

博士學位請求論文

新しい時期区分による 明治以降中国語教育史の研究

鱒澤 彰夫

新しい時期区分による明治以降中国語教育史の研究

目 次

はじめに	1
序 章	3
1. はじめに…3	
2. 音聲言語と文字言語…3	
3. 文字言語教育とは…4	
4. 言文一致完成過程の中国語教材への反映…7	
5. 言文一致の出発点と完成点を何に置くか…10	
6. 言文一致完成過程に呼應した 明治以降中国語教育史の時期区分…11	
7. 新しい分期時期決定の理由…13	
第一章 明治以降中国語教育史研究史略 ——日本造語「侵略中国語」考——	16
1. はじめに…16	
2. 戦前の中国語教育史研究の成立と展開…16	
3. 戦後の中国語教育史研究の展開…20	
4. 戦後の中国語教育史研究の一つの歸結…22	
5. 結び…23	
第二章 北京官話教育時期	24
はじめに	24
第一節 北京官話教育と『語言自述集 散語問答 明治 10 年 3 月川崎近義氏鈔本』	26
1. はじめに…26	
2. 北京官話教育の開始…26	
3. 『語言自述集』の寫本…28	
4. 北京官話教育開始時の 教學情況を示す『川崎近義氏鈔本』…31	
5. 川崎近義とはどういう人か…35	
6. おわりに…37	
第二節 日本陸軍における中国語教育の形成	38
1. 陸軍内中国語教育の準備——清國語學留學生の派遣…38	
2. 廣部精『亞細亞言語集 支那官話部』刊刻の 陸軍内支援者たち…39	
3. 陸軍内中国語教育の開始——清國派遣留學生の歸國…42	

4.	福島安正『自邇集平仄篇四聲聯珠』の刊刻事情…44	
5.	陸軍軍人の軍事會話書…45	
第三節	興亞會の中國語教育 ……………	47
1.	興亞會支那語學校の歴史…47	
2.	興亞會の中國語教育…48	
3.	興亞會支那語學校と陸軍との關係…51	
4.	興亞會支那語學校による中國語テキストの編纂…52	
5.	結び…53	
第四節	東本願寺中國語教育編年資料	
	〔自明治 6 年至明治 16 年〕 ……………	54
1.	はじめに…54	
2.	東本願寺の中國語教育編年資料	
	〔自明治 6 年至明治 16 年〕 … 55	
a.	それは小栗栖香頂の北京留学から始まった…55	
b.	東本願寺の中國開教——清國內に語學校開設…57	
c.	中國布教からの後退——語學校の撤收——	
	奈良教師教校内支那語科設置…62	
d.	中國語教育からの撤退	
	——興亞會大阪分會支那語學校への委託…64	
e.	興亞會大阪分會支那語學校廢止とその後…67	
3.	終わりに…68	
第五節	御幡雅文傳考 ……………	70
1.	はじめに…70	
2.	北京留學…71	
3.	荒尾精との出會い…75	
4.	長崎商業學校囑託…78	
5.	明治 10 年代の中國語教育…79	
6.	長崎在住時代から日清戰爭終結までの御幡雅文の著作…85	
7.	日清戰爭終結後の御幡雅文の足跡…87	
8.	御幡雅文の中國語教育論と三井物産上海支店での實踐…91	
9.	尾聲…95	
第六節	『燕京婦語』について ……………	96
1.	はじめに…96	
2.	『燕京婦語』の中國語教育史上の意味…96	
a.	「燕京婦語 總譯 明治三十九年北邊白血氏	
	鈔本」について…96	
	イ. 外形など…96	

ロ．原著者と譯者について…96	
ハ．書寫時期と場所について…97	
ニ．構成と會話書としての特徴について…97	
b．『燕京婦語』の會話内容から、 その成立と周邊について考える…98	
c．『燕京婦語』の成立の背景…98	
d．明治 39 年、『燕京婦語』と同じく、 女性會話書『燕語新編』が刊行…104	
e．『燕京婦語』登場の意義…105	
3．『燕京婦語』の言語的特徴 ——階級方言「克」（去 kè ）について——…107	
a．『燕京婦語』の三つの特徴…107	
イ．形態的特徴…107	
ロ．内容的特徴…107	
ハ．形式的な特徴…107	
b．『燕京婦語』に現れる「克」＝「去 kè 」…108	
附．旗人による「克」、「去」の使用例一覧表…110	
c．「克」の階級的用法の統計的假説検定…115	
d．『燕京婦語』に階級方言「克」が残存した理由…118	
e．「克」の用法の意義…119	
第三章 國語教育時期 ……………120	
第一節 黎明期の現代中國語教育 ……………120	
1．はじめに…120	
2．國語の文章が中國語教科書上に登場…120	
3．中國口語語彙の二層化 ——『急就篇』の陳腐さとその有用性…123	
4．國語に唯一缺けたもの ——公文書文體に採用されなかったこと…127	
5．1930 年代中國語教育の高揚と敗戦後の漢文科目 「時文」の廢止と「支那語」正式科目化の挫折…131	
第二節 滿洲地區の中國語教育と方言音 ……………135	
1．はじめに…135	
2．ドイツ占領期青島の中國語教育での方言音の扱い…136	
3．滿洲地區の中國語教育と方言音…140	
第三節 關東軍の滿洲方言音への對し方 ……………145	
1．はじめに…145	

2.	參謀本部編纂中國語會話書の中の医療活動の位置づけ…146
3.	日本陸軍の方言音への對し方…148
4.	關東軍などが記録した滿洲方言音…150
5.	日本陸軍の中國語に對する認識の變化…161
第四節	日本占領期青島中國語・日本語關係年表
	〔自大正 3 年至大正 12 年〕 ……162
1.	はじめに…162
2.	日本占領期青島中國語・日本語關係年表
	〔自大正 3 年至大正 12 年〕 ……162
第四章	普通話教育時期 ……173
第一節	普通話の普及と現代中國語教育の展開狀況 ……173
1.	はじめに…173
2.	戦後の中國語教育の進展…173
3.	國語教育時期戦後期から
	普通話教育時期に残された課題…174
4.	21 世紀の普通話の變容…175
第二節	普通話の挨拶ことば“你好”考 ……176
1.	はじめに…176
2.	“你好”のバリエーション“您好”の初出…176
3.	1930 年前後に“你好”登場…179
4.	普通話の挨拶言葉“你好”の登場…181
終 章	……183
参考文献	……186
本論文初出一覽	……199
	(本文全 185 頁、總 199 頁)

はじめに

漢族の使用する言語を原語で「汉语(漢語)」と書くが、日本では、現在、一般には「漢語」と呼ばずに、「中國語」と呼んでいる。また、中華人民共和國の漢族の共通語である普通話¹も、廣東語、上海語などの方言も、中國語と呼び、漢字に表記された漢語を中國語と區別して漢文と呼ぶ人もいる。本来はシナ・チベット語族の「シナ語」という呼称が適當で、中國語という呼称は中華人民共和國のその地の言語という意味を聯想させる點で些か適當ではないが、本論文の著述の便宜上、ここでは中國語という呼称を用いた。なお、本論文の明治以降中國語教育史の中國語は、北京官話、北京語、清語、支那語、中華國語、華語、滿洲語、滿語、などと呼称されて來た、口語の共通語に限られる²。

また、本論文の對象とする中國語教育は、戦前³に於いては、中等學校以上の學習者で組織された中國語教育であり、戦後に於いては、新制高等學校以上の學習者で組織された中國語教育である。

本論文は、序章、第一章、第二章、第三章、第四章、終章、參考文獻、本論文初出一覽で構成されている。

序章では、先ずは本論文の核である文字言語教育について、それがどういうものであるかを明らかにした。次に、明治以降中國語教育史を戦前と戦後とに先ずは二分する従来の戦後の明治以降中國語教育史研究による時期區分ではなく、中國語の共通語の名稱の變遷から新しい時期區分を提示した。そして、その提示理由は以下の通りである。

言語がその有効性を保證されるのは、音聲言語・文字言語に関わらず、その一意性が發信・受信の雙方向に保持されることである。そして、音聲言語は、時空を共にして存在するので、音聲と音聲化されぬ發言背景との總和でその一意性を雙方向に保證している。また、文字言語は、時空を共にせず存在するために、音聲化されぬ發言背景も文字化することでその一意性を雙方向に保證している。そのため、音聲言語は、時空に密着した存在から、口語という日常生活を圓滑にする言語として發達した。文字言語は、文字という實在から、文語という學術や思想の言語として發達した。しかし、とくに日清戦争敗戦後、歐米の新しい知識を獲得するための基礎を固めるべく、先ず中國語統一の動きが起こり、従来の文

¹ 普通話は、漢族の共通語であり各民族間の交際に用いられる共通語として規定されていたが、2000年10月に『中華人民共和國國家通用語言文字法』により、「國家通用語」となっている。

² 臺灣では、1949年に中華民國政府が大陸を追われて盤踞して以降、國語を共通語に指定し今日に至っている。しかし、本論文では臺灣の國語事情を考慮していない。

³ 昭和20年8月15日の日本敗戦を境として、その前後で戦前、戦後と稱している。本論文も便宜上これに従う。

語文によらず、それまでのように文學作品だけではなく、學術や思想を口語文で書く動きが顕在化した。そして、口語文による新しい學術や思想の表現形式は、北京官話、國語、普通話という中國語の共通語の名稱の變遷に従って準備され完成されたのである。つまり、本論文は、中國語自身の變化、それは、中國口語の共通語、即ち、北京官話、國語、普通話という名稱の變遷に反映されていることをとらえて、北京官話、國語、普通話という名稱の變遷に照応した新しい時期區分を提示し、その新しい時期區分により、明治以降の中國語教育史を概観したものである。そして、音聲言語と文字言語との別を起點とした文語による思考世界の専有狀態の解體過程、即ち、口語統一から言文一致の實現過程であった。このことは、明治以降の中國語教育が段階的に音聲言語教育専一から音聲言語教育と口語文の文字言語教育との並立という質的變化を求められた歴史であったことを語るものである。それゆえ、本論文では、第一義的に中國語の共通語の名稱變遷を新しい物差しとした明治以降中國語教育史を提示したのである。

しかし、中國語教育といっても、そこには受講者の學力とカリキュラムの問題がある。とりわけ、音聲言語教育を主とした中國語に最も緊密な文字言語教育の代表である漢文科目は、明治以降戦前期の學校制度では、國語と並稱され、國語漢文(國漢)として必修科目であり、受験に於いても重要科目であった。そして、漢文力は明治期、大正期、戦前昭和期と時代を下るに従って落ちて行ったとはいえ、中國語學習は漢文科目としての時文併修を旨としていた。この狀況が一變したのは戦後である。

戦後期は、時間とともに、漢文輕視と漢文力衰退の傾向は顯著なものとなっている。とりわけ、中國語學習に於ける漢文學習併修を義務とされなくなり、それまで續けられて來た漢文科目としての時文併修も途絶えた。それゆえ、本論文では、戦後の受講者側の變化と戦後學習制度的變化とを考慮し、中國語の共通語の名稱變遷という新しい物差しの上に、更に第二義的に該時期の中國語教育を戦前期と戦後期とに下位區分して考えなければならない。これは、戦前と戦後とに區分する從來の時期區分と重なるが、前述の理由によるものであって、その意味は全く別なものである。

第一章では、戦前の中國語教育史研究が問題の語學的解決の爲に立論されたのと異なり、戦後の中國語教育史研究が語學外の社會的解決、或いは、學習者・研究者の内省問題として立論され、その結果、その議論が非生産的な言葉遊びの上に踊っていたことを述べた。

第二章から第四章までは、新しい時期區分に於ける各時期の問題を論じ、各章冒頭にはそれぞれの時期の特徴を述べ、採り上げた問題の位置づけを示した。とりわけ、第三章第一節に力を注いだ。そして、終章では、新しい時期區分による明治以降中國語教育史から現代中國語教育を展望し、以て本論文の結論とした。

序 章

1. はじめに

中國語の言語活動を「聞く、話す、読む、書く」という四つの行為に単純化した場合、中國語を習得するとは、その四つの行為をそれぞれ習得することである。それゆえ、明治以降の中國語教育史研究の今世紀的主要テーマは、「中國語を習得するために、主要には、中國語を習得させるために、中國語の「聞く、話す、読む、書く」という行為に對して、明治以降、それぞれにどのような工夫を重ねてきたのかを明らかにすること」である。この視點に立つ明治以降の中國語教育史研究は、中國語學習上に展開されてきた、「聞く、話す、読む、書く」に對する、主にその教授者による様々な工夫を辿る、技術史研究に相似した歴史の考察である。そして、このような考察により、戦後のこれまでの中國語教育史研究、即ち、實藤惠秀を起點とし安藤彦太郎や六角恆廣等が構想し描いて來た、その發想の根を日本・日本人惡玉論とする中國語教育史研究とは、全く異なった新しい中國語教育史研究の世界を拓くことができるのである。

2. 音聲言語と文字言語

言語活動は、その表出方法により、「聞く、話す」からなる音聲言語と「読む、書く」からなる文字言語との二つに分けられるが、言語がその有効性を保證されるのは、音聲言語・文字言語に拘らず、その一意性が發信・受信の雙方向に保持されることである。

「聞く、話す」からなる音聲言語の代表である會話が、その一意性を發信・受信の雙方向に保持できるのは、會話では場(人間關係や狀況などの會話の背景)が常に言語の外に發信者・受信者に共有されて存在しているからである。中國語は主語の省略を常態とする⁴とされるが、言葉の省略が極端に發揮されても場の存在がその言葉の不足を補い、場を同じくするから氣持の變化も音調音色で傳達できる。だから、同時に共通する場を必要とする音聲言語は時空を超えて自由に再現できない。また、會話を成立させる基本的な論理は、一問一答の應酬であり、必ずしも起承轉結のような全體を包み込む論理は必要とされていない。このような性質を持つ音聲言語だからこそ、音聲言語は日常生活を圓滑にする言語、即ち、口語として發達したのである。

一方、「読む、書く」の中心は、文字言語を代表する文章である。文字言語が、その一意

⁴ これには「宮島大八編『官話急就篇』の例文が優れているのは、省略を旨としているからである。」(鐘ヶ江信光, 1986)という言が想起される。この記述は、鱗澤は未見で、『中國語と近代日本』(安藤彦太郎, 1988; 40-41 頁)に記載の引用による。

性を発信・受信の雙方向に保持できるのは、文字という實在によって、時空を超えて自由に思惟を再現するからである。形のない音聲言語を形ある文字言語にして實在化し、時空を超えて検証できるからこそ、文字言語は學術と思考の言語、即ち、文語として發達したのである。そして、思惟は論理で表現されるから、文章とは文の羅列を指すのではなく、文字言語としての文章には全文に亘る構成、即ち、論理が必ずなければ一意性を保持できない。そこで、文字化されたものを全て文字言語と規定するのではなく、次の如く新たな定義をする。まず全文に亘り論理構成された文の集合を文章とし、文章文字言語と文章音聲言語とを文字言語と定義し、また、非文章文字言語と非文章音聲言語とを音聲言語と定義する。しかし、さしあたりは、會話形式ではない所謂文章形式に限定して文字言語とし、片言隻句の集積や互いに脈絡のない文の集合は、書記化されただけの音聲言語とする。それゆえ、片言隻句の集積や互いに脈絡のない文の集合は、書記化された音聲言語と見なす。以下、文を文章として扱い、口語文とは口語の文章を指し、文字言語として論ずる。

音聲言語の論理の通し方は場を 120% 生かすことである。言外の場合という論理の上に乗った話者の思惟が、音聲言語として發せられているのである。だから、音聲言語の「聞く、話す」も單なる音聲言語ではなく、文章として論理表現されるものと同質な文字言語的音聲でなければ、「聞く、話す」と「讀む、書く」とを結びつけることはできない。つまり、ともに論理が通っていなければ、ともに文章の質をもっていなければ、この二者を結びつけることはできないのである。單なる自然現象的な「聞く、話す」の練習、即ち耳の訓練と口の動かし方の訓練という肉體的音聲訓練は必要である。しかし、いくらこの肉體的訓練を重ねても、そこから論理は生み出せないのである。確かに音聲は言語の母である。しかし、父たる論理を放擲しては、論理の込められた言語(文章)は生まれないのである。音聲は音聲であり、論理を持った音聲にするためには、別の訓練即ち論理構築の訓練が必要不可欠である。論理構成を可視的に記録した文章の「讀む、書く」の訓練をしなければ、文章の質を有する音聲言語は手にできないのである。

3. 文字言語教育とは

ここで、文字言語教育とはどういうものであるか明らかにしておこう。

山田謙吉⁵は、その著『支那時文釋義』(山田謙吉, 1923; 古文と白話 37-38 頁)で、

「右、金國璞氏の『北京官話談論新篇』⁶第五十三章の全文を掲ぐ。白話に於ける敘述の力に注意するを要す。微細なる敘述と一絲も亂れざる語句の層進する所は、全然古文の組織法と同じ。支那の戲劇等に於て局面の轉換は、脚本家の最も注意する所にして、古文の章法、篇法と同一の原理に本づきて結構せらる。此の文章に於ても、文章

⁵ 山田謙吉(號は岳陽)、執筆當時、東亞同文書院教授(漢文と倫理擔當)であった。

⁶ 金國璞・平岩道知, 1898

としては章法、篇法に注意し、演藝としては局面の轉換に注意すれば、自然に巧處を悟るべし。」(標點符號は引用者による)

と述べている。

山田謙吉は、古典文言文と現代白話文とを結ぶものは論理展開の仕方(論理構成即ち文章構成)であるとした。一篇の文章は、章(段落)で構成され、一つの章(段落)は句(文)で構成され、一つの文は單語・連語で構成されている。従って、文章にはそれを統べる一連の技術、即ち、一連の用語——篇法、即ち、一篇を章(段落)で構成する方法、章法、即ち、一章(一段落)を文で構成する方法、句法、即ち、一句(一文)を單語・連語で構成する方法、字法、即ち、句(一文)中の單語・連語を選択する方法——が必要である。これら四つの用語は連鎖しており、篇法は常に文章の底部になればならず、篇法、章法がなければ、句法、字法は本來存立し得ない関係なのである。この古典の訓讀で得られた論理構成法、即ち、文章構成法は、現代白話文の訓讀でも同じく要諦であったから、兩者を結び付けることが出来たのである。つまり、訓讀で漢文の文章構成の方法、即ち、用語とその用法、換言すれば、篇法、章法、句法、字法など、それ以外に對句など漢文教育で使用された、あまたの用語とその用法を掴み取ることこそ、漢文教育の眞の目的であり、文章構成の方法は漢文教育、即ち、文字言語教育の本當の果實であったのである。文字言語教育の神髓は、文章構成という思惟の論理化の方法を掴み取ることにあったのである。文章の中身を學ぶことが漢文教育の目的とされてはいたが、實際には、訓讀の過程で得られる論理構成の方法の方が、文章の中身の理解よりも遙かに有用なものであった。そして、文章の中身の理解は、實は文章構成の習得に附隨したものに過ぎなかったのである。

既述したように、口語は場を借りて論理展開するため、論理は必ずしも言語表現されなくても貫徹され、その發言は一意的な意味を持つ。しかし、口語文は言語表現の中に一意的な意味を決定する論理が必ず組み込まれていなければ、その口語文は口語文たり得ない、即ち、文章たり得ない。言語表現に論理構成を整える手立てを知らなければ、口語の文章は作れない。これが口語習得と口語文習得、即ち、口語文章習得との落差の正體であり、その落差解消の手立てを示したものが、前掲した山田謙吉の一節なのである。

ところで、文字言語教育の中心は教材であり、その教材は文章なら何でもよいのではなく、先ずは論説文でなければならない。なぜなら、現代國語でも我々の最も基本とする文章は論説文であり、現代中國語も又然りであるからである。それゆえ、我々の學習すべき現代中國語の文章は論説文であって、隨筆や小説の類の文章ではない。

文章には「お手本」があるものである。同時に、文章には「お手本」が必要である。文章を書けるようになる方法は、唯一「眞似る」以外に何もない。「自由に書け」は、眉唾の空論であり、思ったままに書いても、或いは、喋るように書いても文章にならない。このことは、現實が我々に知らしめている所である。まして外國語としての中國語においてをやである。

それでは、我々は現代中國語のどの論説文を學習對象＝眞似る對象とすればよいのか。

文章の「お手本」即ち「軌範文」を指し、「軌範文」といえば、すぐ想起されるのが、南宋・謝枋得編『文章軌範』である。『文章軌範』の論説文は、多くが政治論文である。そして、『文章軌範』は、中國では科擧の時代、日本でも敗戦までは、「受験参考書」であり、「文章作成教科書」であった。そして、現代の『文章軌範』の読み方として最も示唆に富む指摘をしているのは、前野直彬, 1961; 「解説」6 頁の末尾のくだりである。そこには次のようにある。

「議論文というものは大體が固苦しくておもしろみが薄く、しかも時代から土地がらまで違ったわれわれには、なおのこと理解しにくい點が多い。それだけにまた、昔の中國人の立場、ものの考え方を知る手段となり得るであろう。ことに受験作文は、明瞭に論理の筋を通さなければならない。その模範として選ばれたこれらの文章は、さまざまな技巧を用いてはいるけれども、いずれも作者がみごとに論理を展開させた作品ばかりである。これによってわれわれは、過去の中國人の論理・思考の型について、理解を得ることができるであろう。それがわれわれの書く文章の参考になるかどうかは、また別の問題であるが。」

この文中の「昔」や「過去」という言葉を「現代」という言葉に置き換えれば、我々日本人中國語學習者にそのまま當てはまるものと考えられる。さらに、「それがわれわれの書く文章の参考になるかどうかは、また別の問題であるが。」という點についてであるが、「さらにそれはわれわれの書く中國語の参考にもなる。」と言えるのである。

それは次の理由による。

「明治五年より同十一年まで米國留學懷舊錄」(金子堅太郎, 1940; 106 頁)を見ると、「漢學の素養と英文起草」という章立ての中に、次のように書かれている。

「この級(Grammar school 第三級……引用者補注)より英文起草の論文を課せられ、余は屢々英論文を起草して提出したり。この時の論文は何時でも米人の生徒より優等なりき。是は福岡の修由有館(原文のまま。一般には修猷館……引用者補注)にて漢學を修め、殊に正續の文章軌範を習得したる素養が、發して英文となりたるに依る。英文の構造と漢文の構成とは殆んど同一にして、唯その文字の差あるのみ。余が論旨の高雅なる感想の精巧句なることは、皆漢學より出でたるものなれば、同級の米國學生には見るに能はざるところなりと教員は賞嘆したり。」

ここで注目したいのは、金子堅太郎が『文章軌範』の内容を英語論文の作成に利用した點にではなく、その文章構成を英語論文の作成に利用した點にある。このことは、現代中國の政治論文を政治的、思想的読み方とは別の、「現代中國語の文章作成教科書」として活用し得る途を示している。また、現代國語の大學受験参考書からも、日本の近代から現代までの評論文がシンメトリカルな文章構成を特徴としていることを容易に看取できる⁷。これは、日本人の文章構成は傳統的に『文章軌範』の學習に由來していたことを窺わせる

⁷ 例えば、『必修現代評論』(吉田精一, 1977¹)、『必修近代評論』(吉田精一, 1977²)の「解説」の圖解。

ものである。

それゆえ、「現代漢語の規範文」として「現代の政治論文」を見倣し、それを「現代漢語の文章作成教科書」に利用できる、という結論を得たのである。とりわけ、中國共產黨紙誌に發表される論文は、中國語として煉られたもので、中國人に「普通話」の模範文たりうるものとしても書かれ、中國人として求められる中國語の理解水準をも示したものと考えられるからである。勿論、それらの論文で「事實である」と彼らの認定する事象ですら、必ず自分の都合に合わせて發せられたものであるから、それらに對する我々の學習は、内容の事實認定はいつでもよく、主張の仕方の語學側面、主張の語學的形式のみを掴むことだけを、それだけを唯一の目的とすべきことを指摘しておく。

4. 言文一致完成過程の中國語教材への反映

明治に至るまでは、漢語の文言は漢文と稱され、日本語で訓讀して學ばれ、中國と同様に文言が學術・思考の言語手段であり、文言は文字言語として學ばれて來た。一方、中國語は俗語として、學問とは無縁で、通商・外交の橋渡しの用途として主に長崎通事により、音聲言語として學ばれて來た。そして、明治以降は、中國語は一般人にも學べるものになった。しかし、その當時の中國語は、現代の我々のそれと同質なものではなかった。日本語と同様に、口語統一が先んじて、さらに言文一致を経て、中國語は、生活言語、交際言語としてばかりではなく、中國語の文章が學問の言語・思考の手段としても用いられるように根本的に變ったからである。つまり、中國語は、音聲言語專一の存在から、文字言語を兼ね備えた存在に變化をしたのである。だから、中國語の存在意味の變化を生ぜしめた中國語の口語統一から言文一致に至る過程に於ける、明治以降の中國語教育上の變化を先ずは明確にしなければ、明治以降の中國語教育史を明確に論ずることはできないのである。これまでの明治以降の中國語教育史研究でも、舊東京外國語學校での南京官話教育から北京官話教育への明治 9(1876)年 9 月に始まる轉換を、日本の學習中國語の質的な轉換として位置づけ、この北京官話教育の開始を近代日本の中國語教育の出發として正しく捉えたものであった。しかしながら、北京官話教育轉換後を扱うこれまでの戦後の中國語教育史研究では、教材である中國語と文言との関係が口語統一と言文一致によって一變しているにも拘らず、この點をその考察對象としては來なかったのである。なぜこれが問題とされて來なかったかについては、第一章で論じた。ここでは、戦後のこれまでの中國語教育史研究成立時の立論が中國語の口語統一と言文一致とを中國語教育史研究のテーマとして反映させ得なかったことを指摘するにとどめる。

そこで、先ず、言文一致に先立つ口語統一について見て行こう。

英國駐北京公使 T. F. Wade は 1867(慶應 3)年に『語言自邇集』(Wade, 1867¹⁾)を刊行した。Wade はこの『語言自邇集』の中で、外國人が先ずは學習すべき中國語として、清朝におい

て政府部内でも依然として有力であった南京官話⁸を選択せず、香港から北上し北京に至る過程の中で、北京官話こそ共通語であることを発見し、これを第一に学習すべきであると断じた。これにより、『語言自邇集』は世界の中國語初學者に北京官話学習という指針を与えた。とはいえ、東京外國學校が再建され、北京官話教育がすでに支配的であった筈の二十世紀初頭の日本において、実際には、大陸を目指す中國語初學者が未だに學習中國語の選擇に迷う現実があったのである。早稻田大學教授・青柳篤恆は、「日露戰後支那に於て活動せんとする日本の青年は如何なる支那語を學ぶべき乎」(青柳篤恆, 1908;70-71 頁)で、「支那語研究に就て學生をして其選擇に迷はしむるは、一體言ふと統一された國語を持たぬ支那そのものゝ罪であつて、之を學ばんとするものゝ責ではない」として、その上で「國語統一の地響は官話を中軸として周圍より集まりつゝあるは事實である」から、北京土語ではなく北京官話を學べ、と正確に指摘した。この青柳篤恆の發言は、口語統一の動向を等閑視しては、明治以降の中國語教育史の核心を掴み得ないことを示唆している。それゆえ、官話、T. F. Wade が指し示した北京官話、さらに、中華民國政府が口語統一の方針を確定させた國語、それから、中華人民共和國の普通話という、これら共通語の名稱の變化には、南京官話から北京官話への轉換のような、學習中國語の種類の轉換という外觀上の分かり易さに比べて、隠れてはいるが、學習対象である中國語に質的變化が存在したことが豫想できる。だから、北京官話から國語、國語から普通話という名稱の變化と、明治以降の教材に現れる中國語の質的變化とが、時間的にはそのまま符節しないにしろ、官話、國語、普通話という名稱變化に照應した、教材である中國語の質的變化を発見できれば、明治以降の中國語教育史を南京官話教育時期、北京官話教育時期、國語教育時期、普通話教育時期という四つに區分できると豫測できる。そして、この豫測を裏附けるのが言文一致による中國語教育への影響の確認である。

それでは、口語統一後の言文一致による中國語の變化を明治以降の中國語教育のどの教材に焦點を当てれば、確認することができるのか。

その答は、T. F. Wade が『語言自邇集』の刊行とともに、その對として、同時に『文件自邇集』(Wade, 1867²)を刊行していることにある。この二書の同時刊行は、存外に忘れられがちなが、音聲共通語(口語)と文字共通語(文語)とが全く別物という、刊行當時の言文乖離の状況を端的に示したものである。つまり、Wade が口語の共通語と判断した北京官話

⁸ 中國語高級通譯として清朝高官と直接交渉した鄭永寧は、『興亞會報告』「明治 13 年 5 月 8 日の演説」(興亞會 1880¹;5-12 頁)で、清朝政府内での言語状況から、北京官話ではなく、「中州官話」(南語)を推している。鄭永寧の發言内容は、本論文 112 頁脚注 167 で紹介している。一方、『語言自邇集』を藍本として『亞細亞言語集 支那官話部』を編んだ廣部精は、「官話論」(興亞會, 1880²;5-10 頁)を書き、北京官話を推した。[なお、『興亞會報告』はともに黒木彬文・鱒澤彰夫, 1993 による]また、當時の北京官話の状況について参考となるものとして、東京外國語大學名譽教授中嶋幹起博士より、小山澄夫, 2010;附録「曹雪芹と江蘇」で『紅樓夢』と曹雪芹の生地・江蘇の言語との關係に言及している、とのご教示を賜った。

のテキストと並行して、公文(公文書)のテキストを編まなければならなかったのは、Wadeの外交官という職務上の必要性からばかりではなく、言文一致ならざる當時の中國語の状況に對應した、Wadeの極めて自然な現實的對應だったのである。というのは、公用文が通行する文語文(現代文語文)という、北京官話で書かれた口語文(白話文)とは全く別物であったからである。そして、その現代文語文を、漢文と呼稱している古文と區別して、日本では時文と稱したのである。だから、言文一致の反映を見るには、「時文」の教材に焦點を當てれば良いのである。

『時文類纂』(長澤規矩也, 1932; 序1頁)によれば、時文は「口語文即ち白話文は含めずに、口語と古文との中間に位する文、例へば、公文や尺牘や新聞に見える通行の文を總稱して來てゐる。」というものである。しかし、「口語文即ち白話文は含めずに」とはあるが、實際には、口語統一を目指し始めた清末から文章に白話が用いられるようになり、後述するが、民國9(1920)年からは中華民國教育部が將來の言文一致を視野に入れた國民學校〔日本の小學校に相當。民國11(1922)年に初級小學校と改稱〕の教科書の口語文體化を開始していた。そして、1920年代半ばからは、時文の中で白話文が成長しており、『新選支那時文讀本』(神谷衡平・北浦藤郎, 1929)「序」によれば、「恐らく將來の文學は言文兩つながら其の長を採り短を棄て、また東西洋文學の影響を受けて生れ出づる、選鍊されたる言文一致の文章によつて建設されるであらうと思ふ。」〔()は引用者による〕と付け加えるような勢いにあった。口語統一から言文一致への強い動きに押されるように、時文は白話文をも含むものにその内包を変えていった。そして、昭和14(1939)年2月9日の文部省訓令による中等學校教授要目一部改正で、それ以降は、時文が中學校・師範學校・商業學校四・五年次に講ぜられるようになって一般化した。これは、昭和6(1931)年5月16日、「支那語ノ研究及支那語教育ノ向上ヲ謀」る目的で發足した全國組織の支那語學會が目指した、高等學校での「正科」化と中等學校(商業學校ではない)における現状の隨意科目・支那語の扱いから「正科」昇格⁹への前段階と位置付けられた。そして、中等學校用の時文教科書にも「本書ニ白話文數篇ヲ收録セル所以モノハ時文ガ漸次白話ニ移行セントスル過程ニアルヲ以テナリ。」¹⁰、「本書下卷ニハ若干ノ白話文(口語體)ヲ加ヘタリ、蓋シ白話體ハ時文ノ最モ將來性アル文體ナリ。」¹¹と記されて、時文という漢文の教科の中で白話文が中學校で學ばれるようになった。昭和16(1941)年1月、螢雪書院刊『支那語雜誌』創刊號の「編輯後記」には、「從來の支那語學習は實用一點張りであつた。然し支那語が一度び中等學校其他に正科として採用されて來ると、それ丈では濟まされなくなつて來る。これは日本の支那語學界が今後すぐ當面する問題だから心しておくべきだ。」と書かれたように、それまでの「實用主義」の反省に基づき、中國語學研究は進展した。しかし、昭和18(1943)年以降の戰況惡化により、中國語學研究も縮小し、敗戰を迎えるに至った。そして、戦後の漢文

⁹ 林憲一, 1939、及び、鹽谷溫, 1939

¹⁰ 『最新中等時文讀本』(宮越健太郎・杉武夫, 1940; 例言)。

¹¹ 『中等學校時文新編下』(鹽谷溫, 1940; 例言)。

科目の受難とともに、これを以って、中國語學習者の漢文科目との併修は基本的に終わりを告げた。そして、漢文科目は古文の漢文のみを管掌することになり、漢文科目の中から時文が消えた。そして、時文は二度と漢文科目の中に復活しなかった。これにより、中國語學習者の、漢文科目の時文との併修は終わりを告げた。そして、時文は尺牘、宣傳文等を積み残したまま、中國語時事文、中國語論説文などと改稱されて中國語教育の中に戻された。

中國では、李昌遠, 2007; 171-173 頁によれば、既に中國共產党は民國 10(1921)年の結党以來、党内向け・党外向け文書での白話文使用と標點符號使用とを積極的に進めていた。そして、1949(昭和 24)年の中華人民共和國の建國後、1950(昭和 25)年 12 月 30 日の「公文處理暫行辦法(草案)」を経て、1951(昭和 26)年 9 月 29 日の「公文處理暫行辦法」¹²により、公文書は口語文とし標點符號を付けると、正式に決定された。これは、普通話という言葉はまだ正式には使われていなかったけれども、白話文を含む時文に新しい標點符號付き口語文が取って代ったことを意味したものであった。つまり、1951(昭和 26)年の「公文處理暫行辦法」の公布は、國語から普通話への流れの必然的な準備段階であった。國語において、口語文を教科書に取り入れることまでは、國民政府がなし得たが、口語文を公文書にまでは採用するには至らなかった。それゆえ、國語が普通話の位置と同じ位置を占めるには至らなかったのである。だから、公文書での標點符號付き口語文の採用という受け皿を準備することによって、「聞く、話す、読む、書く」全てを統合した「中國語」への道を拓いたのである。換言すると、標點符號付き口語文を公的に承認したのが公文書での口語文の採用であり、この重要な手立てこそが、中國語の言文一致の完成を示すものである。そして、1955(昭和 30)年 10 月に、全國文字改革會議と現代漢語軌範問題學術會議で、普通話という名稱が正式に承認されて、標點符號を持った普通話という口語の共通語が、「聞く、話す、読む、書く」全てを統合し、音聲言語と文字言語とを統合した「中國語」となったのである。こうして、中國語が変わることで、中國語教育に新しい時代の到來を準備したのである。

5. 言文一致の出発點と完成點を何に置くか

口語統一と言文一致とは、並列した異なる事象のものではなく、口語統一を経て言文一致を最終目的とした一連の事象である。言文一致の完成を最終目的として、そのために、先ずは口語統一し、次に言文一致させることである。口語統一の完成は、文言と同じく全國的に一元的になったという意味で、口語が文言と同じ資格を持つことにより、その口語を文として表記すれば、それが文という名に値するかどうかは別にして、形式上は、言文一致の口語側の受け皿が先ずは準備されたことになる。そして、口語統一の完成點、即ち、

¹² 七條「公文以用語體文爲原則、併加注標點符號(公文書は口語文を原則とし、標點符號を附す)」。

言文一致の具體的出發點となる指標がなければならない。その出發點を口語・口語文の言語形態に其の指標を採るのは、客觀的指標といえないし、不確實なので、ここは、政府の言語政策の中の具體的措置・具體的決定をその指標とするのが、妥當であろう。そこで、小學校の教科書の記述文體を口語文體にするという中華民國教育部の決定を言文一致の出發點とする。言文一致の完成點も、口語文の巧拙や口語文の完成度にそれを求めるのは適當とは言えない。また、言文一致の完成點とは、言文一致の十全な修正のない状況に現實に至っていることを意味せず、ある具體的な方針で進むことを決定することを完成點とするのが妥當である。だから、口語文が文言文に代わるためには、口語文が文言文の領域全てに受け皿を準備しておかねばならない。公文書の文章は、各種文章の中で中核的な重要な意味を持つ。なぜならば、公文書の文章は、全國的に通行することを政府に保證された文章であるから、公文書の文章を口語文體と決めることは、口語文が全國的に通行することを政府が保證したことを意味する。それゆえ、規範的口語文が必要とされ、同時に、口語も、それまで以上に口語の規範化が進められることとなる。だから、言文一致の完成點も言語政策上に言文一致の完成基準を求めるのが適當と考える。そこで、本論文では、言文一致の完成點は、公文書の文體を標點符號付き口語文とした中華人民共和國の「公文處理暫行辦法」の決定であるとする。

以上に述べたように、言文一致の進展とテキスト中の口語記述文の普及の経緯を踏まえて、明治以降の中國語教育史を次のように分期することができる

6. 言文一致完成過程に呼應した明治以降中國語教育史の時期区分

I 期 南話教育時期 [1868(明治元)年～1876(明治9)年8月]

口語統一前で、江戸期の連続としての南話教育(音聲言語教育専一)の繼續である。

なお、一般には南京官話教育と稱されているが、本論文では、以下、南話教育とする。その理由は次の通り。「『大清文典』の中国語カナ表記について」(張照旭, 2014)によれば、「潁川重寛の使う中国語音は杭州音」であり、「明治初期の中国語教育は唐通事時代の杭州音が教授されたのではないかと主張したい」に賛同するからである。理由は、舊東京外國語學校の教科書の『漢語跬步』は『南山俗語考』の焼き直し本であったこと、潁川重寛の教え子の一人・彭城邦貞『獨習日清對話捷徑』¹³も、所謂「浙江口」であり、「南話」ではあるが南京官話系統の音ではないこと、これらをその傍証と考えるからである。

II 期 北京官話教育時期 [1876(明治9)年9月～1923(大正12)年]

この時期も口語統一前で、江戸期の連続ではない北京官話教育の開始は、即ち、近代中國語教育の開始であった。しかし、教學内容は口語統一前ということで前代の南京官話を含む南話教育と同じ、音聲言語教育専一であった。とはいえ、北京官話教育時期の中國語學

¹³ 彭城邦貞『獨習日清對話捷徑』については本論文 51 頁を参照。

習者は、文字言語としての漢文科目・時文の併修を旨としていた。北京官話と時文の併修は、北京官話教育時期、國語教育時期(戦後を除く)に共通する特徴であり、これは、極めて重要な特徴である。これは、當時は、中國語教育としての口語の北京官話と漢文教育の時文との兩者によって中國語學習が形成されている、と認識されていたのである。

また、北京官話教育時期は、それまでの南京官話を含む南話とは別の北京官話を學習し教育しなければならなかった時期であることと、江戸期とは別の近代中國語教育の確立が求められた時期であり、中國語教育のあらゆる點で教育環境整備が必要とされる時期であった。

Ⅲ期 國語教育時期 [1923(大正 12)年～1960(昭和 35)年]

口語統一以後言文一致前で、現代中國語教育の黎明期と規定できる。

そして、漢文という文字言語の下にあった時文(中國語現代文を含む)の扱いの點で、この國語教育時期は國語教育時期戦前期と國語教育時期戦後期とに下位區分される。だから、

國語教育時期戦前期[1923(大正 12)年～1945(昭和 20)年 8 月]

國語教育時期戦後期[1945(昭和 20)年 9 月～1960(昭和 35)年]となる。

口語統一がなされ、さらに言文一致へと向かう中國語の變化は、その變化の核心である口語文の擴大普及を受け、教學内容はそれまでの音聲言語教育専一から口語の文字言語教育にも擴大した。それまでの中國語教育の音聲言語教育専一の教學が終焉したのである。それまで文言に獨占されていた舊來の學術語彙に代わり、日本製漢字語という新來の學術語彙が口語文・口語に移入されることによって、語彙の面で、中國語の中に初めて日常生活語彙と普通學術語彙との二層の語彙層を持つに至った。これにより、語彙の面で現代中國語が準備された。口語文と口語語彙とが、整備・豊富化されて、國語は發展し成長した。さらに、小學校の國語教科書の口語文體化によって、國語は言文一致へのスタートを切り、言文一致を完成した中國語へと、即ち、現代中國語へと踏み出した。しかし、國語時期の中國語は、國語文體(口語文)が公文書に採用されるに至らなかった點で、國語は未完成の現代中國語であった。それゆえ、國語に對應した中國語教育の國語教育は、現代中國語教育の黎明期であったと規定できるのである。

この時期には、中國で中國語の學術研究が始まり、その發音、文法の教育的研究が始まった。日本でも、中國語の教育・學術研究が本格的に始まり、支那語學會も組織され、研究・學習雜誌も刊行されるようになった。また、中國語教育に中華民國教育部國語教習所による發音教育方法の成果や『新著國語文法』(黎錦熙, 1924)が移入された。

Ⅲ期中の文字言語教育の挫折とそれを決定づけた日本の敗戦

Ⅲ期中には、口語の文字言語教育の挫折とそれを決定づけた日本の敗戦を挟んでいる。日本敗戦により、戦前期に「漢文科目時文」(文字言語)の正式科目化を實現し、さらなる目標とした中國語の正式科目化は挫折し、同時に、敗戦は戦前期の中國語教育の指導者層の退陣をもたらした。また、戦後期の漢文輕視の教育システムの變更は、中國語學習者層の質的變化、即ち、戦後の中國語學習者の漢文力の低下をもたらした。さらに、學習上も

時文が中國語教育の下に位置付けられた結果、口語文の文字教育が未確立の上に、それまで行われてきた中國語學習に於ける漢文學習としての時文の併修は無くなった。即ち、従前の時文科目内容も中國語時事文に縮小させた上、中國語現代口語文に對する文字言語教育的アプローチも未解決にもかかわらず、時文併修を停止した。そのうえ、中國語教育に於ける音聲言語教育專一を主張する『支那語教育の理論と實際』（倉石武四郎, 1941）の戦前に於ける登場は、結果的には戦後期の文字言語教育挫折の萌芽となり、戦後の中國語教育に於ける音聲言語重視、文字言語輕視を決定づけた。それゆえ、文字言語の扱いの點で戦前と戦後とに國語教育時期は下位區分される。

IV期 普通話教育時期 [1960(昭和 35)年～現在]

言文一致後の中國語が、従前の音聲言語に加え、文字言語を併せもつ存在になり、その性格を一變させたにもかかわらず、即ち、現代中國語教育の本格的開始の必要に拘らず、戦後の國語教育時期に始まった文字言語教育否定が繼續している。

中國では公文書の標點符號附口語文採用により、既に 1951 年以降、言文一致が完成し、中國語教育は現代中國語教育時期に本格的に突入したことになった、それゆえ、その教學内容は口語の音聲言語教育と口語文の文字言語教育との竝立體制を確立しなければならなくなった。しかし、戦後の國語教育時期の狀況が繼續したままである。

7. 新しい分期時期決定の理由

分期のそれぞれの理由は、以下の通りである。

II期の始まり、即ち、I期とII期との分期は、すでに知られている通り、舊曆明治四年二月に開學した外務省漢語學所に端を發する舊東京外國語學校での 1876(明治 9)年 9 月からの北京官話教育の採用である。これは、江戸期に始まり受け繼がれてきた南京官話を含む南話から、北京官話へという學習中國語の轉換であったからである。

III期の始まり、即ち、II期とIII期との分期への胎動は、中華民國教育部が口語統一から更なる言文一致への布石として、1920(大正 9)年、前の年の教育部國語統一籌備會の議決を受け、國民學校の「國文科」を「國語科」に改め、先ず國民學校一・二年級の教科書の文言文を止めて語體文(口語文)を採用し、以って、國民學校全教科書の口語文表記に着手したことに始まる。この機に及び、口語文の伸展と小學校の教科書の口語文表記とを中國語教育の變革の契機と認識した中國語教育者が、日本の内地・外地で期せずして、1923(大正 12)年にテキストをそれぞれ刊行している。日本内地の神谷衡平・清水元助は、『標準中華國語教科書 初級篇』（神谷衡平・清水元助, 1923）を刊行し、その刊行意圖を翌大正 13(1924)年刊行の『標準中華國語教科書 中級篇』（神谷衡平・清水元助, 1924）「序」に

「我們學外國話的目的，並不在乎只講這樣眼面前的會話；我們還要往高一點遠一點的地步上走，才能有學話的意味，我敢斷言；(中略)非得多看一點各種的文——文言的與

白話的，才能培養語學的根底；老守着那會話的課本，還要盼望提高學話的程度，那簡直的比『緣木求魚』還難啊！」¹⁴（我々が外國語を學ぶ目的はただ喋るだけの日常會話にあるのではなく、我々がまだもっと上のもっと先の程度を行ってこそ外國語を學ぶ意味を持てる。（中略）いろいろな文章——文言と白話のと——をたくさん讀んでこそ、語學の基礎を育てることが出来る、とあえて斷言する。あの會話のテキストにいつまでもしがみついていて、スピーキングの程度を高めようと望むのは、絶対に無理である。）

と記した。また、外地（滿洲地區）の飯河道雄は、『現代支那語讀本』（飯河道雄，1923；はしがき 4 頁）¹⁵に、

「我々が從來専ら交通語として支那語を學習して居つた上に、更に修養語としての支那語を研究しなければならぬ時代になつたのである。（中略）會話材料は主として交通語としての目的に適し、修養語としての目的には別に記述文を要する。（中略）會話材料は主として交通語としての目的に適し、修養語としての目的には別に記述文を要する。（中略）會話材料の外に記述體を入れ、而も現代思潮に伴ふ新しい思想から生れた文章を加へた」

と書いた。そして、兩者ともに、中國語教育の新時代到來を宣言し、小學校の教科書掲載の白話文を登場させた。なお、『中華言文新編』（富谷兵次郎，1923）には、前掲の内容の前言はないが、先んじて小學校の教科書掲載の白話文を登場させている。それゆえ、これらを以ってⅡ期とⅢ期との分期とし、日本の中國語教育は北京官話教育から國語教育に轉換したと考える。勿論、「國語」が教科書に採用されても、公文書には現代文語文が採用されていて、現代白話文ではなかった。しかし、言文一致への動きが急で、通行する文においては、本來の主演であつた現代文語文に、現代白話文が拮抗するようになっていった。そのため、中等學校などの漢文科の時文テキストにも現代白話文を収載するようになり、中國語教育は音聲言語の習得が中心ではあつたが、その教育範圍は口語（音聲言語）の領域を越え、口語文（文字言語）の領域にも擴大し始めていったのである。しかし、中國語教育は、新しい中國語教育、即ち、文字言語教育の竝立を目指しながらも果たせずに、文字言語教育は從來通り漢文教育に任せたままで推移した。

Ⅲ期中の文字言語教育の挫折

戦後に於ける文字言語教育挫折の、戦前に於ける萌芽は、「訓讀を玄界灘に投げすてて來た」、「從來文語を訓讀していた人が音讀を學び、現代音に通じた人が文語を學べば、自然にその聯絡ができてしまふ」とする、漢文教育が擔つてきた文字言語教育を否定し、音聲言語教育を主張する『支那語教育の理論と實際』（倉石武四郎，1941）の刊行である。

戦後、GHQにより漢文教育は弱體化させられ、中國語學習者の漢文力に戦前との明確な差が生じ、このことは中國語教育に常に影として作用した。また、時文は中國語現代文

¹⁴ 「序」は大正 13 年 1 月 20 日記。

¹⁵ 中國語テキストでは初めて挿繪を配し、特にカラーの挿繪頁まで附けた劃期的なテキストである。挿繪とカラー頁の導入は、新しい中國語教育出發に際して著者の意氣込みを明らかにしたものであり、同時に、滿洲地區での中國語普及を見据え、女性や子供という新しい學習者を視野に入れた配慮と考えられる。なお、「はしがき」は大正 12 年 3 月記。

の中に組み入れられたけれども、時文の尺牘などの内包を中國語現代文に縮小し、口語文の文字言語教育が未確立の上、口語文が文字言語としては位置付けられず、口語文が音聲言語の延長に位置付けられた。つまり、口頭語と口語文とを同一視して、口頭語さえ学習しさえすれば、自然に口語文も習得できるとして、この兩者併修を捨てたのである。これは、口頭語と口語文との兩者によって中國語學習が形成されてはいるが、口頭語と口語文とは同じものであるから、その學習に區別はないとの認識に變ったからである。そして、東京大學教授の威光を背景として倉石武四郎の文字言語教育否定の意見は有力な勢力となり、『ラテン化新文字による中國語初級教本』（倉石武四郎, 1953）の刊行は、中國語教育が漢文教育に於ける文字言語教育の繼承を否定し、中國語教育は音聲言語教育に限定されることを示したものであった。時文は中國語に移行したものの文字言語としては位置付けられず、漢文教育の中の時文の併修を續けていたことの意義を内省する機會も持たなかった。その結果、戦前に何盛三らが意圖した口語の音聲言語教育と口語文の文字言語教育との竝立は挫折させられた。それゆえ、漢文教育の弱體化を背景として中國語教育史の國語教育時期を下位區分して戦前期と戦後期とに二期に分ける。

Ⅳ期の始まり、即ち、Ⅲ期とⅣ期との分期は、1958(昭和 33)年に北京で刊行された普通話の外國留學生向け中國語テキスト¹⁶が、1960(昭和 35)年には同じく北京から『漢語教科書(日本語版)』（北京大學外國留學生中國語文專修班, 1960¹）が刊行され、同じ年にその縮刷版で『中國語教科書』（北京大學外國留學生中國語文專修班, 1960²）として日本の光生館から刊行されたことによる。その経過は次のとおりである。中國では、すでに 1951(昭和 26)年、公文書の標點符號付き口語文採用が決定されており、さらには、1955(昭和 30)年以來、その口語は正式に普通話と呼ばれていた。しかし、戦後日本の中國語教育にとっては、中國語使用地域の中核である大陸における中國語の現況がいまひとつ不明確であった。そこへ、「外國人向け」に普通話の軌範的テキストとして作成された『漢語教科書』が、1960(昭和 35)年に日本で縮印刊行され、『中國語教科書』として日本人學習者の眼前に提示され、これによって、日本人に手に入りやすい形で登場した。この刊行によって、日本の中國語教育は國語教育から普通話教育へと轉換したのである。普通話と國語との決定的な違いは、中華民國の國語は公文書に採用されず、中華人民共和國の普通話に採用された點にある。公文書に標點符號付き口語文を採用し、その口語を普通話と命名したことで、普通話で言文を一致させたのである。だから必然的に、中國語教育は口語習得(音聲言語教育)と竝立して口語文習得(文字言語教育)もその任務となったのである。しかし、實際の中國語教育は音聲言語教育に集中し、漢文教育が擔っていたような文字言語教育は行われていない。漢文教育の衰退狀況も文字言語とその教育への關心を薄めている。

¹⁶ 北京大學外國留學生中國語文專修班, 1958¹。北京大學外國留學生中國語文專修班, 1958²もある。

第一章 明治以降中國語教育史研究史略

——日本造語「侵略中國語」考——

1. はじめに

北京官話教育轉換後を扱う戦後の中國語教育史研究では、教材である中國語自體の口語統一と言文一致による中國語の質的特性とその變化とをその考察対象としては來なかつたのである。勿論、「中國語教育法」(六角恆廣, 1978; 219 頁)で、その論文に「とくに採り上げなかつた點」として「共通語の歴史的形成について」と「國語運動と文字改革について」を含む五つのテーマを挙げ、「他日、稿をあらため述べてみたい」と書いている。しかし、その後、「中國語教育史の研究」(六角恆廣, 1983; 247 頁)には、「清末・民初における中國の近代への動きのうち、日本の中國語教育にも關聯してくる國語運動や文學革命などがある。だが、そのような動きにも無縁な場で中國語教育がおこなわれていた。」と相變わらずの評価からは、前掲の二つのテーマも中國語教育とは別の中國での動きとして書かれたであろうと推測される。しかし、中國語教育史研究史を戦前までに遡ると事情が異なっていることがわかる。

2. 戦前の中國語教育史研究の成立と展開

よく知られているように、中國語教育史研究の淵源は、何盛三, 1919 を補訂した何盛三, 1928 の中で、「近代支那語(口語)が」「如何にして我が日本人に學ばれたかを少しく考えて見よう」として、「徳川時代」、「明治初年(南京官話時代)」、「明治九年より日清戦役まで(北京官話時代の初)」、「日清戦後現在に至る」と分けて論じたことに始まる。何盛三の視點は、「總説」の5つの構成——「支那語の種類」、「北京官話」、「國語統一運動と白話文學運動」、そして「近代日本に於ける近代支那語」という構成——に見られるように、中國語の動向を見ながらの日本人の中國語學習史・研究史研究であった。

その後、昭和6年5月16日、「支那語ノ研究及支那語教育ノ向上ヲ謀」る目的で發足した全國組織の支那語學會(東京・文求堂内)が成立¹⁷すると、上述した何盛三の問題意識と同様に、明治初期の中國語教育を回顧する考察・談話記録が現れてくる。それは、興亞會

¹⁷ 支那語學會は、『支那語學報』創刊號(昭和10年11月26日文求堂刊)51頁「本會記事」によれば、會報『支那語學會會報』(第1號は昭和8年6月15日文求堂刊)を第3號まで出した(第2、第3號は鱒澤未見)。その繼續誌が『支那語學報』であるが、第7號(昭和14年4月20日刊)以降は現認できず、該學會の結末は不明である。

支那語學校についての宮島貞亮「明治最初の支那語學校」(宮島貞亮, 1933)、支那語學會での中田敬義の回想談をまとめた「明治初年に於ける支那語の研究に就て」(中田敬義, 1933)、「支那語雜誌小史」(渡會貞輔, 1933)などである。そして、中國文學研究會編『中國文學』(生活社刊)は、「日本支那語史」構築を目的として、實藤惠秀、魚返善雄、曹欽源を中心に、第 83 號[昭和 17(1942)年 5 月 1 日刊]を特輯「日本と支那語」とした。ところが、實藤惠秀はその特輯「日本と支那語」の「後記」冒頭に、

「支那語の歴史は語學以外の問題をふくんでゐる。これには日支文化交渉史、日本人大陸進出史がからまつてゐる。」

と書いた。

實藤惠秀のこの問題意識は、中國文學同人の方向と一致したものではあったが、當時の中國語教育史研究の方向とは異なるもので、中國語の動向を見ながらの日本人の中國語の學習史・研究史という語學的視點を否定するものを内包しており、その力點を「日本人大陸進出史」に置けば、中國語教育史研究の本筋である語學の問題を全く容易に後景に迫りやるものであった。

しかし、敗戦までの間では、依然として中國語の動向を見ながらの日本人の中國語學習史・研究史が主流であり、宮原民平主幹『支那語雜誌』(螢雪書院刊)に中國語教育史研究關聯の論考が見られ、第 2 卷 6 號～第 8 號[昭和 17(1942)年 6 月 1 日～8 月 1 日刊]には「私が支那語を始めた頃」と題して連載され、第 3 卷 6 號～第 4 卷 2 號[昭和 18(1943)年 6 月 1 日刊～昭和 19(1944)年 2 月 1 日刊]まで 9 回にわたり、實藤惠秀と魚返善雄とが「支那語書誌學」を連載している¹⁸。とりわけ、魚返善雄のものは現在でも参考とすべき記述が多い。

さて、戦前の中國語學界の悲願は、前掲した支那語學會の趣意——支那語教育ノ向上——に現れているように、隨意科目「支那語」の正科化、つまり、高等學校での「正科」化と中等學校(商業學校ではない)における「正科」昇格であった¹⁹。その前段階と位置付けられたのが中等學校漢文科目における「時文」の設置[昭和 14(1939)年 2 月 9 日文部省訓令]であった。そして、さらに正科化に歩を進めんとして編まれた雑誌が、奥平定世編集『支那語と時文』(昭和 14 年 7 月 1 日開隆堂創刊)である。また、中學校用の中國語教科書も、昭和 14 年 1 月 25 日には、『新編中等支那語教本』(全 5 卷)(宮原民平, 1939)卷 1、同年 7 月 1 日には、『倉石中等支那語』(全 5 卷)(倉石武四郎, 1939)卷 1 が刊行され、前者は昭和 15(1940)年 8 月 6 日文部省檢定濟中學校・實業學校外國語科用となり、昭和 16 年度文部省選定教科書となっている。そして、昭和 16 年 1 月、螢雪書院から新しく前掲の『支那語雜誌』が創刊される。その「編輯後記」には、

¹⁸ 但し、その内、6 のみ「宮島大八先生 急就篇回顧」は、實藤惠秀・郭明昆の合作による。

¹⁹ 「支那語及び支那時文教授の意義及びその實施方法試案」(林憲一, 1939)、及び、鹽谷溫『支那語と時文』創刊號「善隣の至寶」(鹽谷溫, 1939)本論文 132 頁参照。

「従來の支那語學習は實用一點張りであつた。然し支那語が一度び中等學校其他に正科として採用されて來ると、それ丈では濟まされなくなつて來る。これは日本の支那語學界が今後すぐ當面する問題だから心しておくべきだ。」

と書かれている。「日本の支那語學界が今後すぐ當面する問題」が文字言語教育に直結したものになるか否かは不明にしても、當時は少なくとも漢文教育の否定の上には中國語教育が立つてはいなかったので音聲言語教育專一ということには歸着しなかった可能性が高いものと豫測される。「支那語」正科化の端緒がついた昭和 16(1941)年當時は、支那語學會の成立以來、少なくともそれまでの「實用主義」の反省に基づき、中國語學研究は進展し、前年の 12 月 5 日には、外語學院出版部刊の學習誌『支那語』が臨時増刊「支那語文法研究號」を刊行し、この年には、倉石武四郎『支那語教育の理論と實際』(昭和 16 年 3 月 22 日岩波書店刊)も刊行され、中國語教育にも眼が向けられはじめた時期であつた。しかし、昭和 16 年 12 月 8 日の開戦後の戦況悪化により、紙の手配にも事缺くようになり、中國語學習誌の頁數も減少し、天理外國語學校海外事情調査會編『支那語研究』²⁰は第 8 號[昭和 18(1943)年 9 月刊]で休刊、大阪外國語學校支那語研究會編『支那語と支那文化』は第 5 卷第 7 號(昭和 18 年 6 月 26 日發行)まで刊行され、『支那語文化』と改題發行するも第 2 號(昭和 18 年 11 月 26 日發行)で停刊、上海東亞同文書院大學華語研究會編『華語月刊』も第 119 號(昭和 18 年 11 月 10 日發行)で休刊、さらには、『支那語雜誌』は昭和 19(1944)年 3 月號を以て東京の他の 2 雜誌、『支那語』、『支那語と時文』とともに廢刊、統合され、『支那語月刊』(帝國書院刊)となる。しかし、これも昭和 19 年 12 月號をもつて廢刊され²¹、中國語學研究はもとより中國語教育史研究も縮小し²²、敗戦を迎えるに至つた。

日本敗戦後、『支那語月刊』は、「支那語」の名稱を捨て『新中華』²³第 1 卷第 1 號[昭和 21(1946)年 6 月 1 日帝國書院刊]とし再刊した、1947 年 1 月號の第 2 卷第 1 號からは『中國語雜誌』と再改題している)。『新中華』第 1 卷第 1 號には「昭和 16 年 3 月 11 日第 3 種郵便物認可」とあり『支那語月刊』の記載と同じであるし、所載の「模擬試験」(長谷川寛)は『支那語月刊』昭和 19 年 12 月號の、即ち、終刊號の「問題解答」を掲載し、『支那語月刊』繼續誌であることを明らかにしている。しかし、六角恆廣, 1988; 14 頁に、「戦後まも

²⁰ 創刊號より第 4 號までは、天理外國語學校崑崙會編刊。

²¹ 大連の『善隣』(善隣社刊)については、天理大學所藏は第 15 年第 9 號(昭和 19 年 9 月 1 日刊)までで、該號「編輯後記」は工具不足による 7 月號發行の遅延(8 月 22 日發送)に觸れている。だから、この「9 月 1 日刊」も奥附期日で、實際は遅延している可能性が高く、その休刊も間近いことを窺わせる。

²² 鳥居鶴美, 1947、魚返善雄, 1948、倉石武四郎, 1949 は戦時中の研究成果である。

²³ 編集者・守屋紀美雄を變えず、「後書」によれば、編者は「支那語」でもかまわないが、改めた方が妥當として改名した。また、天理語學專門學校崑崙會編『支那語研究』も、第 9 號(昭和 21 年 10 月 8 日刊)から『華語研究』と改題している。その「編輯後記」には「戦ひ終わつた今、想を新たに第 9 號を世に送る。」とある。

ない時期の中國語學習者の多くはそれまでの日中關係の歴史を批判する立場から中國語を學習することになった。」と書く通り、「卷頭言 華語の回復」(岡本隆三筆と思われる)では、「我々が帝國主義のお先棒たるべく支那語(ルビ點ママ)を學んだのは昔の思い出になった。」と記している。そして、『〔中國語雜誌〕新中華』第1卷第5號(昭和21年12月3日刊)に、實藤惠秀は「明治以前の中國語研究——日華語學關係史(1)——」(實藤惠秀, 1946)を書き、その中で、

「倭寇の大規模なものが、豊臣秀吉の朝鮮征伐かもしれません。かれは北京を占領するといひ、そのときの用意に、かんたんな中國語を扇にかきつけてもつてみた、といはれます。これぞ、いはゆる「侵略中國語」のはじまりです。明治になつてよみがへり、さいきんの敗戦にいたるまでつづけられたのでした。」

と、「侵略中國語」という、それまでにない新しい名稱を明治以降敗戦までの中國語に與えた²⁴。戦前にも中國語を「戦争語學と云われてもよい、職域奉公以て國家に貢獻することを念頭に置いて學習すべきである」(中澤信三, 1941)と自ら「戦争語學」と呼稱した例はあったが、實藤惠秀は「侵略中國語」という造語により戦前の自らの「支那語の歴史は語學以外の問題をふくんである」を發展させるとともに、戦前との決別を示すものであった。この「侵略中國語」という造語は、日支事變により、戦地を長城内の中國大陸に擴大し長期戦となり、昭和20(1945)年8月15日に敗北した日本に對し、明治以降の歴史を侵略と斷罪した言葉であり、同時に、明治以降の中國語教育を負の遺産として總括する立場を明確にした言葉であった。そして、これは戦後の中國語教育の傾向を暗示し、戦後の中國語教育史研究の方向を示した絶妙なネーミングであった。つまり、戦後の中國語教育と教育史研究に於いて、戦前戦後とに二分した時期區分を絶對なものとして、戦前の中國語に對する評價の言葉が「侵略中國語」という用語になった。例えば、「(敗戦前の——引用者による)中國語の歴史的役割から侵略中國語と呼ぶようになった。」(六角恆廣, 1978; 67 頁)、「(學習誌の『支那語』²⁵は——引用者による)次第に戦争(侵略)語學としての中國語が明確に定着していく過程を明確にしている。」(鳥井克之, 1972; 54 頁)] というように、中國語と侵略とを直接結びつけた「侵略中國語」、「戦争(侵略)語學」という言葉が見られる。とくに、「戦争語學」という言葉は、安藤彦太郎, 1988 のみならず多用されている。なお、「侵略語學」、戦後の「戦争語學」という言葉は、いずれも「侵略中國語」の言い換えである。

²⁴ 實藤惠秀、安藤彦太郎らを編輯責任者として創刊された『新中國』(昭和21年3月1日、實業之日本社創刊)のNo. 11(昭和22年3月1日刊)66頁所載「それから」に、安藤彦太郎は「あるべき新日華關係は、まず、日本の自己批判からはじまる。」としている。そして、No. 18(昭和22年11月1日實業之日本社刊)37頁所載1947・10・10 附け安藤彦太郎「中國研究の手引き 中國語」には、中國語學習の要籍を紹介した上で、タカクラ・テル『ニツボン語』の「(中國の國語教育は…引用者補記)“話す”ことばの文法や發音方法はまったく問題にされなかつた。これは、中國の教育が“特殊教育”だつたとゆうことと深く關係している」を引用し(再引用者鱗澤原文未見)、「かつての日本の中國語界は、やはりこの「特殊教育」の上にたつていゝるものであつた。」と書いている。

²⁵ 宮越健太郎主幹による昭和7年9月創刊外語學院出版部刊の月刊學習誌を指す。

3. 戦後の中國語教育史研究の展開

戦後の中國語教育史研究は、實藤惠秀の「侵略中國語」という用語を起點として、既にレールが引かれていたのであるが、六角恆廣, 1988; 12 頁によれば、「中國語教育史の研究は、昭和 30 年(1955)前後の時期から生まれた研究分野である。」とし、同じく 15 頁によれば、1955 年 3 月に發表された 2 つの論文、「中國語教育の歴史的 성격」(安藤彦太郎, 1955¹⁾)、「明治における日本の中國語」(六角恆廣, 1955)により、「中國語教育史研究の第一歩がふみ出された」としている。この二論文を生んだ原因は、1954(昭和 29)年の中國語學研究會全國大會(金澤大會)での共通テーマである。それは、「中國語教育方法論」(中國語學研究會關西支部, 1954)によれば、(A)一般教養としての中國語教育體系、(B)専門學科としての中國語教育體系、(その 1)國際的實務に従事する人物の養成するためのもの(その 2)中國文化を研究するものためのもの、という新制大學の教育體系の現状(教材、教育内容)を整理分析し、以ってどのような中國語教育を行うことができるか、という現在から見ても至極妥當な語學的問題提起であった。これに對する安藤彦太郎による反論を「共通討論テーマを學生と討議しよう」(安藤彦太郎, 1955²⁾)から引用すると、

「つきつめれば教える側の主體性の問題に歸着しよう。つまり、「だれに奉仕する中國語を教えるか」という問題だ。この問題をはっきりさせるために、「いままでだれに奉仕してきたのか」ということを歴史的にふりかえってみるのだが、そのたびにわたしは、骨を噛むような気持ちにおそわれる。かといって、これを避けて通ることはできない。」

というものである。このように非語學的主張を展開し、結局、この金澤大會は、「金澤大會を顧みて」(座談會, 1954)、「全國大會の主旨を會報にも反映させよう」(柴垣秀太郎, 1954)によれば、關西支部・關東支部・學生の 3 者の間でうまく議論が噛合わず終了したという。

また、安藤彦太郎は 1968(昭和 43)年の中國語檢定試験反對の論陣を張る中で、「中國語は外國語である——戦後の中國語教育」(安藤彦太郎, 1971¹⁾)を書き、1954 年當時を回顧して

「日本の中國語教育は、中國侵略への基礎のうえに成立してきた。その點では先にのべた戦時中の科學的中國語の研究も同様であった。當時、教師・研究者そして學生が、主觀的にはいかに日中兩國人民の親善友好を願う気持ちをもっていたとしても、それに反する結果を中國語教育はもたらした。(中略)そのかんに中國語自體の變化がおこった。何をおしえるか、ということは、せんじつめればこれらの問題に日本人としてどう對處するのか、という點に歸着するはずであった。「中國語は外國語である」ことからすすんで、なんのために中國語を教え、かつ學ぶのか、言いかえれば、「中國語とはいかなる外國語であるか」という點について、さらにきびしい論議が必要だったのである。」

としている。つまり、戦後の中国語教育史研究で盛んに説かれた、安藤彦太郎が提起し戦後の中国語教育史研究成立に託したものは語學的範疇の外のものであった。また、中国語は外国語であるという主張は、「漢文」から中国語を切り離す目的から發せられたものである。ここには、漢文教育が擔っていた文字言語教育を吸収するという觀點はない。この點では倉石武四郎の立場と同じである。なお、ここでの「中国語自體の變化がおこった」とは、言文一致を指しているのではなく、中華人民共和國となって、社會主義政權という政體の下で言葉が「人民」のものになったという變化のことを指している。

このような中国語教育史研究成立の経緯はそのまま、戦後の最初の中国語教育史研究の專著である、『近代日本の中国語教育』（六角恆廣, 1961）「はしがき」に

「1945 年までの日中關係には、われわれ日本人にとって、默過して濟ませないものがある。それは、明治いらいの日本があゆんだ歴史に問題があろう。しかも、1945 年までの日本の中国語教育は、日中の非友好關係を基礎とした道をあゆんだ。そこに、從來の日本の中国語教育研究や中国語教育の發達のおくれがあつたようにおもわれる。」として、時期區分の物差しを冒頭で提起している。

また、「中国語教育史概論」（六角恆廣, 1978）では「單なる語學的範疇にのみ立つて教育史の時期區分を考えることは適切ではない。」とし、やはり戦前戦後の二分はそのままにして、1871~1945, 1945~1966, 1966~の三期に分け、「第 1 期は、一口にいえば中国侵略に奉仕した時期」、「第 2 期は科學的な研究や教育が基調となっている。（中略）だが、中国語學習における姿勢の問題が缺落している。」とし、第 1 期と第 2 期の中国語を近代中国語と規定し、「文化大革命新しく生まれた文化を學習するための中国語教育ないし學習と、その基礎となる中国人民の連帶があつてこそ、第 3 期の中国語教育ないし學習ということが出来る。第 2 期における科學的研究と教育にたいして、新しい基礎をあたえたものが、第 3 期といえよう。」として第 3 期の中国語を現代中国語と規定した。そして、「第 3 期の現代中国語を考える場合、そこには、現代中国語にふさわしい教育論がなくてはならない」として、「現在の時點では、淺川謙次『披黑雲睹晴天』がある。」と書いた。しかし、この時期區分の主張は、中國共產黨による文革の否定的總括と共に、「中国語教育史の時期區分」（六角恆廣 1986;147-148 頁）では、戦後については觸れていない。そして、

「（中国語教育の…引用者補記）歴史的時期區分をおこなうならば、先ず昭和 20 年(1945)の敗戦の時點、その前と後とを分けてかんがえる必要がある。敗戦前の中国語教育の意義と、戦後のそれとでは本質的な相違があるからである。（中略）（敗戦前の…引用者補記）時期區分の視點は前述したように日本の中国に對する政治的・經濟的・軍事的な侵略の進行過程に準拠して、（時期區分する。…引用者補記）」

として、戦前期をさらに七期に分け、1871~1877, 1877~1886, 1887~1895, 1895~1905, 1905~1918, 1919~1931, 1931~1945 と（1919 は第一次世界大戰終了を指す。…引用者補記）分期している。

4. 戦後の中国語教育史研究の一つの歸結

實藤惠秀を起點とし、安藤彦太郎・六角恆廣は戦後の中国語教育史研究を語學的範疇の外にその答えを求め、たどり着いた主張が、明確にその後否定していないので、『披黒雲睹晴天 浅川謙次追悼遺稿集』（浅川謙次, 1977）に書かれた主張であったといえよう。

中国語研修所學校（1966 年設立）創始者・浅川謙次（1910～1975）は、同書略歴によれば、1945 年に日本共産黨に入黨している。1951 年、中国研究所（1947 年開設）理事となり、1966 年、中国プロレタリア文化大革命を契機に中共と日共が袂を別った結果、除名され離黨している。

浅川謙次の中国語教育の主張は浅川謙次, 1977. 205 の「中国語教育における歴史的課題」（『アジア經濟旬報』1968 年 6 月下旬號原載）の次の言に明確である。

「中国語の學習・教育を日本人民の解放運動のなかに位置ず（ママ）け、眞に日中兩國人民に奉仕するものにするものである。もっと具體的に云うならば、日本の自衛隊や特審²⁶公安調査廳でどのように中国語を發展させようと中国語法の研究がすすむと、それは、日中兩國人民にとっては、それだけ危険を増大させるものであり、大きな政治的視點からするならば、人民の中国語の振興を扼殺するものでしかない。この論理をしっかりとつかむ必要がある」

この主張は、前掲した安藤彦太郎の「だれに奉仕する中国語を教えるか」と同じものと理解されよう。この主張は、反日本政府、親中華人民共和國政府＝親中國共産黨という構圖をも明確にしている。これをより具體的に示すものとして、浅川謙次は前掲の主張に續け、1960 年安保闘争時の日中友好協會事務局長三好一の言、

「中国敵對の最大かつ具體的表現である新日米安保條約反對の國民運動がこんなにも盛りがっているとき、中国語學習者、教師がわからず、まだまとまった形での反對の意志表示がなされていない……。」²⁷

を引用し、1970 年安保闘争では、「もはや 60 年のとき三好氏から指摘されたような散漫な状態はゆるされないであろう。」と續けているからである。

よく知られているとおり、直接的にはほぼ 1966 年 8 月に紅衛兵の登場に始まる文革まで、日中兩共産黨の蜜月時期においては、日中友好運動の中核は日本共産黨が握り、中共の對日文化戦線の一翼を日共が擔っていた構圖が續いていた。このことは、中国語學習、中国語教育においても例外ではなかった。日共が主導する日中友好運動という大衆運動の衣をまとった政治運動の隙間で、倉石武四郎が「倉石中国語講習會」を主催したことを「中国語を依然として技術の範疇にとじこめ、中国語の學習と政治とを切り離して」（浅川謙

²⁶ 昭和 25 年 GHQ の法務府内に設けられた、超國家主義團體、共産主義勢力を取り締まりの對象とした特別審査局。昭和 27 年破防法制定より、公安調査廳に引き繼がれた。

²⁷ 原載は『書評』1960 年 7 月號（極東書店刊）7 頁。原題は「中国語教科書の“貧困”と中国語教育者の責任について——「中国語教育の現状と見透し」を讀んで」である。

次, 1977; 202 頁) との批判は、政治情勢を窺いながらも政治からは獨立して中國語教育普及を圖る倉石武四郎の姿勢を言い當てたものである。東京・京都兩帝國大學教授を兼任した倉石武四郎が、政治音癡であったはずもなく、この信念のもとに中國語普及のためなら利用できるものや機會は利用したのである。この方法で民間の中國語學習を舵取りしていたのである。だから、文革を契機として發生した 1967 年の善隣學生會館事件により、日共と反日共派の對立から教室を確保できず、「倉石中國語講習會」を解散したのは、すぐれて政治的決斷であつた。これ以降、前掲した淺川謙次の立論に見られる如く、それまでの反日本政府、親中國政府即ち親中國共產黨に反日本共產黨という黨派性を加え、中共の對日政策に中國語教育を從屬させるという現實の政策は、それは政治への從屬という點では戰前期と同質とはいえるが、戰前とは對極的な反日本政府的性格がさらに一層強められた。そして、1972 年日中國交回復後もこの傾向は續いたが、中共自身が文革否定の結論を出し、日共と和解するに及び、表面的には些かの沈靜化を見せている。とはいえ、依然として現在も、中共の對日政策に從屬する奇妙な政治主義が「日中友好」という名で中國語學習・教育に投影される傾向が未だに存在している。

5. 結び

敗戰後、米軍の War Department Education Manual EM506-507 として刊行された *Spoken Chinese* (Hockett & Fang, 1944) の存在をはじめて知った日本の中國語學界では、「アメリカの中國語學——特に最近の傾向について——」(伊地智善繼, 1949) で、「ともかく注目すべき點が多い」とし、『ラテン化新文字による中國語初級教本』(倉石武四郎, 1953) の「はしがき」では、「この教本の形式がほぼ *Spoken Chinese* のやりかたを學んだ」とあり、また、『初級中國語讀本——中國語のはなし方——』(金子二郎, 1957) の「まえがき」でも、*Spoken Chinese* に觸れているように、*Spoken Chinese* が戰後日本の中國語教育に與えた影響は非常に大きかった。しかし、該書が、「Spoken language」シリーズとして米軍の語學集中訓練用に編まれたことに思いを致すならば、中國語教育史研究に於いて、戰前の中國語教育・研究がどの點で戰爭の役に立たなかったのか、どの點で戰爭の役に立ったのかを後悔反省することがはるかに建設的であつた。しかし、米軍被占領下(昭和 20 年 9 月 2 日から昭和 27 年 4 月 27 日まで)の狀況では、如上の内容を實感しても直截的な軍事に及ぶ總括はできなかつたものと思われる。とはいえ、實藤惠秀によって發せられた「侵略中國語」という造語に表現された視點は、戰後の中國語教育に悪しき影響を與え、當事者との間にその突き合わせする具體的な議論の機會を夭折せしめ、口封じの役目を果たした點において、また、戰前の中國語教育を糾弾する者に「我は正義なり」という立場を無條件で與えた點において、中國語教育上、中國語教育史研究上、「侵略中國語」という言葉は、中國大陸では漢奸裁判前夜、日本は被占領下であつたとはいえ、實藤惠秀の極めて罪深い造語であつた。

第二章 北京官話教育時期

はじめに

北京官話教育時期の特徴は、口語(音聲言語)習得を目的とする点では、江戸期を継続した南京官話を含む南話教育時期とは変化はなかった。しかし、南話とは別の北京官話を学習し教育しなければならなかったことと、江戸期とは別の近代中国語教育の確立が求められた時期であり、あらゆる教育環境の整備が必要とされる時期であった。そして、日清戦争終結までの中国語教育には、四つの有力な組織があった。それらは、一つは通商・外交の必要から行われた中国語教育の核となる公教育としての舊東京外国語学校、一つは軍事の必要から行われた陸軍内の組織的学習、一つは亞細亞への關心から民間で組織され公教育を補完した興亞會支那語學校、一つは大陸布教の必要から行われた京都・東本願寺教校での組織的学習である。これら四組織は互いに分立しながらも関係も持っていた。北京官話教育時期の初期の教育状況や教育形態は、後の中国語教育の雛型となったものを多く含んでいる。それゆえ、これら四つの組織の考察は、その成立過程に多くの力点を置くものとなった。また、北京官話教育時期を體現する典型的な人物……舊東京外国語学校に在籍中陸軍清國派遣留學生に採用され、歸國後、陸軍、長崎商業、上海日清貿易研究所、日清戦争従軍後、上海三井物産社内で中国語教育の傍ら東亞同文書院でも教鞭を執った人物……御幡雅文の中国語教育に捧げた一生を追った。そして、北京官話教育時期の刊本テキストには見られない清末滿洲貴族の北京語の實態を明らかにした稀書・寫本『燕京婦語』について論じた。

第一節「北京官話教育と『語言自述集 散語問答 明治 10 年 3 月川崎近義氏鈔本』」は、近代中国語教育の公教育に於ける開始、即ち、北京官話教育の開始を示す東洋文庫所蔵『語言自述集 散語問答 明治 10 年 3 月川崎近義氏鈔本』の發掘を中心に論考を進めたものである。

第二節「日本陸軍における中国語教育の形成」は、陸軍參謀本部による中国語教育の形成過程を中心に論考を進めたものである。

第三節「興亞會の中国語教育」は、大陸への關心から民間で組織された興亞會が組織運営した支那語學校の始末を『興亞會報告』、『亞細亞協會報告』を用いて論じたものである。

第四節「東本願寺中国語教育編年資料〔自明治 6 年至明治 16 年〕」は、『上海東本願寺開教六十年誌』、東本願寺『配紙』などを用いて、編年で資料を構成したものである。

第五節「御幡雅文傳考」は、御幡雅文という、北京官話教育開始時期に生徒として學び、陸軍派遣清國留學生となり、舊東京外國語學校の消滅後も、長崎、上海で教鞭をとり續け、ドイツのテキスト (Arendt, 1894) にも採り上げられた『華語跬步』を編み、上海の三井物産で社内中國語教育に従事するなど、北京官話教育時期と共に中國語教育に捧げた人物の一生を追って論じたものである。

第六節「『燕京婦語』について」は、寫本『燕京婦語』の發掘により、北京官話教育時期の刊本には残されなかった、清末の滿洲貴族の北京語の實態を明らかにするとともに、明治末期の女性の中國語教育について論じたものである。

第一節 北京官話教育と『語言自述集 散語問答』

明治 10 年 3 月川崎近義氏鈔本』

1. はじめに

明治 4 年 7 月 29 日 (1871 年 9 月 13 日) の日清修好條規等の調印、そして、その改訂や臺灣問題などの對清外交交渉は、日本に“北京官話教育”の必要を痛感させた。その結果、明治 9 (1876) 年 9 月、北京人教師・薛乃良を東京外國語學校に招聘し、ここに“北京官話教育”は開始された。そして、その初級教科書として、英國人 T. F. Wade の『語言自述集』が使用された。これらのことは、夙に知られている所である。

近代日本の中國語教育の出発となった、“南語教育(南話教育)”から“北語教育(北京官話教育)”²⁸へという、歴史的轉換期における教學情況について、從來も中田敬義や平岩道知らの回想などによって知られてはいた。しかし、それらは必ずしも十分と言えるものではなかった。本節では、當時の東京外國語學校助教諭・川崎近義の事蹟を通して、“北京官話”受容の姿を明らかにしたい。

2. 北京官話教育の開始

「東京外國語學校教諭清人葉松石²⁹氏儀、本年七月十五日滿期雇止。右代員同國江招

²⁸ 南語、北語という言葉は、『東京外國語學校一覽 明治十三・十四年』(東京外國語學校, 1880) 所収の「科目細目 漢語學」に見える。『大清文典』(金谷昭, 1877) 所載のカタカナ音表示は、東京外國語學校教諭・穎川重寛が関しており、浙江口を採用している。それから類推すると、吳語の影響の強い官話を、南音、南語、南京語などと呼んでいたと思われる。また、南語の初級教科書としては、北京官話教育導入以前から用いていた『漢語跬步』(外務省, 1870) が用いられた。東京外國語學校での南語科は、「明治十四年に至って」廢止した、と何盛三, 1928; 71-72 頁にあるが、南語という言葉は、『東京外國語學校一覽 明治十六・十七年』(東京外國語學校, 1883) にまで見えるので、南語科はその頃まで設置されていたと見られる。

²⁹ 名は煒。字は松石。號は夢鷗。嘉興(現・中國浙江省)の人。道光 19 (1839) 年前後～光緒 29 (1903) 年。享年、數え 65 歳。東京外國語學校に招聘され、明治 7 年 (1874 年) 7 月 28 日より明治 9 年 (1876 年) 7 月 15 日まで同校教諭。歸國後、再來日。詩文に長じ、日本の文人達との交流も多く、當時の詩文集の詩評等にその名が散見される。晩年、吳縣主簿となる。著書に『煮藥漫抄』がある。蘇州大學范建明先生のご教示で、俞樾「吳縣主簿葉君墓誌銘」(『春在堂全集』雜文六編五所收)を知り、その略傳を知ることができた。

傭之儀囑托致置候處、這回、同國人薛乃良³⁰氏儀、右爲教諭來着候二附、葉松石氏月給金百六拾圓之處、薛乃良氏儀、月給金百圓ヲ以、本月一日ヨリ來明治十一年七月三十一日迄、向二十參ヶ月間雇入結約致候。…(略)…明治九年九月廿五日…(略)…」³¹(標點符號は引用者による。)

とあるように、明治9年(1876年)9月1日³²、薛乃良が東京外國語學校に着任した。そして、同校漢語學科では、從來までのものを“南語”とし、主要には“北語”つまり“北京官話”を教授することになった。これが、公教育上の“北京官話教育”の開始である³³。

この“北京官話教育”の開始は、新しい教科書を必要とした。それが、當時の英國駐北京公使 T.F.Wade の『語言自邇集』³⁴(Wade, 1867¹)であった。なぜ『語言自邇集』であったのか。これについて

「Wade は…(略)…北京官話が、支那全國に通じ、殊に政府の官吏の間に往來するには、最も適當するとの事を發見し…(略)…(そして『語言自邇集』が)支那語の教科書としては、當時(1867年當時…引用者補記)最も完全なるものなりしかば、本書は忽にして在清歐洲人并に歐洲の支那語學生の教科書となり、隨て日本に於ても、支那語の教科書とし云へば、今日に至るまで、何人も本書を用ゐざるものなく」

と、明治39(1906)年に廣池千九郎は「歐米學者の支那語學研究に關する略歴史」(廣池千九郎, 1937; 862 頁)に記している。

しかし、『語言自邇集』初版本自體、明治9年當時、日本に殆ど流入していなかった³⁵。

それでは、“北京官話教育”に踏み切った東京外國語學校ではどうしたか、といえ、刻することなく、寫本に依つて“北京官話教育”を開始したのである。これについて、從來の論考に多く引用される『北京官話文法』(何盛三, 1929; 73 頁)には、回想に基づく記述がある。それは

「學校に藏したる纔かに一部の語言自邇集を原本とし、生徒をして悉く之を筆寫せし

³⁰ 生没年、經歷等不明。家族(妻、陶氏。一男二女、受慈、心慈、念慈)とともに來日。編著に『眉前淺話』(寫本)がある。『中國文學語學資料集成』第1篇第2卷(波多野太郎, 1988¹)に所收。

³¹ 「東京外國語學校教諭清人葉松石氏滿期雇止右爲代員同國人薛乃良氏雇入之儀御届」(國立公文書館所藏『公文錄』2A9 公 1773)。

³² 新年度の最初の日。

³³ 明治9年以前の北京留學生、例えば、小栗栖香頂、中田敬義らによる北京官話學習、及び、琉球地方での中國語教育は、ともに本論文の論ずる範圍にはない。つまり、日本國內では、公教育において、東京外國語學校での北京官話教育を嚆矢とする。そして、同校のそれが重要な意味と影響を持つことは言うまでもない。しかし、民間では、明治8(1875)年12月1日、京都・東本願寺に開設された育英教校で、その「乙科課業表」中の「漢語學」の欄に、「北京音」という記載があり、現實に乙科が運營されたことから、これが北京官話教育のはじめと考えられる。東本願寺での明治初期の中國語教育については本章第四節(54-69 頁)に譲る。

³⁴ 書誌的記述は、Cordier, Henri, 1881 ; pp. 1881-1895, pp. 1688-1690 に詳しい。

³⁵ 舊東京外國語學校以外に、小栗栖香頂、金子彌兵衛らが所藏していたと考えられる。

めて教科書とし」³⁶

というものである。しかし、これまでは、この記述の引用にとどまり、その寫本の“存在”や“寫本自體”に言及したものは、残念ながら無かった。

そこで、次に、鱒澤の目睹した語言自邇集の寫本について述べることにする。

3. 『語言自邇集』の寫本

鱒澤の現在までに目睹し得た寫本は、三部ある。靜嘉堂文庫所蔵の一部と東洋文庫所蔵の二部(AとB)である。

① 靜嘉堂文庫所蔵寫本について

『靜嘉堂文庫國書分類目錄』715頁に、「語言自邇集五卷 言語例略一卷 文件自邇集一六卷 撰者未詳 寫 八冊」

と著録されている。『語言自邇集』は「言語例畧」を全8部の第8部として含む。『文件自邇集』³⁷は『語言自邇集』とは別の獨立した書物であるから、分出したほうがよい。しかし、ここでは、『語言自邇集』寫本のみを紹介する。

○書誌

『語言自邇集』(寫本)〔但し匡郭は刻本〕

○全6卷(改裝全4冊)。全230葉。線裝。四針眼。

○外形 268×185(mm)

○朱欄 匡郭内 189×150(mm)

○有界 每半葉12行。每行16字。(但し平仄篇のみ18字)

○版心なし。(但し 平仄篇の4葉のみ「東京外國語學校箋」とあるものを用いる。)

○書名 卷首題 語言自邇集

○鈔寫人 未詳

○舊蔵 東京外國語學校。同校廢校後、東京商業學校に移管。(「東京外國語學校圖書」と「東京商業學校消印」の印記。)

○現蔵 靜嘉堂文庫 圖書番號 83-50

○底本 Wade, 1867¹。

寫本は、「散語四十章」、「問答十章」、「續散語十八章」、「談論篇百章」、「平仄篇」、「言語例畧」で、底本の中國語テキスト本文の全てである。

○書寫時期 未詳。『東京外國語學校書器目錄 第二輯 明治十三年八月調査』に著録があり、前掲した『北京官話文法』の記述から、明治9年9月頃かと推定されるが斷定できない。

○寫本中の書き込み

³⁶ 明治9年當時の記述は、平岩道知の回想に基づくものと思われる。

³⁷ 書誌的記述は、Cordier, Henri, 1881 ; pp. 1881-1895, p. 1689 に詳しい。

量的には少ないが、本節 4. の 31-35 頁で觸れる。

② - 1 東洋文庫所藏寫本 A について

なお、以下、寫本 A を寫本と呼び、後述する東洋文庫所藏寫本 B を鈔本と呼ぶ。

○書誌

川島浪速書寫『語言自邇集 問答十章』（小田切萬壽之助舊藏）

全 23 葉（但し本文は 22 葉）

○全 6 卷（改裝全 4 冊）。全 230 葉。線裝。四針眼。

○底本 Wade, 1867¹。

寫本は、「問答十章」で、底本の中國語テキスト本文の全てである。

底本は、Wade, 1867¹ の「問答十章」である。

寫本は、「明治十四年二月四日起念」（オモテ表紙）、「此本乃蔡伯昂師所授」（見返）とある。寫本本文は、底本本文と一致するが、底本本文と異なる鈔本本文の字句を行間に書き入れてあり、蔡伯昂が薛乃良の修正し教授した「問答十章」本文に従って教えたことを伺わせる。

鈔本の「問答十章」直前には、蔡師ハ大抵薛師讀マヨリ教ユ（51b）という氣になる記述があるが、不明。また、寫本は、重念箇所を字の右、又は上に\で、有氣音を○で、卷舌音を△で表示し、四聲の符號位置は鈔本と同様である。また、行間には解釋の書き込みが散見される。そして、寫本の重念位置は、鈔本の蔡伯昂によるという重念位置とほぼ一致する。この寫本も、鈔本とともに、當時の教學情況を知ることのできる貴重な資料である。

② - 2 東洋文庫所藏寫本 B について

○書誌

『語言自邇集』（寫本）〔但し匡郭は刻本〕

○全 6 卷（改裝全 4 冊）。全 230 葉。線裝。四針眼。

○書誌

『語言自邇集 散語問答 明治 10 年（1877 年）3 月川崎近義氏鈔本』（但し匡郭は刻本）

○殘 2 卷³⁸（全 1 冊）。全 89 葉。線裝。四針眼。

○外形 112×150（mm）

○藍色の欄。匡郭内 94×130（mm）

○有界。每半葉 12 行。每行字數不同。

○有魚尾

○書名

くるみ 書外題、語言自邇集 散語 問答。

³⁸ 自筆の『西涯子藏書目錄』（川崎近義, 1883）には、「語言自邇集 ○平○散○問○續散○談○例畧○以上寫本 全五」とある。「全五」とは全 5 冊と考えられるので、殘 2 卷（全 1 冊）とした。

書外題 散語問答 語言自述集

卷首題 語言自述集

○鈔寫人 川崎近義(東京外國語學校助教諭)。

○舊藏 中山久四郎。(「近義」と「中山氏藏書之記」の印記。)

○現藏 東洋文庫(圖書番號Ⅷ—6—1002)

○底本 Wade, 1867¹。

鈔本は「散語四十章」(第1葉～第50葉)、「問答十章」(第52葉～第88葉)である。
なお、鈔本本文は、學習に際し、中國人教師の指示により、字句を改めた書き込みが有る。また、鈔本の「問答十章」本文には、底本本文と異なる字句があり、後で〔明治14(1881)年3月3日に〕、底本本文を硃字で書き込んでいる。このことから、これは薛乃良の指示によって改められて筆寫された、と考えられる。

○書寫時期などについて

鈔本には、墨筆の本文のほかに、行間や欄外に、墨筆と硃筆による多くの書き込みが有る。そこには、日附の書き込みが散見され、それによって、書寫時期と學習時期を確定、或いは推定することができる。

「散語四十章」については、「明治九年九月初二爲始」(1a)〔第1葉オモテを示す。ウラを示すのはbとする。以下同じ。〕、「二月念七日念完」(50a)とある。

「問答十章」については、「明治十年丁丑二月念二起抄」(52a)、「明治十年三月九日抄完」(88a)とあり、「二月二十八日學起」(52a)、「明治十年五月念六日念完 川崎近義」(88a)とある。

さらに、日附の書き込みの主なるものを時間順に並べると

〔明治9(1876)年〕

九年十一月卅日告假是昨日近火(25a)

子十二月廿三日爲止(32b)

〔明治10(1877)年〕

十年丑一月八日爲始(32b)

十年二月一日念(44b)

〔明治11(1878)年〕

明治十一年十月七日起再念 墨筆記號ハ龔先生³⁹ノトキ改ムルナリ(見返b)

〔明治12(1879)年〕

明治十二年十月十四日再念起(51b)

〔明治13(1880)年〕

³⁹ 龔恩祿。生没年不明。北京の旗人。東京外國語學校に招聘され、明治11(1878)年9月16日より明治13年9月5日まで同校訓導。弟、恩長とともに來日。何盛三1928;76-77頁に、彼の紹介記事がある。龔姓は來日のための偽姓で、父親は英紹古(繼)と思われる。一家が北京で日本人に北京官話を教えていたことは、中田敬義らの回想に見える。

明治十三年十月十三日起蔡師⁴⁰ (32b)

十三年十月蔡師教學 (33a)

〔明治 14(1881)年〕

文中硃字ハ原文 又硃筆抹去字亦原文没有字 十四年三月三日記 (51b)

である。

これらの書き込みから、「散語四十章」は、薛乃良の來着時期(明治 9 年 8 月 20 日頃)を考慮すると、明治 9 年 8 月末から書寫を始め、同年中、或いは明治 10 年 1、2 月頃までに書寫を終えたものと考えられる。「問答十章」は、明治 10 年 2 月 22 日に書寫を始め、同年 3 月 9 日に書寫を終えた、と記述がある。

また、「明治九年九月初二爲始」とあるのは、「散語四十章」の學習開始を示すものと考えられる。明治 9 年 9 月 2 日は、薛乃良が東京外國語學校に着任した明治 9 年 9 月 1 日の翌日である。そして、これは、何盛三, 1928;77-78 頁の

「川崎近義わ…(略)…薛乃良來るや生徒と共に之に就て北京語を學び」

という記述から考え合わせると、「明治九年九月初二爲始」の書き込みこそは、近代日本の中國語教育史上、北京官話教育の開始を示す、現在のところ最も早い直接の記録である。この點で、東洋文庫所藏寫本 B は、記念碑的な意味を持っている。

次に、鈔本中の書き込みについて見ることにする。

4. 北京官話教育開始時の教學情況を示す『川崎近義氏鈔本』

鈔本には、『語言自邇集』本文のほか、川崎近義による墨筆と硃筆の書き込みが澤山ある。それは、薛乃良、龔恩祿、蔡伯昂ら 3 人の中國人教師に就いて、彼が學習したものの書き込みである。

“北京官話教育”の開始當時の教學情況について、本論文 27-28 頁で引用した何盛三, 1928;73 頁の記述に續けて

「先づ其平仄編に依り正確なる發音を練習し、十分習熟して甫めて談論編に移り、更に上達して後、教授潁川重寛⁴¹が紅樓夢を講じ⁴²、川崎近義が熱心に之を補佐したと云う。」

⁴⁰ 蔡伯昂。生没年等不明。北京の人。東京外國語學校に招聘され、明治 13 年 9 月 6 日より明治 14(1881)年 10 月 5 日、家族の者が病氣に罹り離任するまで、同校教員。彼も北京で日本人に北京官話を教えていた。なお、東京外國語學校では、蔡伯昂の離任後、明治 15(1882)年 5 月 3 日、關桂林の着任まで、中國人教師不在の狀況が續いた。

⁴¹ 天保 2 年 10 月 2 日(1831 年 11 月 5 日)～明治 24(1891)年 4 月 21 日。長崎市・崇福寺に「潁川重寛先生之碑」がある。また、何盛三 1928;77 頁に紹介記事がある。

⁴² 紅樓夢を講じていたことは、『東京外國語學校一覽 明治十三・十四年』に見える。ちなみに、南語は『今古奇觀』を用いていた。

と記している。

この記述から、“北京官話教育”の開始當時、“發音”に重點を置き學習されたことが伺える。このことは、鈔本のほぼ全文に及ぶ“發音”についての書き込みによって裏づけることができるのである。そして、鈔本中の書き込みによって、“北京官話教育”導入當時の教學情況が具體的に伺える點で、鈔本は更に重要な意味を持っている。ただし、薛乃良、龔恩祿、蔡伯昂ら3人の教師の教授内容の分別がつけ難い點のあることには、留意しておかねばならない。

鈔本のカタカナによる音表記や、發音についての書き込みから、“いかに發音するか”の點に重點が置かれ學習された、とわかるので、その點から見ていく。

① 四聲の表示について

上平は漢字の左下に記號(ゝ、或いは○)を附し、下平は左上に、上聲は右上に、去聲は右下に記號を附している。

この表示法は、『亞細亞言語集 支那官話部』(廣部精, 1879、以下『亞』と略記)、及び「靜嘉堂文庫所藏寫本の書き込み」⁴³(以下「靜」と略記)にも見られる。合著『官話指南』(鄭永邦・吳啓太, 1882、以下『官』と略記)では、その表示法を右上、右下、左上、左下の順で爲す、とするが、それがその後に影響を與えた表示法である⁴⁴とは考えにくい。

② 有氣音の表示について

有氣音は可' (7b)のように、大體は聲調の位置に\、/で表示されている。また、「散語四十章」の見出し字は、左に|をつけて表示している。(右につけるものも少し有り、「散語四十章之三」には文中にも見える。)

「靜」には、鈔本と同様なものが見られる。『亞』では、圈點内に小點を加え、⊙と表示している。『官』では、漢字の左肩に'を附す、としている。

③ そり舌音の表示について

卷舌音、或いは舌音と呼び△、或いは㊦、極く一部は舌で表示している。なお、齒莖音の〔1〕も卷舌音としている。

「靜」にも△を附したものが見られる。『亞』、『官』には見えない。

④ 韻母の分類について

「開口呼 撮口呼 合口呼」(見返b)と記し、齊口呼のものも開口呼としている。さらに、「合口呼ハ合ノ字ヲ記ス以下倣」と(26a)するが、合の字はいくつも見えず、撮口呼としている。そして、開口呼を㊦で、撮口呼を㊧、或いは㊨で表示し、ほとんどこの2つに分けている。

『亞』では、開合呼と合口呼とに分け、『官』では、張口音、閉口音、撮口音、由タチツテト母音所出之音、などと分けているが、いずれも表示法を示していない。「靜」には言及が無い。

⁴³ 「談論篇百章」の書き込みによる。

⁴⁴ 『中國語學新辭典』(中國語學研究會, 1969; 256 頁左)。

⑤ 韻尾の[n] (以下國際音聲記号はすべて[]と記す)[ŋ]との區別について韻尾[n]を窄音と呼び、ㄋで、韻尾[ŋ]を潤音と呼び、ㄋ̣で表示している。

『官』では、韻尾[n]を輕音(窄音)、韻尾[ŋ]を重音(寬音)と呼び、重音は漢字の左に一を附す、とする。『亞』と「靜」には言及が無い。

⑥ 一、七、八、不の變調について

「一ノ字下ノ字ノ四聲ニヨリテヘンズ」(1a)

「八下ニ去アレバ下平ニナル」(1a)

「不下ニツク字ニヨッテヘンズ」(2b)

とあり、七の變調については記述が見られない。

『亞』、「靜」、『官』ともに言及が無い。

⑦ 第三聲の聲調交代について

「九斗米」(2b)では、各々第三聲に硃筆で印があり、「九」と「斗」には更に墨筆で第二聲に印がある。このように第三聲に硃筆で印があり、同時に第二聲に墨筆で印のあるものが散見される。これは、「明治十一年十月七日起再念、墨筆記號ハ龔先生ノトキ改ムルナリ」(見返b)とあることから、第三聲の聲調交代の指摘は、龔恩祿によるものと推測される。

『亞』では言及が無いが、同じ『總譯亞細亞言語集 支那官話部』(廣部精, 1880. 以下『總』と略記)、及び『官』には言及がある。特に『總』に言及があり、『亞』には言及が無いことは興味深い点である。「靜」には無い。

⑧ 助詞、名詞接尾辭などの發音について

「龔先生曰虛字ハ皆上平」(見返b)とあり、「㊦・麼・著・們・呢・的　ㄣ・麼・著・們

・呢　的。ㄣ　・麼・著・們・呢　的〔「ㄣ別本ニ上平ニ印^{讀ム}アリ」を消している――

引用者〕(オモテ表紙b)とある。㊦は龔恩祿、ㄣは蔡伯昂、ㄣは薛乃良である。また、裏°

°^{カルク}頭(4a)、°^{カルク}前°^{カルク}頭(5a)、°^{カルク}銀子°(16b)、嚙。・子(22b)、°老子°　ローシノㄣ

老°　・子　トシヨリノㄣ(40a)、爺^{カルク}們(37b)などとある。

『總』の「凡例」に、「助字虛字、即チ兒、了、著、子、ナドノ字ハ、都テ上平ニ讀ムモ妨ゲナシ」とある。「靜」では、・麼、着、・着、們、・們、・呢、的、と表示し、「カルク」という書き込みは見られない。『亞』と『官』には言及が無い。

⑨ 重念とその表示などについて

「題目ノ字ノワキニ | 印アルハ有氣ナリ、下倣、之外ノ處ノ | 印ハ念重ノ印ナリ」(1a)、
「 | ツヨクオモクイフ印ナリ」(12a)とあり、字の右側に附された | 印は、「題目ノ字」以外の本文全文に及び、「在左ノ | 印ハ蔡師教點」(33a)とある「散語四十章之二十七」以降は、

両側に | 印が附されている。(それ以前に両側に | 印のある箇所も少しある。)

| 印は、文中の強調、強勢の箇所を示している。例えば、「那茶 壺 擱在 那兒了 擱在 屋裏 卓子^{カルク}上^{カルク}了」(13b)〔| 印は、ここでは左側に附した。以下同じ——引用者〕のように、また、「這個 限^{オモク}好^{カルク} 那個 不^{カルク}好^{カルク}」(3a)のように、「オモク」、「カルク」と書き入れてあるものもある。文中の強調の重要性は、「四聲之内 因句之緩急 則有輕重 四聲不能錯」(見返 b)とあることからわかる。文中の強調、強勢を示す | 印は、「靜」にも見られる。また、「靜」では、字の上に \ を附し「重記」とし、/ を附し「最輕記」として、「可[\]不是麼 我念了十幾年[/]的漢書」(談論篇百章之一)のように表示しているものがある。『官』では、「在字之右邊劃一橫 如船一字是也」(「凡例」)とするが、この表示法はあまり使われなかったようである。

『語言自邇集』の「散語四十章」は、「題目ノ字」、「單語」、そして「文」という構成である。鈔本の「單語」部分にも、| 印が附されている。例えば、「| 先生、教 | 學、| 學生」(6b)などのようにである。また、「| 厨^{カルク}房^{カルク}」(9a)、「| 雲^{カルク}彩^{カルク}」(3a)、「| 事^{オモク}情^{カルク}、| 情^{オモク}形^{カルク}」(38a)などのように、「オモク」、「カルク」と書き込みがあるものも見える。さらに、「針線 イトノ トキハ下カルク云 ハリトイトノトキハ 二字トモケイデウナシ」(15b)とあることから、單語内部の輕重に注意を向けていたことが伺える。

また、「句中横ニ一ヲヒキ シハクル^{讀ヌ}ニ指ス句調ノオボヘナリ以下之ニナラウ」(33a)とあり、一印が散見される。一印によって語群に分けられているので一印は休止を示す記號と解することができる。

『亞』、『總』ともに重念に言及していない。

鈔本に、「丑⁴⁵一月十五日…(略)…中國人ノ音聲去 | ヲ輕ク云ハ下平ニ似、下平ヲ重ク云ハ去 | ニ近シ…(略)…」(見返 b)とあることから、“北京官話教育”開始當初、已に「重ク」、「輕ク」という點に注意が拂われていたことがわかる。重念が、中國人教師のもたらしたものか、日本人學習者の獨創なのか、はたまた、歐米人の發案か等々、後考に俟たなければならない。また、『語言自邇集』には、重念について言及していないが、前著『尋津錄』⁴⁶(Wade, 1859; pp. 74-81)では、中國文のアクセント表示として、横書きの Wade 式發音表記の上方に一印を附し、さらには、一文を語群ごとに分け、語群に間隔を空けて休止を表示する、という表記法が見えることを附言しておく。いずれにせよ、“北京官話教育”の導入初期の段階で、重念が重視されていたことは確かであり、『官』における重念の重視は、この影響を受けたものと推測する。

以上は、發音に関する書き込みであったが、次に、その他の鈔本中の書き込みを見てみる。

⑩ 語釋について

北京など中國の風物理解を示す語釋や圖が散見される。ここでは、いくつかの紹介に止

⁴⁵ 明治 10 年。

⁴⁶ 書誌的記述は、Cordier, Henri, 1881 ; pp. 1881-1895, p. 1688 に詳しい。

める。

「勺子シルジャクシ 匙子チリレンゲナドノヲ」(9a)

「人ノ錢ヲカタリトルヲモ刷洗ト云」(14a)

「饅頭マンヂウ パンノヲ ムギモチ 先生⁴⁷日本ワナイ 餅ヲミテマン中ナリト云」

(17b-18a)

「老婆子ハ下女ノヲ 教師⁴⁸ハ家ノ下女ヲ | | | (老婆子の略——引用者)ト云ヒオル(72a)

「別的 不別的ハ土語ナリ 外ノヲハ今ニ及ハズト云也」(88a)

⑪ その他の書き込み

「耳音要緊 耳音ハ耳聡聴音ノヲ」(見返b)

「學話秘訣六件 一 耳音 二 舌便 三 口氣 又 一 悟性 二 用心 三 求甚解」(ウラ表紙b)

4. のまとめ

鈔本本文に現れた、四聲と重念に対する教學上の重視とその符號化の中に、“北京官話教育”の開始とともに、後の日本の中國語教育の“傳統”の原點が已につくられていたことを、見てとることができよう。『亞細亞言語集 支那官話部』、『官話指南』は、前者は四聲の符號表示、後者は重念の重視という、各々公刊書としての先驅的役割を果たしたが、いずれもこれらが、東京外國語學校の教學實踐の追認であったことを鈔本は示している。この點においても、鈔本は重要な意味を持っているといえよう。

次に、鈔本の鈔寫人・川崎近義について紹介することにしよう。

5. 川崎近義とはどういう人か

従来は、川崎近義について、何盛三, 1928; 77-78 頁の次の短い記述以外、紹介されて来なかった。それは、

「川崎近義わ^(ママ)水戸の人、漢語學所外國語學校に熱心支那語を教え、明治十六年病歿、東京谷中天王寺に葬る、初め何處に支那語を學べるか不明なるも、夙に相當に南京語に通じ、後北京人薛乃良來るや生徒と共に之に就て北京語を學び、終生黽勉怠らず、支那語教育に於ける功績大なる人である。」

というものである。

鈔本の書き込みの様子から、この記述は十分に肯定できるものである。しかし、「明治十六年(1883 年)病歿」とあるのは誤りである。そして、この記述は些か簡略なものである。そこで、鱒澤の調査した所を以下に述べることにする。

川崎近義の墓所は、東京都・谷中の都共同墓地乙 1 號 8 側 18 番にある。

⁴⁷ 先生とは薛乃良を指すと思われる。

⁴⁸ 教師とは薛乃良を指すと思われる。

墓石によると、戒名を義恭院即法居士といい、天保十四癸卯年十二月六日(1844年1月25日)生、明治17(1884)年6月23日歿、享年40歳5ヶ月であった。

また、明治18(1885)年当時、東京外國語學校の清國人教師・張滋昉⁴⁹の筆になる「川崎君墓誌銘」の碑(明治18年6月23日立石)が、同乙8號8側6番にある。

さらに、川崎近義の寫眞が、茨城縣東茨城郡桂村の黒澤家に残されている。

ここでは、前述の碑文を紹介し、それによって、從來知られることの少なかった川崎近義の一生を見ることにする。

碑の全文は次の通りである。(標點符號は引用者による。)

・川崎君墓誌銘

君姓川崎、名近義、號西涯。幼名鐵之助。舊水戸藩茨城郡堀村人。父日常衛門、業農。娶於同族、生三子。君其次也。明治初政丕變舊習。君奮然思有以展其志。乃以三年之秋、偕友至東京。是年冬、因鄉人某之介紹、遂執贄於長崎潁川君之門、而學漢語焉。明年春、長野縣召爲吏。甫及月餘、辭職而歸。潁川君嘉君謹慎深資、倚任。三月、遂擢爲外務省漢語學塾佐。四月、轉文書司等外二等。七月、遷一等仍兼漢語學塾頭。六年五月、調文部省等外一等、歷十四等、十五等出仕。七年十一月、罷出仕、以奉職三年蒙賜如例。是月、即改爲東京外國語學校學習教諭。八年七月、遷教諭補。十年八月、轉助訓導。十四年七月、遷助教諭。君夙夜匪懈、克勤厥職。十七年春、嬰疾、猶復趨公如故。二月、病增劇始入醫院。予每省君疾時、以曠廢職業爲念。竟以其年六月二十三日卒於淡路町之私寓。距生於天保十四年、春秋四十有二。越三日、葬於谷中天王寺之新塋。娶會津某氏。生子女各一。女殤。子近雄嗣其家。君幼學、爲詩、長習擊劍。有慷慨之意。惜皆未竟其志以歿。可悲也。夫既葬之、明年漢語諸生謀立石、以表君墓乞予銘。銘曰、

君性質樸、言和貌恭。與人無忤、黽勉從公。

夙志未展、吁嗟可惜。佑啟後人、奠此幽宅。

清北平 張滋昉撰竝篆額 明治十八年六月二十三日立石 市川安壽雕
と表面に刻む。

裏面に共建者、以下76名の氏名を刻す。(上段右から下段に記す)

「谷信近、磯部榮太郎、伊東小三郎、吳大五、瀬川淺之進、横田三郎、鈴木行雄、伊達寧祐、鄭永邦、瀧野種孝、里見義正、島田桑三郎、加藤義三、中山繁松、吉島俊明、大河平隆則、田邊熊三郎、豐島捨松、潁川雅言、遠山忠治、二口美久、沼田正宣、石崎正之、關口長之、大澤茂、柴田晃、御幡雅文、小林光太郎、谷信敬、平岩道知、木野村政徳、小川忠彌、榊原源太郎、草場謹三郎、末吉保馬、吳永壽、足立忠八郎、馬場廉、平岡道生、榎本師美、潁川甲子郎、黒柳繁昌、金森一孔、山田萬里四郎、村田龜、北條直方、加藤正生、竹内椿四郎、石原逸太郎、小田切萬壽之助、草鹿又次郎、重野紹一郎、大倉次郎、川島浪速、宮島大八、七

⁴⁹ 張滋昉の履歴は本論文53頁に記載。

里恭、山本瀧四郎、池田載、野間芳太郎、中川勝太郎、安原正意、望月幸三郎、大澤欽一、原全平、原次郎、吳泰壽、金田千代吉、田中金次、吉田清揚、石崎雄次、鉦鹿貫一、松永由熊、司馬忞、三輪高三郎、辻鐙太郎、野間光彦」

川崎近義は、天保14年12月6日(1844年1月25日)、現・水戸市堀町に生まれた。慶應3(1867)年、黒澤家に婿入りするが、同年離婚⁵⁰(後に、叶澤美津子と再婚)、當時、下坏村(現・東茨城郡下坏村大字下坏)で塾の教師をしていたという。明治3(1870)年秋、上京。潁川重寛の塾⁵¹に入り、中國語(南話)を學ぶ。明治4年(1871年)、中野縣(現・長野縣)に出仕するも、程なく歸京。同年3月(陰陽曆)、外務省漢語學所の塾佐に拔擢されて後は、漢語學所の歩み⁵²〔明治6(1873)年5月に文部省に移管され、東京外國語學校漢語學科となる〕とともに、明治9(1876)年9月の北京官話教育開始とともに北京官話を學び、中國語教育の第一線で活躍した。しかし、病を得て明治17年(1884年)6月23日にその生涯を終えた。

翌明治18(1885)年6月23日、碑が立てられた。しかし、その3ヶ月後の9月22日、東京外國語學校は、同校附屬高等商業學校とともに、東京商業學校に合併、東京商業學校となり、廢校。東京外國語學校の教科は、翌19(1886)年1月、東京商業學校第三部(語學部)として存續することになるが、これも、翌2月、廢部、名實ともに東京外國語學校は消滅した。

こうしてみると、川崎近義の一生は、近代日本の第一期中國語教育の歴史そのものであったといえよう。また、長崎出身の元唐通事やその子弟達が中國語教育界の主流であった明治初期に、川崎近義が水戸出身で、元唐通事でなかった點で、彼は近代日本の中國語教育——北京官話教育——のパイオニアとして、まことにふさわしい人物であった。

6. おわりに

近代日本の中國語教育の出發・北京官話教育の開始を時期的に實證するものとして、そして、後の中國語教育を方向づけた明治初期の中國語教育の實態を示すものとして、東洋文庫所藏『語言自述集 散語問答 明治10年3月川崎近義氏鈔本』が中國語教育史上の第一級資料であることを、本節で明らかにした。更に、この鈔本の鈔寫人・川崎近義が、潁川重寛や中國人教師とともに、中國語教育のパイオニアとして活躍したことも、本節で明らかにした。この東京外國語學校に播かれた北京官話教育という種が、いかなる形で全國に擴がり、いかなる花を開いていったか、次節以降で明らかにして行きたい。

⁵⁰ 『黒澤李恭』(立林宮太郎, 1937; 15頁, 29頁)。

⁵¹ 中田敬義, 1942; 12頁下段。

⁵² 漢語學所, 東京外國語學校の歩みについては、『東京外國語學校沿革』(東京外國語學校, 1932)に詳しい。

第二節 日本陸軍における中國語教育の形成

1. 陸軍内中國語教育の準備——清國語學留學生の派遣

本節では、日清戦争終結までの明治前期における日本の中國語教育に於ける軍事的關心から組織された陸軍の中國語教育の組織過程とそれに附隨した問題を論じる。

隣國・中國に對する軍事的關心は、陸軍の鳥尾小彌太の策定による東亞對策に始まり、具體的には、明治6(1873)年6月の將校の第一回清國派遣、翌7年4月の南清を中心とする將校の第二回清國派遣に始まる。この目的は、後出「明治十二年一月二十一日の桂太郎の山縣有朋宛上申書」の中の一節「支那朝鮮等の國に於て、我陸軍に關涉する諸件を探偵し、地理を精査して地圖を製し、時事を詳記して政誌を造ること」に括ることができる。この將校清國派遣は日清戦争まで續き、さらに、陸軍の調査活動とともに、地圖制作については陸地測量部の活動に引き繼がれていくこととなる。さて、この第一回、第二回の清國派遣將校も、北京など現地で中國語の學習を経てそれぞれの任務に就いたが、現地での中國語學習にはかなり力を入れたようである。そして國內では、明治11(1878)年5月頃から、在京の將校の何人かは、明治9(1876)年12月～10年8月に東京で中國語の私塾・日清社を主催し、當時、中村敬宇の設立した同人社で漢學・漢語を教授していた廣部精との交わりの中で、北京官話の學習と研究を始める⁵³。これが陸軍の中國語教育の起點となるのである。

さらに、この中國語學習を促進することになるのが、明治11年12月の參謀本部の成立であり、さらに直接的には、翌12年1月21日、桂太郎參謀本部管西局長が陸軍における中國語・朝鮮語の通譯の養成を山縣有朋參謀本部長に上申したことに始まる。この上申内容は陸軍の語學との関わりの原點として極めて重要なものなので、防衛省防衛研究所戦史研究センター史料室所藏『參謀本部歴史草案』より全文をここに長いが引用する。

「凡ソ支那朝鮮等ノ國ニ於テ、我陸軍ニ關涉スル諸件ヲ探偵シ、地理ヲ精査シテ地圖ヲ製シ、時事ヲ詳記シテ政誌ヲ造ルハ、即チ、管西局ノ管掌スル所ナリ。故ニ局員若干名ヲシテ通常彼地ニ派遣シ、實地ニ就テ之ヲ研究シ時々本邦ニ報送シテ、地圖及政誌ノ參考ニ備ヘシム。然レトモ、一旦事アルニ當テ、彼國ト兵ヲ接スルノ際ニ至テハ、縱令ヒ極メテ明細ナル地圖及詳述セル地誌アルモ、其言語ノ異ナルヲ以テ、我軍隊ニ要スル通辯若干員ヲ得ルニアラサレハ、何ヲ以テ我軍隊ニ必需スル所ノ要務ヲ辦理シテ其肯綮ニ中ルヲ得ンヤ。是レ最モ缺ク可カラサルノ一事ニシテ、而シテ未タ嘗テ我陸軍ニ於テ着手セサル所ナリ。然レトモ、此通辯ヲ得ンカ爲メ、現ニ服務セル將校ヲ以テ之ニ充テ語學ノミニ從事セシムルハ、本意トセサル所ナレハ、後來、士官學校ヨ

⁵³ 廣部精, 1880; 卷一下. 明治十三年一月附「跋文」では、菊野、柴山、中村、丸子、小泉の名を擧げている。

リ該國語ニ通スルノ士輩出ノ日ニ至ル迄、先ツ假リニ若干名ノ生徒ヲ募リ語學生徒トシ、年限ヲ定メ支那及朝鮮國ニ派遣シ、其語學ヲ學ハシメ、成業ノ日ニ至リ陸軍ニ採用シ、參謀本部ニ出仕セシメ、支那及ヒ朝鮮ノ通辯トシ、平時ニ在テハ士官學校内ニ於テ支那及ヒ朝鮮等ノ語學科ヲ設ケ之カ教師トシ、又支那及ヒ朝鮮ニ派遣セル將校ノ通辯ニ充テ、戰時ニ在テハ悉ク團・隊ニ分屬スル者トス。今其要スル所ノ人員ヲ舉クル。概ネ左ノ如シ。

一 軍團本營三名、一 四師團本營八名、一 六旅團本營十二名、一 十六聯隊十六名、計三拾九名

追テ兩國通辯ノ人員ヲ要スル概算、本文ノ如シト雖トモ、今一時ニ此レヲ派遣スル時ハ其費用少ナカラサルヲ以テ、先ツ其半數ノ人員ヲ派スル者トシ、而シテ其半數中、三分ノ二ヲ支那ニ、其一ヲ朝鮮ニ充ツ。但、朝鮮通辯ノ如キハ現ニ其語ニ通シ用ニ適スル者アルニ於テハ直ニ之ヲ採用スルモ可ナラン。其費用ハ左ノ金額ヲ以テ概算スヘシ。

一 支那ノ部 一人一ケ年、金七百八十圓、總人員十四人、此金額壹萬零九百貳拾圓

一 朝鮮ノ部 一人一ケ年、金四百圓、總人員六人、此金額貳千四百圓

合計壹萬參千參百貳拾圓

但シ、右ノ外定則ノ往復旅費ヲ給スヘシ。」（句點、傍點は引用者。以下同じ）

陸軍が中國を戦略的な重要地域として明確に認識し、また、中國語の必要性を指摘したこの上申書は、ほぼこのまま實現されることになる。具體的には、明治 12 年 11 月 25 日、東京外國語學校生徒 12 名を含む、13 名を清國留學生に採用し（現地採用を含め計 16 名）、同年 12 月 3 日北京に派遣したことである。また、中國語の必要性を指摘したこの上申書の直接的な反應は、明治 12(1879)年 11 月 25 日、公に中國語教育を擔っていた東京外國語學校の生徒 12 名を含む、13 名を清國留學生に採用し（現地採用を含め計 16 名）、同年 12 月 3 日北京に派遣したことである。しかし、中國の戦略的重要性と中國語の戰術的重要性という參謀本部の認識は、恐らくは自然發生的に、陸軍内での組織的な中國語學習の高まりを生じせしめたと思われる。これを時間で追ってみよう。

2. 廣部精『亞細亞言語集 支那官話部』刊刻の陸軍内支援者たち

先ず、明治 12(1879)年 6 月、『語言自邇集』を底本とした『亞細亞言語集 支那官話部』（廣部精, 1879）（以下、『亞』と略記）卷一が、ともに北京官話を學習し研究していた將校らによる出版資金援助の結果、刊刻される。次に、中國語學習將校は數十人に達し、同年 8 月、彼らを中心に「漢語會」が組織され、當時、東京外國語學校に招聘されていた（明治 11 年 9 月から明治 13 年 7 月まで）中國人教師・龔恩祿の弟、龔恩長を招き講師とし、中國語學習を始めたことである。さらに、13 年 2 月から 8 月の間、再び陸軍の將校らによる廣部精への資金援助により、『亞』卷二から完結の卷七、同じく『總譯亞細亞言語集 支那官

話部』(廣部精, 1880) (以下、『總譯』と略記) 卷一から卷三までが刊行される。

ここで、『亞』卷一の刊行、「漢語會」、卷二以下と『總譯』の刊行において、廣部精自身の言及した 13 名の將校について考えてみたい。

六角恆廣, 1988 の『亞細亞言語集』の刊行をめぐって」の中で、『亞』の刊行の經濟援助者について、樺山資紀、兒玉利國〔海軍〕、柴山尚則、中村義厚、野崎弘毅、比志島義輝、益滿邦介、丸子方ら 8 名を同定し、さらに、六角恆廣, 1988; 172 頁で

「廣部精が挙げた經濟援助者一二名のうち、菊野・大迫・古田・松村の四名は不詳である。(中略) 經濟援助者として挙げた人物は、主として陸軍の參謀組織の將校とみなすことができる。」

としている。

『明治十二年七月一日調陸軍省官員錄』によれば、六角氏の不詳とした 4 名とは、大迫——大迫尚敏、菊野——菊野景衛、古田——古田章文、松村——松村務本であり、また、すでに明治 11 年には廣部精と交流のあった小泉は、小泉正保であると考えられる。さらに、この氏名の判明した 13 名の當時の所屬と身分の内譯は、不詳の野崎弘毅、海軍の兒玉利國を除き、益滿邦介大尉、小泉正保少尉の 2 名は參謀本部員、樺山資紀は近衛局幕僚參謀部參謀長で陸軍大佐、その他 8 名は全て近衛歩兵第一聯隊、第二聯隊の少尉から少佐の人達であったことがわかる。

このことから、六角恆廣の「主として陸軍の參謀組織の將校とみなす」見解は、事實として正確ではなく、また、中國語學習に參謀本部を一元的に結び付ける六角氏の考え方も、正確さを缺いたものといえよう。勿論、前掲明治 12 年 1 月の桂太郎の上申書に見られるように、參謀本部を代表とする陸軍組織が廣部精と中國語に目を向けなかった筈はないのである。だからこそ、中國語學習に對する陸軍の關與の仕方に注目する必要があると考えられる。

そして、實際、『亞』卷一の刊行、「漢語會」の組織化、卷二以下の刊行と續く時間の中で、將校の中國語學習に對する陸軍の對處の仕方に變化が有るのである。そこで、これについて、少し詳しく見てみよう。

前掲の大迫、つまり、當時の歩兵第一聯隊第一大隊長・陸軍歩兵少佐大迫尚敏は荒尾精を回想する談話の中で

「余が近衛の大隊長をして居る時に、士官を集め、東洋語學校教師の弟、長氏を師とし、廣部精氏が支那語を幾分解して居られたから、通譯として夜間支那語を學んだ、其時分語學に關する書籍なかりし爲め、士官連中で醵金して、亞細亞言語集なるものを、廣部氏に編ませめた」⁵⁴

としている。これは、刊行を援助した側から、廣部精への一連の刊行援助の事情を裏付け

⁵⁴ 井上雅二, 1910; 226 頁。なお、東洋語學校は東京外國語學校の誤り、長氏とは龔恩長である。また、この記述は、當時の中國語學習の様子を示すもので、中國人教師一人に通譯として日本人教師がつく教授形態は、東京外國語學校と同様である。

る記述である。同時に、これは、「去年(明治12年…引用者)八月某々君等、相謀テ漢語會ヲ某處ニ設ク」と『總譯』卷一の跋文にある「漢語會」の實體が、近衛歩兵第一聯隊、第二聯隊の將校を中心とした中國語學習組織であったことを窺わせるものである。そして、「某處」とは『増訂亞細亞言語集』(廣部精, 1902)「緒言」⁵⁵にある「近衛ノ參謀長樺山資紀君ガ長タル將校學習所ノ共同社」が考えられる。

この樺山資紀の關與は、最初の廣部精を圍む個人的な中國語學習組織が數十人に達するに及び、それら將校の中國語學習を後援する形で、個人的な中國語學習組織から陸軍内での公認された中國語學習組織「漢語會」として轉換したことを意味している。同時に、『亞』卷一の刊行援助は、個人的意味しかもたなかったが、卷二以下、『總譯』の刊行については、各々の個人的支援とはいえ、陸軍の組織的な意圖を含んだ援助であったことを意味している。つまり、『亞』卷一の刊行時と卷二以下等の刊行時との間には、このような明確な差があるのである。そして、「漢語會」での中國語教育は、國內における、陸軍の組織的な中國語教育の始まりといえるものである。

一方、明治13年初め、海軍中佐・曾根俊虎、元・北京日本公使館勤務の金子彌兵衛を中心に、日本を軸に「アジアの劣勢を挽回せん」と組織された興亞會(廣部精も30人の創立會員の一人である)は、その事業の第一歩として、2月16日、東京に興亞會支那語學校を開校する。そして、同時に、夜間に別課を設け、陸軍の教導團の將校と下士官に中國語教育を始める。従來の論考⁵⁶では、興亞會支那語學校では夜間に別課を設け、陸軍の教導團の將校、下士官に中國語教育を行ったという事實の紹介にとどまっている。しかし、この興亞會の別課の設置に、參謀本部が直接關與したと斷言まではできないが、外部とはいえ、學校形態の下で陸軍の中國語教育が行われるようになったことを示すものであり、「漢語會」という軍内の學習會組織の中國語教育から、より組織化された中國語教育に發展したことを示すものである。つまり、興亞會の別課は、實質的には、「漢語會」から繋がる、陸軍の中國語教育の外部での代行機關と位置付けられる。また、13年2月という興亞會支那語學校の開校、即ち、別課の開設の時期と、2月から8月まで續いた『亞細亞言語集』と『總譯』の一連の刊行の時間的重なりを考えると、興亞會支那語學校の開校は、廣部精への一連の刊行援助を一層促進したと推察できる。

このように、個人的グループの中國語學習から、公認されたグループの中國語學習へ、そして、軍外とはいえ、明確に陸軍將校、下士官を對象とした學校形態の中での中國語學習へ、という一連の過程に、自前ではないが、陸軍の中國語教育が形成されていく過程を見ることができる。このことは、自前の中國語教育體制の確立を待つことの時間的餘裕を持てないほど、陸軍の中國語に對する要求が切實なものであったことを十分に示している。

⁵⁵ 『増訂』「緒言」では、『總譯』卷一下「跋文」で明らかにしていない點、即ち、陸軍將校と關わりを初めて明らかにしている。

⁵⁶ 例えば、六角恆廣, 1988 所收「興亞會支那語學校」。

3. 陸軍内中國語教育の開始——清國派遣留學生の歸國

さて、參謀本部では、明治 13(1880)年 3 月、桂太郎は、局員・小川又次を派遣して清國語學留學生徒を監査させ、それに基き、10 月 21 日、「支那語學生心得」と留學生徒の取締を上海駐在の志水大尉に命ずることを上申し、認可されている。このように、着々と陸軍内における自前の中國語教育體制の確立が計られ、明治 14 年 9 月、桂太郎管西局長心得は山縣有朋本部長に將校自身にも中國語を習學させるべく、士官學校に中國語の一課を増置することを含め、桂太郎は、陸軍内の中國語教育の確立の具體化を山縣本部長に進言し、「將校ヲシテ支那語ヲ習學セシメ度儀ニ附」、次のように上申した。

これも長いが『參謀本部歴史草案』より全文引用する。

「外交日ニ廣ク月ニ密ナルノ今日ニ在テハ、將校タル者隣邦ノ語學ニ通スルコト軍事上必要ニシテ緊要トスル所ナリ。是レ歐州各國ノ士官學校ニ於テ外國語學ノ一課ヲ設置スル所以ナリ。是ヲ以テ、彼國ニ在テハ境界ニ接スル隣邦二三ノ國語ニ通セサルモノ殆之ナシ。然ルニ、今、我國ニ在テハ遙ニ隔絶スル英佛ノ語ニ通スルモノ稍多シト雖モ、却テ隣邦タル支魯兩國ノ語ニ通スルモノ極メテ少シ。是、畢竟、時世ノ然ラシムル所ニシテ、今日ノ開明ヲ致スモ泰西ヲ學ヒシニ由アルト雖モ、一朝隣邦ニ事アルノ日ニ方テハ、其語ニ通曉セサルカ爲メ軍隊ノ進退遲滯シ、其活動力ヲ減スルコト大ニシテ、我軍隊一ノ缺點トモ謂フ可キナリ。依テ、猶歐州各國ニ於ケルカ如ク、我國士官學校ニモ語學ノ一課ヲ増置セラレンコトヲ切ニ希望スル所ナリ。然リト雖モ、今、士官學校ニノミ置カルモ、其生育遙遠ニシテ今日不慮ノ用ヲナス能ハス。且、目下各將校ヲシテ之ヲ學ハシムルコト最モ緊急トスル所ナレハ、各師管ニ各一人ノ教師ヲ派遣シ、各將校ヲシテ日々本課ノ餘暇ヲ以テ習學セシメンコトヲ併セテ要スル所ナリ。此論、幸ニ採用セラレハ、其教師タルヤー昨十二年來彼國ニ差遣セラレ、既ニ習熟スル者十五名アリ。之ヲ一ヶ月平均貳拾五圓ノ俸給ヲ以テ雇フモ、十四師管ニ各一名(但第一師管ニ在テハ二名)ヲ以テシテ一年通計金四千五百圓ニ過キス。此僅々ノ資金ヲ以テ善良ナル將校ヲ得ハ、其益タル大ナリ。依テ、願クハ速カニ彼ノ生徒ヲシテ歸朝セシメ、各師管ニ派遣シ、以テ語學ノ教授ヲ爲サシメンコトヲ此段上申候也⁵⁷。」

と、清國語學留學生を陸軍の中國語教育の中心に据え、その確立を計った。そして、明治 14 年 11 月 8 日附けで、北京の清國語學留學生に歸國を命じ、同年 12 月、語學留學生 14 名⁵⁸は歸國した。

また、この上申に對して、『參謀本部歴史草案』によれば、明治 15 年 2 月 22 日、山縣有朋は、

「將校タル者隣邦ノ語學ニ通スルコト軍事上緊要ノ義ニ附、士官學校ニ於テ語學ノ一

⁵⁷ これによれば、15 名とあるが、福州の山口五郎太を除く、北京の留學生のみを数えたと考えられる。

⁵⁸ 前掲『參謀本部歴史草案』では、山口五郎太、小川忠彌を除く、14 名を記す。

科ヲ増置云々、及ヒ、現在ノ將校ニ學ハシムル爲メ語學教師各鎮臺ヘ配布ノ義等、縷々御協議ノ趣了承。右ハ御申越之通、如何ニモ緊要事ニ附、幸、將官會議ノ節、各鎮臺司令官ヘモ致内問候處、孰レモ同意見ノ義ニ有之、旁配賦ノ事ニ決定致候間、右配賦スヘキ語學教師人名御取調御申越有之度。將又、士官學校之義ハ、從來ノ學科夥多ニテ、現今、直ニ此一科ヲ増置難都合モ有之ニ附、篤ト取調之上迫テ決定可致候得共、幼年生徒學科中ヘハ差當リ支那語學ノ一科増置致候事ニ可致。」

と回答し、明治 15(1883)年 4 月には、歸國した語學留學生を參謀本部ほか、東京、仙臺、大阪、名古屋、廣島、熊本の各鎮臺に配屬⁵⁹、同時に士官學校や幼年學校でも、彼らを教師として中國語教育が開始されるようになる。そして、ここに、參謀本部による自前の中國語教育が陸軍内に組織化されたことになる。このため、同年 5 月 14 日の興亞會支那語學校の閉校という陸軍の中國語教育の代行機關の喪失にも、すでに自前で中國語教育を始めた陸軍では、何ら影響を受けなかったと考えられる。陸軍清國語學留學生には「單に語學の教授になってしまったものが多い」と瀨川淺之進が『續對支回顧錄』下卷 249 頁で述べているが、これは、關口長之、原田(木野村)政徳、谷信敬、柴田晃、西山(草場)謹三郎、平岩道知、大澤茂、御幡雅文らを指している。このことは中國語が陸軍内で眞剣に學べたことと、語學の需要の多さとその高まりを示している。

また、16 年 1 月には、陸軍大學(同年 4 月開校)入學試験の外國語選擇科目に「支那語」も加えられ、將校の中國語學習に應える體制も整備されていく。18 年 4 月には、福島安正は、『對支回顧錄』下卷 270 頁所載の「支那の形勢言語に通ずる士官を養成するを必要とする件」の中で、「支那の言語に通じ、支那の形勢を明らかにする者、少くも大隊中三名を配置」すべしとして、軍内の中國語教育の更なる強化を求め、中國語學習に對し「特別の方法を設け勸奨の道を開」くよう上申している。

このようにして、陸軍内の中國語教育は國內において組織化され、日清戰爭を迎えることになる。

一方、將校、下士官の中國語教育とは別に、參謀本部がその成立に力を入れた學校がある。それは、明治 23 年 9 月 20 日に上海で開校した日清貿易研究所である。これは、「日清貿易ニ適當ナル商人ヲ養成セン」として設立され、「清語學」がその學科課程時間の約四分の一を占め、中國語教育に重點が置かれた學校である。この日清貿易研究所の成立は、參謀局員・荒尾精の明治 22 年 5 月の「復命書」により、

⁵⁹ 明治 15 年 7 月 1 日調の歸國語學留學生の所屬は、參謀本部〔*關口長之〕、東京鎮臺〔*原田(木野村)政徳〕、仙臺鎮臺〔*谷信敬・*沼田正宣〕、大阪鎮臺〔*柴田晃・*西山(草場)欽(謹)三郎・川上彦治〕、名古屋鎮臺〔*平岩道知・富地近思〕、廣島鎮臺〔*大澤茂・*末吉保馬〕、熊本鎮臺〔*御幡雅文・*瀨戸晋・杉山昌大〕で、16 年 3 月 1 日調で東京鎮臺〔*小川忠彌〕とする。山口五郎太(厦門留學、後に福州)は 15 年 3 月 1 日調で參謀本部なれど、以後不明〔*は 12 名の元・東京外語生徒を示す〕。なお、明治 13 年 3 月、陸軍省會計局では、廣部精を招き、會計部士官に中國語を教授させている。このことから、15 年 4 月以前にも、各鎮臺でも公認の中國語學習會が組織されていた可能性もある。

「二十三年夏、川上參謀次長は荒尾精の議を容れ、日清貿易研究所の創設に對し、陰に陽に援助することに決するや、荒尾、根津の二將校は清國差遣の形式を以て之に専心從事せしめ、更に二名の將校を選拔し參謀本部附として内命を以て研究所の役員となし駐在せしむるに決し」⁶⁰、

とあるように、參謀本部の財政的援助(内閣機密費の充當)を含む全面的後援を得て設立されている。そして、日清貿易研究所の卒業生 89 名のうち數名を除く全員が、日清戦争に主に通譯として、「特別ノ徽章ヲ附シ一見研究所出身ナルコトヲ明カニシ」⁶¹從軍したことは、他の從軍通譯と違い、日清貿易研究所が參謀本部に密着していたことを示すものである。日清貿易研究所自身は組織的にも陸軍の中國語教育機關の範疇には入れがたいが、參謀本部の關與の仕方は、興亞會支那語學校に無いものであり、現實みを帯びた積極的なものであり、日清貿易研究所は、實質的に陸軍の教育機關に準ずるものであったと言えよう。

4. 福島安正『自邇集平仄篇四聲聯珠』の刊刻事情

ところで、陸軍の中國語は、主要には國情を探偵し、地圖をつくり、政誌をつくり、戦時に備えることにあり、戦時においては、宣撫工作、補給等、戦争遂行を圓滑足らしめるためにあったことは勿論であるが、その一端が、テキストの刊行として現れたことを述べておかなければならない。

その一つに明治 19 年 9 月、陸軍文庫から公刊された、福島安正編輯、英繼校訂『自邇集平仄編四聲聯珠』がある。これは、『四聲聯珠』の名で知られている北京官話のテキストである。この書の注釋は文言(漢文)で書かれていることに特徴がある。そして、福島安正の企劃により、英繼が編纂したものであることは、これまであまり知られていないので、『參謀本部歴史草案』より紹介したい。

明治 16 年 12 月 28 日、清國公使館附武官の福島安正へ別格の探偵費下渡の件について、桂太郎より大山巖本部長への伺書に、

「在北京福島歩兵大尉儀、彼地到着後大ニカヲ探偵上ニ用ヒ、其功績ノ著ナルコト、既ニ從來ノ報告上ニ於テ察セラルヘキノミナラス、磯野砲兵大尉ノ視察ニ依テ、愈々其確實ナルヲ證スヘシ。然ルニ、其探偵手段頗ル費用ヲ要シ、従前ノ御手當及準備金等ヲ以テ、支出シ得ヘキ限り之ニ充テ居候處、本年ニ至リ各國公使館附將校ノ手當御節減ニ相成候ニ就テハ、從テ右費用ニ差異ヲ生シ、探偵上ノ手段ニ頗ル困難ヲ來タシ

⁶⁰ 『對支回顧錄』下巻 596 頁。學生募集の全國遊説で荒尾精は、「予は元軍人にして嘗て參謀本部に出仕し」と述べている。このためか、荒尾は軍籍を退き學校經營に尽力した、とする論考もあるが、參謀本部出仕のまま、明治 24 年 2 月には大尉に昇任、日清貿易研究所閉校の明治 26 年 6 月より一ヵ月後の 7 月 22 日に退役し、その間、參謀本部に機密報告も送っている。このことから、この記述が正確であろう。なお、荒尾精は東京外語佛語科在籍経験がある。

⁶¹ 東亞同文書院學友會, 1908; 27 頁。

候得共、今更其手段ヲ變更シテ清人(兼テ雇ヒ入レシ居者ナリ)ノ信用ヲ失シ目的ノ憾
何ヲ來サンヨリ、寧ロ私債ヲ爲ストモ其目的ヲ達スルノ宏益アルニ如カサルコト決
行シ、孜々黽勉罷在候由ニ有之候間、格別ノ御詮議ヲ以テ、當人限り探偵費トシテ、
一ヵ月洋銀五十弗宛御下渡相成度、目今着手ノ事業ノ表、相湊御參照ニ供候也。

着手事業ノ表

四聲聯珠

英紹古

其實俗話ヲ以テ、政體、兵制、人情、風俗、地理、氣候等ノ實談四百十八篇ヲ綴
リシ者ナリ。明治十六年三月一日ヨリ始メ、十一月二日ニ至リテ終ル。尚ホ足ラ
サル所ハ註解及插畫⁶²ヲ加ヘ、十七年五月下旬全完ノ見込ミ。

神機營沿革誌

(以下略)」

とある。これは、福島安正の膨大な報告書の作成實體を物語るとともに、『四聲聯珠』の成
立の過程とその姿が、具體的な日附とともに記されている點で貴重なものである。

この『四聲聯珠』は、『語言自邇集』『平仄編』の音節表に従って、その音節に当たる語
を含む政體、兵制、人情、風俗、地理、氣候等の會話からなり、その注釋は地誌、制度等
の中國書の記述を引用したものである。これは、北京官話とともに、中國の風土を理解さ
せようと編纂された代表的テキストとなっている。このため、明治 35(1902)年には、東京・
博文館から再刊されている。なお、英紹古＝英繼は、前述の東京外國語學校招聘中國人教
師・龔恩祿の父親であり、『北京官話 伊蘇普噲言』(中田敬義, 1878)に協力しており、こ
の一家は明治初期の日本の中國語教育に大いに貢献しているが、不明の事項が多い。

さて、『四聲聯珠』は「我陸軍に關涉する諸件を探偵し、時事を詳記して政誌を」綴る典
型的なテキストといえようが、後の陸軍軍人の中國語テキストに方言の言及や俗語の収集
などが散見され、彼らの中國語研究の深さを見て取ることができる。それは、本論文 148
頁の「日本陸軍の方言音への對し方」で觸れているが、現地住民との接觸の必要に發した、
風俗、人情を含む國情の探偵という軍事上の當然の關心であつたことは言うまでもない。

5. 陸軍軍人の軍事會話書

最後に、戰時において「軍隊に必需する所の要務を弁理」すべきとされる、進軍等の直
接的な内容を持つ、所謂「軍事會話書」について少し觸れたい。

公刊された軍事會話を含む中國語テキストの最初のものとしては、明治 18 年 7 月刊、
田中正程譯、ジョーン・ベビス、張滋昉共校『英清會話獨案内』⁶³をあげることができる。
これには、「兵要常語」と題し、中日對譯からなる所謂「軍事會話」が 20 頁にわたり掲載
されている。しかし、その内容は直截的な軍事會話とは些か言いがたいものである。また、

⁶² 『四聲聯珠』の陸軍文庫本、博文館本、ともに插畫は無い。

⁶³ 原本には、張子坊とする。

明治 20 年に東京鎮臺編『支那語要略』⁶⁴が刊行されているが、鱒澤は未見である。

そして、軍事行動に直結する本格的な中國語會話書は、明治 27 年 8 月 1 日の日清戰爭開始直後の 8 月 7 日、近衛第一旅團編『兵要支那語』(東京・東邦書院刊)の刊行に始まる。そして、8 月 23 日、參謀本部編『日清會話』(東京・參謀本部刊)が刊行されている。さらに、9 月 17 日、木野村政徳編『日清會話 附軍用語』(東京・日清協會刊)が刊行される。日清戰爭中、20 點前後の會話書が刊行されたが⁶⁵、この二つの「日清會話」は、當時かなり通行した會話書で、ともに、日露戰爭時にも用いられている。このカタカナ發音表記で、日中對譯式の 14 cm 前後の小型の會話書は、當時の會話書の典型的スタイルであり、兵士の背囊に詰められて海を渡っていった。この袖珍本の形態は、その後の宮島大八編『官話急就篇』(明治 37 年 8 月東京・善隣書院刊、版を重ね、昭和 8 年 10 月に改訂され、『急就篇』と改題)等に見られる小型會話書の原形である。また、内容的にも、參謀本部編『日清會話』は、單に頭だしの語句をイロハ順に配列するのではなく、中心語句をイロハ順に配列し、その語句を文中に含む關聯會話を配するなど、内容に工夫が見られる。これが、大正 7 (1918) 年 8 月 1 日刊の參謀本部編『日支會話』(東京・小林又七刊)になると、その配列は行軍、宿營、傭役など軍隊の進軍行程に合わせて改定され、カタカナ發音表記、圈點の四聲表記などは變化していないが、重念の印が附けられている。そして、このスタイルは基本的には改められずに敗戦を迎えている。

以上、これまで述べて来たように、日清戰爭までには、陸軍内部の中國語教育は形を整えていった。しかし、明治 19 年 2 月の東京外國語學校の實質的廢校に見られるように、中國語教育は全體的に低調なもので、日清戰爭では、直接的には通譯不足という事態に直面した。この「苦い」経験と對中國政策の觀點から、政府は中國語教育に眞剣に取り組まざる得なくなる。そして、明治 30 年、高等商業學校の附屬外國語學校が開校し、同 32 年に東京外國語學校として獨立、同 34 年(1901)には、上海の東亞同文書院の成立をみるなど、中國語教育は本格的に整備されていく。また、軍の語學教育に對するバックアップとして、42、43 年から東京外國語學校では、將校の陸海軍委託選科(陸軍は一年修學)制度を設け、大正 5 年 4 月からは本格化する。支那語部では昭和 12 年 9 月まで續けられた。この陸軍委託學生の中から、鈴江萬太郎、下永憲次、岡本茂、權寧漢(世)〔權藤正一〕が出て、後に中國語學書を編纂している⁶⁶。陸軍の中國語教育の目的は、戰時であれ、平時であれ、軍事的任務の遂行のための重要手段であった。

⁶⁴ 中國文學會編『中國文學』83 號(昭 17.05.)82 頁による。但し、『支那話要略』とあり、『支那語要略』の誤りであろう。

⁶⁵ 國會圖書館での管見によると、日清戰爭終了の明治 28 年 4 月 17 日までに 18 點(再版を含めず)の中國語テキストが刊行されている。

⁶⁶ 著書には、鈴木萬太郎、下永憲次共著『北京官話俗語集解』大正 14 年 5 月東京・大阪屋號書店刊、下永憲次編『北京俗語兒典』大正 15 年 6 月東京・偕行社刊、岡本茂著『支那文語口語文典』大正 14 年 8 月東京・偕行社刊、權寧世編『支那四聲字典』昭和二年九月東京・大阪屋號書店刊がある。

第三節 興亞會の中國語教育

1. 興亞會支那語學校の歴史

簡単に興亞會支那語學校の歴史を振り返ってみよう。

『興亞會報告』第九集(以下、『興亞會報告』は第×集と略記する)所載「大阪興亞會第二分會歴史」によって、興亞會支那語學校の成立を知ることができる。(以下、全ての引用文の括弧内と標點符號は引用者による。)

「興亞會ノ起源ハ、既ニ明治十年ノ春、曾根俊虎氏ガ創立セシ處ノ振亞會ニ始マリシ。偶々昨冬(明治十二年十二月二十四日)、金子彌兵衛氏(金子彌平と同じ)清國ヨリ歸朝シ、亦……此舉……以テ亞細亞大州ノ衰頽ヲ挽回振作スルノ基礎ト爲シ、更ニ進ンテ歐米諸邦ノ暴横ヲ挫カンコトヲ期シ、與ニ共ニ之ヲ有志諸君ニ謀ル……明治十三年二月十三日ヲ以テ第一集會ヲ開キ改稱シテ興亞會ト號シ、更ニ興亞會支那語學校ヲ開設ス。是レヲ本會事業ノ第一着歩トス。」

このような経緯で生まれた興亞會支那語學校は、「支那語學」を専門に教授する三年制の學校として、当初は「興亞覺」の名稱で(「振亞校」とも稱された)、明治 13(1880)年 2 月 7 日、曾根俊虎の名義を以て東京府に申請、認可され、2 月 16 日、芝區西ノ久保巴町 59 番地の榮壽寺内で開校した。第二集によると、3 月 31 日現在、中國語教員は曾根俊虎、張滋昉、前北京日本公使館勤務・金子彌兵衛の陣容であった。

しかし、間もなく、廣部精を語學教授とし長崎縣出身の大立爲一(龜吉)を語學助教とする異動があり、さらに、5 月 7 日の興亞會議員集會に校長として丸山孝一郎が出席したことを第四集では報じている。

東亞同文會,1936;「曾根俊虎」の條に、彼が明治 13 年 3 月、インド行きの軍艦「比叻」(4 月 8 日横須賀出航)に乗船し 11 月に歸朝したとあり、前掲「大阪興亞會第二分會歴史」に、「五月、本會幹事金子彌兵衛君ハ幹事總代ノ任ヲ帶ヒテ上阪シ」、彼が大阪興亞會第二分會の創立に向け興亞會の情宣活動に専念していた記事があることから、3 月中には、會と學校運営の二本立ての體制を決定し、學校體制を新たに固めるために、廣部精、大立爲一の 2 人の中國語教員を含む 4 人の教員を新たに採用し、遅くとも 5 月初頭には、曾根俊虎に代わる新校長として丸山孝一郎を迎えたものと思われる。

その後は、教師張滋昉、廣部精、助教員大立爲一の體制で中國語教育が行われ、明治 14(1881)年 12 月、廣部精が自分の經營する、支那語學と漢學の學校・日清館に専念するために辭任し、金子彌兵衛の元同僚で、北京公使館勤務から外務省公信局に轉任していた中田敬義がその後任にあたった。そして、明治 15(1882)年 5 月 14 日の閉校に到り、教師・

張滋昉、本科生徒 19 名は東京外國語學校に編入された。その間に在籍した者、約 160 餘名であった。

2. 興亞會の中國語教育

興亞會支那語學校の中國語教育、つまり、興亞會の中國語教育について考えるとき、第一に忘れることのできないことは、興亞會の活動が日本の中國語教育の擴大の原動力となったことである。

興亞會が中國語教育を擴大していった過程を検討するとき、前掲の「大阪興亞會第二分會歴史」にその一端を見ることができるので、長くなるが、以下に引用する。

「(明治十三年)五月、本會幹事金子彌兵衛君ハ幹事總代ノ任ヲ帶ヒテ上阪シ、興亞會分會ヲ神阪ノ兩所ニ置カント(す)。……西京東派本願寺(は)……(その)教師校中支那語學部ヲ本會ニ合併シ、教師汪啓棟及ヒ其生徒、教育ノ事務ヲ本會ニ委託シ、……汪氏、給料雇滿期ニ至ルマテ合計千二百圓ヲ寄附セラレタリ。同年六月十一日府下平野町淨專坊ヲ分會假事務所トシ、亦此ニ支那語學第二分校ヲ開設シ、汪氏ヲシテ教務ヲ司ラシメタリ。……同月十九日大阪商法會議所ニ於テ分校開校式ヲ執行ス。……同月二十二日大阪府管理支那語學教授事務ヲ委託セラレ、教師清人廬永銘氏及ヒ所屬ノ生徒ヲ讓與セラレタリ。同月廿五日、……北久太郎町四丁目妙(妙)琳坊ヘ事務所及ヒ學校ヲ移シ本願寺生徒及ヒ教師ハ同町東本願寺別院内ヘ寄宿ス。(七)月廿四日、語學生徒現員……二十壹名アリ。今後漢學變則教科ヲ開カハ、五十名ニ至ルベキ景狀ナリ。」

ここには、興亞會大阪分會支那語學分校が、明治 13 年 6 月、東本願寺の奈良教師教校内(奈良興福寺内)の支那語學科(明治 12 年 9 月開設)を引繼ぎ、さらに大阪府立中學校支那語科(明治 13 年 2 月 28 日開設)をも引繼いで成立したことが述べられている。

大阪分會支那語學分校は、『興亞會報告』、東本願寺の『配紙』、東京で發行されていた『開導新聞』に見られる人事と記事から、實體は、明治 8 年以來、東本願寺が組織していた中國布教要員養成のための中國語教育の繼續であつたとはいえる。しかし、この學校は、すでに名目的には東本願寺とは別の組織であり、ここに東本願寺が組織していた中國語教育は終了したのである。中國布教に消極的な當時の東本願寺指導部にとっては、奈良教師教校内の支那語學科の處理、つまり、經濟的負擔の輕減を圖り、さらには如何にしてスムーズに廢止するかを考えるとき、校舎や人員構成などの實體はともかくとして、別組織である興亞會大阪分會に委ねることにより、東本願寺から切り離して經濟的負擔の輕減を實現し、さらには、外部組織との連帶の一步と位置づけて中國布教積極派の顔も立てつつ、支那語學科の廢止の形をとらずに廢止できる點で、渡りに船の移管合併であつたと考えられる(大阪府立中學支那語學科の場合も、府の財政危機のおり、この運営を興亞會に任せるのは全く渡りに船であつたと思われる)。その後、明治 14 年 12 月頃、理由は不明であ

るが支那語學分校は閉校され、その生徒 2 名を中國布教に渡らせることで、東本願寺は、最終的に中國語教育から撤退した。これは、分校での一應の學習成果を待って、東本願寺が支那語學分校から手を引いたというのが、實情に近かったのではないのだろうか。このことは、翌年一月頃、支那語學分校は再開されたものの、東本願寺はそれにタッチしなかったことに示されていると考えられる。このため、後援者の中核であった東本願寺の抜けた穴は如何とも成しがたく、また、東京の興亞會支那語學校自體も明治十五年五月に閉校されたためか、支那語學分校は半年程で廢止されている。東本願寺の中國語教育についての詳細は、次の第四節(54-69 頁)を参照されたい。

また、『神戸區教育沿革史』(神戸小學校開校三十年記念祝典會, 1915)『六十年誌』(兵庫縣第一神戸商業學校開校三十年記念祝典會, 1915)によれば、神戸でも、興亞會第一分會員・藤田積中らによって、明治 13 年中(日時不明)、支那語學校(支那語學第一分校か?)が設置され、日本の速記の創始者である田鎖綱紀が校長に就任し、また縣の豫備財源の貿易五厘金によって運営されたという。ここも、明治 14 年、學校經費上、神戸商業講習所と聯合、明治 15 年 7 月には、神戸商業講習所に編入、9 月から商業學校となり、日本で初めて正式科目に中國語が英語との選擇で採用された。その後、文部省管轄となり、「商業學校通則」により組織、教則を改め、同 19(1886)年 9 月、縣立神戸商業學校(現・兵庫縣立神戸商業高等学校)となるや、英語が専修語學となり中國語の科目も消えた。

さらに、福岡分會との関わりは不明であるが、興亞會の影響は、熊本の地で中國語教育の火を點ずることになった。興亞會會員・興亞會支那語學校漢學教員で熊本出身の吉田義靜の遊説により、觸發されて興亞會會員となったと思われる佐々友房は、肥後生(井手三郎)稿『清國ニ於ケル肥後人』(國會圖書館憲政資料室所藏「佐々友房文書 23」所收)によれば、

「我熊本ハ十年ノ戰後其ノ餘焰未タ銷セス。將ニ党爭ニ傾カントスルノ勢アリ。如カス此ノ志氣ヲ海外ニ向ハシメ清韓ニ向テ勢力ヲ樹立セハ、以テ世人ニ對シテ先鞭ヲ着クルコトヲ得ヘシ」

として、明治 14 年 2 月、熊本鎮臺雇支那語教師榊木某(彭城邦貞)を招聘し、その創立した同心學校の生徒中の希望者に學習させた。そして、同心學校の後身の濟濟齋では明治 17(1884)4 月、支那語學科を設置、當時の熊本鎮臺御用掛・御幡雅文を招聘した。しかし、同 19 年 9 月、學科改正とともに支那語學科は廢止された。西南戰爭の敗戦後の熊本での中國語教育の持つ「志氣ヲ海外ニ向ハシメ清韓ニ向テ勢力ヲ樹立」しようとするこの方向は、當時の積極的な對中國中國語教育關係者、例えば、曾根俊虎、丸山孝一郎(興亞會支那語學校校長)、宮島大八の父・宮島誠一郎は米澤藩、廣部精は請西藩の出身など、舊幕府の關係者が多いことと一脈通じるものがあるように思われる。そして、歐米によって衰退していく清國への同情と焦れったさは、彼らの熱心な中國語學習によって知ることができる。事實、日清戰爭時に「全國の支那語に通ずる者は、尽く通譯官を命ぜられ」徴集された總員 500 名(一説に 300 名)の内、前掲の『清國ニ於ケル肥後人』によれば、52 名の熊本出身

者を出したことは、熊本の中國語學習が高まりとその熱心さが窺われる。

一方、興亞會が明治 16(1883)年 1 月、亞細亞協會と改稱した後の、翌 17(1884)年 7 月、上海で亞細亞協會會員・末廣重恭を館長とした、東洋學館が開設された。しかし、東洋學館は、興亞學校、亞細亞學館と改稱するが、徴兵通れを主な理由に、日本政府の正式認可を得られぬままに財政難などにより、同 18(1885)年 9 月、廢止された。

しかし、前述したように、興亞會が正式發足以前に既に支那語學校の申請を終えていたことは、即ち、支那語學校の運営を興亞會が目指した事業の中でその第一歩としたことは、興亞會の活動に於ける中國語教育の重要性を端的に示している。それゆえ、興亞會の活動の擴大の一つの大きな指標として、分會での中國語學校の開設をみることができよう。興亞會に關係した學校は、全て長期に存続しなかったとはいえ、中國語教育が振るわない時期に、興亞會が中國語教育の種を播いた點では、確かに中國語教育の擴大となったのであり、その功績は高いといえよう。實際、興亞會支那語學校は、善隣書院の創始者・宮島大八、陸軍大學などで教鞭をとった足立忠八郎など、中國語教育に足跡を残した人物を出している。しかし、御幡雅文ら東京外國語學校出身の陸軍派遣清國留學生が語學の専門家として活躍したことと比較して、興亞會支那語學校出身者で、中國語教育に直接關與した者はむしろ少なく、中國語を使つての中國關係事業に従事した者が多いのである。これこそ、「學生ヲ興亞ノ事實上ニ從事セシムルニ至リ、始メテ本會中ノ一部分タル學校ノ功效ト謂フ可キ(中略)我カ興亞會ノ如キハ獨リ學校ヲ以テ本務ト爲スニ非ス。學校ハ興亞ノ事業ヲ爲スノ一器具タルニ過ギザル」(吉田義靜「同會諸君ニ告グ」、第七集)ものとされた興亞會支那語學校の中での中國語教育の位置を事實として示したものといえよう。

さて、ここまで單に中國語教育の擴大としてきたが、どんな中國語を擴大してきたかをここで少し觸れておきたい。

現在の眼から見ると、日本の中國語教育の中心にあった東京外國語學校が“南話、教育から轉換し、北京人教師・薛乃良を招聘して北京官話教育を開始した明治 9 年 9 月以來、テキストの刊行にも顯著に現れているように、北京官話教育が日本の中國語教育の中心となっていくのである。しかし、興亞會支那語學校の存在した當時、當然のことながら必ずしもそう考えられてはいなかった。例えば、明治 13 年 1 月から翌 14 年 7 月まで支那語科を設置した慶應義塾では、當初、北京官話教育であつたが、中國語教師交替の際、福澤諭吉らは、「商用としては、必ずしも北京官話を貴しとせず、寧ろ南清語を適當とす可し」として、11 月に“南話、の教師を招聘している。さらに、北京官話教育を採用した興亞會内部でさえ、中國語教育は官話教育を行うことでは一致していたが、鄭永寧は第四集の「清國官話について」で中州官話を推し、廣部精は第十二集の「官話論」で北京官話を推しており、發音の異なる南北に大別される官話のどちらを選択して教育するかは、統一された意見はなく、“北京官話、教育を第一とするという共通認識までは到っていなかったと考えられる。

それゆえ、興亞會による中國語教育の擴大は、東京の興亞會支那語學校でなされていた

“北京官話、教育によって中國語教育の點を作り、線にしたというのではない。東京と異なり、興亞會大阪分會支那語學分校では(神戸でも)、“南話、教育であつた(熊本では17年からは“北京官話、教育による、それ以前は、彭城邦貞はのちに『獨習日清對話捷徑』を編み、「書中ニ圈點ヲ附シタルハ上聲ト入聲トノ區別ヲナスモノアリ」(引用者補注：同書では、上聲○入聲●で區別)とし、「鄉巴老^{ヒヤンバアーラウ} 前面不是村落^{ズエンメン ボ ズォーフツエンロ}」というように『南山俗語考』などの所謂「浙江口」の發音で南話系の發音を表示している。つまり、興亞會による中國語教育は、「興亞」事業の一手段であり、學校運営はその第一歩であるから、現實に教授する中國語は、それぞれの興亞會分會に任され、“北京官話、でなくとも可としたのであろう。なお、大阪、神戸の興亞會支那語學分校がどんなテキストを使用したかは不明である。

3. 興亞會支那語學校と陸軍との關係

第二に注目すべきは興亞會支那語學校と陸軍との關係である。それは、「別課(科)生トハ陸軍教導團ノ下士官ニシテ來學スル者ヲ云フ」(第四集)とする開校時から設置された「別課」の存在である。明治13(1880)年4月30日現在で本課生41人、夜學生5人に對し別課生は42人と現員の45%の多きに及んでいる。そもそも別課は「陸軍教導團ノ生徒ニテ本科ノ時間ニ通學スル能ハサルカ故ニ其情願ニ由テ別科トスルモノ」として午後4時半から5時半(後に5時から6時半)までの時間に設置されたものである。當時、陸軍は北京官話學習に力を注いでいたのである。陸軍では、すでに明治6年には第一期、同7年には、第二期の支那派遣將校を送っており、さらには、桂太郎の中國語と朝鮮語の必要の上申は、士官たちの中國語學習熱を更に力付け『亞細亞言語集』の刊行を助けさせ、さらには、全國の師團に歸國派遣留學生徒を教師として配したり、士官學校での中國語教育の整備するなどの結果を生んだ。これらのことは、本論文第二章第二節で既に論じたので、贅言はしない。ここでは、興亞會支那語學校の「別課」と陸軍との關係について見て行きたい。

第三十集の「吾會紀事」所收の興亞會支那語學校就學生徒氏名と當時の陸軍の官員錄(主に小隊長以上)との突き合わせによる簡単な調査を行った。しかし、その結果は、僅かに三浦自孝の名前のみ共通に見出されるだけであつた。とはいえ、明治15(1882)年5月の興亞會支那語學校の閉校の間、『興亞會報告』に「別課」の改廢を告した記事も見られず、同年2月頃50～60餘名を有し、閉校時、23名は本課生であつたことから、「別課」は存續していたものと思われる。

上述の事情から推して、興亞會支那語學校の「別課」を「漢語會」の發展形態として位置づけることができ、「別課」は、陸軍が自前で各地の鎮臺に一應の形を整えるまでの間、東京における陸軍の中國語教育機關としての役割を果たしていたと考えられるのである。

4. 興亞會支那語學校による中國語テキストの編纂

最後に、興亞會支那語學校による中國語テキストの編纂とその周縁について觸れておきたい。

興亞會支那語學校で使用されたテキストは、寫本として中田敬義編「續散語串珠」(波多野太郎編・解題『中國語學資料叢刊』「燕語社會風俗官話翻譯古典小説・精選課本篇」〈不二出版刊〉所收)が知られているが、ここでは刊行されたテキストのみを問題にしたい。

東京外國語學校では、明治9年9月以來、歐米の北京官話學習の例に習い、『語言自邇集』をテキストに採用した。しかし、既に本論文第二章第一節で明らかにしたように、『語言自邇集』の寫本によって教育が行われていた。更に前述した経緯から、明治12年6月末、廣部精の『亞細亞言語集』卷一(「散語四十章」部分)は刊刻されたが、東京外國語學校では使用されず、當時の藏書目録にも見出す事が出来ない。一方、興亞會支那語學校では、開校して間もない明治13年4月、興亞會支那語學校編輯『新校語言自邇集 散語ノ部』(定價22錢)を慶應義塾出版社から活版印刷で刊行している。これは、『語言自邇集』の中國語本文冒頭にある「散語四十章」の字句に少し手を入れたものである。何故、すでにあった『亞細亞言語集』卷一を使用せず、新たに同様なテキストを刊行したのか。これは、興亞會支那語學校と「散語」と慶應義塾出版社とを結び付け得る人物を検討することで氷解する。その人物とは、明治12年暮、北京から歸國、福澤諭吉に請われて慶應義塾の支那語科の創設を擔い、さらには興亞會の創立に參與し、当初は支那語學校で「散語」を教授していた、慶應義塾出身の元北京日本公使館通辯見習の金子彌兵衛である。金子彌兵衛自らが教えるに際し、『語言自邇集』をそのままの形で採用せず、自らが或いは委託して校訂を加えた『語言自邇集』の使用を意圖して、先ずは「散語四十章」部分を、つまり『新校語言自邇集』を刊行したものと思われる。そして、その後、順次、慶應義塾出版社から刊行する豫定であったと思われる。

しかし、金子彌兵衛が興亞會の活動に専念し、廣部精が教壇に立つことによって、金子彌兵衛の当初の意圖は崩れたと思われる。このことを物語るものとして、明治13年6月23日發行の第六集所載、科業時間改定の記事を挙げることができる。これには、「問答篇」、「六時(字)話」の科業が見える。「問答篇」は、既に3月に發行されていた『亞細亞言語集』卷三にあり、「六字話」は卷一の上欄部にある「六字話」に相當するものとみられる。また、すでに5月には、『亞細亞言語集』卷四、卷五(談論篇百章に手を入れたもの)が刊行されており、使用するテキストは準備を終えていた状態にあった。さらに、廣部精自身の『増訂亞細亞言語集』「緒言」(明治35年11月刊)によっても、『亞細亞言語集』を興亞會支那語學校のテキストとして採用したことを述べている。これらのことから、廣部精の參與によって初めて、『亞細亞言語集』は興亞會支那語學校のテキストとなったと考えてよいであろう。このため、欄外にある校訂部分が『新校語言自邇集 散語ノ部』と一致していることから、同じ校訂者によると見られる、『清語階梯語言自邇集』(英文のKey共、全

2冊、定價5圓)が、同じく慶應義塾出版社から7月に刊行されたが、興亞會支那語學校では用いられることはなかったと思われる。(『清語階梯語言自邇集』は、『亞細亞言語集』と異なり、欄外に校訂部分を配置して『語言自邇集』の原文を残し、原文にある英文の解説Keyをも翻印している。關西大學『鱗澤文庫』所藏の小田切滿壽之助自筆書き込み『亞細亞言語集』「談論篇」、「續談論篇」は、行間に朱筆で『語言自邇集』の原文が書きこまれている。また、日付けの書き込みから小田切滿壽之助が興亞會支那語學校では『亞細亞言語集』をそのまま使用し、東京外國語學校では、書き換えた『語言自邇集』として『亞細亞言語集』を使用した事がわかる。『亞細亞言語集』は東京外國語學校でテキストとしては用いられなかったが、『語言自邇集』の代用として生徒個人が使用していたと推測される。

『亞細亞言語集』は、『語言自邇集』を原本とし、一部7冊で計1圓50錢という価格であり、他に初級テキストの公刊もなく、興亞會支那語學校のテキストとして採用されたことにより、明治期の代表的な中國語テキストとして普及していくことになる。

北京官話學習者の増加の趨勢とはいえ、北京官話テキスト刊行とその普及の面においても、興亞會の中國語教育の果たした役割は大きいといえよう。

5. 結び

以上、中國語教育の擴大、陸軍の中國語教育との關係、北京官話テキストの普及という點から、興亞會の中國語教育について述べてきた。また、支那語學校の中國語教育を實際に擔った曾根俊虎、金子彌兵衛、廣部精、大立爲一(龜吉)、中田敬義については、いずれも『對支回顧錄』(東亞同文會, 1936)、『續對支回顧錄』(東亞同文會, 1941)より、不十分とはいえその経歴の一端を知ることができる。しかし、中國人教師・張滋昉は知られる所が少ないので略歴を記し結びとする。なお、二宮俊博, 2002は張滋昉を廣く紹介している。

張滋昉は道光己亥(道光19年)11月(1839年12月 - 翌年1月)、順天府大興縣に生まれ、國子監南學に學ぶ。明治九年副島種臣と交際を結び、また、曾根俊虎の中國滞在(明治9年2月~11年1月)中に北京官話を教授する。明治12年春、來日し長崎に滞在。13年春、東京に到り、曾根俊虎宅に寄寓。2月、興亞會支那語學校教師に就任、一時期(13年9月~11月)、慶應義塾支那語科講師も勤め、15年5月14日興亞會支那語學校閉校にともない、同月16日、文部省東京外國語學校漢語學講師に轉ず。19年同校廢校により退任。22年より27年迄帝國大學文科大學漢語學講師、23年文部省東京高等商業學校囑託支那語學講師を歴任する。初代琳琅閣主人の回想によれば、日清戦争後歸國したという。著書に明治28年大日本實業學會刊『支那語』(大日本實業學會普通商科講義錄第五十五冊)張滋昉・林久昌共著があり、校閲したものに、明治18年7月昇榮堂刊『英清會話獨案内』田中正程譯、明治18~21年大成館刊『明治字典』重野安繹總閱、北京音磯部榮太郎・張滋昉校閲、明治28年嵩山堂刊『日清字音鑑』・伊澤修二、大矢透著がある。張滋昉は、日清戦争以前の15年間餘りの長きにわたり、日本の中國語教育を支えた中國人中國語教師であった。

第四節 東本願寺中國語教育編年資料

〔自明治6年至明治16年〕

1. はじめに

宗教と言葉との関係は、布教に係わる問題である。同一言語圏内・多くは國內に向かつては、「話」の技法＝「説教」「説話」が、文學の一つの重要な水脈の源泉ともなり、また、異種の言語圏内・多くは國外に向かつては、一つには、「經典」翻譯の必要から、自國語と當該外國語との比較研究を促し、また一つには、とりわけキリスト教宣教師の活動によって、言語の調査研究の端緒と進展が圖られてきていることは、よく知られていることである。それでは、宣教師と似たような活動は日本の宗教團體に存在したのか、そして、それは、どう展開したのか、それを示すのが、京都・東本願寺の中國布教活動である。その中國布教活動については、「中國における日本佛教の布教權をめぐる」(佐藤三郎, 1984)に詳述されている。しかし、明治初期の東本願寺の中國布教活動を支えた組織的な中國語教育については、東本願寺が宗教團體であるためか、従来、魚返善雄, 1957 による小栗栖香頂個人の北京官話學習の紹介以外、中國語研究や中國語教育史研究から、ほとんど觸れられたことがない。しかし、その一連の活動は、中國語教育史研究に缺くことのできぬものといえる。

東本願寺の中國語教育は、明治9年5月、上海に教校(教團内の學校で、上海では實質的には中國語學校)を設立し、開始された。日本人による上海での中國語教育は、明治17(1884)年8月開校の末廣重恭の東洋學館(後、亞細亞學館と改稱したが、一年餘りで日本政府の海外學校の承認を得られず挫折した)、明治23(1890)年9月開校の荒尾精の日清貿易研究所に先立つものであり、そこでの上海語教育も日清貿易研究所に先立つものである。しかし、それ以前すでに、東本願寺では、明治6～7(1873～1874)年の小栗栖香頂を北京派遣留學させ、次いで、明治8(1875)年12月、自己教育機關である育英教校を寺内に開設し、漢學の課目中に北京音を採用する[明治9(1876)年9月の東京外國語學校の北京官話教育開始に先立つものである]など、すでに中國語教育の端緒をつけていた。そして、明治9年5月、上海で中國布教活動を正式に開始し、同時に、現地における説教活動を必須のものとして、前述の如く、中國語教育を本格的に開始した。

そして、明治9年に決められた「清國教校條規」は、

「各省教校共、其所在ノ土語ニ通スルヲ本トス、而ヲ各省中、音ノ正キ音ヲ北京南京ノ兩音トスレハ、三經四書等ノ如キハ外省ノ音ヲ以テハ念スヘカラス、故ニ南部ノ教校ニ於テハ南京音ヲ以之ヲ念シ、北部ノ教校ニ於テハ北京音ヲ以之ヲ念スヘシ」

としている。このように、方言を中心とし、南北官話に及ぶことを目指した東本願寺の中國語教育には、見るべきものが有ると考えられる。そこで、中國語教育史研究の一穴を埋めるべく、明治6年から16年まで、東本願寺の中國語教育關係資料を編年でまとめ、その軌跡を辿り、少しくコメントを加えた。

2. 東本願寺の中國語教育編年資料

〔引用文獻〕

1. 「同治末年留燕日記」魚返善雄校注(『東京女子大學論集』第8卷1～2號)1957～1958年刊〔なおこれは從來、「北京紀事」と通稱されている〕
2. 『東本願寺上海開教六十年史』東本願寺上海別院昭和12年刊
3. 『配紙』東本願寺發行、京都・眞宗大谷派教學研究所所藏
4. 『開導新聞』東京・開導社發行、京都・眞宗大谷派教學研究所所藏
5. 『興亞會報告』東京・興亞會報告局發行、東京大學明治新聞雜誌文庫所藏、東京・アジア經濟研究所圖書館所藏
6. 「大陸における谷了然師の開教活動」諏訪義讓(『同朋學報』第二十二號)昭和45年刊

引用文は、原文に標點符號のあるものはそのままとし、編者鱒澤により標點符號を施したものもあるが、注記していない。(※)内は編者注、()内は上記引用文獻番號と引用箇所である。★は、東本願寺以外の中國語教育の動向を示す。また、文中、敬稱を省略した。

なお、“南京語”という言葉を用い、使用した。これは、“南京口”という江戸の唐通事の命名に由来していると考えられ、明治初期の中國語教育の資料で、多く用いられている。ここでは“北京官話”と對置する歴史的用語として引用、使用した。

a. それは小栗栖香頂の北京留学から始まった

★明治4年3月 外務省漢語學所開設。

明治6年6月17日 小栗栖香頂、長崎を出航、上海に赴く。〔20日着〕(1. [19] 頁)

小栗栖香頂、北京留學の途に。これが東本願寺の中國布教の第一歩となる。

小栗栖香頂は留學以前、長崎・聖福寺の陳善無等に中國語を學んでいる。

魚返善雄校註(1. [50] 頁)

8月16日 小栗栖香頂、北京に入り、龍泉寺に寄留 (1. [29] 頁, [51] 頁)

19日～10月12日 楊朗山の私塾で「幼學須知」を學ぶ。(學支那音)

(1. [35] 頁, [51] 頁)

楊朗山は浙江紹興府餘姚縣人。秀才。約50歳 (1. [32] 頁)

9月20日 三等學師 妙正寺住職 小栗栖香頂、支那國弘教係に申附。(3.)

(7年4月11日 本山以余爲三等出仕、掌支那布教之事) (1. [58] 頁)

9月24日 小栗栖香頂、現如上人に書を呈す。(1. [42] 頁)

曰、「日本爲首部、支那・印度爲胸部、歐・弗爲兩腿部、兩米爲兩脚部、以布教於全地球。」

曰、「布教自支那始、置本山於南京、置支院於十八省、以連枝爲支

那教主、選人才、分掌各省教務。」曰、「日本本山、設外語國學校、以授布教方法」

10月8日(*本然)曰、「俗語師難選。(中略)僧人識字至少、不通文字、則不能授俗語。」(1. [44]頁)

10月12日 幸逢楊老授京韻、三十四章今日終。(1. [46]頁)

10月14日～12月中 龍泉寺の本然について北京語を學ぶ。

本然學京語、時序地名、官名人倫、衣服器皿、及雜話、一斑學了。(1. [51]頁)

余學了須知後、編北京紀事二卷。雅文立稿、請本然、改爲俗文。(1. [58]頁)

明治7年1月3日～3月24日 北京音をマスター。

就本然、受禪門佛事・瑜伽焰口・金剛經・法華經・無量壽經・觀無量壽經・阿彌陀經四書・詩韻集成、三月廿四日學了。於是支那一切之字音、無不可讀、施和字其旁、以備他日遺忘。(1. [58]-[59]頁)

⑨：2月13日の條(1. [54]頁)に、本然曰、「字皆有四聲。郎字平聲郎、上聲朗、去聲浪、入聲洛。羊字平聲羊、上聲養、去聲漾、入聲藥。宮商角徵羽、爲五音。宮喉音、商齶音、角舌音、徵齒音、羽唇音。」とある。小栗栖香頂の中國人教師・本然は、入聲のない北京音を正音とは考えていなかったのであろう。しかし、小栗栖香頂は、北京での布教を考慮して、北京官話音と北京語會話を學習することを第一と決めていた。その結果、

凡頂(小栗栖香頂の自稱)之志願四、一學京音、二學京語、三接名僧碩學、四護法大策。然資金有限、留學不得久。加之、不服北京水土(中略)學京音凡十數卷、第一志願遂矣。記渡航以來事、積成二卷、上人以俗文改之、京語了其一斑。(中略)著護法論(明治36年刊『北京護法論』をいう)(1. [59]頁)と記すに及ぶ。

5月5日 同島・中村(島弘毅中尉、中村義厚曹長、ともに明治6年11月28日發令の陸軍第1回清國派遣將校下士8名のメンバー)氏、訪東江米巷英館(英國公使館)。一官人有雅芝(*人名)出接。余請借覽英國欽差大臣所著「文件自邇集」・「語言自邇集」。曰、「近日取之上海、送呈。」公使威氏(T. F. Wade)、館人三十餘名。(1. [63]頁)

既に4月11日、美代清元中尉・島・中村ら三名と會い、6月22日には、他の4人(江田國容軍曹、長瀬兼正中尉、向郁少尉、芳野正常少尉補)と北京で會っている。北京に限らず、在留邦人の少なかったこともあって、彼らとの緊密な關係が日記などから窺える。なお、「文件自邇集」・「語言自邇集」を取得したと思われるが、日記にない。

8月18日 小栗栖香頂、上海を出航、歸國に赴く。〔21日長崎着〕(1. [78]頁)

明治8年12月1日 育英教校開設。(甲科、乙科各10年間を課業期間とする)

育英教校乙科は、内部：本宗、餘宗。外部：國學、漢學、英學、佛學、印度學、數學、政法學、宗教學、理學 からなり、

乙科課業表の漢學欄には、

	第一級	第二級	第三級	第四級	第五級	第六級
漢學	支那語音	同	同	北京音	同	同
	古文法	同	同	同	同	同
	時文對策	時文敘事	復文	同	時文	同

六級から一級に
順に試験で進級。

(3. 263 丁)

とある。

㊟：漢學の中に北京音が採られたのは、小栗栖香頂の北京行と関係があり、中國・北京での布教を見越しての事であろう。支那語音と北京音を併記しているところからみると、南京音を支那語音として、つまり、正音として考えていたのではなかろうか。

参考：育英教校甲科は実施されなかったが、その課業表の漢學欄には、

	第一級	第二級	第三級	第四級	第五級	第六級
漢學	通辯對話 自在	對話通辯	同	對話筆談	同 五言古詩	敘事筆談
	作文編輯	對策上書	敘事論說	尺牘序跋	議案文	五言律及 絕句

(3. 264 丁)

とある。

b. 東本願寺の中國開教 —— 清國內に語學校開設

明治9年5月中 小栗栖香頂、上京し、外務卿寺島宗則に中國開教を謀る

5月27日 谷了然、上海出張申付けられる

奉上海出張命 蓋海外布教之第一着手也 (2. 243 頁)

6月28日 支那開教決定

7月13日 谷了然ら一行6名、支那弘教のために上海に到着 (2. 6 頁)

谷了然、寺務所へ語學校開設の目算を聯絡

7月16日 假日課表で生徒に教授(江蘇教校の開創)

日野順證、岸邊賢超が生徒 (2. 8 頁)

19日 語學教師・孫藹人(南京音を教授)を雇う。上海領事館の一角を教場に借受け、語學は午後一時より三時まで。(2. 9 頁)

8月3日 白尾義天ら留學生6名を派遣 (2. 8 頁)

㊟：東本願寺は總計22名の留學生を派遣した。

8月20日 上海別院開院供養會入佛式。

22日 この日、説教日。その報告に

「(*小栗栖)香頂南京語ヲ以説教一座(中略)片時モ早ク當地ノ土語ヲ以テ説教致度候ニ附、明廿三日ヨリ松江(*松江府華亭縣)ノ人任鈞溪ト申者ヲ更ニ教師ニ雇入レ、之ヲシテ先ツ信徒ナラシメ、以テ説教者トシ、日野順證ニ晝夜説教ノ土語ヲ學ハセ、次回ノ説教ニハ必ス土語ヲ以テ説教爲致候心得ニ御坐候」(3. 483 丁 a~6 丁 a)とある。

㊟：南京語ヲ以説教、iv では北京語と解す。小栗栖香頂の北京語學習は有名なので、南京語ではなく、北京語と解したのであろうか。上海での説教であるから、そのまま南京語を用いたと解してもよいのではなかろうか。當地ノ土語とは上海語のこと。

これを受けて、上海語教師を雇う。

8月23日 土音教師に任鈞溪(松江府華亭縣人)を雇う。 (2. 33 頁)

★明治9年9月 東京外國語學校、北京官話教育開始。

10月16日 第一回の學力試験、検査には小栗須香頂、倉谷哲僧があたる
その結果は

上海土語二百語	甲	説教一席	甲	日野順證
上海土語二百語	甲	説教一席	甲	岸邊賢超
上海土語二百語	甲	説教一席	甲	白尾義天
上海土語二百語	甲	説教一席	甲	遠藤秀言
上海土語二百語	甲	説教一席	甲	淨川香雲
上海土語二百語	甲	説教一席	甲	龍湖靈鳳
上海土語二百語	乙	説教半席	乙	清原公成
上海土語二百語	乙			桐山玄豹

(2. 250 頁)

であった。

⑨：ここでいう説教とは上海語によるもの。また、「河崎顯成の日記」(2. 250-253 頁)によると、上海語を中心とする學力試験は11月25日までに5回實施されているまた、一年に一度、進級試験があった。

明治9年10月8日 本日舎長より願書差出す、左の通り

伺

(中略)午前第九時より正午十二時まで受業場に於て勉強可仕筈の處、語學の義は他の諸課と異にして、各自の才に應じ、所受の箇所も前後多少の不同あるのみならず、師匠の口音に冥契吻合するを緊要とすれば、多人一場に發音しては、互に受業を攪亂する邊不少候に附、何卒順次受業せし後は、自寮に於て勉強支度、尤も右時間中は、餘事を雜へず、一途に語學暗誦に勉強可仕候此段相伺候也

光緒二年丙子九月廿三日 江蘇教校舎長 日野順證

上海別院輪番權少講義河崎顯成殿

右本山へ伺書を出す

(2. 252 頁)

10月18日 上海別院内に設置の教校を江蘇教校と稱す。

これ以前は、單に「語學校」とのみ呼ばれていた。(6.)

其別院内設置之教校江蘇教校ト可相稱此旨相達候事 事務所長

明治九年十月十八日 權中教正 石川舜台 (3. 507 丁 a)

10月19日 江蘇教校生徒日野順證、江蘇教校舎長に命じられる。

明治9年中 清國教校條規なる (2. 266-269 頁)

「清國教校條規」摘録

第一章 總規

一、本校ハ大清國ノ言語ニ通シ、遠人ヲ教化スヘキ教師ヲ成立セシムル爲ニ設クル所ナリ。コノ故ニ本邦ニ已ニ大、中、小及、育英、教師ノ五校ヲ設ケ、隨テ其成規アリト雖、海外ノ事情、内地ニ夂異スル者アレハ、之ヲ斟酌折衷シ、以テ一箇ノ學科ヲ開カサルヲ得ス。中ニ就テ土音土語ニ通スルヲ第一ノ急務トス。

一、各省教校共、其所在ノ土語ニ通スルヲ本トス。而ヲ各省中、音ノ正キ音ヲ北京、

南京ノ兩音トスレハ、三經四書等ノ如キハ、外省ノ音ヲ以テハ念スヘカラス。故ニ南部ノ教校ニ於テハ南京音ヲ以之ヲ念シ、北部ノ教校ニ於テハ北京音ヲ以之ヲ念スヘシ。

(中略)

第三章 入校心得

(中略)

一、卒業ノ上ハ終身外國布教ニ從事スルヲ法トス。

(中略)

第七章 學規

一、課業及等級表、別紙圖ノ如シ。但シ圖中詩文ノ數ハ甲點ヲ以數フ。

一、本校ノ生徒ハ都テ俊才ヲ撰フト雖、然レトモ其中自ラ年ニ長幼アリ、才ニ甲乙ナキ能ハス。故ニ等外生徒ノ爲ニ假リニ日課ヲ三段ニ分ツ左ノ如シ。

	上才	中才	下才
土語	一日 三十語	一日 廿語	一日 十語
	各自其才ヲ知テ、一日ノ能暗誦シ得ヘキヲ師ニ受クヘシ。		
土語説教	一日 三枚	一日 二枚	一日 一枚
	三枚ヲ以テ一席ノ説教トス已下同前		
宗乘	通要義	解文義	讀文字
	要義ニ通スル以上ニ非レハ昇級ヲ准サス。		
詩	五律 一首	七絶 一首	五絶 一首
	毎月一ノ日ニ題榜ヲ掲五ノ日ニ検査ス。		
文	對策二百言已上	記事百言已上	復文四十字已上
	毎月六ノ日ニ題榜ヲ掲十ノ日ニ検査ス。		
三經	一日 三枚	一日 二枚	一日 一枚

(中略)

一、清國曆毎年六月十二月大検査ヲ行ヒ級ノ登落ヲ定ム。

(中略)

〔課業表〕

	上等	中等	下等
土語	通辯	綴語五十篇	六千語
宗乘	七祖聖教、御本書	和讃、三經	正信偈、御文
餘乘	華嚴、天台、俱舍、唯一、隨一、因明	八宗綱要、傳達緣起	
詩	古體二百首、今體二百首	七絶二百首	五絶百首
文	對策百則	記事百則	復文五十則、記事十則
兩京音	聖武記、西洋記	四書、十八史略、元明史略	三經

⑨：「其所在ノ土語ニ通スルヲ本トス」點では、宣教師の視点と同じであるが、宣教師は「教典」である『聖書』を「土音」で讀んだのであろうか。もしそうであるならば、「各

省中、音ノ正キ音ヲ北京、南京ノ兩音トスレハ、三經四書等ノ如キハ、外省ノ音ヲ以テハ念スヘカラス。故ニ南部ノ教校」では「南京音」、「北部ノ教校」では「北京音」で讀經すべきだとしている。また、前掲の明治 9 月 24 日の小栗栖香頂の手紙にある「置本山於南京、置支院於十八省」という中國全土布教を教育内容からも明確にしている。

明治 10 年 1 月 17 日 育英教校條規改定

育英教校乙科は、宗乘、餘乘、皇漢學、英學、政法學、外教學、語學、作文、習字に課目改定する。

「育英教校乙科課業表」語學、作文は以下の通り

	第一級前期・後期	第二級同	第三級同	第四級同	第五級同	第六級同
語學	英語	同	支那語	同	支那語	同
	印度語	同	英語	同		
作文	英文書牘 散斯克文	漢文對策	漢文記事	時樣文	復文 譯文	公用文 私用文

明治 10 年 6 月 22 日 清國教校條規改正

「清國教校改正條規」摘録 (2. 260-266 頁)

第一章通規は、「清國教校條規」第一章總規と同文。

第七章 本校教科別紙圖ノ如シ。

	一級	二級	三級	四級	五級	六級
宗乘	三經略文類 愚禿鈔	論註 選擇集	定善義 散善義	玄義分 序分義	淨土論	易行品
餘乘	原人論五教 章禪宗大意	十不二門指要 鈔原人論	四教儀集 註	同	略述法相義	七十五 法名目
土語	———	通辯	五千言	三千言	千五百言、下 級ノ五百言ヲ 併セ算フ已上 做也	五百言
兩京 音	———	———	———	四書	大經	觀經 小經
詩	古體十五首	七律十首	七絕十首	五律五首 五絕五首	五、七絕十首	五、七 絕五首
文	論說十則	論說三則 土語說教三篇	對策二通 同	記事二篇 土語說教 二篇	時文記事三則	時文記 事二則
經史	四書	綱鑑易知錄	同	皇朝史略	同	
餘科	希臘教大意 回々教大意	耶蘇教大意	喇嘛教大 意	土語說教 五段	同	土語說 教三段

7 月 19 日 生徒 8 名上海着。 (6.)

23 日 蔣文虎を土音教師として雇う (2. 33 頁)

8 月 2 日 任鈞溪解雇

5 日 生徒 6 名上海着。 (6.)

9月9日 谷了然、支那國布教主務に申附けらる。

11月1日 北京・法源寺にて直隸教校開校

直隸教校舎長 遠藤秀言。(2. 39-40 頁)

昨十年十一月、支那國北京ニ於テ設立之教校ハ、上海教校ト同ク直隸教校ト稱スヘキ旨支那國布教主務谷了然へ御達シコレアリ。明治十一年一月二十五日申附

(3. 777 丁 a)

聞同氏(*谷了然)話、北京引率生徒、平安開教於北京城外法源寺境地。號直隸教校。

土音教師李祖祿。 「岳崎正純雑誌」10月23日(2. 40 頁)

生徒は、江蘇教校生徒の遠藤秀言、栗山寛、大山大鳳、久連松良温、藤野貞順(6.)

「直隸教校生徒日課表」摘録 (2. 273 頁)

進級生

試験生

午後一時至四時語學 語學 (毎日受業、前々日習フ所ヲ暗誦スヘシ) 語學ハ進歩之遲速ニヨリ受業ト説話トノ時間ヲ此内ニ於テ繰合スヘシ。若シ時間不足ナレハ更ニ一時間ヲ増スヘシ。詩文ト習字トハ江蘇教授^(ママ)ニ課程ト同シ。

明治11年1月9日 教育課 外國布教事務掛、支那留學生徒薦舉法則を達示

薦舉法則中に「一、支那音ヲ以テ四聲ヲ分チ唱ヘシメ其正否ヲ試ム。」とある

(3. 770 丁 b~771 丁 a)

1月13日 清國教校改正條規に追加

第三章第八條 第三級卒業之上ハ教授所在地ニ於テ一年間更ニ清國人ニ附着シ、專ラ語學ニ従事スヘシ。但シ、居所竝從學ノ人名等、校務主任者ヨリ詳細教育課ニ具狀シ指揮ヲ受クヘシ。

(3. 779 丁 b~801 丁 a)

※2月6日 石川舜台辭職 (6.)

※ 12日 谷了然辭職 (6.)

(2月7日~14日)京都・本山の寺務所役員中、石川舜台、谷了然ら海外布教に積極的な人物が更迭される。 (2. 42 頁)

④：東本願寺の財政的困難(それだけに限定されるかは、不明であるが)から、海外布教はすでに東本願寺内部で議論を分けるところであった。明治11年2月の人事は、當時の東本願寺の財政から理想はともかく、無理は出来ないという考え方の中國布教消極派が積極派を排除したもので、これを機に、中國布教に關する事業は整理の縮小の方向へ向かうこととなる。そして、翌3月には北京布教の第一着であった直隸教校の廢止を決定している。なお、朝鮮布教はそのまま進められた(2. 41 頁)というが、どのようなやり方で布教していったのかは、未調査。

3月12日 直隸教校廢止

直隸教校廢止達有之。

「岳崎正純雑誌」3月22日(2. 40 頁)

④：直隸教校廢止の達示は1月中ともいわれる。(2. 40 頁)

3月17日 江蘇教校に豫科を設置

(3. 827 丁 a)

今般、江蘇教校中ニ於テ別紙課業之通、豫科ヲ設ケ科中二期ヲ分チ每期六ヶ月ト定メ本年四月一日リ施行候條此段相達候事。 明治十一年三月十七日 少教正 渥美契縁

江蘇教校中豫科課業表

課目	後期	前期
句讀	十八史略	四書
習字	楷書千字文	楷書千字文
通解	日記故事中・下	日記故事上
土語	三百言	五百言
支那音	小經二紙	小經二紙
詩	五言絕句五首	五言絕句三首

「支那在勤雜誌」抜 (2. 269-270 頁)

(※明治十一年五月)廿二日午後五點鐘、邀同寓友宜結交在滬之清人於城外第四馬路聚豐園留別開筵置酒、來會賓位——王寅。字治梅、金陵人、當時畫家大名家。錢懌。字子琴、吳中人儒士、善書。蔣伯威。字文虎、上海縣人、當時別院語學教師。孫工希。字靄人、金陵白門人、上海縣史官。馮筌。字畊三、上海滬城人、商家筆墨等。慮靄人君、臨時固不例不得來會見贈送別詩四章且附簡慰勸告謝。

本朝人賓位——松本白華別院輪番。加藤法城教師。北方蒙承事、今川拾翠教授。清川秀雲、龍岡靈鳳以上四級生。崖邊巖、望月全祐、本多澄雲、北畠惠祐、瀧義存以上六級生。本間實、白尾一也、多賀令佳以上級外生。藤本見瑞、過日來臥病故不與焉。平澤某余都合二十名也。

江蘇教校學科卒業生徒人名〔明治 10 年 8 月 7 日～11 年 11 月 7 日〕(3. 1023 丁 b～4 丁 b)

白尾義天(11 年 2 月 14 日 三級卒業) 遠藤秀言(10 年 8 月 7 日 五級卒業)
 淨川香雲(10 年 9 月 19 日 三級卒業) 龍湖靈鳳(11 年 9 月 19 日 四級卒業)
 崖邊巖 (11 年 11 月 7 日 五級卒業) 望月全祐(11 年 11 月 7 日 五級卒業)
 北畠兼祐(11 年 2 月 14 日 六級卒業、同年 8 月 7 日 依頼退校歸國)
 藤本見瑞(11 年 11 月 7 日 五級卒業) 本多澄雲(11 年 11 月 7 日 五級卒業)
 瀧義存 (11 年 8 月 7 日 五級卒業)

☆江蘇教校の總在籍者は 22 名。

c. 中國布教からの後退——語學校の撤收—— 奈良教師教校内支那語科設置

※明治 12 年 2 月 7 日 教師教校を奈良元興福寺境内に移す。 (3. 1069 丁 a)

明治 12 年 5 月 27 日 江蘇教校を内國教師教校内に轉設。

支那國江蘇教校

今般、詮議之次第有之、其校内國教師教校内へ轉設候條此段相達候事。

明治十二年五月廿七日 議事 少教正長 圓立 (3. 1130 丁)

⑥：江蘇教校の内國教師教校内への轉設は、中國布教に要する費用の輕減ばかりでなく、中國布教事業そのものの縮小處置であり、さらに、9 月の支那語科の設置は積極派と消極派の一つの妥協點であつたと思われる。

9月11日 奈良教師教校内に支那語科を設置

○教第十四號

奈良教師教校内ニ支那語學科ヲ設ケ、山費生徒貳拾名募集候條、別紙合格ニシテ志願ノ者取調、來十月五日迄ニ可申出此段相達候事。

明治十二年九月一日 教育課長渥美契縁代理教育准大録事 細川千巖

募集格 正副住職及ヒ長男ヲ除ク

一身體 健康ニシテ肺病及ヒ脚氣ノ萌ナキ者。

一品行 端正ニシテ遊蕩ノ弊ナキモノ。

一年齡 十八年以上ノ者。

一學術 小教校學科四級卒業シ宗學ハ七論、支那經史等得意ニシテ文才アル者。

但、年齡學術格ニ合ハスト雖モ、非常ノ材器ニシテ後來見込アル者ハ併セテ申出ヘシ。支那語學課業表

	一級	二級	三級	四級	五級	六級
宗乘	略文類 愚禿鈔	選擇集 論註	定善義 散善義	玄義分 序分義	淨土論	易行品
餘乘	楞嚴經	維摩經	四教儀集註	同	略述法相 義	七十五法名 目
語學	通辯 —	同 —	談論 紅樓夢	問答 同	連語 正音咀華	分辨四聲及 華音單語正 音撮要
詩	古體十 五首	七律十首	五律十首	五律五絕五首	五七絕十 首	五七絕五首
文	論說十 則	論說三則 土語說教三 篇	對策二通 同	記事二篇 土語說教二篇	時文記事 三則	時文記事二 則
經史	四書	綱鑑易知錄	同	皇朝史略	同	—

支那語學豫科課業表

	前期	後期
宗乘	改悔文通解	正信偈大意通解
史學	十八史略一二三通解	十八史略四五六七通解
南京音	小經 觀經	大經上下
復文	三則	五則

(3.1216 丁 b ~ 7 丁 a : 1272 丁 ~ 3 丁)

⑩：正音撮要、正音咀華、紅樓夢と北方語のテキストを使用してはいるが、豫科は南京音のみの教育を行っていたことからみて、「南京音」學習に用いていた可能性が非常に高いと考えられる。土語說教は上海語說教であろう。

明治12年11月1日 申附 清國北京留學 菊地秀言、同 藤野貞順

清國直隸省布教掛 菊地秀言

(3.1263 丁 b)

d. 中國語教育からの撤退——興亞會大阪分會支那語學校への委託

★明治 13 年 1 月～14 年 7 月 慶應義塾支那語科

★明治 13 年 2 月 16 日興亞會支那語學校

東京で開校

明治 13 年 6 月 19 日 奈良教師教校内の支那語學科、興亞會大阪分會支那語學分校に合併

⑨：興亞會大阪分會が大阪府立の支那語科を財政的理由から引継ぎ、同時に奈良教師教校内の支那語學科を引継ぎ、合併成立したのが、興亞會大阪分會支那語學分校である。

「配紙」、『開導新聞』、及び、『興亞會報告』に見られる人事と記事から、大阪分會支那語學分校は、實體は東本願寺による中國語教育の繼續であつたとはいえる。しかし、この學校は、組織的には東本願寺とは別の組織であり、中國布教要員養成のために東本願寺が組織した中國語教育は終了したのである。中國布教に消極的な當時の東本願寺指導部にとっては、奈良教師教校内の支那語學科の處理、つまり、經濟的負擔の輕減を圖り、さらには如何にしてスムーズに廢止するかを考えると、校舍や人員構成などの實體はともかくとして、別組織である興亞會大阪分會に委ねることにより、東本願寺から切り離して經濟的負擔の輕減を實現し、さらには、外部組織との連帶の一步と位置づけて中國布教積極派の顔も立てつつ、支那語學科の廢止の形をとらずに廢止できる點で、渡りに船の移管合併であつたと考えられる。このため、實體は東本願寺による中國語教育の繼續とはいえ、中國布教の前提として位置づけられた中國語教育は、中國布教の廢止の方向に向かう中で、必然的に中國語教育を廢止する意圖にあつた處置といえよう。また、明治 14 年 10 月頃、支那語學分校は閉校されるに及び、舊來の東本願寺の學生の學習が一應の成果を生んだとして、その生徒 2 名を中國布教に渡らせることで、東本願寺は、最終的に中國語教育から撤退した。しかし、分校での一應の學習成果を待って、支那語學分校から手を引く、即ち、中國語教育から撤退を決したというのが實情に近いのではないのだろうか。このことは、翌 15 年 1 月頃、支那語學分校は再開されたものの、東本願寺はそれにタッチしなかったことに示されていると考えられる。このため、中核であつた東本願寺の抜けた穴は如何とも成しがたく、また、東京の興亞會支那語學校自體も明治 15 年 5 月に閉校されたことをうけてか、支那語學分校は半年程で廢止されている。

○興亞第二分會支那語學分校開業式演説 少教正 渥美契縁述

本日(*明治 13 年 6 月 19 日)ハ、興亞分會支那語學分校開業の盛筵に列するの榮を辱なふするを以て、聊か鄙言を述へて、會員諸君の高聽を瀆さんと欲す。抑も本會設立の旨趣たるや更に生が喋々を待ず。本會設立日猶淺しと雖も、東京の本會本校ハ事業已に緒に就き、今又、神戸に大阪に其分會分校を開設するに至る。これ啻に本會諸君の榮譽のみならず、亦た亞細亞一般人民の爲めに深く慶賀すべき所なり。然るに我宗派の如き其目的大に本會の趣旨と同じき者あり。是を以て曩に支那上海に別院を假設し、尋て學生を北京に派遣し、又朝鮮の釜山浦に別院を置き、本年元山津の開港に就

いて亦た教場を設けんとす。蓋し其の目的たる大別して二とす。一ハ出世間の爲めにし、二ハ世間の爲めにす。其の出世間とハ、即ち轉迷開悟の謂にして迷倒の世間を出離し解脱涅槃の佛果を證る。是れを佛教の義とす。夫れ佛の大慈悲ハ一切の衆生(即ち動物)を濟度するに在り。我宗派所歸の彌陀佛の本願ハ、普く十方衆生に被らしむ。其教法を宣布する者、豈に人類の異同國土の遠近を之れ擇ばんや。則ち内外彼我を論ぜず廣く布き普く導くハ、是れ其の本分なり。況んや支那朝鮮ハ固より同文同種の人類にして僅に一葦帶水を隔つるのみなるをや。既に我が佛教ハ印度より支那朝鮮を経て流傳せる者なり。然るに方今我に盛んにして彼に衰へ、纔かに其形と名とを存するのみなれば、報本反始の道に於ても亦た之れを傍觀するに忍びざる者あり。故に先づ支那朝鮮を先とし、漸時亞細亞大洲に及ぼし、十方衆生を化益するの佛意に契はんことを期す。是れ第一の目的也。其二に世間のためにする者、即本會と目的を同ふする所なり。凡そ佛門の大乗教法ハ自利利他を本とす。菩薩發心の始めに方りて、願作佛心(自利)度衆生心(利他)を起し一切衆生を利益するを菩薩の修行とす。是れを世間門に行なへハ、所謂利用厚生之道に外ならざるなり。佛教の中に於ても小乘法の如きハ、自利を本として利他を行せざるを以て、自利も眞の自利たるを得ず。其の結果ハ阿羅漢を證るに止まり、永く成佛する能はず。他を先にし、自を後にし、慈悲仁愛を之れ務め、利他の行満足するときハ、自利亦圓滿して佛果を成するに至る。試に看よ、世間の人私欲を恣にして公益を妨げる者果して能く自己を利するを得る歟。所謂己達せんと欲せば、まづ人を達せしむるの理にして、其人と指す者また己か偏愛する所にあらず。公衆一般の人をして共に俱に便益を得せしめ、有無相通し緩急相救ひ、互に自己の安全獨立を保つを得る。是れ即ち世間の自利利他なり。然るに有無相通し緩急相濟はんとする、必ずや交際を親密せざるをえず。交際の親密ならんを欲する、必ずや信義を守り敬愛を盡さざる可らず。若し其の外貌の交際密なるが如きも、内心互に猜疑を抱き禍心を藏せハ、争でか緩急相濟の實あるを得んや。啻に之なきのみならず、其の隙を伺ひ其の機に乘じ却て之れを殘害吞噬せんとするに至る。不信不義如此くして、豈に自己の安全獨立を保つを得るの理あらんや。故に大無量壽經に當相敬愛有無相通と云ひ、又言行忠信表裏相應人能自度轉相□(字體不明瞭、字音ルビは“せう”)濟と説けり。我が教法の世間を益する者、蓋し此にあり。同一の教法を聞き信じて同一の證果を期する者ハ、啻に人世一生の同胞にあらず。來世永劫俱會一處の兄弟たらんとを望むものなれば、其交際自ら親密ならざるを得ず。其の和合協同を得るに至りてハ、實に膠漆も啻ならざるの厚誼あり。故に廣く交りて支那朝鮮に結び、同教同志の公衆を誘ひ、以て利用厚生の実益を起し、遂にハ廣く亞細亞全洲の衰運を挽回して安全獨立を謀らんと欲す。其の事業異なれども其の目的相同じきを以て、今般本派の支那語學校を此の分校に合併し、共に俱に目的を達せんと欲する所以なり。因て生か會員諸君に希ふ所ハ、本會の保護を得ていよゝゝ布教の事業を擴張し、本宗の教導を以て、幾分か交際の親密を裨補、本會本宗亦た互に相待ち相資けて、各自の目的を達せんと欲するに在るのみ。然れども和して同せざるハ君子の交なれば、強て其の同せざる者を同せんとするに非らず。唯其の同ずべきを同し共にすべきを共にし、和合を本とし忠信を主とし、以て巨に其の目的を永遠に達せんことを謀らば、則ち可なり。

(4. 明治 13 年 7 月 15 日刊第 3 號)

○大坂興亞第二分會歷史

(略)同年(*明治 13 年)五月、本會幹事金子彌兵衛君ハ、幹事總代ノ任ヲ帶ヒテ上阪シ、興亞分會ヲ神阪ノ兩所ニ置カントシ、之ヲ神阪ノ諸紳ニ謀ル。(中略)是レヨリ先キ西京東派本願寺ニ於テハ別ニ見ル所アリ。既ニ清人汪啓棟(*南京人。名松坪。12 年 9 月來日。5.16 輯に拠る)氏ヲ聘シ教師教校中ニ支那語學部ヲ置キ、衆生徒ヲ教育スルノ事アリシガ、今回大坂興亞分會ノ舉ヲ聞キ頗ル之ヲ稱賛シ、教師教校中支那語學部ヲ本會ニ合併シ、教師汪啓棟及ヒ其生徒教育ノ事務ヲ本會ニ委托シ、併セテ汪氏給料雇滿ニ至ルマテ合計金千二百圓ヲ寄附セラレタリ。同年六月十一日、府下平野町淨專坊ヲ分會假事務所トシ、支那語學第二分校ヲ開設シ汪氏ヲシテ教務ヲ司ラシメタリ。同月十二日、(中略)橘智隆氏ニ分校々長ヲ囑ス。同月十九日、大坂商法會議所ニ於テ、分校開業式ヲ執行ス。會スルモノ四十餘名。(中略)同月二十二日、大坂府管理支那語學教授事務ヲ委托セラレ、教師清人盧永銘氏及ヒ所屬ノ生徒ヲ讓與セラレタリ。同廿五日、平野町ノ不便ナルヲ以テ、更ニ北久太郎町四丁目妙琳坊ヘ事務所及ヒ學校ヲ移シ、本願寺生徒及ヒ教師ハ、全町東本願寺別院内ヘ寄宿ス。本月(*7 月)廿四日、語學生徒現員ヲ數フルニ二十壹名アリ。今後漢學變則教科ヲ開カハ五十名ニ至ルベキ景狀ナリ。(5.明治 13 年 8 月 24 日刊第 9 輯)

「松ケ江賢哲師懷舊談(昭和十一年十月廿三日)」

私の渡支は、明治十四年十一月である。本山教學部から留學を命ぜられたのである。當時、大阪の難波別員に教師教校があつて、そこに支那語科が設けられてをり、純南京人の汪松坪といふ人が教員であつた。八名の學生の中で、松林孝純と私と二人だけ支那留學を命ずといふ渥美契縁の辭令を貰つて出かけた。汪は別院に起臥して自炊していたが、當時、大阪に亞細亞協會^(ママ)(興亞會)といふものがあつて、その生徒が數人やつて來て、我々とともに南京語を汪から習つてゐた。(略)(2.277 頁)

⑨：上海語については觸れられていないが、これまでの經過をみるに、興亞會大阪分會支那語學校では純然たる南京官話教育のみであつたと思われる。そして、このことは、東本願寺の中國語教育は、江蘇教校の國內移轉後、奈良教師教校内の支那語學科を経て、上海語説教を中心とした教學内容から、“南京音”を中心とする官話教育に、即ち、教育内容においても、中國布教から一步後退するものに變更したことを示すものと考えられる。

明治 13 年 9 月 13 日 依願職務差免 一等教授兼支那語學生監督(*分校校長) 橘智隆
(4.10 月 25 日刊第 23 號)

28 日 興亞會支那語學科生徒監督 兵庫 圓覺寺住職 佐治實然
(3.1476 丁 b)

10 月 龍湖靈鳳 支那語學科卒業 (3.1489 丁 b)

11 月 3 日 分校生徒ほぼ 40 名

本(*11)月三日大坂分會通信云、(中略)分校生徒。今幾有四十名。其授業自午前八點鐘始。至十二點鐘止。其夜學授業。則午後六點鐘至九點鐘。(5.12 月 15 日刊第 13 輯)

12 月 14 日 大阪支那語學生徒教授 儀同學師補 渡邊法瑞

16 日 興亞會支那語學科生徒監督 進業學員 白尾義夫(*=天)

(4.明治 14 年 1 月 12 日刊第 38 號)

12月25日 大試験實施

該分校亦行大試験。其優者爲外等一級生新田民三郎。村井昇太郎。二級生松江賢哲。平田精二也。賞之以詩韻含英異同辨。箋註蒙求等書。據校長白尾氏報。稱設校以來。僅六閱月。所幸教諭諸員。誨人不倦。生徒俱各長進。想本處士庶。漸知有效。將來入校之徒。當亦不少。該校之幸。是本會之幸也。
(5. 明治14年1月6日刊第14輯)

明治14年5月13日 支那語學科生徒教授 一等教授 朝倉觀水 (4.6月15日刊第90號)

6月7日 興亞會支那語學科在勤差解 儀同學師補 渡邊法瑞 上等普通教校在勤 同 同。上等普通教校在勤差解 儀同學師 河尻秀 興亞會支那語學科在勤 同 同。
(4.6月23日刊第94號)

8月2日 上海別院を北京へ轉設。
(2.43頁)

9月10日 興亞會支那語學科在勤差解 儀同學師 河尻秀
(4.9月19日刊第137號)

10月1日 興亞會支那語學科在勤差解 儀同學師 楠本靜惠
(4.10月13日刊第149號)

10月5日 支那國江蘇省布教主務 進業學員 白尾義夫
(4.10月5日刊第145號)〔明治14年10月中、遅くとも11月初頭〕
興亞會大阪分會支那語學校一時閉校。

11月5日 支那國留學申附 支那語學生徒 松ヶ江賢哲、松林孝純
(4.11月17日刊第164號)

○この度支那語學科を廢されしにより、これまで大坂に於て該學を修めし松ヶ枝^(ママ)賢哲、松林孝純の兩名は、本月五日更に支那國留學を申し附られたり。

○また、進業學員白尾義夫氏はこの程支那國江蘇省布教主務を申し附られしゆへ、本月十八日發にて、大坂支那學科生徒松ヶ枝^(ママ)賢哲、松林孝純の二氏等を引具して任地へ赴かれたり。
(4.11月19日刊第165號)

！ここに東本願寺の係わる組織的な中國語教育は一應の終了をみた。

e. 興亞會大阪分會支那語學校廢止とその後

★明治15年1～2月 興亞會大阪分會支那語學校再開
據大坂分會報。(中略)該學校。去年(*明治14年)有故。暫停教事。今聘清國浙江人 氏方喩爲師。已開學云。
(5. 明治15年2月28日刊第25輯)

再開後の活動は不明。

★ 5月14日 東京・興亞會支那語學校閉校

★ 7～8月 興亞會大阪分會支那語學校廢止される
據大坂分會報。此次全員會議。自今撤開其會已決等語。
(5. 明治15年8月30日刊第31輯)

明治16年3月1日 「別院日記」記事 (2.47頁)

今日蔣文虎每日來院の事に約す。即ち松林儀蘇州語を習はん爲也(過日來、用吉氏の依頼により同氏へ謀り、午前八時に用吉氏へ先づ行き、次に、本院へ來る、謝禮は例月の三弗に松林より別段心附を送る事を約するなり)

9月15日 本山より支那開教の中止の布達。

明治 31 年、東本願寺は中國開教を再開する。そして、杭州日文學堂、蘇州日本學堂、南京東文學堂などを開校する。日文、日本、東文という學校名から推察されるように、中國布教の方法の轉換を示している。それは、自らが中國語學校をつくり、自らが學習し、現地中國語で中國人を教化する方法から、教師となって日本語教授や教育を通して、中國人を教化する方法への轉換である。勿論、明治 33 年には、「布教ノ最緊要務ハ語學ノ熟達者ヲ以テ養成スルニ在リ而シテ留學生ガ其土語ヲ學ブト同時ニ土人ニ交リ日語ヲ授ケ人情ト地理トヲ知ルハ佛緣ヲ結バシムル布教ノ實ニシテ(略)」(「瀧開教監督心得上申書」2. 321 頁)として 7 名の留學生の増員を要求している。このように、以前と同様に中國語方言教育に對しての大きな關心がみられる。しかし、各地に學校が散ったためか、各地での個人的教育に任されたのか、東本願寺の主催になる中國語學校の設立は記録にないようである。また、これらの學校は、義和團事件の後、閉鎖され、東本願寺の中國での活動は、ますます、中國在住日本人のための教團としての活動となっていくこととなる。

3. 終わりに

阿片戰爭以來、直接の經濟的必要にではなく、政治における北京の重要性が増加するにともない、さらには、宣教師から政治家へと主要な擔い手も變わっていき、歐米の中國語教育は、學習言語を南から北上させるとともに、方言學習から、より通行性のあるものへと眼が向けられるようになっていった。そして、イギリス人 T. F. Wade は中國における官話、とりわけ、北京官話の通行性と政治的重要性に着目し、『語言自邇集』を外交要員教育用に編んだ。これを契機として、歐米の中國語教育の方向は“北京官話”に絞られていく。日本においても、外交上の必要から明治 9 年 9 月に東京外國語學校で北京官話教育を開始し、従來の“南話”教育を漢語學部南語科とし、“北京官話”を漢語學部北語科と複線化した。しかし、事實上は北京官話教育を主とするものに轉換し、南語科は明治 17 年春迄には廢止されている。勿論、明治 11 年に再開された長崎中學校では、“南話”が學習されていたし、貿易商務に従事するものにとっては依然として“南話”を必要としたのではあるが、明治 17 年に、“貿易商業の人材養成”を目的として上海に開校した東洋學館でも、“北京官話”教育を採り入れており、これは、日本においても北京の政治的重要性が増し、“北京官話”の重要性が増加したことを示すものであろう。

北京官話教育を開始した明治 9 年から 16 年の間、日本の中國語教育において、南北官話の差異を發音の差異以外に、どこまで意識していたかどうかは、今後の研究によらなければならないであろうが、當時の中國語認識はどのようなものであったのだろうか。例えば、東京の興亞會支那語學校(明治 13 年開校)では“北京官話”教育を行い、その運營母體・興亞會は、そして神戸、大阪でも分會を開設し、活動實體として、支那語學校を運營した。また、熊本では、興亞會に共鳴する形で支那語科が設置された。明治 13 年～15 年における興亞會の中國語教育普及への功績は、その後の影響を考えても大きなものがある。しかし、東京でなされていた“北京官話”教育によって中國語教育の點を作り、線にしたのではない。東京と異なり、大阪では(神戸でも)、“南京官話”教育であった〔熊本の同心學校(後身の濟濟齋)では 17 年からは御幡雅文による“北京官話”教育であるが、それ以前に彭城邦貞が關係していた時期は南話教育であったと、鱒澤は推定している〕。これは、方言教育ではなく官話教育を行うことでは一致していたが、興亞會内部でも、鄭永寧は中

州官話を推し、廣部精は官話＝北京官話を推しており、南北に大別される官話のどちらを選択して教育するかは、統一された意見はなく、“北京官話”教育を第一とするという共通認識までは到っていなかったと考えられる。また、第三節 50 頁で述べたように、慶應義塾では、北京官話教育から南語教育に転換している。

しかし、明治 9 年の東京外國語學校の北京官話教育導入以降、“北京官話”教育の重視は、テキストの刊行状況をみると、より明確になる。

明治 9 年以降日清戦争終結までに四十余點が刊行されているが、明治 10 年前後、「當時支那語學ノ書物ハ漢語跬歩瓊浦佳話ナド長崎通事相傳ノ南邊語ノ寫本バカリデア」（明治 35 年刊廣部精『増訂亞細亞言語集』緒言）ったことを裏附けるように、明治 12 年の中田敬義『伊蘇普喻言』をかわきりに、その九割以上を“北京官話”テキストが占め、『亞細亞言語集』、『官話指南』、『華語跬歩』などの有力なテキストが生まれている。一方、“南語”テキストはというと、江戸期の島津重豪『南山俗語考』を凌ぐ有力なものは刊行されておらず、「長崎通事相傳ノ南邊語ノ寫本バカリ」の状態が続いた。

このようにみえてくると、明治 9 年以降、“南語”教育が行われてはいたが、“北京官話”の重要性の増大、“北京官話”テキストの普及の面で、それは、すでに拮抗する力になく、主流の座を北京官話教育に譲り、明治 16、17 年には、“北京官話”教育を受けた東京外國語在籍生や興亞會支那語學校生が“南語”教育を受けた者を壓する人数で全国に四散したことにより、ますます、“北京官話”教育は日本の中國語教育の主流としてその位置を固めていったといえるであろう。

だから、本稿で扱った東本願寺の中國語教育の時期は“南語”教育が“北京官話”にとって代わられる時期にあたるのであるが、“南語”教育が唯一の時期の明治 6～7 年、小栗栖香頂は北京官話學習に着目し、彼の北京留學は東本願寺の中國語教育の第一歩となった。さらに、日本の中國語教育が“北京官話”教育に轉換する僅か 4 ヶ月前から明治 16 年までの“北京官話”教育が主流を占めた時期には、主要な布教活動地域を上海とし、上海語と“南京官話”を學習中國語とした。この“捩じれ”に東本願寺の中國語教育の特徴、即ち、中國現地布教という目的をみることができる。上海での布教を中國布教の第一歩として、方言の役割と官話の役割とを區別し、上海語と“南京官話”を選択したのである。説教は具體的な對人接觸行為であり、中國布教の最初の拠点となった上海の方言、上海語を、また、讀經は公的・儀禮的な行為であるから、布教地域の上海に照應させて“南語”を選択したのである。それゆえ、現在からみると“捩じれ”が生じているように見えるのである。そして、布教地域により南北どちらかの官話を採るという東本願寺の考え方は、當時の中國における中國語の姿の實情に近かったと思われる。

東本願寺による組織的な中國語教育は、中國布教という目的を失ない、僅か 6 年を満たずに終息していった。それは、宗教團體としての營爲であり、確かに、當時の中國語教育とは距離を置いてはいた。とはいえ、上海語や“南語”の教學蓄積、さらには中國語教育界での人的交流なども十分に考えられる。それゆえに、今後、中國語教育史に東本願寺の影を見出す契機となれば幸いである。

第五節 御幡雅文傳考

1. はじめに

御幡雅文は安政5年4月10日(1858年5月22日)長崎の銀屋町に生まれ⁶⁷(父は三代目榮三、母なを)た。『東京外國語學校官員並生徒一覽 明治7年3月』に「下級3級 御幡雅太郎(長崎)」とある人物⁶⁸が御幡雅文と見られる。御幡雅文は、明治45年(1912)3月10日、三井物産上海支店在職中、長崎にて病没した。御幡雅文の姿は、『東亞先覺志士記傳 上卷』(黒龍會, 1933)の口繪「日清貿易研究所卒業寫眞」に見える。それによると、前から3列目中央・荒尾精(山高帽子の髭の人物)から向かって右2人目が御幡雅文である。(右の御幡雅文の寫眞は、『東亞先覺志士記傳 上卷』口繪寫眞より轉寫したもの。)



(御幡雅文)

御幡雅文は、東京(外國語學校在學)→北京(陸軍省派遣留學)→熊本(熊本鎮臺)→長崎(長崎商業學校)→上海(日清貿易研究所)→日清戰爭從軍(第二師團司令部)→臺北(臺灣總督府)→上海(三井物産)に、中國語學習と教育・實踐の足跡を残している。その経歴と長崎以降の活動から、御幡雅文を東京外國語學校廢校(明治19年2月)後の中國語教育の中心を擔う人物であったと位置付け、その足跡を追うことで、東京外國語學校廢校から日清戰爭までの中國語教育の實相を明らかにし、また、主著の北京官話テキスト『華語跬步』『家常問答』を上海語に譯したものが、『滬語便商』『問答』であることも既に指摘した通りである⁶⁹。なお、『華語跬步』は、海外にも知られた数少ない日本人による中國語テキストである⁷⁰。

御幡雅文關係資料について、御幡雅文の傳は、『對支回顧錄』下卷(東亞同文會, 1936; 231-232頁)に全文1100餘字の記載があり、彼の著書の「自序」と「序」、及び、關係した人物の回想や關係した團體史の中に、それを補充する記述が散見される。とりわけ、『對支回顧錄』や『續對支回顧錄』下卷(東亞同文會, 1941)の關係記事との照合により、御幡雅文の傳を構成し記述することは、さしあたりの合理的な方法である。現在、御幡雅文傳の集成を目したと思われる『漢語師家傳——中國語教育の先人たち』(六角恆廣, 1999)所收「御幡

⁶⁷ 東亞同文會, 1936; 231頁御幡雅文傳では、幼名を「雄太郎」とし、生地も「安政6年4月3日長崎市新町」とするが、本論文は、全て後述する『長崎の時計師』(渡邊庫輔, 1952; 55頁)による。

⁶⁸ 東京外國語大學史編纂委員會, 1999; 882頁。

⁶⁹ 「明治以降の中國語教育史の考察——日清戰爭終結までテキストを中心として」(鱈澤彰夫, 1990)。

⁷⁰ Arendt, 1894の課文には、『華語跬步』からも採用している。また、その影響と思われるが、同書第70課から第79課までには、重念を「一」で右に示してある。ちなみに課文には『官話指南』からも採用している。なお、Arendtに柏原文太郎編刊本以前の『華語跬步』を紹介したのは、關桂林であろう。

雅文——上海の語學の達人」は、その方法に則り、フィクション仕立てで著述されたものと見られる。

資料の少ない、或いは、資料の缺けた歴史的事實の真相は、フィクション(推論)によってのみ炙り出されるとはいえ、それは、十分な資料検討の上に據って立つものでなければならぬことは明らかである。『對支回顧録』下巻・『續對支回顧録』下巻の記載は、御幡雅文の傳に於いても、重要な絲口を與えてくれる點では極めて重要なものではあるが、年月の誤記や説明不足を含むゆえ、検討すべき記述が見られる。しかし、前掲「御幡雅文——上海の語學の達人」には、その検討に缺ける點があり、そのため、重要な場面が繪空事になっているのは残念なことである。

さて、御幡雅文傳を語るとき、参考とすべき重要資料を示す2つの先行論著がある。

それは、『長崎の時計師——長崎時計産業發達史稿』(渡邊庫輔, 1952)と「三井物産會社支那修業生制度の歴史的意義」(山下直登, 1980)である。

まず、渡邊庫輔, 1952 は、「雅文書上履歷書」(同書 55 頁)の存在を明らかにしており、同書に「雅文に就いては、今はくはしくは言はない」(同書 57 頁)と述べている。しかし残念ながら、氏の他の著述や直筆の手帳類(長崎縣立長崎圖書館所藏)からは、長崎・皓臺寺の御幡家墓所の記述⁷¹以外、御幡雅文に関する記述と資料の寫しを平成 12(2000)年 9 月上旬の調査では見出すことができなかった。當然、「雅文書上履歷書」は、「御幡氏文書」に含まれているものであり、仄聞するところによれば、將來、「御幡氏文書」が整理公開されるものと思われるので、そのときは、御幡雅文傳の記述に大きく寄與するはずである。

2. 北京留學

御幡雅文は、東京外國語學校在學中の明治 12 年 11 月 25 日、桂太郎參謀本部管西局長より山縣有朋參謀本部長への上申書(明治 12 年 1 月 21 日附)に基づいて、東京外國語學校生徒より選ばれた 13 名中の 1 人として「清國留學ヲ命」ぜられ、「十二月三日」「北京ニ差遣」された。以上は既に本論文 38-39 頁で述べていることである。

さて、これまでは、御幡雅文の北京に於ける足跡について確たる資料がなく、それゆえ、『漢語師家傳』(六角恆廣, 1999; 143-146 頁)は、明治 9 年 9 月の東京外國語學校で北京官話教育開始以前の、明治 9 年 3 月に外務省から書記見習の身分で北京官話學習のために北京に派遣された中田敬義の回想と、御幡雅文の自著『華語跬步』の光緒辛卯 2 月(明治 24 年 1-2 月…引用者)桂林「序」にある「庚辰辛巳間(明治 13-14 年の御幡雅文在北京時期…引用者補注)、曾相識於燕京。別已十稔」という記述に基づき描かれたものであった。そして、そこには、御幡雅文の北京での 1 年に及ぶ『語言自邇集』學習が描かれている。しかし、東京外國語學校では明治 9 年 9 月以降、何盛三, 1928; 72 頁の「從來の南京語の學生も大半北京語に移った」のであれば、陸軍としても北京官話の學習經驗の全く無い者を派遣するとは考えに

⁷¹ 昭和 57(1982)年以來、皓臺寺には御幡雅文を含む御幡家の墓所はない。

くいし、既に明治 12 年の段階で、明治 9 年 9 月以前に派遣された中田敬義の回想から御幡雅文の北京留學を推し測ることは無理であろう。

本節は、鈔本 3 部(長崎大學附屬圖書館經濟學部分館所藏)と、本論文 38-39 頁、42-43 頁で引用紹介した『參謀本部歴史草案』によって、御幡雅文の足跡に迫った。

はじめに、長崎大學附屬圖書館經濟學部分館所藏の鈔本三部を紹介しよう。

その鈔本とは、「長崎大學附屬圖書館經濟學部分館漢籍分類目録」(東京大學東洋文化研究所附屬東洋學文獻センター, 1980)に、『紹古先生口授京話 鈔本 二冊』、『官話志白問答 二卷 鈔本 二冊』、『官話今古奇觀 闕名譯 鈔本 一冊』と著録されている 3 部である。いずれも、武藤文庫のもので、袋綴じ背皮洋装本に装丁されおり、背に金文字で題名とともに「御幡珍藏」と、「先生」、「氏」などの語をつけず、箔押しされている。それゆえ、後年、上海か長崎で御幡雅文自身により装丁されたものであろう。そして、これら三部の鈔本は、後述する『華言問答』巻頭に「御幡雅文謹抄」とある筆跡と同じであるから、すべて御幡雅文自筆であると考えてよい。

以下に、各鈔本について簡述する。

①『紹古先生口授京話 御幡雅文鈔本 2 冊』

背には「紹古先生口授京話 乾(坤)御幡珍 [藏]」と箔押しされている。

印記は第 1 葉 b に「鶴江御幡」(鶴江は長崎の別名)の方形朱印。

『乾』 (每半葉タテ 226mm×ヨコ 148mm)全 45 葉、每半葉無界墨筆 9 行毎行 22 字蟲損が多く、特に第 1~10 葉は判讀に難がある。

『坤』 (每半葉タテ 210mm×ヨコ 178mm)全 93 葉、每半葉無界墨筆 13 行毎行 21~23 字共に楷書で、句讀は朱、有氣音には字上に朱で\と振られ、四字句などには右に朱の圈點が打たれている。

『乾』第 1 葉 b の巻頭欄外に「明治十三年十月初四課□(□は「始」字の缺落か? 蟲損にて不分明…引用者)」とある。また、『坤』第 47 葉 b に「明治十四季八月初八日于延旺廟街地藏庵抄完」という記載があることから、この鈔本の書寫時期は北京留學時期のものであり、延旺廟街の地藏庵⁷²に住み、英繼(字は紹古)にも就いて學んでいたこともわかる。

この鈔本は、工部勤務の「文五」に役所勤めで初めて北京に來た「章二」が、役所での習慣・交際、北京の風俗・生活を尋ねる會話書である。

②『官話志白問答 不分卷 御幡雅文鈔本 2 冊』

背には「官話志白問答 乾(坤)御幡珍 [藏]」と箔押しされている。

印記は第 1 葉 a に「鶴江御幡」の方形朱印。

『乾』、『坤』ともに(每半葉タテ 155mm×ヨコ 112mm)

『乾』全 195 葉、每半葉無界墨筆 13 行毎行 20 字。第 1 章から第 164 章までを收載。

『坤』全 165 葉、每半葉無界墨筆 13 行毎行 23~25 字。第 165 章から第 285 章までを收載。

⁷² 現在の北京市西城區迎新街 57 號に存在したが、2010 年に取り壊された。

共に楷書で、句讀は朱。

英國人「白老爺」(Mr. White…引用者による)が兵部捷報處で差使をしていた秀才の「志文(號富齊)」に、『京報』に現れた用語、制度などを尋ねる會話書である。第 21 章では、光緒 6 年(ほぼ明治 13 年にあたる…引用者)の會試が話題とされていることから、書寫時期もこれに近い時期と考えられる。『京報』讀解に關することは、外務省官費留學生學力試驗(明治 19 年 9 月 18、20 日施行)に對する「北京留學生試驗成績審査意見書 吳大五郎明治 19 年 10 月 30 日」⁷³の「第二 試驗監督ヲ設ルコト」中、「増加スベキ科目」の 1 つとして「京報註釋 特ニ解シ難キ者ヲ揮ヒ註釋セシムベシ是レ其事實ニ暗明ナルヲ試ミル爲メナリ」とあり、御幡雅文はこれを學習對象としていたことを示すものである。また、この鈔本は英國人「白老爺」を中心とする『京報』讀解の對話であるから、同時期に英國人の學習が『京報』學習にまで及んでいたことを示すものであり、歐米人の中國語學習が端倪すべからざるものであったことを御幡雅文も感じていたのではないだろうか。

③『官話今古奇觀 関名譯 御幡雅文鈔本 1 冊』

背には「官話今古奇觀 御幡珍藏」と箔押しされている。

印記は第 1 葉 a「御幡」の圓形朱印。

每半葉タテ 213mm×ヨコ 177mm、每半無界墨筆 15 行毎行 20～22 字。

楷書で、句讀は朱。

全 6 話が收載され、それぞれに葉數を記すが、蟲損が激しく修復を必要とし、葉數は未確認、全文の確認も困難である。收録題名は以下の順の通りである。

- | | |
|------------------|---------------|
| 1. 「莊子休鼓盆成大道」 | 2. 「裴晉公義還原配」 |
| 3. 「轉運漢巧遇洞庭紅」 | 4. 「杜十娘怒沈百寶箱」 |
| 5. 蟲損激しく頁を繰れず未確認 | 6. 「蘇小妹三難新郎」 |

『今古奇觀』の北京官話譯本と言え、金國璞譯『北京官話今古奇觀 第一編』(明治 37 年 6 月 20 日文求堂刊)、同『第二編』(明治 44 年 4 月 28 日文求堂刊)⁷⁴があるが、この鈔本とは收録内容が異なる。

以上 3 部の御幡雅文自筆鈔本は、①は明確な書寫期日の存在から、御幡雅文の北京留學時のものであることは明らかである。②は明治 13 年の「京報」記事の註釋である點、①、②、③のいずれも「珍藏」と箔押しされ、紙質も似ており、同様な装丁で製本されている點から、②、③も御幡雅文の北京留學時のものと鱒澤は見ている。

次に、御幡雅文ら陸軍派遣留學生の北京留學情況について考えてみよう。その實態は、直接には不明であるとはいえ、それに迫り得る記述が 2 つある。1 つは、本論文 73 頁で少

⁷³ 外務省外交史料館所藏「清國へ本省留學生派遣雜件」所收。なお、中國人試驗官には、「教師金國璞國子監監生、紹昌内閣中書、蒼昌乙酉舉人、申承恩撥什戸」ら 4 名が見える。

⁷⁴ 神谷衡平は、「北京官話に演譯された「今古奇觀」(これは金國璞氏の譯だと言はれるが私は疑つてゐる)」『支那語雜誌』第 2 卷第 6 號(昭 16. 06.) 60 頁』としている。

し觸れた、明治19年10月の呉大五郎「北京留學生試験成績審査意見書」であり、もう1つは、本論文92-93頁に御幡雅文関連部分の全文を引用する三井文庫所蔵(物産144)『明治三十三年上半季會議錄』所収「小室三吉の明治三十三年二月十七日附書簡」である。

呉大五郎意見書は以下の如く記している。(以下、引用文の標點符號はいずれも引用者による。)

「學業ノ進歩甚緩慢ナルカ如シ。然リト雖是レ全ク生徒ノ不勉強ナルノミニ依ルニ非ラス。(中略)北京留學ノ難キニ數源因アリ。(中略)第三北京留學ハ僅カニ二三ノ教師ニ就キ隨意ノ肄習ヲナスノミニシテ、歐米ノ如ク學校ニ入り、秩序ノ學課ヲ修メ、其國人衆ノ中ニ群學スルニ非ラサレハ、學業紊亂シ進歩緩慢ナル患アリ。」

とし、留學しても歐米と異なり北京には日本の自前で組織された學校がないことを指摘し、「第一 學課程度ヲ立ルコト」、「第二 試験監督ヲ設ルコト」、「第三 學資ヲ補貼スルコト」と、3つの獻策をした。そして、その「第一 學課程度ヲ立ルコト」の中では、

「歐米人ノ清國ニ僑居スル者多クハ十年以上ノ久ニ及ヒ一身ヲ東洋ノ間ニ委棄シタカ如ク嚴然毫モ他物ニ動搖サレズ故ニ我國人ハ隣國ニテアリナガラ清國ニ事情ニ明曉ナル常ニ歐米人ニ一籌ヲ輸スルコトアリ洵ニ遺憾ノ至リナラスヤ而ルヲ六年ノ留學豈ニ長シトスヘケンヤ」

と、外國事情の精通は二三年の留學では足りず、留學生を長期的に滞在せしむるようになるべきであることを説き、「第三 學資ヲ補貼スルコト」では、

「從來ノ生徒ハ教師ニ就學スル、毎日僅カニ二時間、或ハ三時間ニシテ、其月謝ハ七圓又ハ十一圓ナリ。原來僅々二三時間ノ就學ニテハ、之ヲ内外學校ニ比較シテモ甚タ少ク、責^(ママ)メテ毎日六時間ハ就學スヘキ者ナルヘシ。六時間就學スルトキハ二十一圓ノ月謝ヲ要ス(北京ノ例ニ二時間七圓ノ月謝ニ定ムル)。此二十一圓ヲ三十五圓ノ現額ヨリ支出スルトキハ、食住料ニ不足ヲ生シ、到底行レ難ケレハ、教師ヲ多聘スル爲、現額二十圓ノ増給アリ度モノナリ。」

と、現今の豫算では、満足な成果を得られず、このままでは個人の努力を超えた學資の不足が外務省留學生の學力向上を阻害していることを述べ、必要最低限の留學費用増額を進言している。この呉大五郎の意見書は、北京留學に對する教育投資額とその効果との直接的關係を率直に述べ、改善を要求したものである。また、教育投資という財政上の問題は、御幡雅文ら陸軍派遣留學生も期間を一年繰り上げて終了した理由であつたと見られる。ここに、財力に乏しいことにより惹起された、直接的な効果しか眼くばりのできないという、餘裕のなさに甘んじざるを得なかつた後發の“日本”の姿が浮か上がつて來るのである。

次に、御幡雅文の北京留學經驗の總括を含む「小室三吉の明治三十三年二月十七日附書簡」を見ると、それには、

「無暗ニ實地ノ人ニ往來スレハ語學力ノ進歩ヲ見ルコトヲ得ルモノト斷言スルハ、大ナル誤リナリ。假リニ三年ヲ留學期トシ教師ヲ聘シテ必死ノ勉強ヲスルモノトセヨ、其聘シタル教師ハ、日本人ニ教ユルニ如何ナル方法ヲ以テスルヤモ知ラス。亦タ、其師ニ就ヒテ學フ本人ハ勿論、語學上最モ必要ナル四聲ノ分別語調ノ緩急句法ノ道理ヲ

モ知ラス、雙方共ニ素人ナレハ、好シ三年間苦修スルモ、到底、其日子ニ對スル丈ノ結果ヲ見ル能ハサルハ必然ノ理ナリ。故ニ、今御幡ノ實驗ニ徴スレハ寧ロ店內管轄ノ修業生丈ハ上海ニ集メ、學校組織ニシテ、別表如キノ課目ヲ定メ、進歩スルニ從ツテ課目ノ程度ヲ高メ、自然ニ語學ノ研究法ヲ熟知セシメ、何地ニ手放シテモ差支ナキ迄ノ頭緒ヲ開キ、然ル後、一年或ハ半年間、年令ニ依リ實地演習セシメル事トナサハ、將來、實際取引ニ於テ差之毫厘失之千里ノ虞ヲ免ルハノミナラス、羽毛滿チテ高飛スルコトヲ得、安心シテ事務ヲ司ルコトヲ得ルモノナリ。」（標點符號は引用者による、以下同じ）

とある。

これは日清貿易研究所での教育経験の總括を含めてのものとしても、この提言が呉大五郎のものと同様な内容をもつことは、財力の上から日本が例えば公使館内に學校を組織しえず、只管個人の奮勵努力に頼らざるを得なかったこと、及び、當時の中國人教師の教學水準など、御幡雅文が北京留學で體驗した狀況は、時間が5年程先んずるものの、やはり呉大五郎のものと大差無いものであったと言えよう。

3. 荒尾精との出會い

御幡雅文ら清國陸軍派遣留學生は、明治14年9月30日の桂太郎管西局長心得による「將校ヲシテ支那語ヲ習學セシメ度儀ニ附」山縣有朋本部長への上申の結果、明治14年12月、御幡雅文ら陸軍語學留學生は歸國命令を受け、參謀本部附に配屬された。これらの詳細は既に本論文42-43頁で述べたので略す。

明治14年12月、御幡雅文ら陸軍語學留學生は歸國し、參謀本部附に配屬された後、『參謀本部歴史草案』によれば、明治15年2月21日、

「將校タル者隣邦ニ語學ニ通スルコト軍事上緊要ノ義ニ附士官學校ニ於テ語學ノ一科ヲ増置云々及ヒ現在ノ將校ニ學ハシムル爲メ語學教師各鎮臺ヘ配布ノ義等縷々御協議ノ趣了承(中略)配賦スヘキ語學教師人名御取調御申越有之度(中略)士官學校之義ハ(中略)現今直ニ一科ヲ増置難致都合モ有之ニ附篤ト取調之上追テ決定可致候得共幼年生徒學科中ヘハ差當リ支那語學ノ一科増置致候事ニ可致候」

という、參謀本部のこの指令により、明治15年4月13日、御幡雅文も熊本鎮臺に御用掛として赴任した。

そして、明治16年春、歩兵第13聯隊附として、荒尾精少尉が熊本鎮臺に赴任する。

『巨人荒尾精』(井上雅二, 1910; 10-11頁)によれば、「君乃ち請うて官舎を共にし隊務の餘暇支那語を學習す。御幡今尚ほ君が夙夜黽勉進歩の速かなりしを嘆稱せり、君は毎日(中略)支那語研究の傍、傳習録を愛讀して精神を鍛えた」という。確たる證據はないが、その後、商業の中での中國語教育に全力を傾注した御幡雅文の姿をみると、この荒尾精との出會いという「人」の要素は、本論文78頁、85頁に後述する明治19年前後の日本の中國語教育をとりまく情況の變化という「時」の要素を加え、さらには、熊本という「地」の

要素に加える⁷⁵ことで、御幡雅文に決定的な影響を与えたものと考えられる。

前掲の井上雅二, 1910; 10 頁によれば、荒尾精の中國への關心がすでに熊本着任以前からなみなみならぬものであったという。それは、士官學校在校中に「深く國家の前途を慮り、眼を宇内の大局に注ぎ、心竊かに東亞の衰運を挽回せんことを誓ひ」、明治 15 年冬の卒業時に「清國に遊び、其實勢を探求せんと欲し」たが、養育者たる菅井誠美の説得に「服し辭職渡清の意を翻」したとあることから、十二分に窺える。それゆえ、荒尾精にとっても、中國の實際を見聞してきた御幡雅文との出會いは、その中國に對する接し方をより深めたと推測される。そして、その具體的施策が、明治 18 年に始まる漢口樂善堂での活動であった。その活動を、『東亞先覺志士記傳上卷』（黒龍會, 1933; 343-344 頁）には、

「荒尾に取つては商賣は單なる方便で、彼は海外駐在諜報武官たる職責上、各地の情
況を調査して本國に報告する必要があつたし、又彼の懷抱する大計劃（支那の改造…引用
者による）の上からいつでも支那内地の實情を充分に調査しなければならなかつた」

と記されている。しかし、「荒尾に取つては商賣は單なる方便で」、單に商賣を隠れ蓑として諜報活動を行うという便宜的活動として商賣を捉えていたかということ、そうではなく、荒尾にとっての商賣はそれにとどまらないものであったと考えられる。それは、荒尾精自身、日清貿易研究所設立に向けての演述の中で、

「今日外國貿易ノ實況ヲ觀察スルトキハ、常ニ彼ノ爲メニ壓抑セラレ、常ニ彼ノ爲メニ商權ヲ蹂躪セラルヽ所以ノモノハ他ニナシ。長ク武門ノ治下ニ立チ、人皆利ヲ語ルヲ以テ恥ト爲シ、商工ヲ以テ賤業ト爲スノ餘弊延テ今日ニ及ビシニ因ルノミ。（中略）而シテ此兵力ヲ養ヒ海防ヲ嚴ニセンニハ、第一資金ノ充實ナルヲ要ス。（中略）固ヨリ今日民力ノ許サヽル所ナレバ、斷然身ヲ挺シテ商工海ニ入り、專ラ商工者ノ便利ヲ謀（る）。（中略）第一、我物產ノ販路ヲ擴張シテ、第一着手ニ支那ニ其ノ道ヲ開キ、延テ亞細亞全州ニ及ホスノ方法如何。第二、從來支那人トノ貿易ニ於テ、我商人ノ失敗セシ原因如何。第三、將來亞細亞貿易ノ基礎ヲ定ムルノ方法如何。此三項ヲ實地ニ就テ研究スルハ、最モ今日ノ急務ナルコトヲ察シ、明治十八年ノ春、支那ニ渡リ東西ニ奔走シ之ヲ研究セシガ、（中略）漢口ニ貿易店ヲ開キ、其他要地三四ノ支店ヲ分置シ、專ラ試賣ニ從事シ、爾來五ヶ年ヲ經テ、漸ク其原因ヲ探求シ、猶向來施スヘキ方針ヲ定メタリ。」⁷⁶

と述べているからである。

荒尾精の商業への關心の基底は、數え十五の頃「兩親は東京麴町で荒物屋を営み、所謂士族の商賣に失敗して困窮してゐた」⁷⁷ことにあつたと考えられる。だから、前掲の「長ク武門ノ治下ニ立チ人皆利ヲ語ルヲ以テ恥ト爲シ商工ヲ以テ賤業ト爲スノ餘弊延テ今日ニ及ビシニ因ルノミ」というのは荒尾精の實感であつて、そこから發した「（我國の…引用者

⁷⁵ 野口宗親, 1999 が参考になる。

⁷⁶ 「明治二十二年十一月二十五日山口藤六樓ニ於テ日清貿易商會荒尾精演述ノ要旨」（荒尾精, 1889²）。

⁷⁷ 黒龍會, 1933; 327 頁。

による)兵力ヲ養ヒ海防ヲ嚴ニセンニハ第一資金ノ充實ナルヲ要ス(中略)固ヨリ今日民力ノ許サメル所ナレバ斷然身ヲ挺シテ商工海ニ入り専ラ商工者ノ便利ヲ謀」ることは、諜報活動のための方便とはいえぬものである。さらに、「此三項ヲ實地ニ就テ研究スルハ最モ今日ノ急務ナルコトヲ察シ明治十八年ノ春支那ニ渡リ」⁷⁸とあることから、すでにこの「三項」の實施の意志を御幡雅文に伝えていたと考えられよう。否、むしろ、「士官學校卒業後(中略)霸道を以て一國一州に臨むの不可を悟り、王道を以て全世界を救ふといふ大目的に精進せんとするに至つた」⁷⁹とするならば、南北官話を知り北京の生活經驗を持った御幡雅文との熊本での出会いこそ、荒尾精の霸道から商道へという經綸の轉換を早期に促したものと推測される。一方で、時計師の息子で平民の御幡雅文にとっても、荒尾精との出会いは、商業への關心と商業の重要性とを惹起させられた、或いは、再認識させられたものとなったと考えられる。

明治 18 年荒尾精が中國に赴き熊本を去り、御幡雅文は明治 19 年夏、『華語跬步 未定稿本』を刊行した。『華語跬步』は彼の生涯の著述の核になった。御幡雅文の著述——テキスト作り——は、「小室三吉の明治三十三年二月十七日附書簡」中に示されている「英佛ノ語學ヲ學フ如ク完全無缺ナル語學書有レハ、固ヨリソレニ由リ獨學シテ自カラ其學法ニ注意ヲ催スコトアルモ獨リ支那語學ニ至リテハ、更ニ日本人ニ適當ナル學書ナキト、獨學ノ參考書ナキカ爲メナリ。」という認識から發したものである。

明治 19 年 9 月の熊本の濟々覺學則改定により、同校での支那語學科は廢止され、明治 17 年 4 月より就いていた任を解かれた。しかし、その後も有志には中國語教育を續けていた⁸⁰。

明治 20 年 3 月、「自序」によれば、「有金國璞之著華言問答者列纂訴訟及商業之語」として、場面設定を商店とした課文を含む、金國璞『華言問答』を自ら筆寫し、青焼き本〔全 27 章、商業については第 17 章まで(全冊の約 22%)。明治 36 年 4 月 1 日文求堂刊本は全 30 章で商業についての第 18、19、20 章を増加した以外、同文である。〕を自ら刊行した⁸¹。當時の官話教科書は、公刊、非公刊にかかわらず、官吏生活を中心とした北京の制度・風俗・習慣を題材としていたし、吳啓太・鄭永邦『官話指南』の「官商吐屬」には、出入りの商人との對話を扱った場面もあるが、商店での會話ではなく、商業會話としては不備なものであった。勿論、御幡雅文の『華言問答』刊行意圖には、社會の全面に渡る中國語教

⁷⁸ 『日清貿易商會荒尾精演說筆記』(荒尾精, 1889¹)は、明治 22 年 10 月 8 日の演說であるが、その 3 頁でも「余ハ貿易事業ニ感觸ヲ起シタルヲ以テ明治十八年ニ始メテ支那ニ渡航シ」と述べている。

⁷⁹ 前掲の黒龍會, 1933; 345 頁。

⁸⁰ 野口宗親, 1999; 145 頁によると「(濟濟覺では明治 20 年)春まで續けられていたようである。」とある。後掲『華言問答』の刊行を明治 20 年 3 月とすると長崎に移住する恐らくは明治 21 年中までは有志に中國語を教授していたと思われる。

⁸¹ 封面には「明治丁亥貳月下浣」(明治 20 年 2 月下旬)とある。

材構想の一環という面はあったにしろ、明治 20 年初めの中國語教育の状況に呼應したものであったと見るのが妥当であろう。というのは、東京外國語學校は東京商業學校に合併後、明治 19 年 2 月に廢校され、同年 4 月、長崎外國語學校は公立長崎商業學校と合併廢校され⁸²、東京でも、長崎でも、中國語を使用することを前提にし各種業種に就くことを目的にした中國語教育から、商業教育の中の 1 科目としての中國語教育に変わったからである。この状況の中で、本格的な商業會話を含む北京官話の『華言問答』を先行印刷し、教材に供したことは、中國語教育の軸を北京官話に据え、中國語教育を商業の中に明確に位置付ける御幡雅文の確かな意思が見てとれよう。そして、このことは、少なくとも結果的には、前述した荒尾精との出会いをテキストとして具體化した第一着であった、といえよう。

4. 長崎商業學校囑託

御幡雅文は、明治 20(1887)年 10 月 21 日、熊本鎮臺を非職御用掛となり、翌明治 21 年 8 月 28 日清國留學を申請し、31 日認可されている⁸³。一方、同年 8 月 25 日、長崎商業學校助教諭松山等は「今般漢語部御廢止ニ相成專務無之附解職被成下度此段奉願候也」⁸⁴(下線は引用者による)として、辭表を提出しこれが認められ、後述する如く學校規則上、長崎外國語學校からの中國語教育は、長崎商業學校で存續していたが、この辭職理由から明治 21 年 7 月、つまり、明治 20 年度學年末を以って實質的には途絶したことがわかる。しかし、この學校規則は存續し、それが御幡雅文の囑託就任の道を開いたといえるのである。

明治 21 年 12 月 15 日、

「御幡雅文 右者支那語學ヲ修メ嘗テ熊本鎮臺支那語教授致シ居候者ニ附松山等ノ代リトシテ一ヶ月九圓ノ俸給ヲ以テ一日二時間乃至三時間教授囑託ノ儀商議員會ニテ可決致候間來ル明治二十二年一月ヨリ教授委囑仕度候也」⁸⁵

⁸² 『長崎商業百年史』(長崎市立長崎商業百年史編集委員會, 1985; 60 頁)には、「生徒は舊外國語學校より轉校せし者と」「教師は」「王恩彤氏にて従前の如く相替らず授業なしをらる」(『長崎縣有志教育會雜誌』第 3 號 4 月刊)を引用する。なお、王恩彤(40 歳)の任期は明治 19 年 1 月 1 日—明治 19 年 12 月 31 日、前任の孫士希は明治 17 年 4 月—明治 18 年 12 月であった。

⁸³ 『明治 21 年「貳大日記 8 月」』(陸軍省-貳大日記-M21-8-26 防衛省防衛研究所原藏) 國立公文書館アジア歴史センターデジタルアーカイブ。

⁸⁴ 前掲『長崎商業百年史』67-68 頁の記述から、明治 20 年 7 月、漢語學生徒 3 年生が商業學校に編入され、これが外國語學校漢語科の最後の生徒で、この生徒達が 21 年 7 月に卒業した、という。また、7 月以後は、この退職理由と矛盾するので、編入漢語科生徒が残存した可能性はない。

⁸⁵ 長崎縣立圖書館所藏『學務課決議簿 教員進退ノ部 明治廿一年自五月 至十二月 月』所收。なお、教員給月計豫算[現員月俸支給高(158 圓)、殘餘(13 圓)]を掲げ、毎日 1 時間 1 ヶ月 5 圓で習字の囑託を雇用した記録がある。つまり、囑託經費 (79 頁脚注欄に續く)

として、長崎縣は清國留學帰國後の御幡雅文を長崎商業學校囑託に任じた。この日、臨時縣會で縣立長崎商業を長崎區(のち明治 22 年 4 月 1 日より市)に移管することを決定しており、同日の御幡雅文の囑託就任決定は、松山等退職後の中國語教員空白解消を圖ったものである。こうして、明治 22 年 1 月より、御幡雅文は長崎商業學校囑託として、これより商業學校・商業界での中國語教育に従事することになる。

明治 22 年 4 月、長崎商業學校(明治 34 年 4 月より、市立長崎商業學校と改名するまで、この校名を襲う。)は長崎市に移管改組開校された。長崎商業學校は、商業學校通則(明治 17 年 1 月 11 日)で「第一種ハ主トシテ躬ヲ善ク商業ヲ營ムヘキ者ヲ養成スル爲メ……第二種ハ主トシテ善ク商業ヲ處理スヘキ者ヲ養成スル爲メ」と規定された、實地の商人養成の爲の第一種商業學校であり、その學科目は、「修身、讀書、習字、算術、簿記、商業書信、商業地理、商品、商業經濟、商業實習但土地ノ情況ニ由リ本文某科目ノ程度ヲ斟酌シ若クハ斟酌セスシテ特ニ銀行、爲替、運輸、保險、會社、圖畫、物理等ノ某科目ヲ置キ又英、佛、獨、支那、朝鮮等ノ某語ヲ置クコトヲ得」⁸⁶とされていた。長崎商業學校では、この「土地ノ情況ニ由リ(中略)支那等ノ某語ヲ置クコトヲ得」を援用し、對中貿易に對應した「漢文書信科」という科目を設置し⁸⁷、次の如く定めた。それによると、

「漢文書信ハ現今清人ノ使用スル俗文ノ文字句讀ヲ習熟セシメ、日用商業取引上ニ使用スル受取手形及手翰ノ類ヲ筆記セシメ、以テ支那人ト取引ヲナスニ當リ文學上ノ往復ニ差支ナカラシムコトヲ要ス」

とある。この科目内容は、中國語教育の存續を内包するものであり、さらに、その「時間表」をみると「漢文書信科 商賣尺牘一年次生二時間／週 商賣尺牘二年次生二時間／週 商賣尺牘三年次生二時間／週」とあり、その使用教科書には

「尺牘薪採 全二冊 (著譯者氏名欄未記載、「採」は?…引用者)
結翰墨緣 全一冊 御幡雅文」

とある。この御幡雅文『結翰墨緣』も不明であるが、明治 22 年 11 月 25 日刊『官商須知文案啓蒙』の假題本である可能性が高い。ともかくも、『官商須知文案啓蒙』は、この漢文書信科のテキストとして編まれたものであると言えよう。

5. 明治 10 年代の中國語教育

さて、御幡雅文が熊本で中國語教育に従事し始めた明治 10 年代中葉、どのように中國語教育が行なわれていたか、これを考えるとき、當然、東京外國語學校のカリキュラムについて見ておかなければならない。東京外國語學校に於ける中國語カリキュラムは、各年

(78 頁脚注 85 の續き)は學校の人件費豫算の剩餘から充てられた。

⁸⁶ 『實業教育五十年史』(文部省實業學務局, 1934; 140-142 頁)。

⁸⁷ 長崎縣立圖書館所藏『學務課決議簿 學制ノ部 明治廿三年』所收「長崎商業學校規則」(長崎區告示第 30 號明治 22 年 3 月 31 日)による。

度の『東京外國語學校一覽』に見ることができ、それは『東京外國語大學史』⁸⁸(東京外國語大學史編纂委員會, 1999; 896-900 頁)の記述に反映されている。一橋大學附屬圖書館所藏にかかると『東京外國語學校一覽』には、『明治七年三月官員並生徒一覽』、『東京外國語學校一覽明治十二年十月』、『東京外國語學校一覽明治十三、十四年』、『同 明治十四、十五年』、『同 明治十五、十六年』、『同 明治十六、十七年』、『同 明治十七、十八年』があり、『明治十三、十四年』以降のものにはカリキュラムの記載がある。これは「教育令」公布とそれに續く教育内容整備による結果である。また『東京外國語學校校則』(明治 9 年 12 月)⁸⁹には『明治十二年十月』と同様に科目内容の記述は無いが、「課程表」は同一であり、さらに『明治十三、十四年』とも同じである。そして、「北語科」「南語科」の區別は『明治十六、十七年』まで見られる⁹⁰。このことから、明治 9 年 9 月の北京官話教育開始から、明治 16 年度までは、同一のカリキュラムの下で中國語教育が行われていたと考えてよいであろう。しかし、上述の『東京外國語學校一覽』の記述は簡略であるため、より明確な資料による補足が求められていた。

それゆえ、明治 14 年 7 月に縣立長崎中學校清語學部として再興され(明治 7 年以來)、明治 15 年 7 月に長崎外國語學校清語學部と改稱し、さらに、明治 19 年 4 月、公立長崎商業學校に合併され縣立長崎商業學校漢語學部となった経緯を持つ、長崎外國語學校、長崎商業學校の學校規則は、さらに詳しい中國語の「教授要旨」(カリキュラム)が記載されている点で重要な資料である。鱒澤の目睹したものは次の 3 種である。

- A. 長崎縣布達甲第 31 號明治 16 年 5 月 7 日長崎外國語學校規則(長崎縣立圖書館所藏)
- B. 長崎縣布達甲第 56 號明治 18 年 7 月 23 日長崎外國語學校規則(長崎縣立圖書館所藏)
- C. 長崎縣令第 21 號明治 19 年 9 月 10 日長崎商業學校規則⁹¹

これらを通覧すると、A. を基本としていることがわかる。そして、A. の内容が「長崎縣嚴原中學校韓語學部規則」⁹²(長崎縣立圖書館所藏「長崎縣布達甲第 21 號明治 16 年 3 月 5 日」)に先行するものと見られること(本論文 81 頁脚注 94 を参照されたい)から、A. は、鱒澤未見の長崎外國語學校清語學部と改稱當初の、或いは、縣立長崎中學校清語學部開校時のカリ

⁸⁸ 同書 781-791 頁には露語科カリキュラムが收載されていて、比較に便利である。

⁸⁹ 東京外國語大學名譽教授中嶋幹起博士のご好意により、『東京外國語學校校則』(明治 9 年 12 月)(茂原市立木、高橋喜惣治文書所收)のコピーを頂戴した。

⁹⁰ 何盛三, 1928; 72 頁の「明治 14 年に至つて之を廢し、専ら北京官話のみを教ふことゝなつた」という記述が正しいようであるが、待考としたい。そして、第二種商業學校とされた附屬高等商業學校の設置で、『明治十七、十八年』では入學資格が「初等中學卒業」に変わり、學習科目と授業時間數も大きく変わる。しかし、漢語學科のカリキュラムは「南語科」はなくなるも、同文である。なお、『明治七年三月』には時間割を掲載するも「校則」の記載は無い。

⁹¹ 佐々澄治編『長崎縣達類纂』明治 21 年以文會社刊所收(國立公文書館内閣文庫所藏)。

⁹² 對島の光清寺に 1872 年 10 月 25 日に設置された、嚴原韓語學所(1873 年 11 月 4 日に東京外語に人員とともに移管)を前身とする。

キュラムと同じものであると推測できる。また、『明治期英語教育研究』⁹³（松村幹男, 1997; 167 頁）に掲載する「宮城中學校學則」の「英語教授規則」は長崎外國語學校の英語科の「教授要旨」と相似している。それは、長崎外國語學校が當時の「中學校」と同格である點に由來する。そして、その中國語カリキュラムは英語のそれと比べるとその位置を知ることができる。さらに、これを前掲『東京外國語學校一覽』と併せ見ることで、明治 10 年代中葉に於ける中國語教育の實態をより明確なものとするができる。

そこで、長文ではあるが、A. の中國語の「教授要旨」を英語のそれと對照して〔資料〕として紹介する。なお、A. は、『東京外國語學校一覽明治十四、十五年』の漢語科學科目「習字、授音、授語、句法、話稿、翻譯、解文、算術、修身學、皇漢書、體操、記簿法、代數、幾何學、英語」にほぼ一致するので、その「習字、授音、授語、句法、話稿、翻譯、解文」も適宜に紹介した。

〔資料〕の見方

明朝體、ゴシック體、正楷書斜字體という 3 種の字體と黒色、赤色の 2 色を用いて、以下のように書き分けた。（傍點、標點符號は引用者による。）

清語學科・英語學科共通の文言を明朝體黒字で示し、**清語學科のみの文言をゴシック體黒字で示し、清語學科の文言と異なるか、或いは、英語學科のみの文言を正楷書斜字體黒字で示し、東京外語の『明治十四、五年』の該當部分の文言を明朝體赤字で示した。**

【資料】

長崎外國語學校規則（長崎縣布達甲第三拾壹號明治十六年五月七日）

長崎外國語學校ハ英語學清語學ノ二部二分チ、英語學部ハ英語ヲ要スル各種ノ事業ニ就カントスル者又ハ高等ノ學校ニ入ラントスル者ノ爲ニ必須ノ學科ヲ授クル所トシ、清語學科ハ清國南京語ヲ要スル各種ノ事業ニ就カントスル者ノ爲ニ必須ノ學科ヲ授クル所トス。

（清英語學科）清英語學科ハ修身清英語竝ニ和漢文習字算術

代數幾何三角法地理歴史生理動物植物金石物理化學經濟記簿圖畫

本邦法令及唱歌體操トス。

但唱歌ハ教授法ノ整フヲ待テ之ヲ設クヘシ。

教旨（清英語學科ヲ教授スルノ要旨）

清英語ヲ分テ誦讀讀法文法習字會話ノ四科トス。

誦讀讀法ハ授音綴字讀書譯讀ノ別アリ。

授音ハ正文ヲ音誦セシメテ五音四聲ノ區別ヲ正シ⁹⁴。

授音 儒書ノ音誦ヲ授ク

⁹³ また、同書 163-176 頁によれば、中學校の教授要旨は明治 14 年 7 月の「中學校教則大綱」以降、各府縣で準備され、明治 15 年以降、各中學校で制定されたという。

⁹⁴ 「長崎縣嚴原中學校韓語學部規則」は、「韓語」教旨を收載するが、その内容は「清文」を「諺文」に書き替えたもので、特にこの「授音」の部分「五音四聲ノ區別ヲ正シ」と同文であることから、同規則は先行する「長崎外國語學校」「清語」教旨を下敷きにしたものと見られる。

綴字ハ諸科ヲ課スルノ始メ、文字ノ名及音母音子音ノ區別分音法等ヲ授ケ、

以テ發音ヲ正シ稍熟スルニ及テハ之ヲ書取セシメ、

授語ハ單音單句及俗文ヲ音讀セシメテ、音聲ノ抑揚句讀ノ斷續ヲ明ラカニシ、

授語 俗語ノ單言單句ノ音譯ヲ授ク

讀書ハ稍綴字ヲ解スルノ時ヨリ、簡易ノ讀本ヲ授ケテ其讀方ヲ授ケテ其讀方ニ熟セシ

メ、漸ク進テハ、稍高尚ナ讀本及名家ノ詩文ヲ授ケテ之ヲ講究セシメ、

譯讀ハ授語 讀書ヲスルノ際邦語ヲ以テ其意義ヲ譯授シ、或ハ生徒ヲシテ之ヲ譯說セシム。

凡誦讀 讀法ヲ授クルニハ清 英語ノ力ヲ養成センコトヲ旨トシ、姿勢行動ヲ正シ、

授音ニ於テハ音聲ヲ明ラカニシセシメンコトヲ要シ、

綴字ニ於テハ語音及其綴屬ニ練熟セシメンコトヲ要シ、

授語ニ於テハ聲調ヲ整へ、聽ク者ヲシテ其主意ヲ會得シ易カラシメコトヲ要シ、讀

書ニ於テハ音聲ノ抑揚句讀ノ斷續ヲ明晰ニシ、聽ク者ヲシテ其主意ヲ會得シ易カラシメ、又緊要ノ句章ハ之ヲ書取ラシメ、ドウ勢力及其綴屬ニ練熟セシメ、感聽ヲ練リ綴字ヲ正シ筆記ニ慣レシメンコトヲ要シ、

譯讀ニ於テハ詳ラカニ主意ヲ了解セシ且生徒譯說スル所ノ語句ハ自ラ章ヲ爲シ、直ニ之ヲ誦シ得ルニ至ラシメンコトヲ要ス。

文法ハ文典作文修辭翻譯ノ別アリ。

文典ハ詞法句法等ヲ教フルヲ始メトシ、漸ク進ンテハ清語ヲ以テ各種ノ文格ヲ講授シ、或ハ生徒ヲシテ之ヲ解説セシメ。

句法 單言單句ノ熟語ヲ移？シ、短略言談ヲ湊成スル等ノ法竝ニ散文吏語等ノ屬法ヲ授ク。

文典ハ語詞ノ本源ヨリ始メ終ニ詩文法ノ概論ヲ講授シ、

翻譯ハ各種ノ清文ヲ和文ニ和文ヲ清文ニ翻譯セシメ、

翻譯 散文體ノ譯題ヲ出シ、之ヲ譯セシム其譯題ハ彼我ノ新報等ニ採ル。

翻譯 吏牘體ノ譯題ヲ出シ之ヲ譯セシム。其譯題ハ彼我ノ新報等ニ採ルヲ時トシテ尺牘ヲ作ラシム。

解文 彼國吏治ノ書文講授或ハ之ヲ生徒自己ニ講解スル等ノコトヲ課ス。

翻譯ハ先ツ英文ヲ和文ニ和文ヲ英文ニ翻譯スルニ、各恰當ノ譯詞ヲ教ヘ稍熟スルニ及テハ公私書牘文ヲ翻譯セシメ、終ニ誌傳論說文ニ及ス。

作文ハ單言單句ヲ綴ラシムルヨリ始メ、各種ノ清文ヲ作ラシム。

未記載…但し、參考書に『尺牘雙魚』、『酬世錦囊』を挙げているので尺牘の實作を指す。(引用者補注)

作文ハ填語ノ法等ヲ教フルヲ始トシ、漸ク進ンテハ官府及民間ニ通用スルノ書牘文ヲ作ラシメ、終ニ誌傳論說文ニ及ホシ

修辭ハ英語ノ沿革等ヨリ始メ、兼テ快滑讀方ヲ爲サシメ、漸ク進ンテハ文體詩律篇等ヲ講授シ、或ハ生徒ヲシテ之ヲ講演セシメ、

凡文法ヲ授クルニハ行文ノ法ニ通達セシメンコトヲ旨トシ、公私ノ別ヲ明ラカニシ、
文典ニ於テハ言詞ノ用法屬文ノ格式等ヲ熟知セシメ、
翻譯ニ於テハ務テ原文ノ意義ヲ悉クシ、事實正確ニシテ其主意ニ通曉シ易カラシメ
ンコトヲ要シス。
作文ニ於テハ作ル所ノ文 務メテ體裁法式ニ適ヒ事理簡明ニシテ、辭氣快爽ナラシメ
ンコトヲ要スシ
修辭ニ於テハ英語ノ理會スルノカヲ一層強固ナラシメ、以テ文章言語ノ實用ヲ習熟
セシメンコトヲ要シ、

習字ハ楷書行書草書ヲ授ク 先ツ姿勢執筆ノ法ヲ授ケ字形ノ大小字畫ノ疎密等ニ注意セ
シメ漸ク進ンテハ運筆ニ習熟セシム。凡習字ヲ授クルニハ姿勢執筆ノ法ヨリ間架結構
ヲ練熟セシメ筆法端正ニシテ且字形ヲ整雅 字形明晰運筆快暢ナラシメンコトヲ要ス。

95

習字 楷體ノ字式ヲ掲ケ其音其義ヲ授ケ之ヲ習ハシム

會話ハ對話々稿ノ別アリ。

對話ハ言語ノ作用ヲ口授シ、

話稿ハ生徒ヲシテ一席話及思想ヲ口演或ハ筆述セシム。

話稿 生徒自己ニ打稿セシ一席話ヲ或ハ口説シ或ハ筆述スル等ノコトヲ課ス。

會話ハ單語連語ヨリ始メ漸ク進ンテハ實際ノ談話ヲ爲サシム。

凡會話ヲ授クルニハ言談ニ熟シ筆記ニ慣レシメンコトヲ旨トシ會話ニ熟シ、對話ニ於
テハ言語ノ用法ヲ理會セシメンコトヲ要シ、話稿ニ於テ口演スル所ノ語句ハ抑揚頓
挫明朗ニシテ聽ク者ヲシテ感覺ニ敏捷ナラシメンコトヲ要シス。其筆述スル所ノ文
句ハ自ラ章ヲ爲シ、之ヲ音誦スルニ艱澁ナカラシメンコトヲ要ス。

「清語學科課程表」欄外に「清語ヲ除クノ外ハ都テ邦語ヲ以テ之ヲ授ク」、「英語學科課程
表」欄外に「英國地誌地文萬國史□生理動物植物金石物理化學經濟ハ皆英文ヲ以テ授ケ其
他ハ都テ邦文ヲ以テ之ヲ授ク」（□は不鮮明文字…引用者）とある。

〔B. 及び C. について〕

B. では、漢語學科と名稱を變え、單に「本校ハ英語學科及漢語學科ヲ教授スル所ナリ」
となり、學科も「修身、和漢文、習字、算術、代數、幾何、地理、歴史、經濟、記簿、圖
畫、英語、體操トス」となり、英語學科との違いは「博物、物理、化學」に縮小した。た
だ、教授内容は「誦讀、文法、會話」と英語學科の「讀書、文法、習字、會話」と相違を
感じさせるが、A. への「習字」を所謂「書道」の「習字」に移行したのみで、「授業要旨」
の文言は、A. を踏襲したものである。

C. では、「本校ハ商業學校第一種ニ據リ商ノ學業ヲ教授スル所ナリ」と、商業學校への改

95 英語の習字は、墨書の所謂「書道」ではなく、penmanship を指す。

組のため、半年 1 期 5 年制から 1 年 1 期 3 年制に短縮され、英漢 2 學科の區別はなくなり、共通科目の「修身、讀書、英語(若クハ漢語)習字、圖畫、簿記、商業書信、商業、地理、商品經濟、商業實習及び體操トス」となった。さらに、「漢語科」の使用教科書には「漢語跬步、語言自邇集、官話指南、今古奇觀、四書、文件自邇集、三國志、資治新書」とあり、北京官話教育に半ば脚を移したことが窺われる點では、重要な變更である。

A.、B. と C. との違いは、北京官話教育に踏み出したことの外に、修學時間數と學習内容に顯著に現れている。一つは、修學期間の短縮に伴い、舊 4、5 學年配當科目をカットしたことであり、このため、「英語ノ沿革等ヨリ始メ兼テ快滑讀方ヲ爲サシメ漸ク進ンテハ文體詩律篇等ヲ講授シ或ハ生徒ヲシテ之ヲ講演セシメ」る「修辭」はカットされた。そして、それは、必然的に、每期全學年總中國語授業時間も習字を除き A. の 165 時間(B. では 150 時間、)から 37 時間(半年 1 期に換算すると 74 時間に相當する)へと減少に現れ、同時に、全授業時間に對する A. の比率も體操(毎日 30 分)を除くと $165/280(\div 0.59)$ [B. では $150/280(\div 0.54)$ 、東京外語では $153/290(\div 0.53)$] となり、C. では $37/84(\div 0.44)$ と 15 ポイントの減少に現れている。この修學時間の減少は、現在から見れば多いとはいえ、やはり、語學教育にとっては、その目的は別にしても致命的であつたことは言うを待つまい。もう一つは、商業學校という性格に由來する内容の絞込みである。これも、修學時間の短縮と對をなすものであることは言うまでもない。つまり、「凡讀書ヲ授クルニハ勉メテ實用漢語ノカヲ養成センコトヲ旨トスルヲ以テ」(下線は引用者)とした點にあり、「會話ハ單語連語ヨリ始メ漸ク進ンテハ專ラ商用上ノ談話ヲ爲サシム」(下線は引用者)とされ、教授内容ノ「會話」が「商用談話」に限定されたのである。

以上をまとめると、

C. の「教授要旨」には、「英漢語 英語及漢語ハ分テ讀法文法習字會話ノ四科トス」と、英漢共用の同一の文言で書かれおり、英語科は「讀法ニ綴字讀法譯讀ノ別アリ」とし、漢語科は「讀法ニ授音授語ノ別アリ」として、相違があるように思われるが、「讀法」の説明の後に「授音授語亦全シ」と續けている。A. を見ても、この両者がほぼ同一である事は窺えるが、これを明確に裏附ける書き方となっている。また、「文法」(語法のみを指さない…引用者)においても、英語との違いは「修辭」のみが異なるだけで、大要は同じである。それゆえ、A. にも明確に規定されていた如く、中國語學習が上級學校への門途を開くものではなかったとはいえ、實際との隔たりは有るにしろ、A.、B.、C. に盛られた教授内容からは、明治 14～5 年當時、英語の教育内容と中國語の教育内容との間に特段の相違が存在していなかったといえよう。また、「文言」と「口語」とが中國語として併修され、「清語ヲ除クノ外ハ都テ邦語ヲ以テ之ヲ授ク」と注記されていたことは、時代的特徴とはいえ、現在の中國語學專攻の大學などでの講義と比較するならば、思い半ばに過ぎるというものである。そして、東京外國語學校でも、早期到北京官話教育に轉換した點では異なるものの、その教育内容は長崎外國語學校と同様なものであつたと見るのが自然であろう。むしろ、長崎外國語學校の中國語教育が東京外國語學校と同様なものであつたと見るべきであ

ろう。

以上のことは、明治 10 年代において、中學校クラスのカリキュラム上は、中國語と英語とは同等のものを持っていたことを示している。

6. 長崎在住時代から日清戦争終結までの御幡雅文の著作

御幡雅文の活躍した「明治」とは、歐米の國力(實體のある新しいものを産み出す力)、即ち、新しい物質文化は、中國を師とした舊來の物質文化を壓倒し、御本家・中國の國力は新しいものを産み出す力を失い、その軍事力も歐米の力を翻すに至らぬことは衆目の一致する所となった時代である。そして、新しい物質文化と舊時代の教養とから切り離された、唐通事時代とは異なる中國語教育は、「語學開立ノ趣意ハ人材ヲ教育シ專ラ翻譯通辯ノ業ニ熟セシメ外國交際ノ便ナラシムルニ在リ」⁹⁶とした外務省漢語學所に始まり、「甲ハ通辯ノミヲ志スモノヲ教授シ乙ハ通辯ヲ志スモノ及專門諸科ニ入ラント欲スルモノヲ教授ス」⁹⁷とした文部省管轄移管後の東京外國語學校においても、甲に屬した。東京外國語學校は、明治 18 年 4 月、佛語科、獨語科も東京大學に移管され、同年 9 月に東京外國語學校附屬東京高等商業學校、及び、東京商業學校と合併され、翌 19 年 1 月、漢語科は朝鮮語科・露語科とともに東京商業學校語學部に所屬を變えた。さらに、それまでの生徒の進路の受け皿であった外務省が、外交上の必要人員を満たしたとしたため、中國語教育はその活路を商業に向けざるを得なくなった⁹⁸。このことの制度的追認が明治 19 年 2 月の語學部の廢止、つまり、東京外國語學校の廢校と見ることができる。

さて、御幡雅文は、明治 19 年夏に『華語跬步』を「未定稿」として刊行(以下、『華語跬步未定稿本』と稱する)し、明治 20 年 10 月 21 日、明治 15 年 4 月 13 日から在勤していた熊本鎮臺をやめ⁹⁹、長崎にもどり¹⁰⁰、明治 22 年 1 月より、長崎商業學校囑託¹⁰¹として、商

⁹⁶ 東京外國語大學史編纂委員会, 1999;44 頁。

⁹⁷ 東京外國語大學史編纂委員会, 1999;46-47 頁。

⁹⁸ 「露語漢語朝鮮語ノ如キ商業上ニ用フルニ非ンバ更ニ他ニ要用ヲ見ザルモノニシテ益々語學ハ商業ニ附屬スルノ科業タルニ外ナラザルニ至ルベシ」(東京外國語大學史編纂委員会, 1999;75-76 頁再引用の「明治 18 年 4 月 11 日以降に書かれたと思われる」文部卿「大木喬任メモ」、原載は細谷新治, 1991 である。また、外交史料館所藏資料 3-10-2-4 によると、明治 19 年 1 月 20 日附文部省書記官の外務省書記官宛の將來採用豫定約束願いに對し、同年 2 月 3 日附の回答では、定員を満たしていることを理由にそれを確約せず、他の語學の兼修を勧めるにとどまった。なお、商業を目的とする中國語教育といっても、特に異なった中國語教育があるということではない。

⁹⁹ 渡邊庫輔, 1952;56 頁。

¹⁰⁰ 『對支回顧錄 下卷』577 頁鐘崎三郎傳に「後長崎に出て御幡雅文につき支那語を學び」とあるが、これは明治 21 年 8 月のことである。

¹⁰¹ 長崎縣立長崎圖書館所藏「學務課決議錄自明治 21 年自 9 月至 12 月」。

業學校での中國語教育に脚を踏み入れた¹⁰²。そして、商業用文を採り入れた『官商須知文案啓蒙』(明治22年11月25日長崎刊)を、明治23年8月には、荒尾精の日清貿易研究所(上海)の開所に備え、日清貿易商會藏版『華語跬步 上編』(小林又七印)¹⁰³を刊行し、同年9月より日清貿易研究所で教鞭をとる。明治24年には『華語跬步 下編』¹⁰⁴を刊行後、『華語跬步』の字音集である『華語跬步音集』を編んだものと推測される。光緒17年11月(明治24年11月)序刊御幡雅文譯述『生意筋絡』¹⁰⁵がある。さらに、北京官話テキスト『華語跬步』を土臺に相次いで上海語商業會話書——日本の上海語商業會話書の嚆矢である上海・修文書館明治25年9月序刊『滬語便商』(「問答」は『華語跬步上編』「家常問答」全36章の第35章までの上海語譯)とその總譯の『滬語便商意解』、その續編である『滬語商賈問答』(明治26年5月12日未定稿)とそれに合綴する『續散語類』(『華語跬步 上編』「續散語類」の上海語譯)¹⁰⁶——を刊行した。一方、北京官話商業會話書としても全百篇で各業種の店舖での會話集の御幡雅文・桂林合著『生意雜話』光緒18年10月序刊(明治25年10~11月)¹⁰⁷を刊行している。そして、日清貿易研究所閉所後の明治26年7月からは、卒業生の實習する日清商品陳列所でそれを監督し、日清戰爭勃發後の殘務整理を終え、明治27年8月31日に歸國、第二軍司令部附一等通譯官として日清戰爭に従軍した。このように、御幡雅文は、最初の上海在住時期に、北京官話を軸に、商業中國語テキストと上海語テキストの先鞭をつけたのである。

¹⁰² 商業を目指した中國語關係者に、沼田正宣(北海道入)がいる。御幡雅文と同じく、東京外國語學校在學中、陸軍省派遣北京留學生となり、仙臺鎮臺に配屬された。その後、かねてからの北清貿易に志す。明治18年5月東崖堂・椿香堂刊『日清貿易針砭』を刊行し、それを増補した明治20年12月有隣堂刊『日清貿易新說』、「輕聲」を初めて表示した明治26年6月27日法木書店刊『日清會話自在』がある。通譯官として日清戰爭從軍中、明治27年11月28日清國安東縣第二野戰病院にて病死。

¹⁰³ 鱒澤は『上編』の原本は未見。「東亞同文書院以前の御幡雅文『華語跬步』について」(石田卓生, 2013)によれば、『上編』は柏原文太郎編『華語跬步』(明治34年10月1日東亞同文會刊)と同じものと推論している。

¹⁰⁴ 『下編』の封面は「明治庚寅歲八月」(明治23年8月)だが、桂林の「序」は「光緒辛卯二月」(明治24年3~4月)とあり、『下編』は明治24年中の刊行と見られる。石田卓生, 2013によれば、『華語跬步音集』の刊行もこの時期と推定している。

¹⁰⁵ 御幡雅文譯述『燕語 生意筋絡』(明治36年7月8日文求堂刊)には、桂林の「序」の日附は「光緒辛卯長至後」(1891年の冬至後)とあり、香月梅外明治25年3月筆寫『生意筋絡抄話』(北九州市立中央圖書館所藏)が存在しているので、御幡雅文譯述『生意筋絡』(これが原題であろう)は、明治24年末、遅くとも明治25年3月までには成書していたと考えられる。

¹⁰⁶ 『滬語商賈問答』は全五十章。末尾に「明治廿六年二月初一起至五月仲二抄畢」とあり、合綴する『續散語類』は沈文藻の序を附す。なお、『滬語商賈問答』『續散語類』は、後に『滬語津梁』として合本再刊。

¹⁰⁷ 香月梅外昭和15年筆寫御幡雅文・桂林合著『生意雜話』(北九州市立中央圖書館所藏)の表紙に「日清貿易研究所教科書」とあり、「序」に「桂林 光緒壬辰小陽月」、卷頭に「鶴江御幡 長白桂林 合著」とある。なお、香月梅外は日清貿易研究所卒業生で、傳は東亞同文會, 1941; 407-413 頁に收載されている。

7. 日清戦争終結後の御幡雅文の足跡

明治 28 年 4 月 17 日(日清講和條約締結)後の御幡雅文の足跡は、臺北在住時期と再度の上海在住時期との 2 つの時期に分けられる。

臺北在住時期については、主要には『臺灣總督府文書目録』(中京大學社會科學研究所臺灣總督府文書目録編纂委員會、1993-1998)により、以下の如く年譜化することができる。

明治 28 年 10 月 10 日	臺灣總督府事務囑託任命 ¹⁰⁸
明治 29 年 3 月 15 日	『警務必攜臺灣散語集』印刷 ¹⁰⁹
同年 3 月 17 日	從軍記章授與 ¹¹⁰
明治 30 年 6 月	『臺灣土語讀本』刊行 ¹¹¹
明治 31 年 5 月 8 日現在	祕書課屬調査係囑託 ¹¹²
明治 32 年 2 月 1 日	文官普通試験臨時委員任命(土語擔當) ¹¹³
明治 32 年 3 月 6 日現在	文官普通試験臨時委員總督府事務囑託 ¹¹⁴
同年 4 月 15 日	依願退職 ¹¹⁵
その後、長崎へ戻る ¹¹⁶	

總督府事務囑託依願退職と、それに續く三井物産上海支店への入社(明治 32 年 11 月 17 日三井商店理事會承認)との関係は不明だが、御幡雅文は、再び上海に活動の場を移すことになる。

さて、御幡雅文の三井物産入社について、『對支回顧録』下卷(285 頁)小室三吉の傳には、
「買辦に代る人物乃至機關は容易に得られなかつた。君は此點に注目して人材の養成を第一の急務とし、次席石田清直と謀り、31 年(32 年の誤り——引用者)知名の支那

¹⁰⁸ 第 1 卷 267 頁(46)。

¹⁰⁹ 第 1 卷 202 頁(14)。

¹¹⁰ 第 1 卷 191 頁(13)。

¹¹¹ 六角恆廣, 1999;161 頁。鱒澤未見。

¹¹² 第 3 卷 311 頁(21)。

¹¹³ 第 4 卷 301 頁(1)。『臺灣文官普通試験問題集 附最近各試験問題集及試験規則』(明治 35 年 3 月 25 日臺北・博文堂刊)61-63 頁には、御幡雅文が作成したと思われる明治 32 年總督府施行の日語土譯の翻譯問題、通譯問題各 5 題を收載する。

¹¹⁴ 第 4 卷 286 頁(26)。

¹¹⁵ 第 4 卷 316 頁(72)。なお、日清戦争從軍の通譯官の多くは、官命により臺灣總督府で仕事をするようになるが、『臺灣總督府文書目録』に見える人事異動を見ると、さらにそのまま役人としてとどまった者が多く、實業界に入る者は極めて少なかったように感じられる。これは、對清貿易黎明期と「士」の意識の影響かと思われるのである。

¹¹⁶ 退職後に長崎に一時戻った事は、『白岩龍平日記 アジア主義實業家の生涯』(中村義, 1999;348 頁)の「御幡、土居、甲斐、諸人從日本到」という記述による。

語學者御幡雅文を社員として傭聘し、留學生を上海に集めて青年社員を養成すると共に、専門學校卒業後入社したる數十百人の店員に對しても、業餘支那語の練習を獎勵し、後年同社の根幹を成したる人物を輩出した。」

とあり、同じく『對支回顧錄』下卷(549 頁)石田清直の傳にも、

「買辦を廢して直取引にする事に努力した。之が爲め其衝に當る人材の養成を先決問題とし、支店長小室三吉と共に益田孝を説いて、支那留學生案を實施せしめ、明治 32 年、遂に三井物産會社第一期留學生を招募し、高木睦郎、内田茂太郎を南京本願寺の東文學堂に託し、翌 33 年夏に(「から」が正確—引用者)森恪、綾野磯太郎、兒玉貞雄、上仲尚明、江藤豐三等を上海支店に集め、御幡雅文其他に託して、支那語英語及び一般支那商習慣を習得せしめて、遂に買辦を撤廢するに至つた。」

とある。

この 2 つの記述を検證するために、まず、前掲「三井物産會社支那修業生制度の歴史的意義」により、當時の三井物産の事情をみると、以下の如くである。

「物産の對清國貿易のための人材養成の一つの轉期となつたのは」「(明治 31)年 12 月の支那并臺灣語學研修規則であり、これが「制定される直接の契機となつたのは」當時の三井物産合名會社社長・益田孝の明治 31 年 10 月下旬から 11 月下旬にわたる臺北支店→香港支店→上海支店の「視察」である。益田孝は、香港支店では、「買辦廢止と直取引の擴大を鼓舞し、」臺北支店では、以下の如く訓示していた。

「今後土語研究ノ爲メ十分ノ時間ヲ與フヘキニ附、支配人以下舉テ土語ヲ習フヘシ。

(中略)向フニ二年間ヲ期シテ土語ニ曉通スル能ハサル者モ均シク辭表ヲ提出スヘシ。

(中略)尤モ土語教師ノ給料ハ社費ヲ以テ支辯スヘク、又、良ク土語ニ通スル者ニハ特別ニ社長ニ稟申ノ上、加給スルノ制ヲ設クルコトアルヘシ(下略)」

そして、「支那并臺灣語學研修業規則」さらに、明治 32 年 1 月 6 日に三井商店理事會で「支那修業生規則制定ノ件」が、可決された。¹¹⁷

このように、益田孝は三井物産に於ける中國語教育を積極的に推進した人物であつた。また、小室三吉も、明治 32 年 5 月 8 日、「北清貿易獎勵ニ附私見」¹¹⁸(永井久一郎と連名)を益田孝ら宛に提出している。その中で、「商品陳列場ヲ設立スル事」、「東京ニハ官立ノ外國語學校有之其科トシテ清國語ヲ教授致居候モ、就テ學ブヲ得ヘキ員數少」なく、内外共に「學ヘキ處」に事缺く當時の状況を踏まえ、「語學研究所ヲ設置スル事」を提言し、(清國)「内地ヲ旅行セシメ語學實習ノ傍ニ」主に商狀調查報告させる事も進言している。この一連の提言は、日清貿易研究所の活動内容を彷彿とさせるものである。小室三吉は明治 24 年 12 月に上海支店に着任し、翌 25 年 4 月上海支店支配人に就任しているので、日清貿易研究所の活動内容も熟知しており、御幡雅文とは面識があつたであろう。だから、すでに

¹¹⁷ 山下直登, 1980; 320-322 頁。なお、益田孝は東京外國語學校廢校に直接關係した東京商業學校評議委員であつたことは、不思議な機縁というべきか。

¹¹⁸ 三井文庫所藏(物産 418)。

このような提言をなしていた小室三吉が御幡雅文入社に関わるキイパーソンと見るのは當を得たものである。なお、石田清直の役割については待考としたい¹¹⁹

そして、三井物産の支那修業生制度の進展とその結果から見ても、この 2 つの記述は、年月の誤記を除けば正しいものと判断し得るのである。だから、前掲「御幡雅文——上海の語學の達人」に於ける、明治 31 年 5 月中旬の御幡雅文宛山本條太郎の書簡に始まるとする入社経緯の記述¹²⁰は、御幡雅文の入社を著名な山本條太郎に結び附けた繪空事であると判断せざるを得ない。また、該文には「三井書院を上海支店に設ける」¹²¹とするが、『續對支回顧録』下卷(224 頁)吳永壽傳に、

「大正 5 年 2 月北京に社員養成機關三井書院の創設せらるゝや、君は擧げられて其の監督に任じ、爾來 8 年の長きに亘りて後進指導の爲盡瘁した。」

とある。

この記述の正しさは、關西大學『鱒澤文庫』所藏の三井書院第二期生卒業式(大正 9 年春)記念寫眞と『社報』¹²²による吳永壽の異動記事から確認できる¹²³。だから、「三井書院」を御幡雅文在職當時の上海支店での中國語學習機關とするのも誤りである。

ここで、主要には三井文庫所藏『三井物産合名會社使用人表』、『三井物産合名會社職員録』により、御幡雅文の三井物産産入社後の足跡を辿ると、以下の如く年譜化できる。

明治 32 年 11 月 17 日 三井物産合名會社上海支店臨時雇として入社決定¹²⁴

明治 33 年 1 月 4 日 日本より上海に着く

¹¹⁹ 石田清直「對清貿易及び長江視察ニ就テ」(明治 33 年 8 月三井集會場での講演・三井文庫所藏—物産 422)では、明治 32 年以來上海支店では買辦を全廢したことを述べるも、支那修業生制度には觸れていない。

¹²⁰ 六角恆廣,1999;162-164 頁。なお、『森恪(普及版)』(山浦貫一,1941)101-103 頁は、『山本條太郎翁追憶録』を引き、「益田孝氏の案を具體的に實施したのが當時の上海支店長山本條太郎であつた」とする。しかし、明治 26 年當時上海支店在職の山本條太郎と(石田清直も)御幡雅文とは面識があつたとは思われるが、山本條太郎が小室三吉の後任として上海支店長に就任したのは、明治 35 年 1 月であり、『對支回顧録』下卷の記述が正確であろう。

¹²¹ 六角恆廣,1999;164 頁による。

¹²² 三井物産株式會社本店庶務課發行(三井文庫所藏)。

¹²³ 三井書院は安定門内司聽胡同に、三菱商事の三菱書院は米市大街史家胡同にあつた。兩院についてはともに未詳。なお、「三井書院」の名稱は、私の調査では、三井文庫所藏資料中に見出せなかった。

¹²⁴ 但し、明治 33 年 12 月 22 日庶務課の三井商店理事會宛異動届(『明治三十二年下半季三井商店理事會議録』所收)(三井文庫所藏—追 1859)には「當會社ニ雇入上海支店勤務ヲ命ス」と「臨時」の字句はない。これ以降の文書も同様である。

同年 1 月より	上海支店にて、北京官話・上海語の教授開始 ¹²⁵
同年 5 月 5 日	父、榮三、上海にて死去(行年 78 歳 2 ヶ月) ¹²⁶
同年中	牧相愛『燕音集』刊 ¹²⁷
明治 34 年 5 月より 9 月まで	東亞同文書院に日曜日出講 ¹²⁸
同年 7 月 30 日	『華語跬步』東亞同文書院會刊(全 1 冊本)
明治 35 年 7 月現在	上海支店支那語通譯
明治 36 年 7 月 8 日	『燕語生意筋絡』文求堂書店刊
同年 10 月 1 日	『華語跬步』東亞同文會藏版文求堂書店刊
同年 2 月 20 日現在	上海支店人蔘掛主任
明治 39 年 8 月 24 日現在	上海支店官省掛主任
明治 40 年 5 月 15 日現在	上海支店官烟軍器掛主任(官憲交渉方)
同年 7 月 5 日	『滬語津梁』文求堂書店刊
明治 41 年 1 月	『滬語便商一名上海語』上海刊 ¹²⁹
同年 9 月 25 日	『增補華語跬步』文求堂書店刊
同年 3 月 13 日現在	上海支店官憲交渉方
同年 6 月 5 日	『滬語便商一名上海語總譯』上海・赤羽正巳刊
明治 42 年 12 月 1 日現在	上海支店清語掛

125

	官話滬語日課表	
月	授 業	抄 話
火	授 業	讀 法
水	授 業	翻 話
木	授 業	讀 法
金	授 業	抄 話
土	溫 習	質 問

備考 店員ヲ三班ニ分ケ一班ノ稽古ヲ一時間ト定メ毎日朝夕右表ニ依リテ教授ヲ爲ス
 一授業トハ日々教科書ニ由リテ新タニ進業スルコトヲ云フ
 一溫習トハ一週間進業シタル所ヲ復習スルコトヲ云フ
 一抄話トハ寫取ノ意ニシテ新規ニ日用ノ用語ヲ教師ニ編輯セシメ之ヲ寫取ラシムルモノヲ云フ
 一讀法トハ所謂句法ノコトニシテ語調ヲ研究スルコトヲ云フ
 一翻話トハ彼我ノ言語ヲ翻譯スルコトヲ云フ
 一質問トハ毎週學ヒ得タル所ノモノニ附疑點ヲ質スルコトヲ云フ
 (前掲『明治三十三年上半季 會議錄』による)

¹²⁶ 渡邊庫輔, 1952; 56 頁;。

¹²⁷ 本論文 94 頁に『燕音集』の詳しい成立を述べる。

¹²⁸ 六角恆廣, 1999; 166-169 頁。

¹²⁹ 鱒澤未見。波多野太郎, 1996; 85 頁による。

明治 43 年 4 月 30 日	『増補華語跬步總譯 上卷』文求堂書店刊
同年 6 月 10 日	『増補華語跬步總譯 下卷』文求堂書店刊
明治 44 年 11 月 17 日現在	上海支店清語掛(最後の職名と思われる)
明治 45 年 3 月 10 日	在職中長崎にて病死

8. 御幡雅文の中國語教育論と三井物産上海支店での実践

山下直登「三井物産會社支那修業生制度の歴史的意義」は、氏の結論には従えぬものの、三井物産の對清貿易人材養成制度の成立過程とその歴史的意味を解明した労作である。同論文には(明治 33 年)「3 月、小室三吉上海支店長からの御幡の意見をとりいれた意見書」¹³⁰の一部(支那修業生教育の改革案と上海支店内での北京官話・上海語學習時間割表)が引用されている¹³¹が、未引用部分に改革案立案の根據とした御幡雅文の中國語教育に對する考え方が明示されているのである。

御幡雅文は三井物産上海支店での北京官話と上海語教育の梃子入れに、「支那語ニ通スル者ニ附無試験登用ノコト」として「本邦給金 75 圓」「支度金 60 圓」「妻女手當毎月洋銀 25 弗」という主任クラスの條件で入社した。御幡雅文は、支店長小室三吉と相談の上、自己の中國語教育方法に即し、從來の上海支店での學習方法を變え、明治 33 年 1 月からの僅か 1 ヶ月餘で、その効果を現出せしめた。小室三吉は、それを實見し、御幡雅文の教學方法によらねば、三井物産の支那修業生制度は期待する効果を擧げ得ないと確信した。そこで、三井本店重役宛に御幡雅文の中國語教育に對する意見を開陳し、それに基づく支那修業生教育改革案を提出した。それが少しく紹介した前掲「小室三吉の意見書」であり、正確には、理事會會議錄の明治 33 年 3 月 5 日「支那修業生ヲ上海ニ集ムルノ件」に添附された、上海支店長・小室三吉の東京本店重役宛明治 33 年 2 月 17 日附書簡(東京本社受領 3 月 1 日附)である。そして、この改革案の要約は、以下の如くである。

「支那修業生ハ從來清國各内地ヘ分遣シタルモ、斯克テハ語學ノ研修變則ニテ、其成果ヲ收ムルコト比較的少キニ附(中略)上海支店申立ノ通り、同店管轄ノ修業生ハ總テ之ヲ上海ニ集メ學校組織ヲ以テ、之ヲ陶冶セシメ度、尚、寄宿舍創立ノ爲メ匯額洋四百十五弗餘支出方認可致度事(中略)向後差出ス人物ハ可成上海ヘ出ス事ニ致度事(但、廣東語ヲ修業致セル者ハ此限りニアラス)」

と。

さて、前述の如く、この小室三吉の提案とその根據こそ、御幡雅文による上海支店での 1 ヶ月餘の中國語教育の効果¹³²であり、それを現出せしめた御幡雅文の中國語教育の意見

¹³⁰ 三井文庫所藏(物産 144)『明治三十三年上半季會議錄』所收。

¹³¹ 山下直登, 1980;330-331 頁。

¹³² 明治 33 年 8 月には「90 圓」、12 月には「100 圓」に、給料の増額が理事會で可決されている。

なのである。そして、後の明治 40 年 7 月の支店長會議では、香港支店長の口からは香港修業生不結果について語られた¹³³一方、飯田儀一理事をして「要スルニ我社ノ修業生ハ成功シタルモノ」と言わしめるに至る。

そこで、長文ではあるが、煩を厭わず、御幡雅文の意見を以下に翻字し引用する。

凡例：原文は縦書。改行、標點符號は引用者による。□は判讀できなかつた 1 字分を、□内の文字は疑字を示す。

翻字したが、意味が通じにくい箇所は(ママ)と記した。

「(上略)御幡氏之意見ヲ摘述シ御參考迄左ニ申上候。

原來、語學研究之必要ハ只タ彼此ノ意思ヲ貫徹スルニ在リテ、困難トスルニ足ラサルカ如クナレトモ、其實甚タ然リト爲サハル所アリ。

抑モ、日本人ノ支那語ヲ學フト歐人ノ支那語ヲ學フトハ雲泥之差異アリ。如何トナレハ、先ニ日本人ノ考ヲ述シニ、支那ハ同文ノ便アルノミナラス、字音モ相近キカ爲メ、學フニ甚タ難カラス、ト云フモノ十中九迄ノ人、皆ナ然ラサルナシ。故ニ、假令ハ日本人ニシテ支那大陸ニ大望ヲ抱キ遠大ノ計ヲ遂ケンモノヲト、非常ナル志操ヲ以テ、支那大陸ニ入ルヤ、固ヨリ人地生疎ノ場所ナレハ、先ツ第一ニ言語ノ必要ヲ感シタル爲メ、直ニ知人ニ托シ、一ノ教師ヲ聘シ、一時ハ初志ニ負カス心約ニ違ハス閉門主義ニテ一生懸命數月間ノ苦學ヲナシ、遂ニ自己ト教師トノ間ニ於ケル朝夕普通ノ挨拶位ヒノ便ヲ得レハ、早ヤ至ル處差支ナキノミナラス、己ノ素志ヲ達シ得ルト惚レ心ヲ起スト同時ニ、研究スヘキノ念ハ日々疎クナルコトヲモ悟ラス、竟ニ不完全ナル言語ヲ以テ、國體ノ情形ヲ視察スルトカ、布面ノ商況ヲ調査スルトカ、實ニ怕ル可キ笑フ可キ考ヲ以テ實地ニ就キ、其目的ヲ果シタルモノノ如クニ思ヒ、甚キハ之ヲ我内地ニ意氣揚々ト報告スルモノ少シトセス。内地人ハ之ヲ聽テ尤トナシ大ニ歡迎スルハ怪ムニ足ラサレトモ、是レ只タ、其人ノ在清年數ノ長キト珍談奇談ヲ見テ、其人ヲ誇獎信服シテ相共ニ事業ヲ興シ一敗塗地セルノ例、實ニ少シトセス。

一體語學ヲ研修シテ、我情意ヲ彼ニ達スル迄ニハ、元ヨリ一二年ノ短日數ニテ學ヒ得ルモノニ非ス。好シ學ヒ得ルトスルモ、練磨ノ功ヲ積マサレハ實益ヲ得ルノ理ナシ。況ンヤ、變則ニテ我僥倖ニ學ヒタルモノカ、實地ニ就キ實情ヲ探ル様ノ大事業ハ夢ニタ^モ出來得ヘキモノニ非ス。只タ徒ラニ山川ヲ跋涉シ風塵ヲ犯シテ實地ヲ眺メ、你、我、他、來不來、要不要、位ノ言語ヲ利用シテ立論スルニ過キサルモノナリ。此流義ヲ以テ、實業上ニ利用スルトセハ、通常取引位ニハ故障ヲ生スルコトナキモ、一タヒ清人ト新事業ヲ起ストカ、或ハ、縛論^(ママ)事件ニ遭遇スルトキハ、恐クハ一歩モ動ク能ハサルコトヲ信ス。然ルトキハ成敗ノ關スル所、損害ノ大小、更ニ底止スル所ヲ知ラス。

外國人ノ學法ハ然ラス。大體、同文國ニ非ス。字音近キニ非ス。故ニ、歐人ニシテ言語ヲ學フモノハ皆ナ一句一言ヲ數百度丁寧反覆シテ熟讀スルカ爲、一タヒ記憶シタルモノハ、年月ヲ經ルモ容易ニ忘却スルノ憂ヒナキノミナラス、益々長進シテ、遂ニ

133 三井文庫所藏(物産 197-6)『明治 40 年支店長會議事録』(三井物産合名會社庶務課)。

實效ヲ奏スルニ至ルハ疑ハサル所トス。大ニ我邦人ノ學法ト同シカラス。反テ同文國人カ非同文國人ニ及ハサルハ實ニ慨嘆ニ堪ヘサレトモ、其弊ハ全ク前述スル如ク輕視シテ、只タ功ヲ急クニ在リテ、所謂心急キテ足遅キノ格言ヲ知ラサルモノナラン。

諸般ノ事情ニ依リテ捷徑ヲ取ルハ不可ナリト爲サレトモ、唯タ實地ニ就キ、無暗ニ實地ノ人ニ往來スレハ語學力ノ進歩ヲ見ルコトヲ得ルモノト斷言スルハ、大ナル誤リナリ。假リニ三年ヲ留學期トシ教師ヲ聘シテ必死ノ勉強ヲスルモノトセヨ、其聘シタル教師ハ、日本人ニ教ユルニ如何ナル方法ヲ以テスルヤモ知ラス。亦タ、其師ニ就ヒテ學ブ本人ハ勿論、語學上最モ必要ナル四聲ノ分別、語調ノ緩急、句法ノ道理ヲモ知ラス、雙方共ニ素人ナレハ、好シ三年間苦修スルモ、到底、其日子ニ對スル丈ノ結果ヲ見ル能ハサルハ必然ノ理ナリ。故ニ、今、御幡ノ實驗ニ徴スレハ、寧ロ店內管轄ノ修業生丈ハ上海ニ集メ、學校組織ニシテ、別表如キノ課目ヲ定メ、進歩スルニ從ツテ課目ノ程度ヲ高メ、自然ニ語學ノ研究法ヲ熟知セシメ、何地ニ手放シテモ差支ナキ迄ノ頭緒ヲ開キ、然ル後、一年或ハ半年間、命令ニ依リ實地演習セシメル事トナサハ、將來、實際取引ニ於テ差之毫厘失之千里ノ虞ヲ免ルハノミナラス、羽毛滿チテ高飛スルコトヲ得、安心シテ事務ヲ司ルコトヲ得ルモノナリ。然ルトキハ、好シ歸朝シテ本邦ノ社用ニ數年從事シ語學ヲ拋棄スルコトアルモ、正則ニ依リテ會得シタルカ故ニ、再ヒ挽回スルハ容易ナレトモ、今日ノ如ク修業生ヲ變則ニ仕込ムハ、眞ニ得策ニ非ラサルノミナラス、後々本邦ニ歸朝スルコト有リテ一二年モ拋棄シテ、再ヒ渡清スル場合アルトスレハ、挽回甚タ困難ニシテ殆ト自カラ徒勞無功ノ憾ヲ抱クコトアルハ、是レ皆從前ノ經驗ニ徴シテ明白ナリ。既ニ此ノ如キ先例アルトセハ希クハ前轍ヲ踏マサランコトヲ切望ニ堪ヘサルナリ。

上海ニテ語學教師トシテ秀才位ノ人ヲ聘スルニハ、左迄困難ナラサルトスルモ、原來、語學研究ハ一ノ專門教師ニ就カサレハ修業者ニ於テノ不利益甚タ不少トス。因テ、其專門教師ヲ聘セントスレハ容易ニ其人ヲ得ル能ハス。況ンヤ漢口、南京等ノ地ニ於テ、適當ナル良師ヲ索ムルハ、尚更困難ナリトス。然レトモ、本邦人ニシテ語學ニ經驗ヲ有スルモノ之カ監督指揮ヲ爲シテ、其不慣ノ教師ヲ利用シ研修セシムルトキハ、何レノ地ニ於テモ修業者ノ不利ヲ見ルコト非サレトモ、是レ亦タ到ル處其人無キニ苦シム。實ニ此ノ點ニ附テハ、執レノ修業者モ抱クセサルモノナシ。是レ、即チ、英佛ノ語學ヲ學ブ如ク完全無缺ナル語學書有レハ、固ヨリソレニ由リ獨學シテ自カラ其學法ニ注意ヲ催スコトアルモ、獨リ支那語學ニ至リテハ、更ニ日本人ニ適當ナル語學書ナキト、獨學ノ參考書ナキカ爲メナリ。(下略)」

以上をまとめると、御幡雅文の意見の特徴は、歐米人の中國語學習との比較から日本人の學習方法を問題にした點にあり、これは、それまでになく、また、その後にもあまり見られなかった視點と思われる。

御幡雅文の意見は、具體的には次の3點からなっている。1つには、中國語を同文同種と捉える日本人の誤りを指摘するばかりでなく、そこから生じる日本人の中國語學習方法

が効果を挙げ得ぬことに比し、歐米人のそれが効果を挙げていることを論じている。2 つには、ネイティブに就けば學力がつく(變則の學習)というのは俗説で、日本人に教える方法も知らず、「語學上最も必要とする四聲の區別、語調の緩急、句法の道理」を心得ぬネイティブに就いての學習は効果がないことを説き、教學經驗に富む日本人が教授方法に慣れぬ中國人を監督し、きちんとした段階を踏んだ學校式の學習(正則の學習)をすべきことを説いている。3 つには、教學經驗豊富な日本人教師の缺乏を補うべき學習書、とりわけ、日本人のための中國語獨習書(御幡雅文も學んだ T.F. Wade『語言自邇集』のように本文部分と詳解部分からなる學習書をイメージしていたと思われる)がないことが、日本人學習者の不利をもたらしている、と斷じている。

この御幡雅文の意見は、北京、上海で歐米人の教學方法(例えば、イギリス公使館では學校方式で『語言自邇集』を用いていたという)の見聞と、歐米人による中國語學習書を研究しての發言であつたと見てよいであろう。そして、「語學上最も必要とする四聲の區別、語調の緩急、句法の道理」は、御幡雅文の創見ではなく、中國語學習の急所として東京外國語學校において教學上重視されたものでもあつたが、これを學習者にわかる形でテキストに反映させる工夫¹³⁴と努力を重ねたことに、御幡雅文の獨創がある。具體的には以下の如く指摘できる。四聲・有氣無氣の區別は、すでに『華語跬步未定稿本』において凡例にではなく全文に四隅の黒白の小丸を附すことで表示した。これは、當時、發音字典が無かつたことに對する獨學者の學習への配慮によるものと思われる。そして、この缺を補うものとして、牧相愛『燕音集』が刊行されたものと考えられていたが、『燕音集』の卷頭には牧相愛撰とあり、序文に續けて配されている「集外」三丁には記名無しだが、牧相愛の増補部分であろう。「集外」に續く『燕音集』一四丁の内容は、御幡雅文混纂¹³⁵『華語跬步音集』(石印版・全一九丁、刊記なし)と同一である。二者の先後は、その増補部分の存在から、『華語跬步音集』に『燕音集』が續いたことを示している。また、孟繁英の序文に「御幡雅文著『清文字彙一卷』悉用東瀛之聲母註明中土漢音」(御幡雅文は特に『清文字彙一卷』を著し、漢語の字音に全て日本語の字音をつけた)とあり、その内容から『清文字彙一卷』こそ『華語跬步音集』であり、『燕音集』は『華語跬步音集』に牧相愛が増補したものである。なお、牧相愛は上海・日清貿易研究所での御幡雅文の教え子である。

また、北京官話音節表の『語言自邇集』「平仄編」(ABC 順)を『亞細亞言語集』では翻刻しただけであつたものを『華語跬步未定稿本』では「改正北音平仄編」(五十音順)に改變し、『華語跬步 上編』「北音平仄譜」で初めて 1 枚の表にするなど、『増補華語跬步』に至

¹³⁴ 管見によれば、日清戦争までに四聲・有氣無氣の表示のほかに、本文發音表示に工夫の見られるテキストは、重念を表示した『支那語獨習書 第一編』(谷信近, 1889)ポーズを表示した『日漢英語言合璧』(吳大五郎・鄭永邦, 1888)、さらにポーズの重要性を説き明確にそれを表示した『獨習日清對話捷徑』(彭城邦貞, 1894)、輕聲表示のある『日清會話自在』(沼田正宣, 1893)を挙げることができる。

¹³⁵ 「混纂」は「色々なところから集めました」の意味か。謙称に用いたものか？

るまで、音節の枠組みに改訂と工夫を重ねている。

言葉を平板に言わぬために必要な語調の緩急は、重念(強く読むこと)により作られるととらえ、重念は、本論文 35 頁、46 頁などで述べたように、明治 9 年から戦前の全期に亘る中国語教育の最重要学習ポイントであった。そして、早くも『官話指南』がその重要性を初めて公にしたが、「凡例」に重念位置の可變性を示すことにとどめ、本文の具体的な重念位置を学習者・教授者に任せる態度をとった。しかし、『華語跬歩未定稿本』では、その「東中問答」(のちの「家常問答」)の一文ごとに重念を記入し¹³⁶、学習者に一つの指針を與え、獨習書としての意思を表現した。

句法の道理については、『語言自邇集』にも見られる所であるが、『華語跬歩未定稿本』以来の「散語」の語句配置に工夫が見られる。例えば、肯定形と否定形の組み合わせ、同じ意味や同じ構造をまとめる¹³⁷(例えば、補語をまとめる)工夫、括弧内に置き換え練習を置く工夫を指摘できる。

『滬語便商』や『増補華語跬歩』に自らの總譯を刊行し、学習者の便宜を圖った。そして、以上のことは後續のテキストに定式を與えたのである。

このように最良の獨習書を日本人学習者に提供すべく、御幡雅文は生涯に渉り努力を重ねた人物であった。そして、「私の持つてゐる原著者書き入れ本を見ても、その教育的良心が窺はれるやうです」という魚返善雄の「御幡雅文の華語跬歩」での發言は、前述した如く、御幡雅文の中国語教育に對する確固たる考え方に基づいた努力が言わしめたものであったのである。

9. 尾聲

明治 45 年 3 月 11 日附三井物産株式會社『社報』「雜件」に、「上海支店勤務御幡雅文昨日長崎ニ於テ病死」と報ぜられた。御幡雅文の戒名は「清遊院溫厚雅文居士」¹³⁸といい、その寫眞(本論文 70 頁参照)からも溫厚實直な人柄が偲ばれる。

¹³⁶ 『滬語商賈問答』『續散語類』各文にも重念がしるされている。

¹³⁷ 江戸期の字數による分類からも類似表現のまとまりのある分類を見出すことができる。

¹³⁸ 渡邊庫輔, 1952; 57 頁。

第六節 『燕京婦語』について

1. はじめに

「燕京婦語 總譯 明治三十九年北邊白血氏鈔本」(以下、『燕京婦語』と略稱する。)は、次の二點で際立った特色を持っている。一つには女性の爲の中國語テキストの嚆矢であり、一つには「去 qù」を「克 kè」と言う清代の滿洲旗人の獨特徴な用例が極めて多くみられるテキストである。そこで、その二點についてそれぞれ本節では見て行くことにする。

なお、本論文では、原文翻字は『影印 燕京婦語 總譯 北邊白血鈔』(鱒澤彰夫, 2013)に拠った。また、典據を示す會話文番号は、『燕京婦語 —— 翻字と解説』(鱒澤彰夫, 1992)で原文發話順に振った番号を用い、例えば、四-33(第四課-33の文を示す)と表記した。

2. 『燕京婦語』の中國語教育史上の意味

a. 「燕京婦語 總譯 明治三十九年北邊白血氏鈔本」について

イ. 外形など

表紙に中央に大きく「燕京婦語」と、左に「總譯 北邊白血」と、いずれも縦に墨書されている。

二針眼紙縫り綴じ。縦 245 mm・横 165 mm。全 2 冊〔上冊(朱で一號とある)66 葉、下冊(朱で二號とある)63 葉、計 129 葉、葉數付けは上冊の二十二に止まり、以降は未記入〕。無邊、無界。縦書き墨書、上下二段で、上段に『燕京婦語』漢語原文、下段に鈔者・北邊白血自身による日本語總譯を配す。上段は毎半葉 12 行 10 字(話者を示す一字を加えると 11 字)、各字には四聲を示す朱圈點と、有氣音には更に字中央に朱點を附す。但し、發音表記は無い。下段は毎半葉 10 行~12 行 15 字(字數不定)。

下冊表紙三に、朱で小判形縦 14 mm の「甲位」の印記が有る。舊藏者の印記と思われる。

ロ. 原著者と譯者について

下冊表紙三に「此の上下二本は所謂魯衛之政の如く兩國に一つも取る可きなきは譯者の是認する處なり」と書き、譯者と自稱して原著者の別に有るを述べている。『燕京婦語』の原著者、及び、北邊白血については不明。ただ、北邊白血の譯文には、「教^{オシイ}サセテ」、「御控^{オヒカイ}イ^(ママ)ニナレバ」、「數^(ママ)ゾイラレナカット」、「カヅイデ來マシタ」、「却^{カイ}ツテ」、「下手ノ上^{ウイ}」^{カンガイ}「考^{オマイ}テ」、「御前モ」、「御歸家リニナリマシタ」、「使イナイ人」、「見イマス」、「着換イルト」など、現代標準語では、エとすべきものがイに、同様に「髮ヲ結うて」、「粥^{カヨウリ}賣リ^(ママ)」、

「襦袢」など、ユとすべきものがヨと表記され、「ドチライ御勤務」、「旅イ出タ」、「引き出シノ中イ入レテ」、「御宅イ年始ニ」、「玉泉山イ御出ナサル」、「行ク可キ所イハ」、「街イ御出ニ」、「彼處イ御蒔キナサイ」、「家イ着キマシテ」など、格助詞「に」、「へ」に「い」が用いられており、「掃除センケレバナリマセン」、「花屋ガカヅイテ來マシタ」という表現もある。これらのことから、北邊白血は、富山、新潟、莊内地方の出身者の可能性がある。

ハ. 書寫時期と場所について

上冊表紙一の右に「丙午歳在青原山」とある。そして、第十一課に日本軍が奉天、鐵嶺を占領したことが述べられている。奉天占領は、明治 38(1905)年 3 月 10 日、鐵嶺占領は、同月 16 日のことであるから、この「丙午歳」は、翌明治 39(1906)年であろう。また、『大清一統志』には、「青原山」は江西省の吉安市東南にある、とあることが注意される。

ニ. 構成と會話書としての特徴について

目次はないが、全巻の構成は以下の通りである。

第一課	鄰人婦女早遇(假題)	第二課	鄰人男婦午遇		
第參課	鄰人婦女夕遇	第四課	中外婦人初會	〔全三節〕	
第五課	戚屬探望	〔全六節〕	第六課	鄰婦過談遊山	〔全六節〕
第七課	中外男婦賀年	〔全四節〕	第八課	中外男婦送行	〔全三節〕
第九課	中外婦人接風	〔全三節〕	第拾課	中外貴顯婦人會晤	〔全二節〕
第十一課	中外貴顯男婦會宴	〔全六節〕	第拾二課	親友男婦賀壽	〔全十四節〕
以上(上冊)					
第拾三課	陞官戚屬致賀	〔全六節〕	第拾四課	買布裁衣	〔全九節〕
第拾五課	作衣	〔全三節〕	第拾六課	種花	〔全三節〕
第拾七課	打掃屋院	〔全六節〕	第拾八課	召裁縫匠作衣	〔全三節〕
第拾九課	召首飾匠製簪釧	〔全三節〕	第二十課	召賣花者買花(假題)	〔全三節〕
第二拾一課	召翠花匠修理鈿子	〔全四節〕	第二拾二課	尋房租住	〔全十節〕
以上(下冊)					

1905 年頃の清末北京を舞臺とした『燕京婦語』の第一の特徴は、第四課では、「敝旗是鑲黃旗滿洲」(四-33)とあり、第十一課では「王爺」(某王殿下：北邊譯)が登場するなど、かなり身分のある滿洲旗人の、就中、婦人の日常生活を中心とした會話集として編纂されていることである。

また、一つの場面設定に二人の會話という形式に全巻が終始しているのではなく、全二十二課中の十二課に三人以上が登場し、しかも、その登場人間の関係が記されている。このことは、これまでに刊行された會話書の中でも珍しいものと思われる。また、登場人間の人間関係の明示は、會話をダイナミックなものにしているばかりでなく、清末の社會言語的考察にも恰好の材料となる。

b. 『燕京婦語』の會話内容から、その成立と周邊について考える

第四課の「中外婦人初會」では、「川島」という日本の婦人が登場し、住居は「安定門裡頭分司廳胡兒胡同」と設定している。そして、彼女に「我們敝國婦女的學問不但是讀書認字就算得了還有各樣兒的女工活計更要緊的是教訓兒女們都得有忠君愛國的心」(四-20)と話している。また、第十一課では、主人役の日本人に「俄國兵他們軍器槍砲甚麼的也是很便利並且他們兵也能打仗可就是不如日本兵他們那麼些個人都是一個心永不往後退都是同心協力所以常能打勝了」(十一-49)と言っている。これらの表現が會話のトレースなのか、日本と日本人の「強さの秘訣」を述べさせ、その「頼り甲斐がある」ことを意圖的に示そうとしたものなのかはわからない。また、同じ十一課には、某王殿下「……………您那兒學堂教日本文麼」(十一-87)、主人役の日本人「有日本文」(十一-88)、某王殿下「啊那很好」(十一-89)、主人役の日本人「現在敝國和貴國辦理的事情很多學日本語最要緊」(十一-90)、某王殿下「是……………」(十一-91)という、一連のやりとりが採り入れられている。これは、この日本人が學堂に關係している事を示しており、その彼が、自分の關係する學堂では日本語を教えていることを述べた上で、更に、「學日本語最要緊」と、もう一押ししていることは、日本教習¹³⁹の重要性を、即ち、當時に於ける日本の援助の重要性を強調して述べたものであるとも考えられる。兎に角も、この會話内容から、明治 38-39 年に頂點を迎える、日本の援助の具現者であり、中國人教育を多くは日本語で行っていたという日本教習の姿が浮かんでくるのである。

c. 『燕京婦語』の成立の背景

私立實踐女學校(下田歌子校長) [現・東京都澁谷区の實踐女子學園]において、明治 34(1901)年秋、清國女子留學生を初めて受入れ、明治 38(1905)年 7 月から大正 3(1914)年までは、別科を設け清國女子留學生教育を續けたことが知られている¹⁴⁰。しかし、日本人女子學生が中國語を學んでいた記録はない。また、矢澤利彦「濱まつと廣東女子師範學堂」(矢澤利彦, 1981)の中で、下田歌子に推薦され、廣東の官立女子師範學堂の清國のお雇い

¹³⁹ 日本教習については、『日本教習』(汪向榮, 1988)、さねとう・けいしゅう『中國人 日本留學史』(實藤惠秀, 1970)に詳しい。後者 99 頁によれば、日本教習の授業は殆ど日本語でなされ、中國語で授業をするものは少なかったという。

¹⁴⁰ 實踐女學校の清國留學生教育については、『下田歌子先生傳』(故下田校長先生傳記編纂所, 1943)に詳しい。それによると、實踐女學校生徒が中國語を學んでいたという記載はない。但し、下田歌子は明治 12 年前後から中國に關心を抱き、清國留學生受入れ以前より、同校教諭の坂卷美都子、松元晴子の二人に中國語を學習させている。そして、この二人が清國留學生の世話をしたという。下田歌子自身も中國語を學習している。本論文 99 頁脚注 142 参照。

日本人・女性教師（〈女性教習〉）となった濱まつの中語學習について、

「日本語で教えたのか中語で教えたのかもはっきりしない。しかし、早くから中國との友好を志したかの女は中語をずっと勉強していたようであるから、中語で行ったものであろう」

とし、さらに、明治 41(1908)年の歸國後、「清國人の教師から中語を習っていた」としている。しかし、これらの記述は、残念ながら、濱まつ自身の中語學習の實體を詳述したものではない。

濱まつの中語學習事情を推察できるものとして、濱まつの先輩格にあたるが、彼女と同様に、中國人女子教育を目指し、下田歌子の斡旋により、横濱の大同學校(清國人經營)の日本人教師を経て、後に上海務本學堂の教習に任じ、さらに内蒙古のカラチンで毓正女學堂を開學した一宮(河原)操子の回想が参考になる。それによると、明治 33(1900) 年 9 月の大同學校着任後、

「生徒に對して十分親切ならんが爲には、みづから支那語を話すことの必要なるを思ひ、大同學校教頭鐘氏が、人格も高く又正しき北京官話を口にする人なるを幸ひとして、放課後鐘氏に北京官話を學びたり。是は後に、上海にても、蒙古にても、大に役立ちぬ。」

¹⁴¹とあり、恐らくは、濱まつ自身も、學校教育のなかでの中語學習ではなく、個人的營爲として中語學習を續けていた可能性が高いと思われる¹⁴²。

さて、日清戰爭の勝利後、日本人の中國居住者數をみると、明治 23(1890)年度 863 人(在上海 734 人)、明治 32(1899)年度 1,725 人、明治 37(1904)年度 16,910 人となり、翌年の日露戰爭の終結を経て、明治 42(1909)年度になると、65,434 人と大幅に増加している¹⁴³。これは居住者數であるから、渡航者數は遙かにこれを上回ると考えられる。また、居住地の分布状態も、日清戰爭以前の上海中心から、擴散状態を呈するようになったことを窺わせる。このような人的“交流、の擴大に對應して、それがそのまま比例的に日本人の中語學習を増加させたかという、そう單純ではなかった¹⁴⁴。しかし、青柳篤恆は、續

¹⁴¹ 『新版蒙古土産』(河原操子, 1944:46 頁)。なお、この書は、著者の女子教育に従事するようになった事情から、カラチンの女學堂で教育に當たる半面、對露調査活動に當たっていた事情を記したものである。なお、横濱の大同學校については、『横濱山手中華學校百年校史』に詳しい。

¹⁴² 東亞同文會, 1941:1235 頁逸見勇彦の條と前掲『下田歌子先生傳』によれば、下田歌子は、明治 35(1902)年に、當時の早稲田大學清國留學生・戢翼翬(清國公使館勤務)から、時任たけ子、内田薫、木村芳子ら女性三人、逸見勇彦ら男性三人とともに中語を習っている。このように、女性の中語學習は個人的、或いは、グループによるものであったと思われる。また、日清戰爭後の清國留學生の大量の來日は、當時の中語學習の高まりを支えたと思われる。

¹⁴³ これらの數字は前掲『日本教習』63 頁(原載『支那年鑑』)による。

¹⁴⁴ 學習者數の推移は判然としないが、日露戰爭終結後の明治 41 年 4 月、「昨今支那語を學ばんとする青年がメッキリ減った」という言葉で、本論文 8 頁で引用した「日露戦後支那に於て活動せんとする日本の青年は如何なる支那語を學ぶべき乎」(青柳篤(100 頁脚注欄に續く))

けて、日清戦争と日露戦争終結までの期間は、「支那語を教授する大小の學校は各地に勃興し教師の數も追々に殖えて枚擧するに遑なき位」であつた書いている。また、これまで、明治期(1945 年以前は多分に)の中國語學習者というと、暗黙の前提の内に、男性學習者のみを視野に入れていたのであるが、果たしてそれでいいものかと考え直さざるを得ない事實に遭遇する。それは女性教習の人數である。光緒 27(1901)年に始まった〈日本教習〉の人數は光緒 36(1906)年を頂點に下降し、辛亥革命直前の宣統 3(1911)年には大部分が歸國することになってしまうが、積極的に中國人女子教育に従事した、濱まつや河原操子のような女性教習が、汪向榮の手になる「日本教習分布表」¹⁴⁵から拾うと、總數 672 人中 49 人(鯨澤の勘定による)で、全體の約 7%を占めているのだ。

この數字は、筆者鯨澤に驚きを與えるものであつた。そして、この數字は、その後ろに、組織化された女性教習の養成機關の存在を示唆するとともに、そこでは、女性の中國語學習も組織的に行われたであろうことを聯想させるのである。

明治 38 年 3 月 13 日、東京市小石川區表町の淑徳女學校(現・東京都文京區小石川の私立淑徳學園高等學校)校長・黒田眞洞から、同年 4 月 10 日を以て、校内に「私立清韓語學講習所」を設立したき旨の認可願が東京府に提出された¹⁴⁶。

淑徳女學校は『淑徳教育七十年』¹⁴⁷によれば、明治 25 年 9 月 2 日、淨土宗尼僧・輪島聞聲により佛教的女子教育を目指して創立された。そして、その教育方針と人格に賛同した伊澤修二は協力を惜しまなかったという。また、伊澤修二夫人(伊澤千勢子)を含む淑徳婦人會の一事業として、私立清韓語學講習所が設けられ、顧問を伊澤修二が務めたという。その設立事情やそれと伊澤修二との關係は後日に期したい。しかし、明治期の女子教育界の實力者であり、一般婦人教育に力を入れていた下田歌子の清國女子留學生教育の開始と女性教習派遣に觸發され、さらには、〈日本教習〉が盛んに渡航し中國人教育に係わっていくという時代の中で、輪島聞聲は中國人女子教育を擔う人材養成機關を設立した、と考えられる。また、伊澤修二は、臺灣の日本語教育にも深く關與しており、また、明治 28 年、『日清字音鑑』を、さらに明治 37 年、『視話應用清國官話韻鏡 附解説書』を編著刊行していることから推察するに、私立清韓語學講習所の顧問とは、名ばかりのものではなかったと考えられる。

私立清韓語學講習所の設立認可願には、次のような「私立清韓語學講習所規則」が添附されている。長い引用となるが、以下に摘録して示す。

(99 頁脚注 144 の續き)恆, 1908)は、書き始められている。

¹⁴⁵ 『日本教習』(汪向榮, 1988)67-95 頁所載。

¹⁴⁶ 東京都公文書館所藏 626-A3-8(明治三十八年文書類纂第一種學事「私立各種學校第一」)による。この資料は、『學校法人大乘淑徳學園一〇〇年史 資料編』(學校法人大乘淑徳學園一〇〇年史編集委員會, 1996)に活字化されている。

¹⁴⁷ 昭和 37 年 11 月淑徳學園刊。同書 36 頁所載の寫眞(撮影は明治 39 年 12 月以降)に、右に「淑徳高等女學校」、左に「私立清韓語學講習所」の門牌が確認できる。

第一 目的

第一條 本校ハ帝國ノ女子ニシテ清韓ニ渡航シ彼女子ヲ啓沃スルノ任ニ從事セント欲スル志望者ニ對シ其教師タルニ必要ナル學科ヲ授クルヲ目的トス

(第二～三條省略)

第四 學則

(第四條省略)

第五條 本校ハ修業年限ヲ壹箇年四箇月トス

第六條 本校ノ授業ハ毎日午後三時ヨリ三時間トス

第七條 本校ノ學科課程表左ノ如シ

備考
清國語
韓國語
ハ各志
望者ニ
其一語
ヲ課シ
兼修セ
シメズ

合計	簿記	手藝	聲樂	教育	韓國語	清國語	漢文	修身	學科 學期及授業 時間
	單記法	裁縫造花 刺繡	唱歌 清韓歌詞等		會話 諺文 音韻	會話 官話 音韻	書法 講讀 作文	實踐倫理	第一學期
二三	一	三	二		五	五	六	一	每週時間
	家計簿記	同上	同上 風琴練習 歌詞等		同上	同上	同上	同上	第二學期
二三	一	三	二		五	五	六	一	每週時間
	商業簿記	同上	同上		同上	同上	同上	同上	第三學期
二三	一	三	二		五	五	六	一	每週時間
		刺繡造花	同上	教授法 保育法	同上	同上	同上	同上	第四學期
二三		二	二	二	五	五	六	一	每週時間

第八條 學年ハ四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ハル

第九條 修業年限ヲ分ツテ四學期トス第一學期ハ四月一日ヨリ七月三十一日ニ至リ第二學期ハ八月一日ヨリ十二月三十一日ニ至リ第三學期ハ一月一日ヨリ三月三十一日ニ至リ第四學期ハ四月一日ヨリ七月三十一日ニ至ル

(第拾～拾二條省略)

第拾三條 本校ニ入學シ得ヘキ者ハ品行方正身體健全ニシテ女子高等女學校女子師範學校卒業生若クハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スルモノトス

(第拾四～拾九條省略)

第廿條 本校ヲ卒業セシ者ハ永ク校友トシテ之ヲ待遇シ又清韓地方ニ渡航ノ志望ヲ有スル者ニハ可及的ノ幫助ヲ與フヘシ

第廿一條 本校ノ經費ハ淑德婦人會ノ寄附生徒ノ授業料等ヲ以テ之ヲ充ツ

其收入支出豫算概目左ノ如シ

但豫算收支ニ於テ不足ヲ生シタルトキハ淑德婦人會ニ於テ特ニ之ヲ負擔ス

收入

一金 壹千百貳拾五圓也

壹箇年收入

内譯

一金 六百圓

淑德婦人會寄附

一金 四百九拾五圓

生徒三拾名十一箇月分授業料

一金 三拾圓

生徒三拾名入學料

支出

一金 壹千百貳拾五圓也

壹箇年支出

内譯

一金 五拾圓

校長一箇年謝儀

一金 八百四拾圓

教授報酬

一金 六拾圓

幹事手當

一金 八拾五圓

教場費使丁費及雜費

一金 九拾圓

豫備

第一條と第廿條に明記されているように、私立清韓語學講習所は中國人(韓國人)女子教育を目指した女性教習養成の機關であつた。『淑德教育七十年』によれば、「校長は岩倉梭子」「監督は黒田眞洞、教授は五名」、「明治四〇年現在の生徒數二五名」で、「卒業生の多くは大陸に渡つて女學堂などの教師と活躍したが、惜しくも四二年三月限りで閉鎖された」とある。¹⁴⁸

¹⁴⁸ 閉鎖の原因は、〈日本教習〉そのものの衰退と考えられるが、さねとう・けいしゅう、1970;99 頁では、〈日本教習〉衰退の原因を三つ挙げ、(1)歸國留學生の増加、(2)西洋教育勢力の進出、(3)日本教育の不評判、としている。

そして、私立清韓語學講習所設立の翌明治三十九年、井上翠の『松濤自述』によれば、卒業生を女性教師として清國に派遣すべく、東洋婦人會附設の教員養成所(修業期間一カ年)が設立され、井上翠(一年間のみ勤務)は清人・松雲程とともに中國語を教授した、という。また、その中で、井上翠は、「學生は前途に横たわる重任を自覺してましたから、語學の進歩もすさまじいもので、僅々一カ年で相當な成績を顯わしました」¹⁴⁹と述懐している。これと前掲した北京官話學習は「大に役立ちぬ」という河原操子の言葉から、私立清韓語學講習所では、女性教習の養成¹⁵⁰というその必要から、初めて組織的に女性中國語教育がなされ、眞剣に中國語が學ばれたと考えてよいだろう。このことは、近代日本の中國語教育史上に特筆すべきことである。そして、このような背景があつてこそ、まさに明治39年、『燕京婦語』が出現したのである。

d. 明治39年、『燕京婦語』と同じく、女性會話書『燕語新編』が刊行

『燕京婦語』の翻譯成立と時をほぼ同じくして、明治39(1906)年4月、女性同士の會話を集めたテキスト・馮世傑、市野常三郎、高木常次郎共著『燕語新編』(京都・干城學校藏板)が、大阪・積善館から刊行されている¹⁵¹。

『燕語新編』の、上段(中國語)下段(日本語譯文)という組み方は、『燕京婦語』と同じである。また、『官話指南』(吳啓太・鄭永邦, 1882)〔のち金國璞改訂の『改訂官話指南』(吳啓太・鄭永邦, 1903)〕が「應酬須知(改訂版では應酬瑣談)」、「官商吐屬」、「使令通語」、「官話問答」(日本大使館員と中國人役人との會話である)とに分けて構成されているのになぞらえれば、『燕語新編』の内容は、全四十章の日本婦人と中國婦人との(或いは、中國婦人同士の)會話＝應酬須知、そして、「使令瑣事」という(日本人)奥さんと下女〔打雜兒的〕

¹⁴⁹ 井上翠『松濤自述』(昭和25年5月大阪外國語大學中國研究會刊)十葉。東洋婦人會附設の教員養成所については、後考としたい。なお、井上翠自身、〈日本教習〉として、北京の京法學堂に赴任している。

¹⁵⁰ 「日本教習分布表」には、安徽安慶地區の布政司衙門幼稚園「酒井余野」のみが清韓語講習所卒業と附記され、彼女以外に、東洋婦人會附設の教員養成所の記載もない。

¹⁵¹ このことは、故那須清先生のご指摘とご配慮により、確認することができ、ここにお禮申し上げる。『燕語新編』は、『中國文學語學資料集成』第2篇第一卷(波多野太郎, 1988²)に収載されている。また、『燕語新編』は、同じ装丁で色違いの『北京官話家言類集』(從來と同じ男性用の會話書)とともにセットで刊行されたものである。藏板元の干城學校は陸海軍士官學校志願者の爲の學校で、馮世傑、市野常三郎、高木常次郎らは、干城學校の関係者であると考えられる。『燕語新編』を女性用、『北京官話家言類集』を男性用會話書としてセット刊行したことは、中國が生活の舞臺になったという當時の認識を示したものといえよう。また、これら二書の巻末には、『急告 清國留學生』として、同校に清國留學生養生部を設けたことを述べ、清國留學生を募集する廣告を載せ、當時の日中関係を彷彿とさせるものとなっている。なお、「克」は使用されていないが、これについては、本節後半で論じた。

との會話＝使令通語という二つの部分から成り立っている¹⁵²。『燕京婦語』も厳密な分類ではないが、第一課から第十一課、第拾三課、第拾五課、第二拾二課を中國婦人と同格の人々との會話、第十二課、第拾六課、第拾七課は中國婦人と下僕との會話、第拾四課、第拾六課から第二十一課を中國婦人と商売人との會話＝官商吐屬から成り立っていると見ることができる。

さらに、『燕語新編』と『燕京婦語』の場面設定を比べてみると、内容的には『燕京婦語』の方がよりリアルで、筋立ても違っているが、『燕語新編』の第十章「祝賀壽誕生」、第十一章「逛十三陵」、第十三章「拜賀新年」、第十六章「陞任道喜」、第十七章「辭行回國」、第十八章「接風問候」、第十章「論花裁種」は、それぞれ、『燕京婦語』第拾二課「親友男婦賀壽」、第六課「鄰婦過談遊山」、第七課「中外男婦賀年」、第拾三課「陞官戚屬致賀」、第八課「中外男婦送行」、第九課「中外婦人接風」、第拾六課「種花」と類似したものがある。とりわけ、『燕語新編』第十五章「唱戲祭碑」では、〔13〕那天頂有趣兒的事情是晚上正唱着戲哪來了電報了、〔14〕「哦是什麼電報呢」、〔15〕「就是擊沈某國一隻頂大的兵船還攻破他兩隻兵船不能再用了那個電報」という場面が、『燕京婦語』第十一課の「……現在聽見說日本兵已經得了奉天了」（十一-37）「是電報已經來了」（同-38）に類似しているのには驚かされる。これには、この二書の間に何らかの連關の可能性の存在すら考えられるが、不明である。

さて、『燕語新編』第四章に、〔14〕「我聽說現在女學堂立了女教習是貴國中村太太」、〔15〕「是不錯」、〔16〕「我們姑娘打算入學堂念書那一切規矩託您給打聽打聽」、〔17〕「我聽說學堂雖然立了學生很少那一切規矩等我見中村太太給您打聽打聽就是了」とあり、女教習という言葉が會話の中に登場している。女性同士の會話を集めたテキストが刊行され、このような會話があることは、折しも明治三十八、九年が日本教習のピークを迎えた年であったことを考えると、大變興味深いものがある。このことは、『官話指南』を日本人が中國語で中國人に接するための、明治以降最初の日本人による本格的な會話書であるとするならば、中國大陸に渡航し、そこで商売、軍事を含めた社會的活動をなそうとする日本人は、殆ど男性であったことから、それは日本人男性のためのものであった¹⁵³ともいえる。しかし、女性教習の形で、或いは、男性とともに海を渡りその陰から、日本人女性が中國での表舞臺に出現し、僅かとはいえ日本人女性が中國人と中國語で接する時代が訪れたことをこの二つの書の存在は教えている。

e. 『燕京婦語』登場の意義

當時の上流階層の中國婦人のリアルな日常生活を中心にしたこと、そして、そこに日本

¹⁵² 『燕語新編』「使令瑣事」は、雇い入れから、日常遭遇する場面の中で、下女を使う際の對し方を教えている點では、基本的に『官話指南』を下敷きにしていると思われる。そして、このことも、中國で暮らし、活動する日本女性の増加を示していると考えられる。

¹⁵³ 『官話指南』は、英語、佛語の譯本が刊行され、讀者は日本人に限定されない。

人女性を登場させたことは、日本人女性が『燕京婦語』というテキストを必要としたということの意味しないであろうか。ここに、この『燕京婦語』の意味があろう。

それでは、どのような女性がこのようなテキストを必要としたのであろうか¹⁵⁴。そう考えると、次の事実を想起することができる。それは、北京の女性教習の中に、服部宇之吉夫人の服部繁子¹⁵⁵がおり、しかも、彼女は北京で中国語を学習していることである。「日本教習分布表」をみると、北京には、巖谷孫藏¹⁵⁶、服部宇之吉、安井小太郎など高級知識人がおり、夫人同伴で着任した日本教習の姿を想像できる。そして、これら在北京の日本教習の夫人たちの中国語学習のために編まれたテキストの一つが、この『燕京婦語』であるとも考えられるのである。或いはまた、日本教習の中で、生の中国語に興味を持った人物が編纂に関与した可能性は高いと思われる。いずれにせよ、『燕京婦語』の背後には〈日本教習〉の姿がほの見えている。勿論、「克」の使用の仕方から、満洲旗人が共編、或いは、主なる編纂を擔ったことは想像に難くない。

こうして考えてみると、第四課に登場する、「川島」という夫人については、当時北京の高等巡警學堂監督・川島浪速の夫人川島福子をモデルにした可能性もあると思われるのである。さらに、第十一課では、日本軍の奉天、鐵嶺占領、さらには、増將軍(盛京將軍・増祺であろう)の無事を「王爺」より早く知ることができ、「王爺」の得た情報に確認を與えることのできた日本人が登場している。このことは、その人物が日本軍と関係の深い人物であることを暗示しているが、彼が清國の學堂にも関係していることを考え合わせると、この人物は川島浪速本人ではないかとさえ思われるのである¹⁵⁷。また、謙祥益綢布店、京劇の名優・賈洪林、山本照相館の名前が出たり、王族から下僕、さらには、乞食さえも登場するリアルな會話の中に、清末の北京の旗人(とりわけ女性)の生活、行動、感情、人間関係をみてとることができるのである。

¹⁵⁴ 六角恆廣編『中國語關係書書目(増補版)(1867~2000)』(六角恆廣,2001)により、そのタイトルから、女性の中国語學習者、或いは女性同士の會話を對象としたと思われるものを拾うと、『婦女談論新集』(金星灑,1914)、『家庭支那語』(梧雨生,1914) 梧雨生は宮脇賢之介、『繪入り子供と家庭の支那語』(飯河道雄,1928)、『男女適用最近日臺會話』(鐘寶,1938)(鱒澤未見)を挙げることができる。

¹⁵⁵ 前掲『下田歌子先生傳』416頁所載の服部宇之吉「下田先生と西太后」(『くれ竹』25號一故下田先生追悼號・昭和12年7月刊原載)に、服部宇之吉は、下田歌子と西太后との會見を圖り、女子の通譯を必要とすると考え、「その意味もあつて妻繁子をして支那語の學習に力をを用いさせたのである。」とある。この計劃は、1908年11月の西太后の死去によって水泡と歸した。

¹⁵⁶ 法學博士・京都大學教授。井上翠編『井上支那語辭典』には「巖谷孫藏氏ノ靈前ニ捧グ」とある。

¹⁵⁷ また、この「王爺」=(乙と記されている)「某王」とは、彼と親交の厚かった肅親王である可能性さえ考えられる。なお、この第十一課は、乙等が前述の軍事情報を確認するのを目的とした會話のようにも思われるのである。

3. 『燕京婦語』の言語的特徴 ——階級方言「克」(去 kè)について——

『燕京婦語』は 1905 年頃の満洲旗人の北京語の姿¹⁵⁸を體現し、明治期のほかの中國語テキストには現れない「去 qù」を「克 kè」で表記している點で、語學資料として稀有な會話書である。

ここでは、『燕京婦語』の最大の語學的特徴である「去」の「克」による表記、の社會言語的用法が、満洲旗人の階級方言用法であることを、『燕京婦語』の三つの特徴(形態的特徴、その會話の内容的特徴、また、會話書テキストの形式的特徴)によって検証できることを示し、さらに、「去」の「克」による表記が、ほかのテキストには現れず、なぜ『燕京婦語』に残存し得たのかについて論じたものである。

a. 『燕京婦語』の三つの特徴

イ. 形態的特徴

『燕京婦語』は、刊本を持たない寫本であること。

ロ. 内容的特徴

概して、明治期の北京官話の會話書には、上層の旗人の生活を描いたものが多い。『燕京婦語』も 1905 年頃の北京の、「王爺」(殿下)が登場するような身分的に上層の満洲旗人の生活を表した會話書であること。

就中、婦人の日常生活を中心に題材をとった女性の會話書であり、このことは同時に、日本の女性中國語學習者のために編まれたものであること。この二點は日本の中國語教育史上劃期的なものであるが、この點については、本節前半で既述した。

ハ. 形式的な特徴

『燕京婦語』は、上段に中國語原文(聲調と有氣音を示す朱點を附す)、下段にカタカナと漢字からなる日本語の譯文を配した會話書であり、各課末尾に、ト書きのない芝居の臺本の如く、三人以上の登場人物に對して、その身分・關係・職業を明示していること。

『燕京婦語』のような「登場人物」の身分・關係・職業の明確に設定された形式は、珍しい。というのは、日本の漢語會話テキストは、『亞細亞言語集 支那官話部』、『官話指南』の如く、空格でそれぞれの發話の別を示すことから始まり、『日漢英語言合璧』の如く、分かち書きの上部にその發話者を明示する形式へと進化して行つた。『燕京婦語』の形式面

¹⁵⁸ 『燕京婦語』第一一課に、日露戰爭時の日本軍による奉天占領・鉄嶺占領(1905 年 3 月と 4 月)を話題とし、また、北邊白血の譯了は、「明治丙午」(1906 年)とあることから、『燕京婦語』は 1905 年頃の満洲旗人の北京語とわかる。『燕京婦語』の北京語については、次の二論文を参照されたい。(一)、江藍生, 1994(二)、張美蘭, 2011。

における先進性は寫本とはいえ明らかである。また、『燕京婦語』には登場人物の多いことも大きな特徴である。多くの會話書では、簡単な人物設定で會話内容から、登場人物の關係を確定させる形式を採用しており、『燕京婦語』のような明確な登場人物の設定にはなっていない。つまり、言葉遣いから身分關係・人間關係を捉えるという不確定さを回避させ、逆に、「登場人物」の身分・關係・職業から、言葉遣いを再吟味できる點で、『燕京婦語』を有用な語學資料にしている。

b. 『燕京婦語』に現れる「克」＝「去 kè」

『燕京婦語』における「克」の 92 例を数える用例は、「克」の先行用例・松友梅『小額』¹⁵⁹の 12 例を遙かに凌ぎ、他の資料には見られない豊富さである。そして、その語法的特徴は、「動作の目的地」＋克＋文末助詞、¹⁶⁰の形式で單獨動詞として使用される以外は、單獨、あるいは第一動詞としては用いられず、第二動詞、あるいは補語として用いられている。この特徴は、『小額』の 12 例と一致している。

ところで、北京語「去 kè」の記載は、T. F. Wade『尋津録』(Wade, 1859)の Syllables in Peking Dialect にあり、「去」の音として c' hū とともに k' o を並記している。同じく『語言自邇集』(Wade, 1867¹)の平仄編にも同じ記述がみられるが、同書「練習燕山平仄編」では、k' o 欄で「去」を採っていない(1886 年第二版本も同じ)。このため、この部分をそのまま翻刻した廣部精『亞細亞言語集 支那官話部』¹⁶¹には、「去 kè」が無い。また、*Progressive lessons in the Chinese spoken language* (Edkins, 1862) では、「去 k' ü'」と「去 ch' ü'」とを確認できる¹⁶²が、「克」の語法的特徴と一致せず、また、該書の注音説明から、「去 k' ü'」は Nanking Mandarin に基づく注音と推察される。御幡雅文混纂『華語跬歩音集』には、「去」に第四聲の「チュキー」、「コー」の二聲あるを記すも、音節一覽なので用例は無い。さらに、1905 年頃のものとして、『官話類編』(第二版再印本) (Mateer, 1906) には「去 ke」はない。また、同書の A Comparative Chart of the Sounds in Five Dialects の表には、「去 k' ü'」は Nanking sound であり、Peking sound でないことを示している。一方、1900～1910 年の日本の辭書類を見ると、牧相愛『燕音集』(明治 33 年陰曆 12 月序刊)は『華語

¹⁵⁹ 本節の『小額』の記述は『小額 社會小説』(太田辰夫・竹内誠, 1992)による。

¹⁶⁰ 『燕京婦語』所反映の清末北京話特色」(江藍生, 1994)によれば、現代北京語にも見られる用法であるという。

¹⁶¹ 正確には、「談論編」、「續談論編」には、明治 9～13 年に東京外國學校に招聘された旗人教師・薛乃良、龔恩祿によると見られる語句の書き換えがある。成立時期が明らかな點から、該書は語學資料として有用である。

¹⁶² 大東文化大學教授大島吉郎先生のご教示による。

跬歩音集』の増補版だから、その記載をそのまま踏襲していることを除けば、石山福治『支那語辭彙』(明治37年12月東京・文求堂刊)、岡本正文『支那音聲音字彙』(明治38年4月東京・文求堂再版増刷本による)、岩村成允『北京正音新字典』(明治39年4月東京・博文館刊)、井上翠『日華語學辭林』(明治39年10月博文館刊)には、「去 ke」の記載はない。

「克」の社會言語學的用法については、これまでも、「滿洲文學考」(太田辰夫, 1995)では、「旗人の使用する階級方言のうち漢語系のもの、すなわち狹義の旗人語」あるいは、「旗人の用いる階級方言を旗人語」と定義し¹⁶³、その旗人語の一つに例示している。さらに、『北京語初探』(胡明揚, 1987)で

「kè 這樣的讀音顯然是一種受社會尊敬的讀音，使用 kè 這樣的讀音可以在羣衆中一下子就顯示了自己的旗人身分，而當時這正是受尊敬的統治階級一分子的身分。辛亥革命以後，情況變了，kè 這樣的讀音就開始消失。」(鯨澤譯：kè という讀音は、明らかに社會的に尊敬される讀音であった。kè という讀音を使うことは大衆の中ですぐに自分が滿洲旗人であること、つまり、當時のまさに尊敬を受ける統治階級の一員であることをはっきり示すことができた。辛亥革命後、状況が変わると、kè という讀音は消え始めた。)

と述べている。

なお、『滿族與北京話』(趙傑, 1996)では、「去 kè」をとりあげ、現在も北京・香山の滿洲族老人が話す、とあり、これを古音殘存によるとする。但し、同書に舉例する「去 kè 香山」のような本動詞「去」の用例は『燕京婦語』にはない。

ところで、これまで、「克」の社會言語學的用法(階級的用法)について、「旗人の階級方言」として檢證されてはこなかった。しかし、幸いなことに、「克」の階級的用法は、『燕京婦語』の豊富な用例と、その登場人物の配役明示という『燕京婦語』の形式的特徴によって、檢證することができるのである。

ここで、『燕京婦語』に現れる「克」、「去」を明らかにするために、旗人による「動作の目的地」+克+文末助詞、の形式、第二動詞、或いは、補語として用いられている「克」と、「去」の使用例を以下に提示しておく。但し後の考察では、第一動詞として用いられている「去」は対象としない。

¹⁶³ 但し、『小額 社會小説』では、「去」という字の方言音であって滿洲語ではない、と注解する。なお、前掲『滿洲文學考』で言及する「喀」は、韓起初『劉巧團圓』(拙論は1949年北京・新華書店初版1953年2月北京・人民出版社重排第一版本による)に15例見られる。また、「喀」には語氣助詞「吧」と同じ用法もあることを注記する。しかし、これらの「喀」は清末北京語ではなく、邊區(陝西)の方言である。さらに、大東文化大學大島吉郎先生のご教示により、『宮良當壯全集10 琉球官話集』(昭和56年6月東京・第一書房刊)の寫眞版部分から、「去年」の注音に「二聲刻、取」と讀めるのを確認した。しかし、該書に入聲もあることから、『燕京婦語』の「克」とは異なる。

附. 旗人による「克」、「去」の使用例一覧表

凡例

- ・ 数字は『燕京婦語 —— 翻字と解説』（鱒澤彰夫, 1992）で原文發話順に振った番号（原文の各一文毎に附けた番号ではない）である。
- ・ 旗人の對旗人の發話には無印、對日本人には J、對下僕には X、對出入りに商人には M で表示した。
- ・ \$ は “「動作の目的地」 + 克 + 文末助詞、” の形式の用例
- ・ # は去の的第一動詞の用例。

旗人の『燕京婦語』に於ける「克」、「去」の使用例一覧表

克		去	
第 1 課	_____		_____
03 甲	二大爺進裡頭克了麼？		
04 乙	進裡頭克了。		
06 乙	上學克了。		
16 乙	上街溜達克, 都快回來了。		
27	有工夫兒克。		
第 2 課	_____		_____
03 婦	您沒上舖子克麼？	25 婦 #	我回來, 去。
04 男	待會兒克。		
	您阿媽上衙門克了麼？		
05 婦	上衙門克了。		
08 男	二爺作買賣克了麼？		
09 婦	您姪兒作買賣克了。		
22 男	我找他說話兒克。		
第 3 課	_____		_____
34 女	趕明兒克。	12 女 #	明兒去。
第 4 課	_____		_____
71 中 J	我還要到太太府上望看々給太太請安克。		
第 5 課	_____		_____
26 甲	我姥爺上那兒克了？	100 甲	您多會兒上我們那兒去呀。
27 丙	您進裡頭該班兒克了。		
29 丙	他上您姐姐那兒克了。		
30 甲	我兄弟他們上學克了。		
31 乙	都上學克了。		

101 丙	有工夫兒克。		
第 6 課	—————		—————
04 乙	我們姑娘他們逛香山克。	06 乙	我就叫他帶着他兄弟去了。
05 甲	您姑娘同着誰逛克了？	15 甲	我同着您哥々去逛了一盪。
20 乙	那一天都有人去逛克。	20 乙	那一天都有人去逛克。 我們姑娘他們去的那一天也，不是那一個大人宅裡的太太們還去了哪。
21 甲	那兒還常有外國人去逛克哪。	21 甲	那兒還常有外國人去逛克哪。
30 乙	我們逛克。	44 乙	再往那麼去，就快到了玉泉山兒了。
34 乙	有一回我們逛克。	57 甲 [#]	明兒去。
39 甲	要是熱的時候兒，進那裡頭克，就涼快着的哪。		
56 乙	您上我們那兒坐着克呀。		
第 7 課	—————		—————
		47 中 ^J	由正月初一到初五這五天裡頭街坊和親友家的姑娘兒們彼此都不能上誰家裡去。這就叫忌門呀。
		49 中 ^J	要是娘兒們甚麼的上人家裡去，人說是不吉祥。
第 8 課	—————		—————
		25 中 ^J	您上公使館去了麼？
		29 中 ^{J#}	您這一去得走幾天呢？
		31 中 ^{J#}	要竟說走連去帶回來也就用二十天的工夫兒。
第 9 課	—————		—————
		13 中 ^{J#}	太太這連去帶回來也有三多月了罷？
第 10 課	—————		—————
16 中 ^J	您沒在家，進裡頭克了。	24 中 ^J	今兒個打裡頭出來，還要上西城拜客去哪。
40 中 ^J	這幾天沒上那兒克。		
42 中 ^J	我還要到太太府上請安克哪。		

第 11 課	—————		—————
		31 乙 ^J	您今兒個沒進裡頭去麼？
		55 乙 ^J	我還聽見說增將軍叫俄國兵給裹了去了。
		60 戊 ^J	他們那兒二少爺還上我們那兒去了哪。
		79 乙 ^J	今兒您上那兒去了？
		91 乙 ^J	二哥前兒個上那兒去了？
		113 乙 ^J	我要回去了。
第 12 課	—————		—————
09 甲	打僭們這兒連那個東西就叫人給送了克了。	47 乙	怎麼這瓜子兒掉下去了。
10 乙	僭們叫人削幃子克呀。	51 乙	你跟他們一塊兒去。
29 甲	今兒就叫他們拿這個幃子給削克。	69 乙 [#]	明兒是您先去, 我先去呀？
67 乙 ^x	你們吃飯克罷。	70 甲 [#]	您先去。 我打裡頭回來再去也不晚。
76 乙 ^x	劉昇, 您跟了我克。		
121 子	剛唱過頭一個戲克。		
151 卯	您今兒個沒進裡頭克麼？		
170 辰	我給大嬸兒叩頭克。		
179 壬	請您棚裡坐着聽戲克。		
187 乙	我過克。		
188 丑	您往裡克罷。		
189 乙	那麼您往裡克。		
244 午	回克呀。		
256 壬	您回克。見了二兄弟, 替我說請安道謝。		
第 13 課	—————		—————
40 乙	差一點兒沒陞到廣西克。	14 乙	今兒打裡頭回來, 拜客去了。
52 乙	您要把張裁縫帶了克。	23 甲	您跟我舅舅一塊兒去呀。
53 甲	您帶了張裁縫克也好。	24 乙	我先不能跟着去哪。
54 乙	張裁縫也願意跟了您舅舅克。		
55 甲	跟班兒的您要帶了誰克呢。		
56 乙	您要帶了劉昇克。		

	您舅舅說帶趙福克。		
58 乙	打雜兒的老郭還要跟出克呢。		
76 乙	您回克。都替我請安問好道費心。		
第 14 課	—————		—————
03 甲	今兒我帶你買布克。	41 甲	給他一個,叫他去罷。
04 乙	上那兒買布克呀?	63 甲	給他一個大,叫他去罷。
05 甲	上後門買布克。		
32 甲	你往裡克。		
42 庚	二嫂子您上那兒克?		
43 甲	上後門克。		
47 甲	大兄弟上那兒克了?		
66 甲	僭們往那麼溜達着回克,就買了布了。		
78 甲	您回克了。		
79 壬	回克了。		
152 甲 ^M	回克了。		
154 甲 ^M	我們溜達着回克。		
158 乙	僭們往那麼瞧瞧克呀。		
164 乙	僭們回克。您給我裁衣裳啊		
第 15 課	—————		—————
25 甲	二姐這兩天沒上那兒克呀。	50 甲 [#]	明兒去。
45 乙	我家裡瞧瞧克罷。		
49 乙	有工夫兒娘兒倆上我們那兒坐着克。		
第 16 課	—————		—————
48 甲	回頭下了學,再瞧種花兒的克。	21 甲 ^X	怎麼這麼早都開過去
第 17 課	—————		—————
29 甲 ^X	劉媽把鋪蓋和包袱甚麼的都擱在西屋裡炕上克。	16 甲 ^X	把帽鏡盆景兒花瓶果盤坐鐘都擱在那屋裏不碍事的地方兒去。
30 丁 (僕人趙之言)	等着土落下克。	34 甲 ^X	你 and 老趙把桌子甚麼的都挪過去照舊都擱好了。
77 甲 ^X	老趙拾掇綴完了歇歇兒回來,	75 甲 ^X	那個木頭影壁底下和魚缸後頭

	買東西克罷。		那個土你們都撮出去麼？
第 18 課	_____		_____
		63 乙 ^M	你回去了。
第 19 課	_____		_____
		55 乙 ^M	你回去了。
第 20 課	_____		_____
10 乙	僭們瞧瞧花兒克。		
第 21 課	_____		_____
19 甲 ^x	你瞧瞧這兒土拿担子在院裡担担克。	41 甲 ^M	那麼你就連錫盒拏了去罷。
		49 甲 ^M	你回去了。
第 22 課	_____		_____
18 乙	你和我兄弟商量商量。再給您問克。	16 乙	那麼我回去到富二奶奶那兒給您問問。
19 甲	您就趕緊的給問問克罷。	55 丙 [#]	趕明兒我要去瞧瞧克。
26 乙	您替我說讓您聽信兒。我回克。	57 乙 [#]	您要去。
38 甲	二哥昨兒您回克。	64 乙	大兄弟您多僭瞧那個房去呀。
52 乙	昨兒個我打這兒回克。 我就上富二奶奶那兒克。	70 乙 [#]	大妹妹我們先去瞧瞧克。 您再去瞧瞧克。
55 丙	趕明兒我要去瞧瞧克。	75 丙 [#]	您先去到門口兒言語一聲兒您拍門罷。
56 甲	我也要瞧瞧克。	84 乙	不用您同着我們到那院裡瞧瞧去。
57 乙	您同着我大兄弟一塊兒到那兒瞧瞧克。 您再去瞧瞧克。	120 乙	趕明兒您先把茶錢給拏過去快 着點兒挑個好日子, 就搬了。
65 丙	我打算今兒就同您瞧瞧克。	121 丙	改日再給您請安去。
70 乙	大妹妹我們先去瞧瞧克。 您再去瞧瞧克。		
100 丙	往那麼瞧瞧克。		
121 丙 ^{\$}	是您家克了。		
122 乙	等您搬過克。給您道喜。		

参考 『小額』（太田辰夫・竹内誠, 1992 による）「克」用例

頁-行	發話者➡	克	➡ 對話者
11-12	少奶奶	您瞧瞧火克吧。	老王(僕婦)
15-05	伊太太	老王啊, 瞧門克。	老王
15-12	伊太太	你們老太太也家克啦吧。	祥子
15-13	祥子	還沒家克哪。	伊太太
15-14	伊太太	你們大奶奶怎麼沒跟克呀?	祥子
16-03	祥子	剛纔他們那一黨找我克啦。	伊老者
20-03	伊太太	王媽, 王媽, 老王瞧門克。	老王
20-05	伊太太	我瞧瞧克得啦。	善金(大爺)
24-02	伊太太	善全哪, 你給拿三吊錢克。	善全(二爺)
27-04	票子聯	大姐, 請回克。	伊太太
27-12	大爺	我去瞧瞧克得啦。	善全
41-04	擺斜榮	來升, 你回告訴太太克得啦。	來升(小童兒)

c. 「克」の階級的用法の統計的假説検定

その検証方法は、旗人の「克」の使用の特徴は、旗人が「克」を採るか「去」を採るかの選擇に現れるから、確率事象とみなすことができる。それゆえ、その検証には統計的假説検定が有効である。

先ず、集計するには、条件を一定にしなければならないから、第2動詞或いは、補語としての「克」の語法的特徴に對應する「去」の用法のみ、「克」との選擇對象とした。さらに、江藍生, 1994 の指摘する語學的誤り部分¹⁶⁴も除外した。その集計結果は下記の通り。

對旗人	79 例	〈旗人の去〉對旗人	18 例	計 97 例
對雇人	5 例	對雇人	4 例	計 9 例
對商人	2 例	對商人	4 例	計 7 例
對日本人	4 例	對日本人	10 例	計 13 例

《旗人の克》對旗人の「動作の目的地」+克+文末助詞、の形式の1例

¹⁶⁴ 江藍生, 1994 では、第十一課の發話番號 37~58 には、語學的に不正確な表現が見られ、それらは日本人の書き換えである、とする。この段落で旗人による「克」の使用はなく、「去」の使用は對日本人への一例のみなので、これを除いても本節の検証結果には影響がない。なお、該論文は、ここでさらに、目前の日露戦争を話題とすることは教科書という性格上、内容としても問題である、と述べている。しかし、この日露戦争の話題はタイムリーなもので、旗人が日本人から日露戦争の情報を得ようとする場面は、むしろ現實の會話場面をありのままに映したもので、會話教科書として何ら問題はないものである。

計 90 例	計 37 例	總計 128 例
《旗人以外の克》雇人對雇人 1 例		
計 1 例	計 1 例	總計 1 例

以下、次の各項目の検証結果は次の通り。

1. 「克」と「去」の選擇には、對旗人と對日本人以外の非旗人¹⁶⁵との間に差があるか。
これを危険率 5% で差の検定を行うと、旗人と非旗人による「克」と「去」の選擇には差がある。「克」が非旗人により使用されている一例は、雇人による別の雇人への命令文に現れており、これは旗人の主人に成り代わっての言と解することができる。
2. 旗人間で「克」と「去」の選擇には差があるか。
これについては、次のように問題を立てる。偶然的最大選擇率を 0.7 (偶然的選擇率の期待値は 0.5 であるが、その事象の曖昧さを勘案して、最大の振れ幅を 0.2 として+の方向にとったもの) とし、これを超えるとき優先的選擇と命名する。そして、試行 99 回中、80 回選擇されたとき、旗人間で「克」の選擇は優先的選擇といえるか、ということである。これを、危険率 5% で片側検定した結果、旗人間で「克」の選擇は優先的選擇といえる。これは、旗人間で「去」の選擇は二次的選擇といえることと同じことである。
3. 旗人間での「克」と「去」の選擇と、對非旗人での「克」と「去」の選擇との間には差があるか。

これについては次のように問題を立てる。

旗人の對旗人では、「克」と「去」の選擇機會 99 回のうち「克」の選擇は 80 回、對日本人では選擇機會 12 回のうち「克」の選擇は 4 回、對雇人では選擇機會 9 回のうち「克」の選擇は 5 回、對商人では選擇機會 7 回のうち「克」の選擇は 2 回であった。このとき、旗人の對旗人の「克」の選擇率と對その他の登場人物との「克」の選擇率との間に差があるといえるか。

そして、それぞれに危険率 5% で差の検定を行うと、次の結果が得られた。

- (a) 旗人の「克」は對旗人と對日本人との間に差があるといえる。
- (b) 旗人の「克」は對旗人と對雇人との間に差があるとはいえない。
- (c) 旗人の「克」は對旗人と對商人との間に差があるといえる。

以上をまとめると、

『燕京婦語』の用例から、旗人は「去 kè=克」を旗人内部の言葉として使用し、「去 qù」は旗人外部の言葉として使用していたことを検証できる¹⁶⁶。勿論、雇人に對しては生活上

¹⁶⁵ 雇人と商人とには、「克」の使用に差がないので、非旗人と一括した。

¹⁶⁶ 前掲『北京語初探』(胡明揚, 1987)では、「噓 zhè」も旗人の應諾の感嘆詞とするが、『燕京婦語』には、「噓 zhè」は現れないが、應諾の「喳 zhā」が見られる。この「喳 zhā」の用例を見ると、旗人も非旗人も使用しているが、旗人は非旗人の前では使用しておらず、「喳 zhā」は身分の下の方が上の者に對して使う言葉だと分かる。なお、權寧^(117 頁脚注欄に續く)

で旗人内部に属することから、旗人間と對雇人の「克」の選擇に差が現れなかったのである。しかし、雇人自身は旗人ではないので、主人に代わって別の雇人などに命令する場合を除けば、雇人は「克」を使用することはなかった。これは、「克」の使用は旗人と非旗人とを分別する作用を果たし、旗人と非旗人との間には、この分別作用を是認する默契が明確に存在していた、と見てよい。

つまり、「克」は地域的分別で律する方言ではなく、階級的な分別で律する社會的方言、つまり、階級方言である。『小額』の例も、これを否定するものではない。

ただし、「去 kè=克」は本來、南方官話を由來する方言であり、滿洲語に由來する言葉ではなく、第一動詞には使用しない點に留意すれば、旗人が政界上層の漢人の南方官話を借用して、自分たちの仲間内の符牒としたと考えるのが自然であろう。つまり、由來は方言の「去 kè=克」を旗人がその働きを階級方言に變えたのである。興味深いのは、『支那四聲字典』（權寧世, 1927）では、「刻 k' e 此ノ音ハ滿洲山東其他ノ田舎ノ音ナルモ北京ニ於テモ俗語トシテ盛ニ用ヒラルハ音トス（您上那兒刻）」、「去 chū ; 官話トシテハ總テ此ノ音ノミヲ用フ」としていたが、『改訂支那四聲字典』（權寧世, 1933）では、二つをまとめて、「去 chū 總テ此ノ音ノミヲ用フ北平ノ俗語トシテ此ノ去ヲ k' e1 或ハ k' e4 トモ發音ス」とした。思うに、清朝崩壊して 20 年を経過して、滿洲旗人の「去 kè=克」は殘存したが、階級方言としての意味合いは喪失したものと解されるのである。

「克」は、清代の使用場面にあつては効果的な言葉であつたが、記録には残り難く、辛亥革命後、滿洲族から漢族へと權力が移行したため、階級方言「克」の使用の意味は消失し、「克」は、それ以來、地域方言に比し注目されなくなり、埋没したのである。

明治初期の優れた漢語學者で外交官であつた鄭永寧は、1870 年代の北京宮中での漢語の實態を「中州官話」（興亞會, 1880¹⁶⁷）の中で「宮殿口氣」と稱し、「去 kè」のような言葉の存在を窺わせる記述がある。それは、「官話ハ明末清初二在テ南方ニ止リタルノ如シ、南人北語ヲ爲スヲ屑トセズ、（中略）余、北京ニテ南人ノ入閣セル學士、堂上ニ在テ親王以下滿大臣ト語ルヲ見ルニ、其言フ所自ラ南北混合ノ音アリ、官位愈高ケレバ北語愈疎ナリ、親王及滿大臣モ語ルニ單ニ宮殿口氣ヲ操セズ、且ツ南人ハ官話ノ素アルヲ以テ、勉強ニ北音ヲ操セザルモ、北人亦能ク推解ス（讀點は、鯉澤による）」というものである。

この發言は、滿洲旗人と漢族官吏との言語交流の實態を示すものである。漢族官吏の反滿感情を底流にした、「南人北語ヲ爲スヲ屑トセズ」という感情が、指導層の共通的社會方

(116 頁脚注 166 の續き) 世『支那四聲字典』（權寧世, 1927）によれば、「此ノ音ハ共ニ極ク敬意ヲ表スル應答ノ音ニシテ北京及ビ其附近ニ行ハル語ナルモ今ノ青年ハ殆ト此ノ語ヲ用ヒズ」とある。

167 この文で、1880 年代の北京の言語は、下は北京の俗語（北京方言）、上は一様な北京官話ではなく、北京官話は優勢ではあるが、南北官話の混在状況に在るという現状認識を示した。これは、(Edkins, 1862) の k' ü' と ch' ü の二聲併記は、彼が耳にした北京での官話の實態であつたと説明できる。それゆえ、鄭永寧は「中州官話」を推したが、廣部精は「官話論」で、T. F. Wade の示した北京官話を推したことなどについては、本論文 8 頁脚注 8、本論文 50 頁、68-69 頁でも觸れた。

言の形成とは別の「宮殿口氣」と表現された、滿洲旗人の社會的方言の形成に一役買ったことを窺わせるものである。

d. 『燕京婦語』に階級方言「克」が残存した理由

『燕京婦語』には、他の漢語テキストには見られない階級方言「克」が残存したのはなぜか。

T. F. Wade により北京官話學習が漢語學習の中心と斷定されて以來、1860 年代から清朝崩壊まで、在北京の北京官話學習者、内外の北京官話學習者はこぞって、旗人を教師として招聘した。それゆえ、『燕京婦語』の豊富な用例から見ても、當時の北京官話學習者がその存在と旗人にのみ許された用法であることも知っていた、とする蓋然性は非常に高い。それゆえ、T. F. Wade が非旗人も外國人も使うことのない「克」を北京官話學習者の點から、音のみを記載し、本文に採らなかつたのは、見識であり、當然の處置であつた。このことは、日本の北京官話學習者にとっても事情は同じであり、公刊の北京官話學習書に「克」が載ることはなかつた。さらに、清朝崩壊後は旗人階級の没落とともに、その言語も社會的意味と價值を失つた。

『燕京婦語』に他の漢語テキストには見られない階級方言「克」が残存したのは、次の二つの理由が挙げられよう。一つには『燕京婦語』が刊本ではなく寫本である、という形態的特徴によるものである。それは、刊行時期・登場人物・構成・内容(女性の北京官話を内容とする)ともに類似する馮世傑、高木常次郎共著『燕語新編』(京都・干城學校藏版明治 39 年 4 月大阪・積善館刊)には「去 kè」は見られない。刊本であるがゆえに、旗人特有の「去 kè」は學習者が使う必要がないので、書き手の旗人により自然に斧正され、あるいは、正確な北京官話に書き直された、と言うべきであろう。この事情は他のテキストも同様であつたであろう。もう一つは『燕京婦語』の原著者の問題である。一般に明治期の北京官話テキストの編著者は、北京官話學習者のことを熟知していたから、自然に外國の北京官話學習者の絶對使わない「去 kè」は初めから採り上げることなどなかつたのである。一方、『燕京婦語』の原著者は、普段は北京官話を教える教師ではなく、日本人から頼まれるままに滿洲旗人の婦人の會話をトレースした、と見るのが自然であろう。それゆえ、他のテキストには見られぬ「去 kè」が残存したのである。そして、清朝崩壊後、日本に限って見るならば、前掲の『支那四聲字典』、井上翠『井上支那語中辭典』(昭和 16 年 10 月東京・文求堂刊)に「去 kè」が採られたのは、旗人の用法とは無關係な地域方言研究の成果によるものであつた。階級方言「去 kè」は、波多野太郎による 1968 年の『小額』景印まで、研究書にも取り上げられることはなかつた。

e. 「克」の用法の意義

旗人の「克」の用法の明らかにしたものは、我々外國という外部、そして、内部に更に國家一三級で括られた瓢箪型情報構造を持つ中國、という現代の關係と相似な關係である。すなわち、「克」の存在は、「隱語」とは別の、外國人の我々には見えてこない内向きの言葉の存在を明らかにしたばかりではなく、そのような存在に對する我々の探究の必要性を示唆している。

第三章 國語教育時期

第一節 黎明期の現代中國語教育

1. はじめに

これまで文言に獨占されていた舊來の學術語彙に代わり、日本製漢字語(主要には二字構成の造語)という新來の學術語彙が口語に移入されたことによって、語彙の面で、中國口語の中に初めて日常生活語彙と普通學術語彙との二層の語彙層が出来た。これにより、語彙の面で現代中國語が準備されたのである。さらに、小學校の國語教科書の口語文體化によって、國語は言文一致への實質的スタートを切り、言文一致を完成した中國語へと、即ち、現代中國語へと踏み出した。口語文と口語語彙とが、整備・豊富化されて、國語は發展し成長した。しかし、國語時期の中國語は、國語文體(口語文體)が公文書に採用されるに至らなかった點で、國語は未完成の現代中國語であった。それゆえ、國語に對應した中國語教育の國語教育時期は、現代中國語教育の黎明期であったと規定できる

2. 國語の文章が中國語教科書上に登場

既に本論文序章 13-14 頁の第Ⅲ期の始まり、即ち、國語教育時期の始まりで述べたように、中國に於ける中國語の統一から言文一致へと歩み出した中國語の變化に觸發された、日本内地での『標準中華國語教科書・初級篇』(神谷衡平・清水元助, 1923. 4 月)の刊行と、外地(滿洲地區)での『現代支那語讀本』(飯河道雄, 1923. 8 月)の刊行とによって、日本の新しい中國語教育が、即ち、國語教育時期が始まった。この二書の刊行意圖は、飯河道雄の言を借りれば、「これまでの支那語讀本の多くが會話材料のみを以て埋られて居るといふことには訂正を加へなければならぬ」、それには、「修養語としての目的には別に記述文を要する」¹⁶⁸というものである。このテキストへの口語記述文の導入こそ、第三期の國語教育時期のテキストの中心テーマであった。以後、第三期のテキストは口語記述文の導入を核に編まれることになるのである。その結果、口語記述文の採用は口語文法への關心を高め、中國語學習書には文法への言及が増加した。また、國語統一の直接的影響として、

¹⁶⁸ 神谷衡平・清水元助は會話文と記述文とを交互に配した。飯河道雄は、常用會話文を冒頭に置き、他の編纂の留意點を順に、成るべく興味ある材料を取った、出來得るだけ挿畫を加えた、所謂言葉の常識として必要なるものは成るべく之を網羅しようと努めた、從來の諸書の長處を採用し新舊の調和に意を用いた、と擧げている。會話文と記述文とを交互に配したこの形式は普通話教育時期を切り拓いた『漢語教科書』にも貫かれている。

1923年に中華民国教育部第四屆國語教習所で王璞・汪怡より學んだ發音・四聲を圖解とともに詳細に説いた、『華語發音提要』¹⁶⁹(宮越健太郎、1926)が刊行された。このような新しい中國語教育の動きは、1930年代から8月15日の敗戦までの中國語教育の高揚をその内側から準備したのである。

1930年代から約15年間に渡る中國語教育の高揚とは、日本の大陸進出に伴うように、中國語も大いに學習されたことである。例えば、新刊點數は『中國語關係書書目(増補版)1867～2000』(六角恆廣、2001)によれば、同時期には約610點を數え、これは戦前の全發行點數の約57%を占める。1980年代の約340點、1990年代の約300點という數と比較してみても、1930年以降の中國語學習の隆盛の一端が窺える。さらに、量的な増加ばかりではなく、質的にも、大きな飛躍があった。それらは次のようなものである。①. 1931年2月のラジオ講座「支那語」の開講(滿洲では1927年4月)により、誰でも家庭で中國語音聲の聴取が可能となった。②. 1934年8月レコード教材の出現で時と場所とを選ばずに中國語音聲の聴取が可能となった。③. 中國語學習・研究誌、『華語研究』、『善隣』、『支那語』、『時文と支那語』、『支那語學報』など相次ぐ創刊と有力學習雜誌の併存は、中國語研究・學習の活性化を促した。④. 西歐、及び中國の中國語研究書、カールグレン『支那言語學概論』、王力『中國文法學初探』、デンツェル・カー『現代支那語科學』、劉復『支那文法講話』などの翻譯が相次いだ。⑤. 白話文學の進展でテキストに現代文學作品を教材に採り入れることが定着した。⑥. 1934年4月、實業學校・師範學校・中等學校の國語漢文科で支那時文が採用され、中國語正課化への足掛かりを築いた。これらは、中國語學習の隆盛を内側から支えた中國語研究者達の努力によるものであった。

そして、神谷衡平、清水元助らが拓いた新しい中國語教育を最も體現した行動の先頭を内地で¹⁷⁰切ったのは、中國語教育プロパーではなく、善隣書院で中國語を學んだ、京都帝國大學法學部經濟學科卒業の何盛三(1885～1951)であった。何盛三は、賛同する中國語教育者を糾合し、1929年3月刊行開始(3月15日^が切)の『現代支那語講座』(太平洋書房)を企画した。そして、その會員募集の三色刷りという贅澤な内容見本に於ける「責任編輯者の言葉」に見られるように、新しい中國語教育を大々的に宣傳したのである。そこでは、

「現代支那は(中略)最近十數年以來一大變轉が行はれつゝあつて従つて其現代語の如きも或點から見ると十年以前の夫と殆ど隔世の感を抱かしめます。此等の點から見て現代支那語(口語文——白話)を極めて適切に講ぜんとする本講座の刊行は切實なる時代の要求で」ある、

169 この書は、調音部位の圖解、母音三角形による圖解、四聲の實驗結果の曲線、口唇寫眞を用いて發音方法を説明している點で、伊澤修二の仕事を除くと、從來の發音教育・學習を一新する内容をもつ。そして、萬國音標文字で發音表記し、それらと從來使用されてきたWade式發音表記、中國音標文字(注音字母)との對照、中國標準音[國音]と京音との對照を附している。

170 外地(滿洲地區)での事情は、秩父固太郎を軸とする滿鐵、飯河道雄、中谷鹿二、幸勉らの民間という兩面から考察していく必要があると思われる。

と斷言し、さらに現代支那語講座の十大特色と銘打つ頁では、その先頭に、

「現代支那語(口語文——白話)を講ず。教材は姑く舊文學の雄を割愛し、主として文學革命以後の作品に採る。」

と記し、それまでの音聲言語教育の口語とこれからの文字言語教育の口語文を並立させて講座を構成している。

そして、その發刊理由を第一卷所載「會員各位の爲に」で詳しく述べている。これは重要なので、長いが引用する。(下線は引用者による)

「從來最も廣く標準語的に見做されたのは北方官話(北京官話——Mandarina dialekto)でありましたが、今や交通の發達、社會政治經濟上の變化に伴つて、漸く南北混淆の傾向が著しくなりました。殊に所謂文學革命以來白話文學の興隆と共に論壇文壇の稍新らし味ある作品が殆ど悉く白話によつて書かれ、それ等には殊に南方人の所作多きを占むる事實に伴つて、南方語の分子が北方語に加わる事が益々多く、且つ新制度新事物と共に新^(ママ)らしい詞日に日に出現して現代支那語は十年以前と面目一變して、新^(ママ)らしい形に變化しつつあります。更に斯くして一面には、將來に於ける自然なる國語統一の第一歩に入つたかとさえ覺えらるる點が多いのであります。或は紙筆に上る白話と日常談話とは非常に隔たりがあつて、文藝作品に現われた白話を實際談話に用いる事は出来ないかの如くに説く人も往々ある様であります、併し之は一面の事實に過ぎません。なるほど今日の中國に於ける大多數の人たる老年又は非知識階級の男女の談話は、恐らく舊套を脱すること少く、文壇論壇に現わるる新時代の白話とは沒交渉でありましょう。現代支那語を學ぶに當つてその目的が單に口頭の話説に止まるならば或は最初には一切の新時代語を捨てて只舊套依然たる市井の応酬語をのみ學ぶとしても、旅行に起居に大體の意を達するに足りましょう。併し若し一步を進めてその望みが現代支那の有識階級と思想の交渉、意見の交換等に在るならば、此成育しつつある新時代語を無視しては殆ど何の役にも立ちますまい。卑近の例は從來我國に於て單に支那語として學ばれ居つたものと、留日學生諸君の論議に用いられてゐる言語とを比較すれば、その相違は想ひ半に過ぐるものがあります。(中略)最近迄の白話の讀解力は、元明以後の白話小説を讀むの他は、只日常口頭の話説に役立つのみであつて、學藝文藝の作品は殆ど悉く漢文(古文)時文(近代文)に依つてのみ記されて居つた爲め、その讀解には役立たず、又漢文時文の讀解力は日常談話と縁遠いものであつたからであります。しかし、近頃の趨勢を見ると、白話の用途の擴大したこと、既に述べた通りでありますから本講座による支那語の修得は從來の講義の場合に比べて、二重の意義を持つに至つた次第であります。」

とある。

この引用文の要點は、これまでの白話(口語)が「老年又は非知識階級の男女の談話」の白話と「文壇論壇に現わるる新時代の白話」という二層の白話(口語)とに分かれる事態の發生により、「老年又は非知識階級の」會話と「文壇論壇に現わるる新時代の」會話との間

で斷絶狀況が発生していることと、白話で書かれた文章が文壇論壇を席捲している状況に反映されているように、會話を越えた「白話の用途の擴大」という二點に絞られる。これらは新時代の白話・白話文の内實に、即ち、新しい中國語教育が目指した修養語としての新しい中國語に起因するものである。だから、その新しい中國語とはどのような内實のものであるかを明らかにしなければならない。

3. 中國口語語彙の二層化——『急就篇』の陳腐さとその有用性

この何盛三の文章では、新しい中國語を「南方語の分子」と「新制度新事物と共に新^(ママ)らしい詞」の二種類と見ている。そして、「南方語の分子」、即ち、「南方語の分子が北方語に加わる」語彙層について、『白話文に於ける吳語系語彙の研究』（宮田一郎, 1964）では、

「「白話」文では、その基礎方言である北方官話の語彙が優勢を占めることはいうまでもないが、方言語彙もかなり混入していく傾向があり、明、清、五四を通じて吳語系語彙が大量にもちこまれた。これらの語彙はそれぞれ基礎方言の語彙と競合して、一部は排除され、一部は定着するにいたるわけであるが、（下略）」

と述べられている。「競合して、一部は排除され、一部は定着する」とは、それらはともに同質な語彙群であることを意味し、北方官話に流入した吳語系語彙は、まさに基礎方言という日常生活の語彙層のものであることを述べているのである。

一方、「新制度新事物と共に新^(ママ)らしい詞」とはどういう語彙層を指すのかについて、その新しい中國語の内實を『支那語は變^(ママ)る新^(ママ)らしい支那語を研究せよ』（中谷鹿二, 1930）の「新^(ママ)らしい支那語から讀者に呼びかける言葉」冒頭の一節で、中谷鹿二は明確に次のように指摘している。

「吾々は新^(ママ)らしい支那語である、吾々が何時何處で生れて何時頃支那に渡つて來たか？などと聞かれると一寸返事に困るが、手つ取り早くいへば、新聞や雑誌から生まれたものもあるが、其大部分は何んでも吾々の國の留學生が、日本から吾々の祖先を連れ歸つたことだけは事實である。だから、吾々が支那に歸化してから大して古い歴史は持つてはゐないのである。」

と書き、新しい中國語の 15 の四字句と 461 單語¹⁷¹を掲げている。それらの全ては、

「意見、偉大、維持、一段落、一目了然*¹、委任、位置、一部分、引用、一刀兩斷、一般、一概、一致、依然、唯唯諾諾*²、異口同音、老朽、勞動*³、發達、發生、範圍、發揮、發表、判斷、薄弱、發展、反對、破綻、發明、破産、發育、場合、場所、任務、認可、日用、保存、保證、方針、方面、暴落、膨脹、暴動、法則、補助、豐富、防止、報告、方法、弊害、變動、變遷、變化、辯護、鞭撻、取締、取消、特色、特別、特殊、獨立、投票、投機、同情、同意、奴隸、努力、當選、當然、統一、統計、都會、騰貴、

¹⁷¹ 461 單語とは、本文に列擧された單語數で、目次に列擧された單語數は 459 單語である。

登記、中立、中產階級、中心、注意、直接、潮流、調查、調停、着手、着々、超過、理由、利害、離婚、利益、流行、流通、了解、諒解、解決、解散、解釋、解除、解說、解剖、解放、開發、感情、感想、感化、感動、觀念、觀察、歡迎、完備、簡單、寒心、眼前、改良、改造、確實、確信、改革、覺悟、恢復、價值、干涉、關係、喚起、加入、換言、渴望、過渡、活動、過激、家族、家庭、階級、活路、悔悟、貫徹*4、額、頑固、官僚、要求、呼聲、豫防、餘地、用途、幼稚、態度、大勢、大家、大多數、大同小異、大聲疾呼、大廈高樓、體面、代々、代名詞、代表、對照、多寡、妥協、團體、斷定、退化、嘆息、例、靈敏、冷淡、聯合、聯絡、聯想、組織、相當、裝飾、總括、壯觀、走馬燈、增加、增進、送別、損失、損害、雙方、存在、率直、束縛、通過、通用、通行、熱誠、熱烈、年齡、內容、内幕、何等、難題、樂觀、無產階級、無聊、無稽、無意識、運動、具體的、區別、黑幕、區域、驅逐、空談、組合、愚弄、野心、枚舉、末路、滿足、形勢、形式、經濟、經驗、經過、經營、經費、形容、計畫、計算、下野、研究、見解、建設、建築、懸案、險惡、權勢、權力、擊退、現狀、現象、原狀、原則、原因、傾向、減少、結果、結婚、結局、結論、決心、決意、結算、缺乏、缺點、激烈、嚴重、普通、普及、腐敗、不振、不可思議、附近、複雜、風潮、復活、物價、物質的、分子、分裂、不平、不公平、不得要領、武器、後援、幸福、個人、構造、高尚、誤解、交涉、高唱、幸運兒、交換、行動、廣告、考慮、困難、根本、五里霧中、根原、攻擊、此點、影響、營業、衛生、延長、延期、援助、圓滿、銳意、程度、手續、手數料、提攜、提議、抵抗、體裁、顛倒、天性、傳說、傳染、惡習、安寧秩序、壓迫、壓制、作用、差別、最近、贊成、參觀、財產、殘忍、採用、機關、機會、氣候、基礎、希望、記者、記載、禁止、許可、極點、極端、競爭、境遇、虛禮、救濟、行商、疑問、義務、有名無實、輸入、輸出、優勝劣敗、優劣、優先權、優待、名義、名實、明瞭、使命、資本、思想、施設、資格、刺激*5、主張、主要、消毒、消息、消耗品、消化、消滅、失敗、失業、失望*6、親善、親切、親密、種々、種類、出席、祝賀、承認、事實、事業、實行、實力、實質、實情、實例、時代、時局、時勢、時期、時々刻々、尚早、少數、勝利、衝突、障礙、信用、信賴、真理、真相、證據、證明、手段、手腕、自由、準備、縮小*7、色彩、條件、招待、狀態、狀況、收拾、收穫、習慣、讓步、新陳代謝、進步、需要、臭味、趣味、出發、蹂躪、充滿、曙光、從容、獎勵、集中、比較、非常、秘密、否認、悲觀、悲慘、避暑、標本、標準、筆法、引渡、表面、敏捷、評論、瀰漫、目的、問題、模範、目下、門外漢、默々、猛烈、網羅、目標、成立、正式、正當、正確、正々堂々、勢力、制度、成績、成功、性質、制裁、製造、生活、整理、整頓、誠意、政策、責任、全部、全體、全然*8、前途、選舉、選擇、先決問題、先見之明、煽動、説明、設備、絕頂、絕對、積極、接續、赤化、先例、反抗*9、征服」

(*1 目次には一目瞭然、 *2 目次には唯々諾々、 *3 目次には労働、 *4 目次には貫徹、 *5 文例は刺激、

*6 目次には失望落膽、 *7 目次には縮少、 *8 目次になし、 *9 目次になし)

である。そして、これらの中の全單語 461 の内、『漢語拼音詞彙(初稿)』(中國文字改革

委員會詞彙小組, 1958)に「中國語單語」として収載されている單語は 417 で、その割合は、 $417/461 \div 90\%$ である。また、『中日大辭典(増訂第二版第 2 刷)』(愛知大學中日大辭典編纂處, 1988)にも収載されていないものは、弊害、大廈高樓、代々、多寡、不振、物質的、高唱、安寧秩序、手数料、最近、名實、消耗品、尚早、正々堂々、先決問題などの單語と四字句の全 15 で、その割合は全體の $15/476 \div 3\%$ である。

これらの新しい中國語群とは、中國人が清末に、同じ字體による漢字語の共通性からよりスピーディーな近代化の方法として取り入れた、日本製漢字語(和製漢字語)という新しい用語群である。これらの單語・四字句の活用範囲は、日常生活用語として移入されたのではなく、近代化のための科學的思考に缺くべからざる用語として移入されたものである。言文一致前では、科學的思考のための文言の語彙層と日常生活用語の白話の語彙層とに分かれていたように、科學的思考を進めるための用語群を形成する語彙層と日常生活用語群で形成された語彙層という二つの語彙層は時代を越えて嚴存している。そうでなければ、新しい科學を創造できない。このことは、森一郎『試験に出る英單語』の出現——日本の上級學校で必要とされる英語の單語層は、それまでのソーナダイクの日常生活用語の頻度数に基づく單語層ではなく、専門的ではない知的抽象的な單語層であることを半世紀前の高校生に明らかにしたこと——を想起させるものであった。前掲した「新^(ママ)らしい支那語」で採り上げた移入された單語を見て欲しい。同様な感慨を與えるものである。

それらの單語は、『普通術語辭彙』(徳谷豐之助・松尾雄四郎, 1905)巻頭に、

「單純なる思想は單純なる言葉によりて能く其の意を説き示すを得れども、複雑にして精緻なる思想は、自然複雑なる意義を含有せる言語を使用せざるべからず、(中略)吾人が百般の研究に蒞むに先立ち、當面先づ必要なるは之等含蓄的言語の最も普通に使用せらるべきもの(中略)、之等の含蓄的言語とは何ぞや、術語是なり、」

と書くような、ある分野の専門的な用語ではなく、複雑な思考を展開するためには欠かせぬ各分野に共通した用語群である。

これらの新しい用語群は、それまでの文言語彙層と同質な語彙層、即ち、舊來の一般的學術語彙層に代わるものであり、「南方語の分子」の語彙層は、舊來の一般的學術語彙層であった文言語彙群と並存していた日常生活用語群に附加された、或いは、更新された同じ日常生活用語群に過ぎない。つまり、同種の流入に見える新しい語彙の移入は、實は二つの異なる層からの移入であり、それぞれの移入の持つ意味は全く異なるのである。そして、普通學術語彙によって直接・間接に新しく生まれた概念や事物(制度・發明品)を通して世の中に擴まり、普通學術語彙は定着して行くものである。だから、新しく生まれた概念や事物の普及の速度と普及の程度とがその用語の社會的認知度を決定する。だから、その概念や事物の發生が遅れたり、その普及速度が遅ければ、それらの用語の認知度は遅れることになる。それゆえ、それらの用語を日常的に使う、或いは、それらの用語によって生まれた事物に日常的に觸れられる有識階級の日常會話、即ち、有識階級の白話には、それらの用語の使用が必然的に増加することとなる。逆に、それらの用語によって生まれた事物

に觸れようとし、或いは、觸れることのない老年や非知識階級の男女¹⁷²の白話にそれらの用語が必然的に使用されることはないのである。この現実が、當時の中國に於ける有識階級の白話と大多數の人たる老年や非知識階級の男女の白話との間に斷絶を生ぜしめたのである。また、それらの用語群と舊來の學術文言語彙との違いは、舊來の學術文言語彙は既に事物を生みだせなくなった舊來の科學用語群であり、それは、新しく移入した和製漢字語を中心とした用語群とは異なり、新たな日常生活には入り込む力が既に喪失している點である。

白話の中でこの新しく發生した斷絶は、中國語教育に一つの象徴的な現象をもたらした。それは、神谷衡平をはじめとする中國語研究者が切り拓いた 1930 年代の中國語學習の高揚の中で、中國人留學生にとっては、舊來の言葉の詰まった、陳腐な中國語の集積と映った中國語テキストが依然として存在し續けた、という現象である。とりわけ、既に 1920 年代から「舊教科書」の代表格として挙げられ、戦後になっても、戦前の中國語教育批判の中で象徴的に取り上げられて批判されたのは、『急就篇』¹⁷³である。『急就篇』について、『日本人の中國觀』(安藤彦太郎, 1971²)所収「裏通りの語學——中國語教育の制度史」178 頁では、

「(『急就篇』は)清末の讀書人や庶民の生活がにじんでおり、練りに練られた會話書であり、まことに名著たるに恥じない。問題は、なぜその後の中國教育が、この『急就篇』を、辛亥革命にも五四運動にも關係なく金科玉條としてきたか、にあるのだ。」

と立論し、これを日本の中國語教育の「停滯」として、その原因を同書所収「新しい中國語教育のために」234 頁で、「日本人の中國觀の反映」としている。

この安藤彦太郎の『急就篇』に対する「舊教科書」と「名著」という、一見矛盾した相反する評價は、既述したように、新しい用語の移入した新しい中國語の口語語彙とまだ新しい用語の恩恵の及ばぬ日常生活の中の舊來の口語語彙という二つの層が口語語彙の中に生じたことから引き起こされた現象に由来するのである。だから、新しい中國語から見れば、換言すれば、言文一致を目指す新しい中國語教育から見れば、『急就篇』は「舊教科書」の代表であった。しかし、「中國に於ける大多數の」非知識階級の人間で構成された社會の中に日本人が入って行って生活するならば、「只舊套依然たる市井の應酬語をのみ學

¹⁷² 舊來知識人も含まれるが、事實上、壓倒的多數は文盲の農民である。

¹⁷³ 『急就篇』は、關西大學鱒澤文庫所藏『官話急就篇』は、明治 37 年 8 月初版、昭和 7 年 8 月 10 日 119 版とあり、同じく『急就篇』は、昭和 8 年 10 月改訂初版、昭和 20 年 10 月 20 日改訂 71 版とある。『急就篇』は、『官話急就篇』收録語彙の改訂がなされ、收録會話文の異同も多い。この改訂の特徴について、古市友子, 2013 ; 114 頁で、「①時代の流れによる名詞の變化、②規範的な表現への訂正、③文語表現への訂正や故事の追加、④教養的内容を厚くした」としている。しかし、この二著は、『急就篇』と總稱されるのが普通であり、『急就篇』が「舊教科書」の代表であったことには變化はなかった。とはいえ、名詞には新しい用語群も少し入り、また、規範的表現とか「南北中國での「通語」化」というのは、口語統一の影響であることから、改訂された『急就篇』にも、1930 年代當時の新しい口語の普及の勢いが窺われる。

ぶに足り」得たのであり、少なくとも社會變動が戦後の變動に比べて少なかった戦前期に於いては、舊來の日常生活用語が詰まっている『急就篇』は實際に大いに役立ったのである。そして、新しい移入用語によって生まれる事物の發生が遅れたり、生まれた事物の普及速度が遅ければ、それらの用語の認知度は遅れることになり、事實、新しい移入用語はなかなか「中國に於ける大多數の」中に達することはなかった。そして、そのような停滞した狀況が永く續いた結果、『急就篇』はいつまでも存在し得たのである。これは決して「日本人の中國觀の反映」ではなく、日本の中國語教育上に於ける現實の中國語の反映である。

同様に、安藤彦太郎, 1971². 所収「硝煙とともに——「戦争語學」への傾斜」192-193 頁では、滿鐵の語學檢定試験¹⁷⁴について言及し、

「「現地」でありながら『官話指南』『談論新篇』（1898 年刊）『急就篇』のような、明治時代の古色蒼然たる「北京官話」の教本が基準になっていること、そして卑近な實利主義につらぬかれている」

としている。

「「現地」でありながら」その地の語學檢定試験に「明治時代の古色蒼然たる「北京官話」の教本が基準」とされたのは、「卑近な實利主義」と總括しているが、前述した中國の「中國に於ける大多數の」非知識階級の間で構成された社會に向き合えば向き合うほど、舊來の日常生活用語が詰まっている『急就篇』などを語學檢定試験の基準としたことは現地の實生活に溶け込もうとするまっとうな實利主義に貫かれていたというべきであり、新しい中國語教育を目指す立場から見れば、「卑近な實利主義」と評されるであろう。これは中國語教育の理想と現實の中國語とに對する對し方の問題である。その點では、戦前期においては、概ね『標準中華國語教科書 初級篇』（神谷衡平・清水元助, 1923）や『現代支那語讀本』（飯河道雄, 1923）のように、舊來の會話と新しい記述文とを並立させた中庸的態度を採らざるを得なかったといえよう。この點については、規範的中國語教育を目指す滿洲の中國語教育關係者の方言音への對し方と現地に駐屯した關東軍の方言音への對し方とをそれぞれ本章の第一節と第二節で見て行くことにする。

4. 國語に唯一缺けたもの——公文書文體に採用されなかったこと

さて、新しい中國語單語群は、新しい國語教育時期を構成した新しい語彙層である。口語層のこのような科學的思考を中心とする新しい語彙層は、生活用語へと徐々に進出することによって、即ち、科學理論から生成された事物が生活の中に徐々に入り込むことによって、新しい語彙層が舊來の生活用語たる舊來の白話の語彙層と並存しながら、舊來の白話の語彙層の中に浸透していくのが、國語教育時期以後の特徴である。勿論、日常生活に

¹⁷⁴ 滿洲の檢定試験については、『日本人を対象とした舊「滿洲」中國語試験の研究について』（李素楨, 2013）の中谷鹿二と『善隣』に絡めた論考と資料が参考になる。

密着した舊來の白話の語彙層がすぐに消失することは考えにくい。しかし、例えば、毎日の生活に必備であった竈やコンロ、薪などの言葉が現在餘り使われなくなったように、徐々に確實に變化していくものである。このようなことはいつの時代でも起こって來たことである。しかしながら、國語教育時期以後の新しい口語の言語層は、同時に舊い文言文に代わる口語文を構成する言語層であることが、これまでとは異なっている。つまり、單に生活用語の竝存・更新ではない點で、新しい口語の言語層の舊來の口語の言語層へ進出はそれまでとは全く異なるものである。それは、日常生活用語を中心とする單純な思考用語の口語語彙層と複雑な思考用語の文言語彙層とに分離していたものが、文言語彙層の複雑な思考用語に相當する新來の口語語彙群の移入により、日常生活用語を中心とする單純な思考用語層と複雑な思考用語層、即ち、日常會話の語彙層と口語文で科學的思考を表現するための語彙層とに、口語語彙層内で新たに二層化したのである。この複雑な思考用語層という語彙上の準備がなければ、口語で新たな記述文を表現できなかったのである。つまり、口語文の建設には、そこに盛り込む素材としての語彙の用意とその新しい素材を盛り込む容器の用意とがともに不可欠な要素であったのである。既に本論文序章5頁で述べたように、單に口語を表記し單に竝べても口語の文章になるものではないのである。

それでは、その口語記述文の状況は、というと、その技術的な進歩はその白話文學作品の上に顯著に反映されるものである。1923年、中國の初級小學教科書の白話文を採り入れた初級テキストが出現したが、中級以上のテキストの白話文學作品は、1926年4月刊の神谷衡平編『註解 支那長篇小説選鈔』、同年5月刊の同『註解 支那短篇小説萃選』では、「五臺山」(水滸傳)などの舊白話小説であった。しかし、白話文學の進展により、1920年代後半になると、既述したように『現代支那語講座』「文學篇」(太平洋書房刊)が現代文學を注釋し、同じく神谷衡平により『現代中華國語文讀本 前・後篇』(神谷衡平, 1929)として、現代の論文、隨筆などの白話文學作品が中國語教材として採り入れられている。さらに同年12月、『支那現代短篇小説集』(宮越健太郎, 1929)が刊行され、これ以降、1930年代に入ると、現代文學作品が中國語教材として定着し、各種テキストが編まれた。『魯迅創作選集』(田中慶太郎, 1932)、『周作人隨筆抄』(田中慶太郎・松枝茂, 1939)は、その代表的なテキストである。とりわけ、現代文學作品を採り入れたテキストの内、その選擇の點で、1930年代で屈指のものと思われる『中國現代文讀本』(北京近代圖書館, 1938.)では、編纂責任者が山村三良で、編纂委員は錢稻孫、尤炳圻、洪炎秋、菊池租で、そこに收載された短篇は、順に、

- 「1、一個慈藹的兵丁 謝冰心 2、背影 朱自清 3、寄給母親的信 吳曙天 4、劉半農 談影 5、老柏與野薔薇 陳衡哲 6、貓 鄭振鐸 7、學問之趣味 梁啓超 8、勝業 周作人 9、一個人在途上 郁達夫 10、書生的一週閒 趙景深 11、呼冤 章衣萍 12、小品和蒼蠅 傅東華 13、秋夜 魯迅 14、幽默解 林語堂 15、喫茶 周作人 16、談趣味 朱光潛 17、牛 沈從文 18、擡頭見喜 舒慶春(老舍) 19、無常 魯迅 20、西湖的六月十八夜 俞平伯」

である。そして、錢稻孫は、その「序」に、

「三面記事や商用書簡を標準とする所謂時文では、兩國青年がここから語り合ふに資すべく餘りに不充分である。(中略)されど白話文もその實未だゞ洗練せる段階にまでは進んでゐない上に、これまであまり關心を持つてゐなかつた同人の目には、實にその僅かな部分しか入らなかつたことを、この二十ばかりの短篇を選び出すことによつて、今更ながら痛切に感じた。」

と書いたように、口語文が文の巧拙としては未完成という状況にあった。

そして、文として未完成という点には、もう一つ別の未完成の問題があった。

それは、『時文讀本』¹⁷⁵ (高田眞治・魚返善雄, 1939)「例言」に次の如く書いたように、

「所謂「白話」は、主として耳と口を通じて學ぶ現代支那の口語であり、従つて「時文」の埒外に位する。而も現代の支那人は、公文・私函はもとより新聞記事・學術書等にも、今尚文語體(「文言」)の方を口語體(「白話」)より遙かに多く用ひてをり、且、これは南北上下共通のものである」

とされる状況にあった。ここで重要なのは、「白話文」が文學作品でも、また、言文一致の口語文が主流になっては來た。しかし、「白話文」の獨壇場とならぬ状況を作っていた原因は何か。それは、「文言」が「南北上下共通」に用いられていることの意味、即ち、口語と異なり地域と識字層の階層を問わず流通できる點が、「文言」の強みであり、逆に、地域と階層にこだわり續けなければならないのが、それまでの口語の特徴である。だから、言文一致を實現する口語「文」を創造するためには、先ずは、口語を「南北上下共通」な一元的なものに仕立て直しておかねばならないのである。そうでないと、口語文の「文」であることの保證條件、即ち「南北上下共通」を維持することが不可能となる。しかし、この條件は國語統一で一應は充たされていた。さらに、口語文が「文」として「南北上下共通」であるには、全て「文」の領域で、「南北上下共通」であることを保證しなければならない。そして、その「文」の全領域での「南北上下共通」であることを保證する唯一の條件とは、公文書の文體として口語文體が採用されることである。つまり、文章の世界でも言文一致の口語文が主流を占めていたという事象は、全く言文一致完成の基準とはならない。公文書に於ける口語文の採用こそが、口語文の「南北上下共通」性を政府が公けに保證したことなのであり、言文一致完成を示すものは公文書に於ける口語文の採用なのである。そして、それは、言文一致の完成を示す唯一の條件なのである。なお、「白話」は、主として耳と口を通じて學ぶ現代支那の口語」であることは確かであるが、口語文も單に耳と口を通じてのみ學ぶものではない。これは、重要なことなので序章で既述したが、本

¹⁷⁵ これは中等學校四・五年用に編まれたものであるが、「支那常識讀本」としても意識的に編まれ、さらには、他の時文の教科書には收載される白話文は、「支那語」として學ぶべきものと考へる。」として收載せず、同時に、主要には、大學・專門學校・高等學校の支那語科「文語講讀」用に、直讀を主眼とした標點符號以外は附さない同文のテキストを『現代文言讀本』(1940年6月大日本圖書刊)として編まれている點などで全く他の時文の教科書と異なる。

論文 131 頁に『時文讀本』(高田眞治・魚返善雄, 1939)の一文を引用する中で再度述べる。

新しい中國語は華々しく登場したが、それはそのまま中國語教育にスナリ受け入れられたのではない。それまでの中國語教育は言うまでもなく、會話文中心の構成であったし、白話文の上級教材と言え、水滸などの舊小説から採ることを常としていた。その例としては、『現代支那語講座』に競うべく、同じ 1929 年 5 月刊行開始豫定とした、文求堂の『最新支那語講座』(杉武夫¹⁷⁶著)の單色印刷の内容見本に掲げられた文學篇のラインアップには、

「儒林外史 聊齋志異 紅樓夢 兒女英雄傳 老殘遊記 今古奇觀」

とあり、何盛三の企画の『現代支那語講座』では、神谷衡平註解による教材、魯迅「孔乙己」、郁達夫「一個人在途上」、葉紹鈞「金耳環」が置かれたこととの違いは明白である。

當時としても中國語教材の老舗出版社であった文求堂が、北京官話學習期の舊態依然の教材を最新の支那語講座として提示したことは、當時の中國語教育の實態を物語るものである。とはいえやはり、『最新支那語講座』の中に、「文法篇」を 1 冊として獨立させて採り入れたことは、國語教育の時代の産物であることを示している。

そして同様に、何盛三の『現代支那語講座』は第八卷所載「完結の御挨拶」によれば、全面的にうまく行ったわけではなかったことを率直に認めている。それは、執筆者達の助力にかかわらずその原因は、「宣傳費」、「會員數の僅少」による「毎卷の損失重加」などにより、ページ數は豫定を満たしたが、全 10 卷の豫定を全 8 卷で完了とし、詩、隨筆、戯曲、關稅、商業の項目は手つかずに終わった、と書いているからである。三色刷りという贅澤な内容見本に見られる「宣傳費」のかけ方、進歩的中國雜誌と同じ横組、装丁は丸背で布製の金字箔押し上製本という凝り方は、新しい中國語教育への意気込みを端的に示すものである。しかし、それに拘らず、「會員數の僅少」の示すものは、當時の中國語教育の實態であった。なおその後、『現代支那語講座』は、その版權は紀文閣に賣却され、「紀文閣支那語講座刊行會」加藤龍雄編纂として、全 8 卷函入り各卷 1 圓 20 錢¹⁷⁷で装丁を簡素化し、昭和 7(1932)年 4-5 月に、『模範支那語講座』として改題再刊されている。

何盛三の試みは確かに十全なる成功は収めなかったけれども、この新しい中國語がどのような發展を見せるかを中谷鹿二は、本論文 123 頁で引用した「新^(ママ)らしい支那語から讀者に呼びかける言葉」の終わり近くで次のように豫言している。

「吾々新^(ママ)らしい支那語は現在支那の知識階級では何處へ行つても、なくてはならぬ流行兒である、(中略)只残念なのは、下層民と目されてゐる車夫馬丁苦力とか土臭い田舎漢、所謂一丁字ない連中の間には今の處吾々の勢力は及んでゐないことだ、これは教育の普及しない關係もあるが、要するに時機の問題である、尤も吾々が日本にみ

176 杉武夫は、『現代支那語講座』の執筆者の一人で、「書簡篇(商用文)」を擔當した。

177 『現代支那語講座』は、全 10 冊、入會金 1 圓 50 錢、入會者のみに配布、全卷一時拂 13 圓 50 錢、毎月拂 15 圓。一方、これに對抗した『最新支那語講座』全 6 冊は、申込金不要、分冊賣、各冊 1 圓 20 錢。この價格差こそ、「會員數の僅少」の重要な要因であったであろう。

た時分も、日本のさうした連中には大して歓迎されなかつたから、支那に来て餘り古くないことであるから、今の所は只成行に任せてゐるが、まあ長い眼で見てゐて貰いたい、近い將來には屹度吾々の勢力を支那の總ゆる階級に普及して見せるから。」と。事實、既に紹介したように、新しい中國語單語群の中國語認知度から、この豫想が全く正しかったことを確認できる。

5. 1930年代中國語教育の高揚と敗戦後の

漢文科目「時文」の廢止と「支那語」正式科目化の挫折

さて、1930年代の中國語高揚は、その高揚期に象徴的な内地のラジオ教育放送の『ラヂオ・テキスト支那語講座』（日本放送出版協會刊）に掲載された『實用北京語速成講座』（北京語普及學會）の廣告に見られる。たとえば、1938年（自9月至10月）テキストには、「學べ！北京語！行け！滿支！」、「北京語は大陸開發の鍵」「即刻來つて先づこの鍵を握め！」「大陸國策の確立とともに愈々北京語（滿・支共通）の萬能時代が來ました！」、1940年（自9月至12月）テキストには、「立身の近道 學べ支那語」「・皇軍大勝、我等大陸進出の機は遂に來つた！・支那語を知らずして渡支渡滿するは盲目同然・先づ標準語たる北京語を身に附けて行くべきだ・今や各學校を始め官民舉り北京語を開始した・先んずれば人を制す、今直ぐ獨習を始め給へ」とある。

このような中で、1939年4月より、實業學校・師範學校・中等學校の國語漢文科に「支那時文」が登場する。「支那時文」は、中國の現代の「新聞記事、尺牘、公文、論說、廣告、白話文、」を内容として會話は含まないが、中國語は、漢文として「青少年」のより身近なものになったと考えられる。勿論、現代の中國語を漢文訓讀することに對する不滿を、例えば、昭和十五年十月檢定済の鹽谷溫編『中等學校時文新編』（開隆堂刊）「例言」には、「白話體ハ時文ノ最モ將來性アル文體ナリ。但シ現實ニ話サルル言葉ナレバ當然支那ノ發音ニヨリ、之ヲ棒讀スベキモノナレドモ、今ハ漢文ノ應用トシテ訓讀ニ從ヘリ」と、『宮原民平 支那時文讀本 自習書 昭和十五年版』（宮原民平, 1941）「はしがき」には、「支那時文とは中華民國に於ける現代文である。（中略）元來支那語で讀まなければならぬのであるが（中略）便宜の爲、從來の漢文科の方法に準ひ、訓點をつけた迄」と述べている。つまり、中國語の漢文訓讀に對する不滿は、倉石武四郎のみならず、中國語研究者共通のものであった。これに關して、前掲の『時文讀本』（高田眞治・魚返善雄, 1939）で、

「時文は主として眼を通じて學ぶ現代支那の文語で、その文法的構造は、漢文と略々同様であるから、解釋の補助手段として「返り點」「送り假名」を附することは、日本人としては或は廢し得ない所であらう。然しながら、（中略）餘り拘泥しない方がよい。」

とするのは、妥當な意見と考えられる。ところで、「時文は主として眼を通じて學ぶ現代支那の文語」と、ある。ならば、文語は「眼を通じて學ぶ」言語であり、口語は口と耳とを通じて學ぶ言語である。では、口語文は、口語であるから、口と耳とによって學ぶもの

と限定できるのか。そうではない。単純なる論理に従った口語文は確かに口と耳によって學ぶものと限定できよう。しかし、複雑なる論理に従った口語文は文語と同質のものであろう。口語文とは、文語と同質の複雑な思考を表現したものを主要に考えるべきものである。逆に、口語文を日常會話レベルの内容しか表現内容を求めるだけであったとしたら、單なる口語の表記化だけの目的で充分であり、言文一致を目指した口語文に昇華する必要はないのである。これも口語文の理想は、聞けばすぐにわかる、或いは讀めばすぐにわかることである。しかし、そのような要件を満たすものは會話文の範疇であるのが、口語文の現實である。また、文言においても、聞けばすぐにわかる、或いは讀めばすぐにわかる文語文もあるのである。やはり、言文一致を目指した口語文とは、學術的に、思考展開に役に立つ口語文、これが言文一致の眼目であり、決して、挨拶言葉の表記化は言文一致の目指した口語文ではないのである。口と耳にのみ支配された口語文は、言文一致の目指した口語文ではないのである。總じて、口語文にも眼を通して學ぶ要素は缺くべからずの要件なのである。

さて、「支那時文」科目の設置に合わせて、同年七月、學習雜誌の『支那語と時文』（開隆堂刊）が創刊されている。その創刊號の卷頭を鹽谷溫（節山）は「善隣の至寶」と題し、

「日支兩國は同文同種の閒柄である。（中略）之を同道の交りといつて差支はない。同文同道の交りこそ、日支兩國を結ぶ、善隣の至寶である。（中略）之を實際に活用するには言語の力を藉らなければならない。支那語を通して、始めて適正に支那を認識することが出来るのであつて、兩國の親善は語學より始まる。（中略）支那時文を課するに至つた理由もこゝに在るのである。而して余は更に進んで支那語を必修課目に加へられんことを望む」

と書いた。この文章には、日中兩國雙方にとって、漢文を通した相互理解がますます困難になりつつある現實¹⁷⁸への錯覺は見られるにしろ、「兩國の親善は語學より始まる」とし、中國語が中等學校で中國語として隨意科目から正式科目に採り上げられるステップとして、漢文科目中に「支那時文」科目の設置を位置づけたことは、ほとんどの中國語研究者に共通の認識であつた。だからこそ、中國語の漢文訓讀に對する不滿を一時の便宜的なものとして一歩引いて構えられたのである。

また、その創刊號の「編輯後記」（奥平定世の執筆）は

「歐州語を借りて、書齋で研究の支那論を振り廻す時ではない。支那語により、又書かれたこの時文により、直接に支那を研究せねばならないと同時に、之れ等を用ひて、其の身を大陸に活動せねばならぬのである。青年よ行け！大陸は招いてゐる！」

と、これまでの「中國語關係者」の思いを晴らすかの如くに述べている。なぜ思いを晴

¹⁷⁸ 錢稻孫は、「日本語は二三年間にはまがりなりにも本が讀めるやうになる。昔の人——私の父などは正式には習はなかつたがかなり讀めた。といふのは、當時は日本でも漢文調であつたからで、その後、日支共に口語を用うるに及んで言葉の隔りは深まつた。今日の二三年は昔の二三ヶ月にしか當らない」〔「北平に於る日本文化研究の現状」（『中國文學月報』第8號1935年10月刊所收）〕と書いている。

らすかの如くなのか。

明治初期、中國語學習は、「舌學」と稱されていた。「舌學」とは、中國の口語を學ぶだけで、中國の「文」＝經史詩文は學ばない、と中國語學習を揶揄する言い方に他ならなかった。それゆえ、明治初期の中國語學習者は、このことを念頭に置いて中國語を學んでいたのである。それゆえ、足立忠八郎, 1902 ; 「自序」3 頁に、

「目下ノ支那語學者ヲ通覽スルニ、口能ク言フヲ得ルモ、筆能ク語ル能ハザルモノ十中ノ七八ナリ。余ハ此ノ情勢ヲ察知シ、大ニ支那語ノ研究ト同時ニ、又支那時文ノ講習ヲ世人ニ勸告セント欲ス。」

と書き、口頭の中國語と書かれた時文との併修を主張している。これは、中國語學習は口頭語だけでは不十分で、當時は漢文科目としてあった時文を併修することで、初めて中國語學習となるのだという認識が、北京官話教育時期以降の中國語教育者に共通する認識であった。そして、足立忠八郎のこの發言は、「舌學」とは言わせないための、決意表明であったのである。「舌學」という中國語學習に對する評価の存在する中で、横文字の歐米の言語ではなく、漢文としての時文であれ、中國問題にコミットできる状況を生み、さらに進んで、中國語としての時文により、コミットできる時代を現實に迎えようとしていたのである。それゆえ、奥平定世の發言は、中國語教育者の素直な喜びであったのである。

中國語教育者たちのこの思いは、ラジオ講座テキストの廣告にも如實に反映しており、1941 年(自 1 月至 3 月)のテキストの廣告には、「興亞の武器 學べ支那語」「新東亞建設には支那語の實力が必要!」という句が見える。これは單なる時勢への迎合とばかりは言えぬ、中國語教育者たちの上述した思いであった。

そして、1945 年、日本は敗れた。日本の敗戦は、中國語學習ブームの高揚の終了ばかりではなく、戦後の中國語教育に重大なダメージを與えた。それは、中國語教育の制度的條件の變化と、中國語教育の人的條件の變化である。中國語教育の制度的條件の變化とは、戦前の中國語教育界が支那時文の漢文科目での正科化を實現し、支那語の隨意科目からの正科化が現實的視野に入っていたにもかかわらず、日本敗戦により全て水泡に歸した。支那時文は漢文科目に屬することで支那語としての文字言語教育としての可能性を秘めていたのであるが、時文が中國語教育に戻されたというよりも、時文科目自體が消滅するとともにし、戦前を通じて行われていた中國語教育に於ける時文の併修が途絶した。これによって、文字言語教育より後退したのである。これは、音聲言語教育のみの北京官話教育時期を脱して、白話文教育という新たな文字言語教育を準備する筈の國語教育時期の中國語教育としての可能性を狭めることとなったのである。漢文という名稱が國語漢文という併稱から削除されて、重要科目として扱われなくなった。その結果、日本人の學力は制度的に漢文という文字言語とその教育から距離を置かざる得なったことである。そして、人的な面でも、一つには教育者側の漢文科目の時文を通して隨意科目・支那語科目の正科化を目指した指導者は全て退き、さらには、中國語受講者も戦後は、時間を経るに従い、漢文という文字言語から距離を置いた受講者に變化したことである。それゆえ、國語教育時

期を戦前と戦後とに二分して考えなければならない重要な変化が生じたのである。

さらに、「訓讀を玄界灘に投げすてて來た」倉石武四郎は、「從來文語を訓讀していた人が音讀を學び、現代音に通じた人が文語を學べば、自然にその聯絡ができてしまふ」と『支那語教育の理論と實際』(倉石武四郎, 1941)の中で主張した。この主張は、當時の中國語教育界の時文科目の正科化からの支那語教育正科化を圖るという主張とは異なるものであり、漢文教育が擔ってきた文字言語教育を否定した音聲言語教育專一の中國語教育の主張は、戦前の中國語教育の推進者とは一線を劃した。この『支那語教育の理論と實際』の刊行は、戦後の文字言語教育挫折の戦前に於ける萌芽と言うべきものであった。戦前の中國語教育の推進者達の敗戦による退場、そして、GHQによる漢文教育の弱體化により、戦後間もなく倉石武四郎の文字言語教育否定の意見は有力な勢力となった。そして、テキスト本文に漢字を使用しないテキスト『ラテン化新文字による中國語初級教本』(倉石武四郎, 1953)の刊行は、戦後の中國語教育が文字言語教育を繼承しないことの宣言であった。つまり、戦後の中國語教育は音聲言語教育に限定されたことを示すものであった。その結果、戦前に意圖された文字言語教育と音聲言語教育との竝立は完全に挫折した。

そして、本論文 10 頁で既述したように、中國では、1951(昭和 26)年、公文書の標點符號付き口語文採用が決定されて、言文一致はここに完成し、國語は半現代中國語から現代中國語に変化を遂げていた。當時は、まだ普通話と名付けられてはいなかったが、言文一致完成以降は、“普通話教育”と假稱しても間違いない。しかし、當時の日本の中國語教育界には、中國語使用地域の中核である大陸における中國語の現況が不明確であったため、言文一致完成後の“普通話教育時期”に轉換できずにいたのである。そして、日本の中國語教育は、言文一致完成後の新しい中國語教育への轉換は、1960(昭和 35)年に『中國語教科書』の日本での刊行を待たねばならなかったのである。

以下、本章は、中國語教育に於ける理想と中國語の現實の姿に關して、滿洲地區に於ける土音(方言音)の扱い方に焦點を當てて論じていく。そして、第二節では、滿洲地區の規範的中國語教育に於ける方言音への對し方、第三節では、中國語の現實の姿に對して現實的對應をした在滿の關東軍による方言音への對し方を見て行くことにする。そして、第四節では、滿洲に於ける中國語教育と日本語教育との相關性の一範例として、日本占領期の青島の中國語・日本語關係年表を作成した。

第二節 滿洲地區の中國語教育と方言音

1. はじめに

本節では、土語、土音と方言、方言音を著述の便宜から混用して用いる。

戦前、日本の中國語教育は内地でのそれと外地(青島・上海・關東洲・滿洲地區などを指す)でのそれとに分かれており、その共通點は、中國語教育がともに上級學校進學と無關係に行なわれていたことにある。一方、兩者の基本的相違點は、内地での中國語教育は日本語母語地域での中國語教育であり、外地でのそれは非日本語母語地域のそれであったことにある。この基本的相違から派生した兩者の相違點は、那須清の指摘¹⁷⁹のほかには、次の4つがある。第一は、外地の中國語教育は、人的にも實踐的にも、非日本人に對する日本語教育と直接に關係をもっていたことである。第二は、内地での中國語教育は、社會人を對象とした講習會の外に、中等教育以上で行われたものであるのに對し、とくに北方官話方言地域の滿洲地區では、1928年からは、全面的に小學校の1科目(隨意科目)として中國語教育が行われたことである。第三は、外地では、初等日本語教育に端を發した日本語教授法の研究から、中國語教授法の議論がなされ、その結果1928年には、直接法に沿った南滿洲教育會教科書編輯部『初等支那語教科書稿本』¹⁸⁰も編まれたことである。第四は、外地では、日本人と非日本人ともに各種の語學檢定試験と語學獎勵試験が行なわれたことである。それゆえ、前掲の教科書のほかに外地での中國語學習刊行物には、これらの相違點に呼應した、内地に見られぬ視點のものが多く見られる。例えば、滿洲地區では規範的な中國語教育を目指して現地日本人の間に流行っていたピジン中國語を是正すべく『家庭支那語』(宮脇賢之介, 1922)、『日支合辨¹⁸¹語から正しき支那語へ』(中谷鹿二, 1926)、本論文13-14頁、120頁脚注168で既述した、國語運動に呼應し小學校の口語文教材と繪をテキストに初めて採り入れて中國語教育教材史の一時期を劃した『現代支那語讀本』(飯河道雄, 1923)、英語學者・齋藤秀三郎を彷彿とさせる中國語譯の『和文華譯講義 日本語は斯うして支那語に譯ませう』(中谷鹿二, 1927)などを舉げることができる。

さて、1898年以來ドイツが中國から租借していた青島を含む膠州灣一帯は、1914年の日獨戦争の結果、日本が租借した。そして、1922年、日本から中國に還附された。その間、青島ではドイツ膠州灣領總督の下で、さらに、日本青島守備軍司令官の下で、中國語教育が行われた。

179 『舊外地における中國語教育』(那須清, 1992; 13-21頁)では、2つの相違點、「教授する中國語がほんとうに實力となるか否かが直ちに試されること」、「中國人に對する日本語教授法の研究」を挙げている。

180 『在滿日本人用教科書集成』第8卷(磯田一雄ほか, 2000)所收。

181 該書表紙、中扉の書名は「辨」ではなく「辨」とある。『新漢語林』(大修館書店刊)によれば、この2字は「嚴密な區別なく用いられることが多い」とある。

本節は、先ずドイツ占領時期青島の中國語教育を考察し、それを足掛かりに、日本外地（とくに滿洲地區）の中國語教育の一端を明らかにしたものである。

2. ドイツ占領期青島の中國語教育での方言音の扱い

1897 年 11 月山東省内でドイツ人宣教師 2 名が殺害されたことを好機として、膠州灣一帯をドイツ海軍が占領した。翌 1898 年 3 月、山東の鐵道敷設權と膠州灣一帯 552 平方キロメートルの租借を含む獨清條約の締結により、青島はドイツの租借地となった。ドイツ占領下の青島では、『膠州灣詳誌』（上仲尚明, 1914; 97 頁）¹⁸²によれば、中國人の爲の學校を開きドイツ語を 1 科目として教え、1901 年開校の獨亞師範學堂では、獨清字典、獨清會話を出版したという。また、『支那に於ける外人の文化事業論』（飯河道雄, 1923; 13-21 頁）に譯載せる 1912 年 10 月の上海獨逸協會の文書によれば、對中活動範圍の 1 つの山東省は、青島を根據地として北部中國の進入口として位置付けられ、中國各地の獨逸協會への注意事項には、ドイツ人の使用する中國人にドイツ語を獎勵すること、ドイツ人に中國語學習を獎勵することが盛り込まれていたが、これはどの國でも同様に採りうる施策である。

さて、本稿では、青島占領時期のドイツの中國語教育について、青島で刊行されたドイツ語による中國語學習書を通して見て行こう。

鱒澤は次の 2 點の學習書を目撃している。

ア、Ferd. Lessing, Wilh. Othmer¹⁸³共著 *Lehrgang der nordchinesischen Umgangssprache* (漢語通釋) (全 2 卷) Tsingtau 1912 年 11 月 Deutsch-Chinesischer 印刷出版所 (Walter Schmidt) 刊。以下、『漢語通釋』と略稱する。) ¹⁸⁴

イ、Max. Bunge¹⁸⁵著 *Kleiner Deutsch-Chinesischer Sprachführer für den Deutschen Soldaten in China*. Tsingtau 1914 年 5 月第 2 版序 Adolt Haupt 刊。(書名譯¹⁸⁶: 『駐留ドイツ兵のための中國語會話ガイド』、以下、『ガイド』と略稱する。)

である。

アの『漢語通釋』は、新出一千漢字で全 49 章からなる北京官話の會話書である。第 1 卷は、全 433 頁で冒頭に概説を置き、各章は新出漢字、語句の注釋、課文、譯文の構成で

¹⁸² 著者は明治 33 年度三井物産支那修業生で御幡雅文の教え子の一人、「緒言」によれば、明治 40~42 年の間、青島に在住していたという。

¹⁸³ F. Lessing (1882~1962 年) 後に、ベルリン自由大學教授。W. Othmer は不明。(この注の記述は、本頁脚注 184、同じく脚注 185) とともに、東京ドイツ文化センター圖書館の町田佳世氏にお世話になった。)

¹⁸⁴ 「序文」によれば、1910 年 1 月に舊版を出版している。<http://www.subitodoc.de/> に著録の *Lehrbuch der nordchinesischen Umgangssprache* (1910 年 Deutsch-Chinesischer 印刷出版所) である。鱒澤未見。

¹⁸⁵ 皇帝軍第 3 海兵大隊軍曹として、12 年間軍務に就き、獨清特別高等專門學堂の職に就き、該書を出版した。後に、Heilingenhafen 市長。

¹⁸⁶ 本節のドイツ語の和譯については、全て佐藤彰元日本大學工學部教授のお世話になった。

進められている。その読みは Einigungsumschrift (直譯：直讀翻字法、意譯：ドイツ式中國語發音表記) による北京音で書かれ、明記はないが“山東”方言音表記¹⁸⁷を括弧内に注記している點が注目される。例えば、以下の如くである。

客 ko(ke)、行 hsing(hing)、江 djiang(giang)、有 yo(yu)、騎 tji(ki)

第2巻は、全160頁で第1巻全49章課文をドイツ式中國語發音表記で北京音を表記したもので、“山東”方言音表記によってはなされていない。また、各單語はハイフンで字間を繋いでいる¹⁸⁸。附録に Wade 式表記との對照表も附されている。

イ.の『ガイド』は、縦113mm、横170mmの横綴じ小冊子で、冒頭21頁にわたり、前掲『漢語通釋』によるドイツ式中國語發音表記の読み方と“山東”方言音から見た北京音との相違、獨中文法の比較を簡述したのち、それに續く各頁にはドイツ語、ドイツ式中國語發音表記、漢字中國語の3段横配列で、北京官話による會話、一般單語、兵用單語を掲載している。

該書では、『漢語通釋』の“山東”方言音表記と同じであるが、尖音と團音との區別が有ることを「特に注意すべきこと」と指摘し、

(北京音)	(『ガイド』採用音)	(北京音)	(『ガイド』採用音)
dji, tji	→ (團音)gi, ki	hsi	→ (團音)hi
	↘ (尖音)dsi, tsi		↘ (尖音)si

として、北京音は採られていない。さらに、白 be(bai) (鱗澤注:be はピンイン表記では bei)、國 gui(guo) と表記し、北京音を括弧内においている。しかし、「ö steht manchmal in pekingaussprache für e: De-gue, peking Dö-guo」(譯:ö は北京音では e の代わりに多く使う: De-gue, 北京 Dö-guo。鱗澤注: gue は gui とともに表記することは、別に見える。)と説明し、「德華銀行 Dö-hua-yin-hang」と表記し、de と表記せず、dö と北京音を採っている。つまり、必ずしも“山東”方言音表記を通してしているわけではない。このことは、次に挙げる『ガイド』の特徴を検討して、その答えを出すことにする。

『ガイド』の特徴は、『漢語通釋』と異なり、北京官話の會話本文に“山東”方言音を採用している點である。

そのいくつかを以下に例示する。なお、ローマ字は、該書原ドイツ式方言音表記、『漢語通釋』によるドイツ式北京音表記の順である。

¹⁸⁷ 『漢語通釋』と『ガイド』の“山東”方言音は、ドイツ軍の主たる活動地域である青島方言と見られるが、『青島人怎樣學說普通話』(青島市推廣普通話教材編寫組, 1987)にある該方言の特徴の全てを満たしているわけではない。また、『北京官話 常用二千句集』(岡田瓢, 1924)は、括弧内に「山東語」を記す。しかし、全書に發音表記も發音説明も無く、山東方言音にも言及していない。それゆえ、著者自身が主宰した青島華文書院で使用され、講義において山東方言音が言及されたであろうことは想像に難くはないが、題名の如く「北京官話」音教育を想定したものであろう。

¹⁸⁸ 例えば、『羅馬字 急就篇』(善隣書院, 1935)の如くに、各字に對して注音しているものではない。

	『ガイド』の原方言音表記	北京音表記
你們往那裏去	ni-men wang na ³ -li kü?	ni-men wang na ³ -li tǐ?
那*一個村叫下王古莊 (*鱒澤注記：那は疑問詞)	na i go tsuen giau Hia-wang-go-tschuang?	na i go tsun djiau Hsia-wang-go-tschuang?
我是即墨人	wo schī Dsi-mi (-jen).	wo schī Dsi-mo (-jen).
現在沒有了	hiän-dsai mu-yu(或いは me-yu) la.	hsiän-dsai me-yo la.
有一些橋	yu i-hsiä kiau.	yo i-hsiä tjiau.

このように方言音を採用する形式を持つ日本の中国語学習書はあるのか。そのようなものには、安東縣で刊行された『日滿會話 日滿協和は先づ言語から』(上奥留輔, 1933)がある。該書「支那語四音發音ノ區別」には、

「北京官話音ト滿洲土音ヲ調和シタノハ例ヘバ官話テ(是)ノ發音ヲ滿洲土音テ(是)ト云ヒ官話デ(起)ヲ土話テ(起)ト(中略)發音スルガ如ク振り假名ヲ附シ」

たとあり、例示すると、

- 1) 你去了麼
- 2) 今天是月底麼 (原文は縦書右ルビ)

の如くである。

このことから、上述した『ガイド』の方言音の“混入”も、この『日滿會話日滿協和は先づ言語から』と同様に「北京音と山東方言音を調和させた」方針を採ったものと考えられる。つまり、『ガイド』の特徴は、北京官話を北京音によってではなく、北京官話を山東現地の言語状況に合わせた方言音で表記していることにある。方言を方言音で学ぶのではなく、標準語を現地方言音で学ぶというやり方を採っていることにある。これは、前掲の上海獨逸協會の文書にある「直隸省 天津、北京の大都市を有し而も政治の中心」を見据えてのことであろう。

しかし、『ガイド』のさらに注目すべき点は、ドイツ總督による中国語獎勵初級試験が現地方言音を認め、『ガイド』は、その試験に合格するために編まれた点にある。卷末に掲載された「Auszug aus der prüfungsordnung」(鱒澤譯：試験規定要約)¹⁸⁹によると、ドイツ總督は青島駐留ドイツ兵の中国語學習を獎勵するため、年一回の試験合格者に語學手當てを支給していた。そして、初級試験の内容は、租借地における現地での生活と職務上での日常會話や用語であった。それゆえに、現地方言音で学ぶ中国語ガイドというこの小冊子の特徴こそ、駐青島ドイツ軍の中国語教育——方言を方言音で學ばせず、共通語を現地方言音で學ばせるやり方は、方言學習に重點を置いているわけではなく、共通語(北京官話)を見据えての上で現實に適應しようというもの——を體現したものであろう。駐留ドイツ兵(平

¹⁸⁹ 「Klasse 1」(譯：初級)のみ掲載されている。

時 1800 の兵力、青島のドイツ人口 1800) の状況は、明治 42 年 7 月に脱稿していたという前掲『膠州灣詳誌』によれば、

「又兵士として勤務中より既に青島政廳の各部に書記となりて勤務を命ぜられ居るものが澤山あります。(中略)満期後官吏となるもの少なからずあります。其他のものも又満期までいろいろと奔走して地位を求めます。(中略)青島在住の獨逸人の十の九までは何づれも兵士上りの者で下士官上りの者も多いです。」

というものであった。それゆえ、奨励金を伴う語學試験の合格マニュアルとしての『ガイド』は、その第 2 版序に、「第 1 版は駐留ドイツ兵に廣く讀まれたようである」と述べているのは、尤もなことであつたばかりではなく、現地方言音による中國語學習は、除隊後の生活のためにも必須のものであつたはずである。勿論、上述した、この『ガイド』と前掲『漢語通釋』との方言音の會話文への組み込みの有無という扱いの相違から、直ちに青島でのドイツの中國語教育が全て現地方言音でなされたとは考えにくい。『ガイド』は、徹頭徹尾、青島における軍務生活の必要から編まれたものであり、實際の日常生活に接する現地方言音に適應しなければ實用の意味を失うという認識と、北京官話を知らなければならぬという認識の上に編まれたものである。一方、教科書として用いることを前提にした『漢語通釋』は、その第 2 卷に見られるように、現地方言音の紹介は知識としてのものであり、規範的な北京音を教授の中心としていたと考えられる。但し、『漢語通釋』附載の Wade 式表記との對照表では、現地方言音表記を主に北京音表記を斜字體で書いているのは、聞き慣れた現地方言音を教室での學習に結び付け、以って學習効果を擧げんがための措置であつたと考えられる。『ガイド』と『漢語通釋』の二著に青島における中國語教育に対するドイツ・ドイツ軍の實踐的な態度が見える。

それでは、日本の中國語檢定試験や奨励試験における方言音の扱いを見てみよう。

内地には、中國語檢定試験も奨励試験もなく、文部省教員檢定試験の支那語科試験だけで、それもかなり程度の高いものであつた。また、日本陸軍の語學奨励策というと、「外國語學奨励規則」(陸達 16 號大正 4 年 8 月 12 日改正)¹⁹⁰があるが、「士官」を對象とするもので、廣く兵士を對象としたものではない。

そこで、兵士にも開かれていた外地の中國語檢定試験や奨励試験における方言音の扱いを見てみよう。

滿洲では他の外地と同様に、官による滿洲國政府語學檢定試験などの各種語學試験¹⁹¹が日本語と中國語など存在したが、最も著名でその對象範圍が廣いのは、大正 4 年から實施された滿鐵の語學檢定試験(規則は大正 11 年 11 月に改正され、筆記、口述の試験を課すなど整備された)であつた。その合格基準は他の資格試験に廣く用いられた。例えば、日本占領下の青島でも、大正 4 年 10 月、在職 6 ヶ月以上の日本人雇人に對する山東鐵道運輸

¹⁹⁰ 該規則改正前のものは鱒澤未見。

¹⁹¹ 『日本人を對象とした舊「滿洲」中國語試験の研究について』(李素楨,2013) に詳しい。

課職員特別採用試験内規には「支那語(急就篇問答ノ程度)」¹⁹²とあり、これは満鐵の語學檢定試験四～三等に相當するものであった。これら中國語檢定試験や各種中國語學試験における方言音の扱いの實態は、『滿洲國政府語學檢定試験問題集』(國務院總務廳人事處, 1937)の康德3年(1936年)施行滿洲國第一回語學檢定試験の委員・木村辰雄による「口述試験講評」(講評篇. 同書; 26-27頁)に窺うことができる。それによると、

「三等及び二等の應試者にありては、飽くまで明確な發音、即ち字音と四聲とを基礎として滿洲語の勉強を續けて貰ひたい。私は字音は必ずしも北京の標準音でなければならないといふのではない、明確ならば滿洲方言の音であつても何等差支ないと信ずるものである。只私は滿洲方言の要領を掴むにしても先づ北京音から入つた方が捷徑であると考へてゐるものである。もつとも、滿洲語習得機關の設けなき田舎に勤務せらるる人々に對しては、出來ない相談かも知れぬが可能範圍に於て滿洲語の先生に就いて」欲しい、

と述べている。このように方言(土語)は全く認めていないが、方言音(土音・訛音)は認められていたとはいえ、土音を推しているのではなかった。つまり、土語は全く推奨せず、受験者の事情により、やむなく土音を認めているだけであつて、つまり、中國語教育の原則は規範的中國語、即ち、北京官話教育であつたのは、滿洲に於いても教育上の合理的選擇であつた。例えば、中國語檢定試験の基準テキスト『官話急就篇』(のちには『急就篇』)の規範的讀みを示した『急就篇發音』『羅馬字急就篇』は、Wade式表記の北京音であつた。また、『急就篇』解説を含み、土音について言及のある『合本 支那語速成講座』(飯河道雄, 1934)も、土語は全く認めておらず、土音について、本文にまでは、土音を示してない。また、滿鐵語學檢定試験官の一人であつた『簡易支那語會話篇』(秩父固太郎, 1928)を見ても、土音には言及がない。

3. 滿洲地區の中國語教育と方言音

『ガイド』は小學校教育に使用されたものではない。また、『漢語通釋』も小學校教育に使用されたものではない。しかし、日本の中國語教育史を考える上で、兩書は、中國現地における方言音の扱いの問題を提起していると考えられる。勿論、例えば、上海では、この問題は起こりえなかつた。なぜなら、北京官話と上海語とは全く異なる言語といつてよい位その懸隔が大きいからで、北京官話の全國的通行性に鑑みて、上海の日清貿易研究所、そして、東亞同文書院では、北京官話を中心に二者併修がとられたからである。また、山東地區や滿洲地區も、實際の方言による困難さとは別に、言語學的にはいずれも北京官話の中の差異といったものであるから、その事實を認識できる社會人の、或いは、中等教育以上の中國語教育では、この問題は大きな問題にはならなかつたと考えられる。そして、外地の中國語學習方法は、次の飯河道雄の言に代表されるものであつた。

¹⁹² 青島守備軍軍政史編纂委員會, 1927²; 第三卷第五編 253頁。

それは、前掲『支那語速成講座』『學習法講話』の「北京語か滿洲支那語か」に述べられている。そこでは、「北京語か滿洲支那語か」と問題を立て、北京語を選ぶ3つの理由を示した。その3つの理由とは、

「① 初めに北京語を習って置いて、然る後北京語と滿洲の支那語との違ふ處を研究すればよい。② 滿洲の支那語は習ひたいと思つても其の便宜がない。北京語であると會話書も辭書も自由に手に入れることが出来るが、滿洲の支那語にはその便宜が一つもない。③ 北京官話は滿洲の支那語よりは弘く使はれるから、應用の道が廣い。」である。そして、「發音法講話」では、發音をよくするために耳を良くするには、各地の方言音にも注意を拂う必要があると説き、その「附錄一 正音對照關東州土音例」¹⁹³に「正音にて話すと雖も土音にて聽かざるべからず、土音を知るの要茲に存すと言ふべし。」と書いている。

この飯河道雄の言は、上述した、次節で見て行く關東軍の會話書、そして、外地での各語學試験の方言音(土音・訛音)の扱いに對する共通した基本的態度である。そして、これは、現在でも説得力を持つ意見である。しかし、これは、中國語學習者が社會人、或いは、中等教育以上の人を對象とするという暗黙の條件での合理的意見であつたのである。それはどういうことなのか。

中國語教育で問題となつたのは、土語ではなく、土音(訛音)の扱いであり、初等教育の場において、實は大きな問題となつていたのである。つまり、教室で學ぶ規範的な中國語音(北京官話音)と現地での土音のギャップによって、日本人教師による外地での中國語教育に對する不信が學習兒童から生じていたからである。このことについて、『舊外地における中國語教育』(那須清, 1992; 98-99 頁)で、旅順第一尋常小學校での思い出として、

「にわとりをシャオチルと書かれたのを見て、誰かがシャオチルではないショーギルだとささやいた。そうだ、この先生のいうことはまちがっている、みんなそう思った。旅順地區のみならず、關東州一帯では山東方言が使われていて、(中略)「小鷄兒」は北京音ではシャオチルだが、山東方言ではショーギルとなる。こどもたちはシャオチルは先生の支那語で、ほんとうの支那語はショーギルだと思った。」(下線は引用者による)と書き、さらに、

「小學校では週一回の授業のほか、支那語劇などもあり、學校側では力を入れていたと思われるが、兒童の反應はさっぱりで、小學校における支那語教育の成果は全くあがらなかったのではあるまいか。」

と結んでいる。筆者鱒澤は同様な回想をほかに知らないが、當時の初等中國語教育の状況から推測するに、旅順ばかりで起こつたものではなく、滿洲地區に普遍的に生じていた現象であつたと判斷される。そして、このような不都合な状況は、前掲した飯河道雄の方言音に對する正しい見解と飯河道雄らの直接法の實效性とは別に發生したのである。なぜ

¹⁹³ 該書に『支那語叢談』(渡會貞輔, 1918)から採録、と記す。この關東州土音は本論文 152-155 頁で引用している。

ならば、教室外の状況に基づいた、中国人の中国語はその中国人が誰であろうと正しい中国語、日本人の中国語はその日本人が誰であろうと中国人の中国語には及ばないという、小學校の生徒にとっては當然と思われる單純な理由によってである。これは、内地の國語教育と臺灣、朝鮮と、外地の日本語教育で行われて來た、正音による方言音の矯正という教室内の“正しい實踐”が、滿洲ではこの單純な理由により學習効果を全く擧げ得なかったことを意味する。それでは、このような失敗は想定されていなかったのか、或いは、これを想定してどのように解決を圖ろうとしたのか、見てみよう。

小學校においても中國語教育を行ったことが擧げられるが、成人の中國語教育と異なり、方言音自體を子供に理解させる發想や方法なしで、正音教育のみで中國語教育を展開した點は、外地での日本語教育の成功の裏に外地の中國語教育の隠れたマイナス點であったと分析した。それは、南滿洲鐵道株式會社地方部學務課『滿鐵教育沿革史(草稿)』¹⁹⁴ 1030 頁所載の大正 13 年度奉天地方視學による「沿線小學校ニ於ケル支那語學習情況調查報告」の中の「支那語教授ノ方針」に見ることができる。そこには、

「滿洲ニ於テハ土音ニヨルヘキカ、北京官話ヲ採ルヘキカ、又ハ注音字母ヲ採用スルカ利益テアルカ、又ハ直ニ教科書ニヨリテ教授スヘキカ茲ニハ之等ノ點ニ深入シテ研究スル必要ハナイカ學校ニ於テハ標準語ニ依ルヘク注音字母ヲ利用スルモヨカラウ是等ハ夫々専門家ノ研鑽ニ俟タネハナラヌ」

とある。つまり、「滿洲ニ於テハ土音ニヨルヘキカ、北京官話ヲ採ルヘキカ」と立論されているように、想定された問題點ではあったのである。そして、その具體的對應策は、『初等支那語教科書(稿本)教師用』¹⁹⁵、『初等支那語教科書教授參考書』¹⁹⁶に結實したと考えるのが妥當であろう。

そこで先ず、『初等支那語教科書(稿本)教師用』の「緒言」をみると、

「滿洲に於ケル小學校兒童ハ、多少トモ支那語ヲ聞キカジツテキナイ者ハナイ。但シソレハ大抵ノ場合、發音ニ於テモ、語形ニ於テモ甚シク不正確ナモノデアル。教授者ハ未知ノ言葉ヲ新授スルト共ニ、既知ノ言葉ヲ矯正スルタメニ斷ヘザル努力ヲ費シテ貰ヒタイ。」¹⁹⁷

とある。しかし、兩教授書の本文を見ると、そこには、正音教授上の留意點や指示はあっても、生徒が日常的に耳にする教室外の方言音を兒童の視線から説明した個所を見出せない。教室での各教師の力量に期待したのかもしれないが、小學校の中國語教育にとって、きめ細かな指導が必要であった。さらに、『初等支那語教科書稿本』全 5 冊中の卷一、卷二は、文字が無い繪ばかりという直接教授法の典型的な内容であるから、この教授書がなければ到底授業を組み立てることができないものである。だから、教室外の方言音に對し、

¹⁹⁴ 『「滿洲・滿洲國」教育資料集成』第 16 卷(「滿洲國」教育史研究會, 1993)。

¹⁹⁵ 『在滿日本人用教科書集成』(磯田一雄ほか, 2000 ; 43-111 頁)所收。

¹⁹⁶ 磯田一雄ほか, 2000; 199-242 頁所收。

¹⁹⁷ 磯田一雄ほか, 2000; 44 頁。同; 199 頁の『初等支那語教科教授參考書』「緒言」もほぼ同文である。

現實への周到さに缺けたままでの方言音矯正という正音教育を説く兩教授書は、この兒童の疑問に對する無策を示すものにほかならない。つまり、兩教授書の編者にとっては、教室外の方言音の存在を認識し、克服對象としてはいたが、兒童の心理と中國語學習にもたらした弊害がこれほどまでとは想定していなかったことを示している。それでは、滿洲地區で中國語教授法に力を入れながらも、また、初等中國語教育という内地にはない新しい中國語教育を目指した意氣込みにも拘らず、この問題の發生した原因は何か。

鱒澤は、外地で議論された中國語教授法が日本語教授法から進展してきたことによるマイナスの作用、と考えている。つまり、國語教育を日本語教育ととらえ、それを外國語教育の一つととらえる視點は、教授法の面で外地の中國語教育にプラスの作用をもたらした。しかし、臺灣、朝鮮と連續的に成功裡に展開させて來た日本語教育の日本人教員は、基本的には日本人であつたから、非日本人の日本語受講者から日本人教員の日本語が日本語としては疑われるなどというようなことは決してなかったのである。だから、教員の操る日本語が標準語であるか否か、或いは、正音(標準音)であるか否かは、教員自身が解決しておくべき課題とはされたが、日本人教員の操る日本語が日本語であるか否かと疑われる事態など起こり得ぬ問題であつた。つまり、滿洲地區での日本人中國語教授者にとっては全く想定外の事態であつた。また、これまで日本語教授法の進展により日本語教育は確かに成果を擧げていたのである。滿洲での中國語教育の特徴の一つは、小學校においても中國語教育を行ったことが擧げられる。しかしそれほどの効果を擧げられなかったのは、成人の中國語教育と異なり、方言音自體を子供に理解させる發想や方法なしで、正音教育のみで中國語教育を展開した點にある。これは、外地での日本語教育の正音教育の成功の裏に外地の中國語教育の隠れたマイナス點であつた。つまり、滿洲地區に於いては、日本語教育に於いては全く起こらなかった、小學生が教室外の中國人の操る方言音を「本當の」中國語と感ずるという狀況について、それは簡単に解決できる問題として考えられたためか、或いは、この狀況は小學校に於ける中國語教育上の最も解決すべき重要問題ではないとして考えられたためか、議論されなかったのである。そして、この問題は、中國語教授法は對譯法によるべきか、直接法によるべきか、というよく耳にする議論に隠れてしまったのである。だから、その結果、教室で學ぶべき中國語とは何か、を小學生に理解できるように説明する努力の跡が前掲兩教授書には見出せないのである。同様に、直接法による中國語教材批判、中國語教育批判の言辭が散見される『日本語教授法概論』(山口喜一郎, 1941)、同『日本語教授法原論』(山口喜一郎, 1943)にも、教室外の方言音と教室内の標準音をどう理解させるか、の記述がないのである。

前掲の那須清による回想の如き事態の發生を的確に豫想しその處置を有効にとりえなかったことは、外地の小學校に於ける中國語教育の内的要因による失敗を意味しているのである。しかし、外地で内地にはない中國語教授法が盛んに議論され實踐されたが、「語學は試験で覚えるというのが昔からの祕訣」という言のとおり、中國語が上級學校の、端的には舊制高等學校の受験科目でなかったという外的要因は、内地・全外地に共通した普遍

的な中國語教育のマイナス要因であった。例えば、前掲「沿線小學校ニ於ケル支那語學習情況調査報告」の中の「支那語學習ニ對スル保護者ノ態度」には、「(高等小學校の兒童の)大部分ノ父兄ハ男兒ニハ支那語ヨリ英語ヲ重要視シテ居リ上級學校ノ準備若ハ内地歸還ヲ希求シ居リ見受ケラレル」¹⁹⁸とある。この状況は内地も全く同様で、中等學校令の昭和6年改正から、中等學校に外國語科目に中國語も加えられたが、『最新支那語大辭典』(石山福治, 1935)服部宇之吉「序」に「上級學校の連絡の關係もあるからであらうが實際に支那語を課して居る中學校は一二校しかないさうである。」という状況であった。それゆえ、内地・外地に共通したこの問題の打開策は、ただ中國語科目を舊制高等學校の試験科目にするのが最善の状態であった。そして、古典の漢文は戦前に於ける受験重要科目であったので、中等學校での時文が漢文科目として正科化し、中國語科目正科化を目指すのが、戦前の中國語教育關係者に共通する懸案となっていたのである。

¹⁹⁸ 『「滿洲・滿洲國」教育資料集成』第16卷1020頁。大正8年5月から青島中學では隨意科目として中國語が教授されていた。例えば、大正12年當時の情況は、「(二年生の)中國語の聴講希望者が二クラスとなり入りきれないほどであったが、先生(鱒澤注：岡田瓢)は五年まで三人も残ってくれたらと言われたので、私は驚いたが、結局、五年まで残ったのは五人、それでも一番澤山残ってくれたと喜んで下さった。」(『青島日本中學校史』(青島日本中學校史編集委員會, 1989; 285頁)とある。

第三節 關東軍の滿洲方言音への對し方

1. はじめに

本節でも、土語、土音と方言、方言音を著述の便宜から混用して用いる。

昭和 11(1936)年 8 月、滿洲の關東軍軍醫部は、A6 版の『衛生部員ニ必要ナル滿洲土語』を發行した。同書は、縦書で上段到北京官話、下段に和譯と注記を置き、注記は土音の記述を主とし、土語の注記は適宜なされている。そして、中國語の全文の左側にカナ發音ルビで示し、土音に對しては、土音の發音ルビをその右側に Wade 式發音表記で北京官話音を記し、注記では土音も適宜 Wade 式發音表記に近い書式で表記している。また、同書巻頭に、「本書ハ陸軍二等軍醫弘島慶勝¹⁹⁹ノ編纂セルモノ」とあるので、以下、『衛生部員ニ必要ナル滿洲土語』(弘島慶勝)と本論文では表記する。

『衛生部員ニ必要ナル滿洲土語』は、衛生部員(主要には軍醫)の爲に「明日ノ勤務ニ役立ツ言語」ナル點ニ重點ヲ置キテ採録セリ」として、本文全 109 頁で診療業務[豫診、診斷、治療、養生ニ關スル諸注意、病名及身體各部名稱、傳染病]、衛生調査、衛生隊、教化行軍の順に全 304 例文で構成されている。また、同書に舉げた参考書の一つに『速成滿洲語自習書』(關東軍參謀部, 1934) [實は『簡易滿洲語自習書』²⁰⁰ (磯野清藏, 1932) を 90% に縮小組版した改題本である]を擧げているので、『衛生部員ニ必要ナル滿洲土語』は、『簡易滿洲語自習書』所載の「衛生施療」の發展形と見てよい。

『衛生部員ニ必要ナル滿洲土語』の重要な特徴は二つある。

一つは、『衛生部員ニ必要ナル滿洲土語』という医療に特化した會話書の刊行は、敵軍の傷病將兵治療ではない現地住民医療が日本軍の宣撫工作として重要な位置を占めるに至ったことを示している點である。もう一つは、それまでの土語・土音資料と違って、医療活動という原住民に密着した活動ゆえに、必然的に現地の土語、土音をかなり細かく記録している點で有用であり、それゆえに關東軍に於ける土語、特に土音に對する具體的指針が明記されている點も有用である。そこで、この二つを順に見ていこう。

¹⁹⁹ 弘島慶勝(明 43. 2. 16 生, 熊本縣人, 昭 9. 6. 30 任官)による該書の著述過程は不明。架藏本の表紙左下に「竹内部隊醫務室」と紫色スタンプの押印がある。竹内部隊とは關東軍の獨立守備隊のいずれかの大隊を指すと思われるが未詳である。また、右肩に「四部之二」と墨書されているので、當時の關東軍獨立守備隊の大隊數は 30 だから、主要には大隊醫務室勤務參考用に 200 部程度は印刷したものようだ。

²⁰⁰ 同書「例言」に、「本書中發音記號及軍用會話、單語單句竝ニ附録(同文怪義ヲ除ク)ハ獨立守備步兵第二大隊本部附陸軍通譯生磯野清藏氏著「日滿對譯軍用軍事會話」ヲ借用セリ」とあることから、以下、本論文では『簡易滿洲語自習書』(磯野清藏, 1932)と記す。また同様に、後掲の『最新支那語軍事會話』(關東軍參謀部, 1937)も奥附に「關東軍參謀部編纂 責任者陸軍通譯官杉武夫」とあることから、以下、本論文では『最新支那語軍事會話』(杉武夫, 1937)と記す。

2. 参謀本部編纂中國語會話書の中の医療活動活動の位置づけ

参謀本部編纂に係わる中國語會話書の中の医療活動の位置づけの變化表

	内 容 (□は鱗澤による)
『日清會話』 (1894)	<p>行動項目別配列ではなく、日本語キーワードのイロハ順配列。</p> <p>【文例】「我給你開個方子、你把這個藥舖裏買去吃幾劑藥、就好了。」「私カ處方ヲ書テアゲルカラ其ヲ以テ藥屋ニ買ヒニ往テ召シ上レバ直治リマス」(119-120 頁)</p> <p>「我不舒服了(我有病了)。」「私ハ病氣デゴザリマス」「上病院去請大夫瞧々罷。」「病院ニ往ツテ醫者ニ診察シテ貰ヒナサイ」(200-201 頁) 一般医療関連例文は以上の例文のみ。</p> <p>現地一般住民に本格的に治療をしていたかどうかは不明。</p>
『日支會話』 (1914)	<p>看護の業務が章立てして登場。</p> <p>全書は「行軍、宿舍、傭役、輸送、工作、徵發及買辦、<u>看護</u>、慰撫、糾問」に項目立て。</p>
『日支會話』 (1918) 兵用圖書株式會社 1933 版も同版	<p>全書は「行軍、宿舍、傭役、輸送、工作、徵發及買辦、<u>看護</u>、慰撫、糾問、警戒」に項目立て。</p> <p>【文例】「此レハ頓服ダ歸ツタラ直グ飲メ 這是頓服的、你回家了就吃罷」(183 頁)「明日ハ來ナクトモヨイ 明天不必來」(187 頁)</p> <p>この文例から、この看護は、負傷兵に限定されたものではなく、駐屯地一般住民の治療をしていたものと見られる。</p>
『簡易滿洲語自習書』(1932)	<p>「於宿營地」の章の中に、「使役、器物借入、購入支拂、<u>衛生施療</u>、慰撫」と項目立てし、「衛生施療」に全 34 文を例示する。</p> <p>【文例】「臨時的醫院設在廟裡了。 有願意治病的就到廟裡去請醫官看看去罷」「臨時治療所ヲ廟内ニ設ケタ 若し希望者があれば直に彼處へ行つて軍醫に診察して貰へ」(277 頁)、「給你這個藥一天分三回吃 お前に此の藥を遣る一日三度に飲め」(279 頁)。</p> <p><u>衛生施療と項目を初めて立てたことは、關東軍が医療宣撫工作を意識的に開始したことを意味する。</u>該書の刊行は、一般將士に對して、現地医療の作戦上の重要性を知らしめ、医療に特化した『衛生部員ニ必要ナル滿洲土語』(1936)を生んだ。そして、現地医療の作戦上の重要性は、該書に續く關東軍參謀部『最新支那語軍事會話』(杉武夫, 1937)、攜帶軍用會話書の決定版『現地攜行支那語軍用會話』(杉武夫, 1940)や總合的軍用中國語書の決定版</p>

	『軍用支那語大全』（武田寧信・中澤信三, 1943）に引き継がれていく。
『衛生部員ニ必要ナル滿洲土語』（1936）	<p>衛生部員の爲に「衛生施療」に特化した會話集。</p> <p>診療業務[豫診(35 例文)、診断(86 例文)、治療(38 例文)、養生ニ關スル諸注意(23 例文)、病名及身體各部名稱(45 語)、傳染病(25 例文)]、衛生調査(31 例文)、衛生隊(37 例文)、教化行軍(29 例文)</p> <p>【文例】「夜裏有覺沒有覺。 夜ハ良ク眠ムレルカ。」「時常睡不覺。 良ク寝ラレナイ。」(22 頁)「你從多啱有病。 何時カラ病氣ニ成ツタカ。」(13 頁)「這是怎麼的了。 此レハ(創傷ヲ指シテ)何ウシタノダ。」(14 頁)</p>
『最新支那語軍事會話』（1937）	<p>「衛生施療」と章立てされて、全 32 文を例示する。</p> <p>【文例】「私ハ軍醫ダ、病氣デ 貧シクテ困ツテ居ル様ナ者ハ無料デ治シテヤル 我是軍醫官、若是有病の人家裡頭、有貧窮的人、我給他白治」(136 頁)、「臨時治療所ヲ廟内ニ設ケタ 臨時的醫院設在廟裡了。」「一日三回毎食服用セヨ 你一天分三回吃、每吃飯後吃一包」(137 頁)がある。</p>
『現地攜行支那語軍用會話』（杉武夫, 1940）	<p>上段の日本語はかな書き、下段は中國語。『最新支那語軍事會話』の「衛生施療」を「衛生隊」「診断施療」の 2 章に分割し、「衛生隊」では戰闘の衛生業務を扱い、「診断施療」では「衛生施療」より會話内容も詳しくして充實化させている。全 47 文を例示する。前掲『最新支那語軍事會話』の 3 例文は同文。また、その採録文例は『衛生部員ニ必要ナル滿洲土語』を参照している。</p>
『軍用支那語大全』（武田寧信・中澤信三, 1943）	<p>「施療」で大項目を立て、さらに「施療準備」、「診断」、「豫防注射」と診療過程に沿って構成されている。上段は日本語、下段は中國語として全 63 文を例示。</p> <p>【文例】「今日我々は此處で施療するから、手傳つて下さい。今天我們在這兒施療，給我們帮忙」(356 頁)、「病氣のものは來なさい、無料で診て上げる。 有病的來，給你們看病，不要錢。」(358 頁)、「お前達皆豫防注射を受けたか。 你們都打過防疫針嗎。」(375 頁)、「受けました、證明書をもつてゐます。 打過了，這兒有證明。」(375 頁) などである。</p>

日本軍は現地住民医療に既に『日支會話』（1918）頃には手を染めているようである。交戦時、交戦後の敵軍戦傷治療は、一般的な戦時治療行為であるが、そうではなくて、現地

住民医療に手を染めたのは、中國農村の衛生状態の悪さと醫療施設の不備に對して、同情と共に、宣撫上から重點施策となったと考えられる。インドシナ三國民族解放闘争で中國人民解放軍がビルマ潜入を目的として編まれた北京大學東方言語系ビルマ語科『緬文軍事會話手冊』（1971年6月刊本文210頁）には、戦俘工作（譯…捕虜工作）の中に、「給俘虜治病」（譯…傷病捕虜治療）という医療項目を位置附けたが、現地住民医療の項目はない。また、マレー進攻作戦に準備された昭和16年8月刊の大本營陸軍部『皇軍必攜〔實用〕馬來語會話』（大本營陸軍部, 1941）には、「宣撫」はあるが、「医療」の項目はない。中國での日本軍の戦場體驗の繼承の有無や、南方戦線に於ける現地住民医療の有無については、未調査である。

3. 日本陸軍の方言音への對し方

日本軍に於ける方言音に對するスタンスは、『衛生部員ニ必要ナル滿洲土語』『凡例』に「語學ハ一國ノ標準語ヲ教フルモノナレバ公文書、外交官、語學者ノ爲ニハ可ナルモ、我等皇軍ニ在リテハ僻地ニ轉戦シ、日常吾人ノ面接スル者ハ教養少ナク目ニ一文字ナキ農民ヲ以テ主トス（中略）我等軍人ニハ北京官話ヨリ寧ロ方言ニ通ズルヲ必要トス」というものである。

滿洲の駐屯地では、駐屯現地での活動という觀點から、その中國語への對し方は、口頭語の規範的中國語（北京官話）と共に現實の農民の中國語（舊來の口頭語）との両面に向き合うことに顯著に現われた。だから、この點で國語教育時期の中國語教師たちとは異なり、有知識階層にとっては時代遅れと評価されても、日本軍の最も役立つ會話書として日本敗戦まで、日本軍の最も役立つ會話書として『官話急就篇』が盛んに學習された²⁰¹。特に、北京、山東・遼東・滿洲地區に駐屯したことから、該地の參謀部が土語・土音に關心を持ち研究させたのは、當然の流れであつた²⁰²。そして、中國語への對し方の駐屯軍の基本的立場は、土語・土音で話す必要はない、つまり、北京官話で話すことを求められ、「土語・土音（主要には土音）」の混在した北京官話は聞き分けなければならぬという立場を採った。それゆえ、1932年に滿洲で刊行された『簡易滿洲語自習書』とそれまでの參謀本部編纂『日支會話』とでは、土音の扱いが異なる。そして、『簡易滿洲語自習書』は參謀本部に大きな影響を與え、參謀本部は1935年には東京の偕行社から内容は同じで縮小版の『速成滿洲語自習書』を刊行し、結果的には「医療」が宣撫工作の要と位置づけられた。しかし、1937年以降は、戦線が滿洲地區から長城内に擴大し、關東軍も同年刊『最新支那語軍事會話』

²⁰¹ 滿洲城第4012部隊昭和17年6月1日序刊『滿語教本 國境の暁 第壹卷』の内容は、冒頭に置かれた「發音と四聲」を除き、『官話急就篇』の「名辭篇」と「問答之上」をそのまま筆寫したB5版謄寫版印刷の私製テキストである。該テキストは部隊學習用に印刷配布されたもので、既に『急就篇』と改訂されて久しい『官話急就篇』がここで採用されている。戦地とは言え、『官話急就篇』の普及の程度を知ることが出来る。

²⁰² 軍人の著作に『北京俗語兒典』（下永憲次, 1926）、後掲の『山東省支那語ノ研究』（安倍貞, 1920）を舉例でき、また、權寧世『支那語辭典』は土語・土音の注記が多い。

では、「滿洲及ヒ支那ニ在リテ」と中國語の位置附けを變容させ、さらに、戰線を擴大し續けた結果、軍用會話書の決定版である二書『現地攜行支那語軍用會話』、『軍用支那語大全』では、各地の土語・土音に對して、滿洲地区のようには絞り切れず、通行する北京官話に收斂せざるを得ず、換言すれば、滿洲地区でのきめ細かさを捨てざるを得なかったのである。

【中國語特に土語土音に對する態度】 (下線は引用者による。)

書 名	中國語特に土語土音に對する態度	表 記
『日清會話』 (1894)	方言に言及はない。	北京官話カナ音表記
『日清對譯戰陣要語』(1894)	「關外各地到ル處各種ノ土音アリ悉ク之ヲ示スニ便ナラズ學者請フ實地ニ就キ之ヲ研究セラレンコトヲ」	北京官話カナ音表記
『袖珍實用滿韓土語案内』 (1904) インフォーマントは在滿 10 年の山東省吳明堂(在仁川)	「軍隊行動ノ使ニ資センガ爲メ特ニ軍事的着眼ヲ以テ編纂セリ」(1 頁) 「滿洲ニ用ヒラル、語ハ北京語若シクハ南清語ト大ニ差異アレバナリ、則チ遼東及滿洲地方ニ於ケル支那民族ハ山東ヨリ移住セル者其八九分ヲ占ムルヲ以テ山東語從ツテ多ク通用セラル」(2 頁)」	北京官話文の土音カナ音表記
『山東省支那語ノ研究』(1920)	<u>青島守備軍が大正 6 年秋、山東鐵道沿線各隊附陸軍通譯に課した「其在勤地附近ニ於ケル土語ノ比較研究」の資料を參考。北京官話の習得者すらも山東では役に立たないことを踏まえ、「北京語を基礎として」「山東語と對照研究し其習得に資」するため、山東方言を東部、西部、中部とに分類注記しながら、北京官話音と山東方言音とを對照させ、『官話急就篇』單語と會話文とをそれぞれに山東方言を表記したものである。</u> (「緒言」)	
『日支會話』 (1914)	「發音ハ專ラ北京音ニ據ルヲ以テ他省ニ到レハ自然多少ノ相違アルヲ免レズ」	北京官話カナ音表記
『日支會話』 (1918) [兵用圖書株式會社版 (1933) も同版]	「支那語ハ各地音ヲ異ニスルモ本書ハ最モ廣ク通スル北京官話ニ依ル」	北京官話カナ音表記

『簡易滿洲語自習書』(1932)	「第一線將兵ガ親シク滿洲國人ノ中ニ在リテ(中略)必要ナル最小限度ノ簡易ナル滿洲語ヲ會得セシメントスル(中略)本書ニ集録セル滿洲語ハ奉天省地方語ヲ主トシ發音ハ應用範圍狹キ一地方ニ局限セラレタル特種ノ訛音ヲ附セズ廣ク滿洲國內ニ行ハルルモノノ外概ネ北京音ニ依レリ。而シテ自ラ云フ場合ニハ訛音ヲ操ル必要ナキモ土語ヲ聞キ分クル上ノ參考ノ爲卷末ニ北京滿洲對照發音表ヲ附セリ。」	北京官話カナ音表記。 卷末ニ北京滿洲對照發音表。
『かなつき 日滿會話』(1933)	「「滿洲語」と銘を打って見た處で、やはり中華民國の標準語たる「北平語」の系統範圍を出づるものではない、」しかし、「初學の間は、實地の練習に乏しい結果「當方の言ふ事」は、先方に通ずるが先方の音は、中々聞きとれないのである、著者は其の點を顧慮して「 <u>現地</u> の土音」と「 <u>特種</u> の方言」に即して此に重點を置き」編まれたものである。	北平官話カナ音表記であるが、土音表記を併記。必要土語を掲載。
『衛生部員ニ必要ナル滿洲土語』(1936)	「自ラ著シキ方言、土語、習慣語ノ存スルハ明カナリ、語ニヨリテハ北京官話ニテハ全ク意ヲ通ゼザル場合少ナカラズ、此ノ爲ニ我等軍人ニハ北京官話ヨリ寧ロ方言ニ通ズルヲ必要トス故ニ本書ニハ特ニ土語トシテノ説明ニカヲ注ギタリ。」(「凡例1」)	北平官話土音カナ表記
『最新支那語軍事會話』(1937)	「 <u>滿洲及ヒ支那ニ在リテ</u> (中略)從事スル第一線將士並通譯ノ任務達成ノタメ(中略)最小限度ノ必要ニシテ簡易ナル支那語(中略)本書ハ標準語タル北平官話ノ發音ヲ片假名ヲ以テ表ハセリ。」	北平官話カナ音表記
『現地攜行支那語軍用會話』(1940)	方言に言及はない	北平官話カナ音表記
『軍用支那語大全』(1943)	「支那語は、標準語である北京語を選ぶべきである、これは通用區域が極めて廣い。 <u>滿洲・北支・中支は大體北京語の通用範圍である</u> 、又方言の行はれる地域にしても、有識者は大抵北京語を理解する、且文章は支那全土を通じて共通である。」(緒言)	北平官話カナ音表記

4. 關東軍などが記録した滿洲方言音

滿洲の土音を比較的多く記載した資料として、時間順に『袖珍實用滿韓土語案内』

(1904)の土音カナ表記、『支那語速成講座』(1927)の「正音對照關東州土音例」、『簡易滿洲語自習書』(1932)の「北京滿洲對照發音表」、『衛生部員ニ必要ナル滿洲土語』(1936)の土音注記がある。これらの資料から、滿洲地區での土音が具體的にどうとらえていたのかを見てみよう。

まず、その土音の採録地などについて、

『滿韓土語案内』では、「遼東及び滿洲地方の土音」と規定し、

『支那語速成講座』では、「關東州土音例」と規定し、

『簡易滿洲語自習書』では、

「奉天省地方語ヲ主トシ發音ハ應用範圍狹キ一地方ニ局限セラレタル特種ノ訛音ヲ附セズ廣ク滿洲國內ニ行ハルルモノノ外概ネ北京音ニ依レリ」

と規定し、

『衛生部員ニ必要ナル滿洲土語』では、

「本書記載ノ土語ハ主トシテ新京附近及此ノ附近以北ニ通ズ、滿鐵沿線ニ在リテハ奉天以北ハ大體ニ於テ大差ナキモノト認メテ可なり、吉林方面ハ滿鐵沿線ヨリ隔ルコト僅カナルモ割合ニ差大ナリ、但シ先ツ大體ニ於テ大差ナキモノ見テ可ナリ。」

と規定している²⁰³。

そこで、これら4種の會話書に採録された土音は、以下の3表の通りである。²⁰⁴

(A) 表は、『簡易滿洲語自習書』を中心に他の3書と比較した土音表。

(B) 表は、(A)表以外の土音で、『袖珍實用滿韓土語案内』を中心に『衛生部員ニ必要ナル滿洲土語』とを比較した土音表。

(C) 表は、『衛生部員ニ必要ナル滿洲土語』のみに記載の土音表。

なお、『衛生部員ニ必要ナル滿洲土語』からの轉記方法は以下の通りである。

- ・表中の釋文は原書による。

²⁰³ 關東軍の昭和11年當時の展開地區は、次の通りである。關東軍司令部・第二獨立守備隊司令部[新京(滿洲國建國前は旅順)]、獨立守備隊司令部・獨立守備歩兵第一大隊(公主嶺)、獨立守備歩兵第二大隊・第一獨立守備隊司令部(奉天)、獨立守備歩兵第三大隊(大石橋)獨立守備歩兵第四大隊(連山關)、獨立守備歩兵第五大隊(鐵嶺)、獨立守備歩兵第六大隊(鞍山)、第三獨立守備隊司令部(海拉爾)、第四獨立守備隊司令部(牡丹江)、第五獨立守備隊司令部(哈爾濱)である。そして、各司令部を繋ぐ鐵道の線を考えればよい。

²⁰⁴ 採録上の注意點をしるすものに、『簡易滿洲語自習書』と『衛生部員ニ必要ナル滿洲土語』とがあるが、『簡易滿洲語自習書』では、「滿洲音とあるは滿洲一部の訛音○印は本書使用文字」として「當字」を明示するが、『衛生部員ニ必要ナル滿洲土語』では、「彼等ニハ文字ヲ解スル者非常ニ少ナシ、唯生涯ヲ言ヒ習ハセル發音ノミニテ終始シアリ、故ニ發音ニミハ知り得タルモ如何ナル文字ニ該當スルヤ筆者ノ知識ノミニテハ遠ク知り得ザル點アリタルヲ以テ當字ヲ使用セル部分モアリ、」として、「當字」には共通認識を持ちながらも、明示は少ない。

- ・原書には該書の注音に関する記述はない。
- ・發音表記の不統一、矛盾する記述が有るが、明らかな誤記以外、そのまま轉記した。
- ・聲調表示には、變調による第 2 聲表記、輕聲による第 1 聲表記など本來の聲調表記ではないものもあるが、明らかな誤記以外はそのまま轉記した。
- ・「A ニ近ク發音ス」、「A ノ如ク聞ユ」に類する注記を持つ場合、A をその發音とする。
- ・「ト發音セザレバ理解セズ」に類する注記を持つ語には、その右肩に＊を附した。

(A) 表 『簡易滿洲語自習書』を中心に他の 3 書と比較した土音表

『簡易滿洲語自習書』 「北京滿洲對照發音表」 滿洲音	『支那語速成講座』 の正音對照關東 州土音例中の土音	『滿韓土語案内』	『衛生部員ニ必要ナル滿洲 土語』(1936)
(奉天省地方語を主)			(新京附近及此の附近以北)
茶, 差, 岔, 叉, 挿(ツァー)	茶, 差, 岔, 查(ツァ)	(ジャー)	「岔氣兒*」 tsa ⁴ -ki ⁴ -rh ¹
扎, 筍, 乍, 詐, 炸(ジャー)	炸(ジャ)		
柴, 拆 (ツァイ)	柴(ツァイ)		「柴*」 tsai ²
摘, 宅, 擇, 寨, 齋(ジャイ)	宅(ジョ)		
站, 棧, 暫, 毡 (ジャヌ)	站, 棧 (ツァヌ)		「站*」 tzan ⁴
長, 常, 昌, 廠, 唱 (ツァン)			
張, 長, 丈, 賬, 章(ジャン)			
抄, 吵, 炒, 鈔, 朝(ツァオ)			
招, 找, 策, 照 (ジャオ)		找(ツァオ)	
街, 楷 (ガイ)		介(カイ)	
吃, 尺 (ツイー)			「吃」北滿ニアリテモ chih ¹ 北京官話ト同ジ、滿鐵本線より離れた吉林方面では tzu ¹ , 「吃飯」=「飲食」 「齒*」 tzu ³
知, 之, 紙, 只 (ジャー)	指, 枝, 至, 紙, 芝 (ジ)		「肢*」 zu ² 「指頭」 zu ³ -tō ² 「治*」 zi ⁴ 「脂*」 tsu ¹ 「手指頭」 shū ³ zū ² to ³
戳 ²⁰⁵ , 觸 (ツォー)	戳(ジョ)		
卓, 着, 酌 (ジョー)	桌(ツォ)		「得*」 do ² 「過*」 go ⁴ 「昨*」 zō ² 「多*」 do ² , to ² デハ通ジズ 「火*」 ho ³

²⁰⁵ 原文は「戮」(lu⁴)と誤る。

			「作」「做」 zo ⁴ 「護*」 ho ⁴ 「鍋*」 go ¹ 「凍着*」 ton ⁴ zu ³ ノ後ハ皆「拉」ヲ 用イ、「了」ヲ用イタ者ナシ 「凍*」 ton ⁴ 「凍瘡*」 ton ⁴ -tsan ¹ 「着」 zyo ⁴ , 「隨着」 ノ「着」 zo ² 「坐*」 zo ⁴ ニ傾ク「掇*」 do ⁴ 「活動」 ho ² ton ¹
出 (ツー)			
諸, 竹, 主, 住 (ゾー)			
抓 (ツォワ)	抓(ツォア)		
川, 穿, 船 (ツォワス)	川, 穿, 船, 串 (ツォアス)	船(ツォワン)	「量船」 un ⁴ tzaün ²
窗, 床 (ツォワン)	窗, 庄(ツォアス)	窗(ツォワン)	「創*」 tzoan ⁴ (ママ) 「床」 tsowan ¹
莊, 裝, 壯 (ツォワン)			
春 (ツウス)	春, 唇, 鶉(ツウス)		「唇*」 tson ² 又ハtson ²
准 (ヅウス)			
沖, 虫 ^{ママ} (ツォン)			「蟲」 chon ²
中, 鐘, 種, 衆 (ゾオン)	中, 種(ツォン)	重(ゾオン)	「種莊傢*」 chon ⁴ tzoan ¹ gya ⁴ 「中*」 zon ¹ 「重*」 chon ¹ 「腫*」 chon ³ 「腫*」 zon ³
然, (ヤヌ)	染(ヤース)		「然」 jen ² 「自然*」 tzu ⁴ -jen ² 「傳染病*」 tzan ² -jen ³ -ping ⁴
讓 (ヤン)	讓(ヤーン)		讓 少シ長ク「ヤーン」
饒, 擾, 繞 (ヤオ)	擾(ヤオ)		
熱 (イエー)	熱 (イエ)		「熱*」 ie ⁴
人, 仁, 忍, 認 (イヌ)		人(イン)	「人*」 in ² jên ² ニテハ理解セズ
扔, 仍 (ノン)			「棄」 lon ³ 辭書ニハ chi ⁴ アレド北滿 ニテハ知ル者ナク「扔」ヲ示ス
日 (イー)	日 (イ)	日(イー)	「日期*」 ih ⁴ ki ¹ 「日本軍*」 i ⁴ pen ³ gün ¹ , i ⁴ pen ³ zün ¹
肉 (ヨウ)	肉 (ヨ)		
如, 入, 褥 (ユー)	乳, 褥, 儒 (ユイ)		「揉」 yu ² 「入」 yü ⁴ 又ハ yo ¹
軟 (ヨワヌ)	軟 (ヨアーヌ)		「若」 yao ⁴ , yo ⁴ ハ聞カズ
肱, 割 (ガー)	割, 渴, 磕(カ)		
	葛, 蛤(ガ)		
攔 (ガォ)	攔 (ガォ)		「攔」 gao ¹ ノ如ク稍短カク發音

雷, 累, 涙 (ロイ)			
掃, 嫂, 臊 (ソー)			「澡*」 so ³ 又ハ zao ³ 「告*」 go ⁴ 「掃*」 so ³
砂, 沙, 殺 (サー)	砂, 殺 (サ)		
晒 (サイ)	晒 (サイ)		
山, 扇, 鱔 (サヌ)	山 (サン)	山(サン)	「山*」 san ¹ , shan ¹ ニテハ理解セズ
商, 傷, 賞, 上 (サン)			
身, 伸, 深, 甚 (セヌ)			「伸*」 shin ¹ 「身體*」 shin ¹ tei ³ 「身」 shin ¹ , shên ¹ ニテハ理解セズ 「甚麼」 (早口) shi ² -ma ¹ , 「甚麼」 (ユックリ) shi ² n-mo ¹ (有識者は) shê-ma ¹
十, 實, 使, 事, 是 (スー)	氏, 虱, 事, 是 (ス)	是(スー) (十シー) 匙(ソー)	「是」 su ⁴ (ママ) 「使*」 sū ³ 「試」 sū ⁴ 「時候兒*」 sū ² hou ⁴ (ê)-rh ¹ 「時候」 sū ² -hō ⁴ 「時」 shih ² ヨリモ sū ² 「氏」 su ⁴ (ママ) 「事情*」 su ⁴ ching ^(ママ) 「事*」 su ⁴ (ママ) 「近視*」 kin ⁴ -su ⁴ (ママ) 「收拾」 shū ¹ shi ² 「紅十字會*」 hon ² shi ¹ zū ⁴ hoi ⁴
書, 署, 數, 樹, 嗽 (スー)	贖, 數, 屬, 熟 (スウ)		「嗽*」 su ⁴ 「咳嗽」 ko ² so ⁴
刷, 耍 (ソワ)	刷 (ソァ)		「書」 sho ¹
摔, 帥, 率 (ソワイ)	摔 (ソァイ)		
拴 (ソワヌ)	拴, 雙, 爽, 霜 (ソアン)		
誰, 水, 睡, 稅 (スイ)	誰, 水, 睡, (スイ)	誰, 水(スイ)	「睡覺」 sui ⁴ zyo ⁴
說 (ソー)			
端, 短, 段 (ダヌ)	斷, 團, 段 (タヌ)		「斷*」 dan ⁴ 「亂*」 lan ⁴
	給(コ)		
	虹(チアン)		
	順 (スン)	順(スン)	
	參(セン) (參崴)	參(シン)	
	學(シオ)		
	掙(サオ)		
	訴(スン)		
	寺(ツ)		「痔」 tzū ⁴ , 知ル者極ク稀。
	松(シュン)		

	重(チェン) ^{ママ}		「重」 chiong ²
	禎 (チオヌ)		
	暖(ナース)		「暖和*」 nan ³ -ho ² 「溫和*」 ũn ¹ -ho ² And ノ 「和」、 hai ⁴ , ho ^{2,4} アレド北満ニ テハ ho ² ヲ使用スルモノノ如シ
	泥(ミ)		
	黒(ホ)	黒(ヘー)	
	北(ボ)	北(ボー)	
	薄(ボ)		
	麥(モ)	麥(モー)	
	藥(ヨ)		
	磊(ラ)		
	閏(ユイヌ)		
	榮(ヨン)		
	瑞(シュイン)		
	生, 牲, 昇, 省(ソン)	省(スン)	「生*」 sun ¹ (ママ) 「衛生」 wi ⁴ sun ¹ (ママ) 「營生*」 ying ² sũn ¹ 目下ノ者ニ使用 「繩*」 shin ²

(B)表 (A)表以外の土音で、『袖珍實用滿韓土語案内』と『衛生部員ニ必要ナル滿洲土語』とを比較した土音表

『滿韓土語案内』	『衛生部員ニ必要ナル滿洲土語』
城(チン)	
眞(チン)	「診*」 chin ¹ 「胗*」 zen ¹ 「診察*」 chin ¹ tza ²
九(キュ)	「救*」 日本語ト同ジク kyu ² 「球*」 日本語ト同ジク kyu ²
江(キヤン)	
橋, 角, 叫(キヨオ)	「覺*」 gyo ⁴ 又ハzyo ⁴ (有覺沒有覺の際は zyo ⁴) 「覺着*」 gyo ⁴ zo ¹ 「脚*」 gyao ³ 「脚心*」 gyao ³ -shin ¹ 「脚背*」 gyao ³ -pei ⁴ 「脚趾頭」 gyao ³ -zü ³ -to ² 「脚指頭蓋」 gyao ³ -zü ³ -to ² -gai ⁴ 「脚後根」 gyao ³ -ho ⁴ -ken ¹ 「足甲*」 zü ² gya ³ 「叫」 ziyao ⁴ 「橋*」 kyo ²
家(キヤー)	「家」 zya ¹ , 輕ク gya ¹ トスレバ無難, 「家裡」 ノ時 gya ¹ 「駕」 gya ⁴ 「加*」 gya ¹ 「架子*」 gya ⁴ zü ¹ 「勁*」 gi ¹
今, 近, 金(キン)	「今*」 kin ¹ 「今年」 kin ¹ -nien ² , 日本語ニ近ク kin ¹ -nen ² ニテモ可 「近視*」 kin ⁴ -su ⁴ (ママ) 「近*」 kin ⁴
幾, 鷄, 給, 吉(キー、キイ)	「幾*」 gi ³ 又ハ zi ³ 「急」 gi ² 又ハ zi ² 「給」 gei ³ 又ハ gi ³ 「自己*」 zugi ³

	「結」 gie ² 又ハ zie ² , chieh ² ニテハ理解セズ 「健*」 ken ⁴ 「蹶*」 kie ² 「秘結*」 mi ⁴ kie ² , pi ⁴ chieh ² (ママ) ニテハ理解セズ
起, 旗(キー, キイ)	「日期*」 ih ⁴ ki ¹ 「起」 ki ³ 「氣*」 ki ⁴ 「騎*」 ki ² 「忌*」 ki ⁴ 「痣*」 ki ⁴ 「旗*」 ki ²
軍(キュン)	「軍*」 gūn ¹ 又ハ zūn ¹
去(キュイ)	「去*」 chūi ⁴ 又ハ kūi ⁴ 「曲*」 kūi ¹ 「取」 chūi ⁴ (ママ)
縣, 鹹(ヘン)	「點」 dē ³ , tien ³ ニテモ可 「臉」 len ³ 「邊」 bien ¹ , ben ¹ 「現在」 hsen ⁴ zai ⁴ 「外邊兒」 wai ⁴ -be-ru 「先」 hsen ¹ , hsien ¹ ニテハ理解セズ 「癲」 hsen ³ 理解スル者僅少
行(ヒン)	「刑*」 hin ² 又ハ hing ²
下(ヒヤー)	「瞎子*」 hya ¹ zū ¹ 「下」 hi-ya ⁴ ノ如ク聞コユ 「下同*」 shia ⁴ hoi ²
鄉(ヒヤン)	「胸*」 hūn ¹
歲(セエ)	「歲」 sui ⁴ 日本語ノ 「水」
隊(テイ、トイ)	「嘴*」 zoi ³ 又ハ zui ³ 「回*」 hoi ² 「對*」 toi ⁴
本(ブン)	
有(ユー)	
没(モー)	
白(ボ、ボー)	「白*」 ニハ po ² モアルガ使用セヌ, bai ²
車(チェー、ヂェー)	「自動車」 zu ⁴ don ⁴ chē ¹

(C) 表 『衛生部員ニ必要ナル滿洲土語』 のみに記載の土音表。

「地」 di ⁴ , ti ⁴ ニテハ理解セズ 「道*」 dao ⁴ 「早*」 zao ² 「代*」 dai ⁴ 「別*」 bie ² 「動*」 ton ⁴ 「辦*」 ban ⁴ 「大*」 da ⁴ (「大概」 ノ時ハ ta ⁴ gai ⁴) 「倒」 dao ³ 「便*」 bien ⁴ 「怕」 ba ⁴ , pā ⁴ ニテハ理解セズ 「共*」 gon ⁴ 「刀*」 dao ¹ (刀子ノ時ハ tao ¹), 「害」 hai ⁴ 「使菜刀切的麼」 ノ 「切」 ノ代リニ 「害」 ヲ使用, 「害」 ハ 「切」 モ 使用可
「個」 ga ⁴ 又ハ go ⁴ 又ハ ko ⁴ 「可」 kà ³
la ¹ ハ過去ノ 「了」、滿洲ニテハ 「了」 ガ語尾ニツイテ lyo ¹ 又ハ liao ³ ノ如ク使用 「尿」 nyo ⁴ 日本語ト殆ド同ジ 過去, 條件ノ 「了」 la ¹ ヨリ lyo ¹ ト云ヘバ理解セシメ易シ 「鳥」 niyol ³ 「ニョル」 ト 「ニャオ」 ノ中間
「年」 nien ² , nen ²
「血」 hsüeh ⁴ , hstüeh ³ hstüeh ⁴ フ主ニ使用 「血*」 hie ⁴ 「吐血」 to ⁴ -hie ³ 又ハ to ⁴ -hsüe ³
「怎麼」 za ² -n-ma ³
「姐々」 zē ² zē ³ 「大姐」 ta ⁴ zē ³ 中流以下ニノ姉, 「姉」 zu ³ (ママ) 「姉」 ノ代リニ 「姐」 chierh ³ モ可
「脈*」 mai ⁴ (引用者補注: Wade 式發音表記では mo ⁴) 瞧一瞧脈(土語) = 看々病
「初次*」 tzu ¹ -o-zuto ⁴ (ママ)
「完全*」 wan ² chen ¹ 第2聲+第2聲⇒第2聲+第1聲

「盜」 to ¹ 「溝」 ko ¹
「跳」 tyo ⁴ 「ティヨー」 ナリ
「喘*」 tzwan ³ 「ッウアン」
「舌*」 shie ²
「神經」 shin ² gin ¹ 又ハ shin ² zin ¹ 「經絡」 gin ¹ lo ⁴ 「經*」 gin ¹
「鬚子」 ho ² -zū ¹
「耳朶*」 ar ² -da ³
「搔」 sao ³ ト讀ム者ナシ、kawai ト讀ム
「臂*」 pi ⁴ 又ハ hi ⁴
「按」 an ⁴ (non ⁴ , nan ⁴ ト發音セルヲ聞キシコトアリ) 「愛」 nai ⁴
「撰」 zowan ⁴
「跟」 kan ¹ 又ハ kun ¹
「味」 wu ⁴ 「臭味」 chiu ⁴ ur ⁴ 日本語「忠」「賣ル」ニ近似
「願意*」 yüwan ⁴ i ¹ 「原」 yüen ²
「針*」 chên ¹ ナルモ zen ¹
「拳」 kūan ² , ken ² ニ近く發音
「立」 liū ⁴
「粥*」 chyū ¹ 日本語ノ忠ニ似ル
「沾*」 chen ¹
「更*」 kung ¹
「光*」 kowan ¹
「療」 lyo ²
「效力」 hyao ⁴ li ⁴ 「ヒヤオリ」ノ如ク發音「效」 hsiao ⁴ ニテハ理解セズ
「内科*」 nei ⁴ -kua ¹ 「外科*」 wai ⁴ -kua ¹
「功」 gūn ⁴
「見*」 zien ⁴
「小產*」 shō ² -san ³
「濁」 tzo ²
「瘟」 un ¹ 「溫和」 ũn ¹ -ho ² 、
「毒」 to ⁴ 「骨*」 go ³ 「骨頭*」 gu ³ -to ² 「骨頭節兒*」 gu ³ -to ² -chia ² -er ¹
「篤*」 to ³ 「汚*」 wo ¹
「瘡」 tsan ¹
「癰*」 yao ¹ 「疔*」 tei ¹
「菜*」 sai ⁴
「雀盲*」 choi ³ -mō ² -yen ³ 「雀*」 chol ³

「許」 hyu ²
「勞」 lo ²
「膿」 nan ³
「瘦」 北滿 so ³
「黃疸*」 hoan ² -dan ⁴
「肥*」 fui ² 「肺」 fui ⁴
「爹」 tei ¹ 「乾爹」 理解スル者ナシ
「聾子」 lon ² zũ ¹
「頸*」 kan ³ 又ハ gan ³
「腿*」 tei ³
「奶頭」 nai ³ tol ² 「頭*」 tol ² 「脚指頭蓋」及其ノ他類似ノ場合ニハ「頭」 tol ² ニ近ク發音スルコトヲ可
「卵孢子」 lan ³ pao ¹ zũ ¹ 「卵子」 lan ³ zũ ¹
「胃*」 wi ⁴ 「衛*」 wi ⁴ 「衛生」 wi ⁴ sun ¹ (ママ)
「吐」 日本語ノ如ク to ⁴ 「肚子」 to ⁴ zũ ¹ 「嘔吐」 a-o ⁴ -to ¹ 「アオト」「吐血」 to ⁴ -hie ³ 又ハ to ⁴ -shüe ³ 「吐沫*」 to ⁴ mo ⁴ 「沫」 ハ ma ⁴ ニ近ク聞ユ
「尿」 suũ ³
「的*」 de ¹ ニテ可
「所*」 shoa ³ 「繃帶所*」 pan ⁴ tai ⁴ shoa ³
「村」 son ¹ 日本語ト同ジク發音
「險」 shin ³
「屍體*」 su ¹ tei ³ (ママ)
「進*」 zin ⁴
「射」 shê ⁴ ト shih ² トアルガ、北滿ニテハ she ⁴ 「射」 shie ⁴
「話*」 hoa ⁴
「聽*」 ten ¹
「臭」 chiu ⁴
「井*」 zien ³
「旁」 pang ⁴ ト pàng ⁴ ノ2音アリ
「握*」 wo ³ , 北滿ニテハ専ラ wo ³ ヲ使用シ wu ⁴ ハ少ナキガ如シ
「塵」 zin ² , chin ² ト發音セバ無難「彈塵」ハ理解セザル者多シ、灰彈一彈ハ何人ニモ理解セシメ得タリ
「設*」 she ⁴ 又ハ shie ⁴
「燙」「ダーン」ト長ク引カネバ理解セズ
「土牆*」 to ³ chan ¹
「協力*」 hie ² li ⁴
「敵*」 tei ²

「楷」 kai ³ トヨマズニ zie ³ ト讀ムコトアリ理不明
「禁」 zin ⁴
「官*」 kowan ¹ 「當官*」 dan ¹ kowan ¹ , 「將校」 chang ¹ hsiao ⁴ 一般ニハ使ハナイ將校ハ「當官的」ガ一般的
「規*」 guoi ¹
「工夫*」 gun ¹ fu ¹ ヌハ gon ¹ fu ¹
「困難*」 kon ⁴ nan ⁴
「窮*」 zün ²
「定*」 den ⁴
「戊」 元來 shu ⁴ , shin ⁴ 又ハ wu ⁴ ト發音スレバ兎ニ角理解セシムル
「希*」 hi ¹
「約*」 北滿ニアリテハ yo ¹ ト發音シ, 特ニ i-yo ¹
「通」 ton ¹
「從*」 tson ²
「等」 don ³
「減*」 zien ⁴
「預」 yüi ⁴
「祖」 zu ³
「多大」 to ² da ⁴ , to ² ta ⁴ ニテモ不明ト云フニハアラズ「多少」ノ時ノ「多」 do ¹ , to ¹ デハ通ジナイ
「吊」 diao ⁴
「疙瘩*」 ga ¹ da ²
「躺」 ハ「ターン」ナリ
「總」 zon ³
「分」 fun ¹ , fen ³ (引用者補注: Wade 式發音表記) ニテハ不可
「横*」 han ²
「消化」 sho ¹ -hua ⁴ 「消」ヲ長クユックリ「化」ハ極メテ輕ク。「剋化」 kōhua ⁴ ニテモ可「消毒」 sho ¹ to ⁴
「打哈梯」 アクビ「梯」 tei ¹
「疹子*」 chin ³ zu ¹
「瘋」 fon ¹
「睛*」 zin ¹ 「眼睛」 yen ³ zin ¹ , engine ト相似タリ
「足*」 zü ² (ママ)
「手爪*」 shou ² zao ³
「膈*」 go ² 「隔*」 go ²
「嗜」 tzan ¹
「桶*」 ton ⁴
「胳膊拈 ^(ママ) 」 gua ³ pi ² gul ⁴ 辭書ニ見當ラズ「婦兒*」 ful ⁴

「換*」 hoan ⁴
「槍」 chuan ¹
「鐵」 tieh ³ ガ te ³ ニ傾ク如ク發音ス
「傾」「リーン」 ト長ク發音
「借*」 zie ⁴
「缸*」 gan ¹
「兒*」 erh ² ヨリモ rh ²
「子」 zü ³ ニテ可(引用者補注: Wade 式發音表記では tzu ³)
「那個」 na ³ ko ⁴ ニテハ理解セズ na ³ ga ⁴ 疑問詞ナラザル「那」 na ⁴ ko ⁴ ノ時ハ na ⁴ ga ⁴ , 「那麼」 na ⁴ -ma ¹
「可」 ka ³
「都」 to ¹
「弟」 tei ⁴ 「哥哥」 ka'ka ¹ 中流以下ニノ兄
「啗」 tzan ¹ ヌハ zan ¹ , 「多啗」 ノ時ノ 「多」 do ¹

滿洲地区の土音について、總括的な記述が、『衛生部員ニ必要ナル滿洲土語』の「凡例」にある。それは以下の通りである。

「滿洲ニ於ケル土語ハ日本内地ト稍近似セル點アリ。支那語全般ヨリ見ルモ日本語ニ最モ近似ス、日本内地ニ在リテハ、關東、東北ノ順ニ北ニ進ムニ連レテ「ズーズー辯」ト成ルモ、滿洲語モ北京官話ニ比較セバ、コノ感特ニ著明ナリ、故ニ往年 Mr. Tomas Francis Wade ニヨリテ紹介セラレタル北京官話ノ發音法ヲ、「ズーズー辯」ヲ以テ讀ムノ心持ニテ可ナリ」と記している。

上記の(A)表は、團音、尖音の區別をしない『簡易滿洲語自習書』、『支那語速成講座』グループと團音、尖音の區別をする『滿韓土語案内』、『衛生部員ニ必要ナル滿洲土語』グループとに二分できる。これは本論文 141 頁で引用した那須清の「關東州一帯では山東方言が使われていて」との指摘と異なる。その理由として前者は、「奉天附近」を採録地域としたため、同地ではこの點は北京官話の優勢地區であると假定すれば、この矛盾は解消する。また、前者グループは-n と-ng とを「一ヌ」と「一ン」で區別するが、後者グループは共に「一ン」で處理し區別していない。

兩者に共通するのは、北京官話の卷舌音が全て、卷舌化せず、 $r \Rightarrow i$, $sh \Rightarrow s$, $ch \Rightarrow c$, $zh \Rightarrow z$ と對應している。「所」のように反對に $s \Rightarrow sh$ の例もある。母音は、 $ie \Rightarrow ai$ の對應が目立つ。

ほかの點は、多數例示の『衛生部員ニ必要ナル滿洲土語』によれば、 $en \Rightarrow un$, の對應のほか、 $ou \Rightarrow u$, $uei \Rightarrow ui$, $ian \Rightarrow en$, $uan \Rightarrow an$ など母音の短縮對應と無聲音の濁音對應が見られる。

5. 日本陸軍の中國語に對する認識の變化

戰線の擴大の結果、軍用會話書決定版というべき二書『現地攜行支那語軍用會話』(杉武夫, 1940)、『軍用支那語大全』(武田寧信・中澤信三, 1943)が生れたが、とりわけ、『軍用支那語大全』には、日本軍のこれまでの中國語への對し方の大きな變更、即ち、中國語が舊來の會話に對するばかりでなく、新來の口語文にも目配りしなければならなくなっているという變更が見て取れる。そこで、これについて見てみよう。

『軍用支那語大全』の注目すべき點は、「第一篇 會話篇」、「第二篇 文章篇」とし、さらにこれを「第一章 白話の部」と「第二章 文話の部」に分けている點である。それまでは、「第二篇 文章篇」といえば文語體のみであったものが、白話體(口語體)の文章に言及し始めたのである。そして、「白話の部」には傳單、通告、布告、祝詞の文例を掲載し、「文話の部」には禁札、立札、告示、布告、通告、式辭、招待狀の文例を掲載している。これについて、同書 425 頁に

「從來はこれら(傳單、通告、布告を指す……引用者)は概ね文話(文語體)を以て爲されたのである。(中略)處が時代の推移に連れ支那にも白話文(口語文)が盛んになつて來たので、反つて内容の如何に依つては民衆の理解を早める爲めにも、うんと碎けて白話文を用ひた方が更に其効果を大ならしめることゝとなつた。俄然滿洲事變から白話文を以て表現せられたものが續々と登場して來た。」

と記している。

「俄然滿洲事變から白話文を以て表現せられたものが續々と登場して來た。」とは、口語文が一般的な文章として、時間的には滿洲事變後、大いに用いられるようになって來たということを意味しているのではない。滿洲事變後、軍事上の文章に、主要には傳單であるが、それらに口語文が澤山用いられるようになって來たことを指しているのである。そして、「俄然滿洲事變から」とあることは、その傳單の内容は、當然、中國共產黨の爲せる反日反滿運動であつたことを意味している。なぜ、中國共產黨が白話文を使用したのか。中國共產黨が依據した階層、即ち、主要なプロパガンダ對象は、文語文の理解できる階層、即ち、有識階層ではなく、「教養少ナク目ニ一文字ナキ農民」層であつたからである。だから、誰かが音讀してやりさえすれば理解できるように書かれた、單純な論理で構成された口語文である傳單が求められたのである。「教養少ナク目ニ一文字ナキ農民」層への「煽動」の手段としては、舊來の文語文に頼るのではなく、白話文でなければならなかつたのである。だから、中國共產黨がその創立から、黨内文書・黨外宣傳文書の白話化と白話文の規範化に熱心であつたのは、中國共產黨の依據基盤に由来している。一方、日本軍の口語文への關心は、狹義には、現代中國語の胎動の影響を受けての轉換ではなく、中國共產黨の農村への浸透という政治狀況の下で、浸透する口語文にも目を向けざるを得なくなつた、即ち、口頭會話だけの對し方を轉換せざるを得なかつたものと見るのが自然である。しかし、廣義には、中國語教育理想に對極的な態度を採っていた日本軍の中國語の對し方にも、現代中國語へと發展していく國語の姿が垣間見えるようになったのである。

第四節 日本占領期青島中國語・日本語關係年表

〔自大正 3 年至大正 12 年〕

1. はじめに

本節で取り上げた日本占領期の青島での中國語教育は、日本外地・滿洲における中國語教育の特徴——中國語教育と日本語教育とが表裏一體の關係にあったこと——を示す一つのモデルケースを見ることができる。それゆえ、その解明のために、日本語學校と支那語學校の動向ばかりでなく、更に、日本人小學校の教員人事にも目を向けた。

臺灣に於ける日本語教育は、國語教育として明確な方向の上に内地と同様な自立を求めたが、中國語教育との關係は、臺灣方言ということも關係して、直接には表裏一體としての在り方を示していない。しかし、臺灣→朝鮮、そして、滿洲→北支と向かった日本語教育は、臺灣・朝鮮での小學校國語教育のノウハウがそのまま滿鐵沿線の日本語教育、そして、表裏一體としての中國語教育に繼承されたと考えられる。子供を対象とすれば子供の、知識人を対象とすれば知識人の、つまり、対象の内實に見合った語學教育があると考えられるように、初等日本語教育に力点を置いた臺灣・朝鮮での経験は、滿洲で教授法が盛んに議論され、問題にされたことに見られるように、やはり、初等教育に力点を置くという滿洲での日本語教育と中國語教育の性格を決定づけたと思われるのである。

さて、日本の中國語教育に楔を打ち込んだものは、五・四以降の中國知識人の一連の活動であり、そのことに敏感に反應したのは、日本内地では神谷衡平らであり、外地では飯河道雄(日本語教育においても著名)、中谷鹿二らであった。しかし、北京近代科學圖書館の日本人教師(何れも「帝國大學出身者」)が、「教養の日本語」を目指しテキストを編纂し、その活動を盛んにしたとき、當時の有力な日本語教育の推進者・山口喜一郎らの現地日本語教育者と教授法の問題として對立が表面化した。これは、『急就篇』の殘存したこと底流にあったもの、即ち、彼ら雙方の接した中國人の社會的層と彼ら雙方の“日常”の内實の兩面の差にこそ、その岐路があったのである。

2. 日本占領期青島中國語・日本語關係年表〔自大正 3 年至大正 12 年〕

〔年表項目典拠資料細目コード〕

〔算用數字〕は外務省外交史料館所藏 5-2-6-22-1-2『青島守備軍公報』の該當號數を示す。

『青島守備軍公報』は青島守備軍司令部の發行した公報紙で、『青島新報』附録として添附され、これにより日本人居留民と中國人住民(必要なものは中國語譯文を附すか、或いは、「譯文」として別添附した)に軍令、告示などを公告した(但し、非公開として添附されなかったものもある)。第 1 号は大正 4 年 4 月 3 日刊、終刊は第 1361 号(大

正 11 年 11 月 9 日)である。

[A]は外務省外交史料館所蔵 5-2-6-22-1 所収『大正 9 年 10 月調 民政概況』(青島守備軍 民政部)を示す。

[B]は外務省外交史料館所蔵 5-2-6-22-1『青島守備軍ノ軍政ニ關スル諸統計表』(大正 8 年 7 月 12 日陸軍省印刷)所載、第 14 表「支那人教育ノ爲日本及獨逸時代ノ施設ニ係ル 學校比較一覽表」、第 15 表「日本人教育ノ爲青島守備軍ノ施設ニ係ル學校開設當時 ト現在トニ於ケル比較一覽表」を示す。

[C]は外務省外交史料館所蔵 3-10-2-10-25『在外本邦學校關係雜件—青島小學校』所収を示 す。

[CR]は外務省外交史料館所蔵 3-10-2-10-25『在外本邦學校關係雜件—青島小學校』所収「履 歷書」(陸軍用箋)を示す。

[R2]は外務省外交史料館所蔵 3-10-2-10-13-1『恩給及退隱料關係—青島』所収「履歷書」 (陸軍用箋)を示す。

[D1]は外務省外交史料館所蔵 3-10-2-10-24『在外本邦學校關係雜件—青島諸學校』所収「青 島學院規則」を示す。

[D2]は外務省外交史料館所蔵 3-10-2-10-24『在外本邦學校關係雜件—青島諸學校』所収「青 島中學校概況 大正 8 年 4 月 30 日調」を示す。

[D3]は外務省外交史料館所蔵 3-10-2-10-24『在外本邦學校關係雜件—青島諸學校』を示す。

[E]は憲兵司令部『秘 日獨戰役憲兵史』を示す。

[F]は青島守備軍軍政史編纂委員會『秘 自大正三年十一月至大正六年九月 青島軍政史』第 2 卷第 4 編衛生・教育, 1927 刊を示す。

〔書式の約束〕

□は、原文の空白を示す

年月日表記は、例えば、大正三年 8 月 23 日を「3.08.23」と記す

學校, 及び、公學堂の教員の任免異動は、斜字體で記す

【年表本文】

大正 3 (1914) 年

3. 8. 23 日本、ドイツに宣戦布告

11. 07 日本軍青島占領、青島と李村に軍政署を開設[61]

大正 4 (1915) 年

4. 01. 18 日本對華 21 カ條の要求

02. 01 青島軍政署支那語夜學校開校 [B]

「青島在住者ニシテ支那語ヲ研究セムトスルモノ爲更ニ來ル 9 月 1 日ヨリ新 學期ヲ開始ス希望者ハ願書ヲ添へ本署ニ呈出スヘシ(4. 08. 28)」[43]とあるの が、『青島守備軍公報』の初出である。

支那語夜學校假規則には、「日常必須な支那語を教授スルヲ主旨トシ」とあるが、「教官ニハ陸軍通譯 2 名ヲ以テ之ニ充テ北京官話及時文ヲ教授セリ」と實際の教學内容を示す一文があり、その實際を追認するように、大正 5 年 3 月 1 日通達の「支那語夜學校規則」には、明確に「簡易ナル北京官話及時文ヲ教授スルヲ目的トス」としている。[F:522 頁]

この半年制支那語夜學校においても、「北京官話及時文ヲ教授セリ」という點が重要である。6.02.28 の日支語學校規則から見ると、豫科で『官話急就篇』とともにではなく、本科で『官話指南』とともに時文は講ぜられていたと思われる。北京官話と時文の併修は、北京官話教育時期、國語教育時期(戦後を除く)に共通する特徴であり、當時の中國語學習認識は中國語學教育としての口語の北京官話と漢文教育の時文との兩者によって中國語學習が形成されているとの認識で、講習會レベルでも中國語教育を実施していたことを示す點で重要な資料である。

なお、支那語夜學校關連記事として、山中六彦－(4.12.01)青島軍政署支那語夜學校卒[R2]、有吉市介－(5.03.30)青島軍政署支那語夜學校豫科卒－(6.03.30)青島軍政署支那語夜學校本科卒[R2]、和田作十郎(6.04.15～7.03.31)支那語夜學校ヲ學習[CR]がある。そして、日本語教員、中國語教員の資格試験が存在したことは、「訓導教師ニシテ支那語(日本人ニ對シテ行フ)日本語(支那人ニ對シテ行フ)ノ試験檢定ニ合格セル者ニハ銀 5 圓以内ノ月手當ヲ給スルコトアルヘシ」と規定していることから窺える。同様な優遇は、「青島守備軍民政部巡捕規則」[592]の第 39 條「日本語其ノ他外國ニ通スル巡捕ニハ其ノ技能ノ程度ニ応シ月額銀 1 圓以上 5 圓以内ノ特別手當ヲ支給スルコトヲ得」に見られる。また、この優遇を支援する意味で、第 14 條の青島憲兵隊で教授する學科に「日本語」がある。實際、池田清の履歴、即ち「(4.06.30)李村小學校教員、(4.11.□)「李村小學校内ニ開設セラレシ支那語夜學校ニ入學、(5.09.01)池田清、李村小學校訓導(5.09.□)李村公學堂特科生體操科教授を擔任(5.12.07)李村公學堂教員兼舍監(10.11.04)第一青島高等尋常小學校訓導(10.11.04)臺東鎮庄公學堂副堂長(10.12.07)青島日語學校教師」さらに、谷口林右衛門の履歴、即ち、「(4.09.30)李村小學校訓導兼校長(5.06.10)李村軍政署支那諸學校卒(5.06.19)青島小學校訓導(6.09.11)青島公學堂訓導(7.04.15)青島日語學校教師(10.03.25)青島公學堂長」から、「支那語學習」による待遇に對する優位性を窺うことができる。これらは滿鐵の語學獎勵試験制度をそのまま持ち込んだものと考えられる。また、青島日本中學校師範科の「支那人教育ノタメノ人材養成」とする存在は興味深い。

03.16 青島公學堂開校[B]

「占領地ニ軍政ヲ布クヤ獨逸政庁時代ノ公立小學校ヲ復舊及増設シ其ノ教科目中獨逸語ヲ日本語ニ替ヘ其ノ他教科用圖書ハ支那國民學校用ノモノヲ採用シ之ヲ公學堂ト改稱シ軍經營ノ下ニ益々獎學ニカメ以教化ノ效果ヲ舉ケムコトヲ期シタ」[A:8 頁]

同日 青島日語學校開校

「青島在住支那子弟ノ日本語ヲ研究セントスルモノノ爲ニ更ニ本(7)月 16 日ヨリ新學期ヲ開始ス希望者ハ願書ヲ北京町公學堂内青島日語學校ニ差出スヘシ」[33]とあり、その譯文に「第二班新生」とあること、新學期開始期日が青島公學堂の開校日(3月16日)との日と一致することから、青島日語學校の開校を3月16日とした。しかし、8年5月現在調査による[B]では、4年4月生徒數欄を空欄にし、(7.03.30)を青島日語學校の創立年月日としていることから、[33]に記載された青島日語學校は、閉鎖されたと考えるのが妥當のようである。

(3.20)上利恭助、納十郎、山中六彦、青島守備軍小學校訓導[CR]に

なお 山中六彦は4年12月に支那語夜學校卒

03.30 青島守備軍青島小學校、青島守備軍李村小學校設置[F]

(04.17)岩城[舊姓 米田]信太郎、青島小學校訓導[CR]に

04.03 『青島守備軍公報』創刊

04.09 臺東公學堂、薛家島公學堂、施溝公學堂、瓦屋莊公學堂、濠北頭公學堂、南屯公學堂、辛島公學堂開校[B] ([F]は臺西鎮公學堂開校 0815 とする)

04.15 李村公學堂、李村公學堂滄口分校、千家下河公學堂、朱家窪公學堂、浮山後公學堂、趙哥庄公學堂、上流公學堂、干哥庄公學堂、登窯公學堂、埠落公學堂、法海寺公學堂、姜哥庄公學堂、候*¹家庄公學堂、宋哥庄公學堂、九水公學堂、灰牛石公學堂、香裡公學堂開校 [B] (候*¹は侯の誤りであろう)

(06.30)池田清、李村小學校教員に[CR]

(09.30)谷口林右衛門、李村小學校訓導兼校長に[CR]

04.27 青島小學校溜川炭鑛分教場開校[B]

5月中 李村日語學堂開設[E54 ㄇㄜˊ]

「軍政署ハ着々施設ヲ進メ衛生事項ニカメ教育ヲ獎勵シ

五月李村日語學堂ヲ創設セリ」

08.01 この日より、青島における人力車營業は、日本語試験合格者のみに許可[34]

「人力車夫全部支那人ナル爲言語不通ヨリ往々乗客ト爭論スルモノアリシニ依リ」[F:149 頁]

「8月1日以降青島ニ於テ人力車營業ヲ爲サントスル者ハ憲兵隊ニ於テ施行スル左記日本語ノ試験ニ合格セサレハ其營業ヲ許可セス但シ7月31日迄ニ營業ヲ許可セラレタル者モ之ニ準ス(7.07.08)」として、次の語句を指定した。(〔 〕内はその中國語)

「司令部〔司令部〕軍政署〔軍政署〕憲兵隊〔軍政署〕停車場〔火車站〕埠頭〔碼頭〕一乃至十〔數目自一到十〕壹錢〔一分錢〕五錢〔五分鐘〕拾錢〔一角錢〕五拾錢〔五角錢〕右〔右邊兒〕左〔左邊兒〕急ケ〔快々〕緩クリ行ケ〔慢々〕止レ〔打住〕待テ居レ〔等一等〕」[34]

ドイツ人から日本人へという占領者(一面では得意先)の變更は、中國人車夫に、

必然的に、そして、強制的に日本語音声(日本語というのは不正確)の習得を迫った。彼らは恐らくこれらの語句(日本語音声)を中國語音に當てて習得したものである

08.15 臺西鎮公學堂開校[B]

11 月中 李村軍政署支那語夜學校開校[CR 池田清入學]

池田清の履歷書には「(4. 11. □)「李村小學校内ニ開設セラレシ支那語夜學校ニ入學」[CR]とあり、谷口林右衛門の履歷書には「(5. 06. 10)李村軍政署支那語學校卒業」[CR]とある。李村軍政署支那語學校の記録は現在の所この 2 つの記述以外に見当たらない。しかし 6. 04. 16 以前には李村小學校にも兵士の代用教員がおり、その内の支那語のわかる兵士あるいは陸軍通譯によって李村小學校内で支那語が教授されていた可能性が高い。閉校時期は不明である。但し、少なくとも[B]には記載がないことから(8 年 5 月現在)には閉校している。

大正 5 (1916) 年

5. 03. 01 支那語夜學校規則制定[108] 4. 02. 01 の條參照

「支那語夜學校規則」によれば、「簡易ナル北京官話及時文ヲ教授スルヲ目的ト」し、豫科、本科ともに 1 日 1 時間 6 箇月(4、10 月開始)とある。また、6. 12. 08. 條に記したように、授業料はこれまでも無料であったと思われ、その力の入れかた(青島日語學校はその宣撫的意味における力の入れかた)が窺われるが、「授業開始時間ハ其時々示達」とあることから、軍の通譯が教師となっていたことを窺わせる。なお本科は、[108]所載「青島軍政署告示第 12 号」によれば(5. 04. 01)に開設され、入學試験によって選拔された。

(月日不明) 支那語夜學校を青島市民會館内に移轉 (99)

(03. 20)櫻田有、青島小學校訓導に[CR]

04. 08 私立青島英學院開校[D1]

04. 10 青島高等女學校開校[B]

5 月中 李村軍政署を青島軍政署出張所に變更[A:1 頁]

(06. 19)谷口林右衛門、青島小學校訓導に[CR]

09. 02 青島小學校臺東鎮分教場開校[B]

(09. 2)納十郎、張店在勤[CR]

(9 月中)池田清、李村公學堂特科生體操科教授を擔任[CR]

10. 02 青島小學校坊子分教場開校[B]

同日 青島小學校張店分教場開校[B]

10 月中 私立青島英學院支那語專修科、日語專修科開設[D1]

(12. 07)池田清、李村公學堂教員兼舍監に[CR]

(12. 27)荻原左兵、李村尋常小學校訓導に[CR]

大正 6 (1917) 年

6. 02. 21 青島中學校開校[B]

03. 26 第二青島尋常小學校開校[B]

(04. 02) 和田[舊姓 俊野]作十郎、青島小學校訓導に[CR]

04. 16 青島小學校は第一青島尋常高等小學校と改稱[CR]

4 月中 私立青島英學院、青島學院と改稱[D1、F]

(05. 10) 櫻田有、青島第二尋常小學校訓導に[CR]

(05. 30) 櫻田有、青島公學堂副堂長に[CR]

06. 26 青島守備軍公學堂規則制定[312]

「青島守備軍公學堂規則」によれば公學堂は 5 年制で 1 週 25～26 時間中、華語 1 週 8～10 時間、日本語 1 週 8～10 時間配當されている。また目をひくのは、「青島守備軍公學堂規則施行細則」第 2 條「訓導教師ニシテ支那語(日本人ニ對シテ行フ)日本語(支那人ニ對シテ行フ)ノ試験檢定ニ合格セル者ニハ銀 5 圓以内ノ月手當ヲ給スルコトアルヘシ」とあり、語學檢定試験により、語學關係者の人事を決定し、語學習得を推奨している。これは満鐵の方式と一致する。

08. 01 雙山公學堂開校[B]

08. 21 李村公學堂編纂『日本語會話篇 公學堂教科書用』青島軍政署李村出張所刊

(09. 11) 谷口林右衛門、青島公學堂訓導兼勤に[CR]

9 月中 勅令「民政部條例」公布[A:1 頁]

10. 01 青島守備軍民政部を開庁、民政署を青島、李村、坊子に設置[A:1 頁]

10. 31 支那語夜學校を青島公學堂内に移轉[373]

「本校ニ入學スル者ハ官衙學校ニ奉職スル者及會社員、店員等ニシテ、開設以來、卒業生ヲ出スコト 96 名ニ及ヘリ。目下講師(民政部通譯官) 2 名ノ下ニ 155 名ノ生徒ヲ教授シツツアリ。其ノ生徒現員内譯左ノ如シ 1 年(47, 47, 46) 2 年(15) 計 155」 [F:121 頁]

(12. 21) 大西金藏、第一青島尋常高等小學校訓導に[CR]

12. 28 日支語學校規則制定[397]

「日本人又ハ支那人ニ對シ日常必須ナル日本語又ハ支那語ヲ教授スルヲ目的トス」1 日 2 時間 2 年間全 4 學期制として學年試験及第を修業、卒業の要件とすることや學科課程を明文化し、學校の體裁を整えたことにより、それまでの多分に講習會的であつた青島と李村の支那語夜學校(青島日語學校もこ點では同様であつたと思われる)を新たに支那語學校、日語學校として再編した。使用テキストは、第 1 學年は官話急就篇、第 2 學年は官話指南及び支那時文課本(不明)。第 1 學年は日本語讀本卷 1～4、第 2 學年は卷 5～8 [満鐵地方課編纂係による『附屬地教育研究會編纂公學堂日本語讀本』5. 03. □. 8 卷完成](國語文化學會編『外地・大陸・南方 日本語教授實踐』堀敏夫「満鐵の日本語教育」昭和 18 年 9 月國語

文化研究所刊 206 頁)である。この支那語夜學校規則から日支語學校規則への體制と教學内容の整備のされ方は、滿鐵の「語學檢定試驗制度及標準」(那須清, 1992, 23 頁)と比較すると、符合している。

大正 7 (1918) 年

(7. 01. 04) 荻原左兵、李村公學堂教師・兼務に[CR]

7. 01. 14 青島中學校規則改正[402]

第 3 條本校ノ學科目「外國語」を「英語、支那語」に改め「支那語」を隨意科目とした。

02. 15 第一青島尋常高等小學校青州分教場開校[B]

同日 第一青島尋常高等小學校高密分教場開校[B]

(03. 25) 岩城信太郎、臺東鎮分教場勤務に[CR]

(03. 25) 上利恭介、第一青島尋常高等小學校訓導／坊子分教場勤務に[CR]

(03. 25) 和田作十郎、坊子分教場勤務に[CR]

03. 30 「青島公學堂内ニ設置シ修業二箇年トシ夜間學校ヲ爲シツツアリ。目下教師 5 名ノ下ニ 180 名生徒アリ、成績頗ル良好ナリ」[F:131 頁]

03. 31 青島日語學校開校[B] (日支語學校規則制定後に新たに開校されたという意味において)

(03. 31) 櫻田有@、青島日、支語學校長事務取扱・兼勤に[CR]

以下、@を附す者は、証 9. 6. 30 現在、當該の職に在職または、兼務していたことを示す

(04. 08) 加賀美五郎七、李村尋常小學校訓導、李村公學堂長兼教師に[CR] なお、加賀美五郎七は臺灣國語傳習學校卒業

04. 10 李村日語學校開校[B]

(04. 10) 加賀美五郎七@、李村日語學校長及李村日語學校教師兼務に[451][CR]

04. 11 坊子日語學校、坊子支那語學校開校[442, B]

(04. 11) 上利恭助、坊子支那語學校長事務取扱に[451](4. 12)[CR]

(04. 12) 坊子日語學校長・兼務に[CR]

(04. 11) 軸丸卓爾@(青島日語學校教師)、坊子支那語學校教師・兼務に[456]

(04. 15) 淺井新太郎@、湯原桃雄@ (ともに青島守備軍民政部高等通譯官)、青島支那語學校囑託教師・兼務に[456]

(04. 15) 谷口林右衛門@、青島日語學校教師・兼務に[456]

(04. 15) 野中伊平(第二青島尋常小學校訓導)、青島日語學校教師兼務に[456]

(04. 21) 相山義雄(青島日語學校教師)、青島公學堂教師・兼務に[456]

05. 14 養生公學堂、明德公學堂、育英公學堂、常在公學堂開校

- (05. 27)伊宗明、青島支那語學校囑託教師に[468]
 (06. 30)上利恭助、坊子日語學校長事務取扱兼務に[CR]
 10. 08 張店日語學校、張店支那語學校開校[538, B]
 10. 09 第一青島尋常高等小學校四方分教場開校[B]
 (7. 12. 02) 山中六彦、上利恭介、休職
 12. 12 第一青島尋常高等小學校博山分教場開校[B]

大正 8 (1919) 年

- (8. 01. 09)納十郎@、張店日語學校長事務取扱
 及張店支那語學校事務取扱に[586] (1. 10) [CR]
 (01. 09)野崎鐵司、渡邊知吉@、張店日語學校教師兼張店支那語學校囑託教師に[586]
 8. 01. 22 大麥島公學堂、浮山所公學堂、湛山公學堂、辛家庄公學堂、高家村公學堂開校 [B]
 (04. 01)野崎鐵司、張店日語學校教師に[636]
 (04. 08)李容劭@、青島日語學校教師に[636]
 ⇒《12. 15》臺西鎮公學堂教師兼堂長に[794]
 (04. 08)安藤昇三、坊子日語學校教師兼坊子支那語學校囑託教師に [636]
 (04. 30)近藤富三、青島日語學校囑託教師に[650]
 (? . ?)池田弘、坊子支那語學校兼坊子日語學校教師に[669]
 (05. 22)岡田瓢(陸軍通譯)、青島中學校支那語教師囑託・兼務に[D2]
 岡田瓢は明 7. 01. 13 生 東京外語卒業
 現在のところ、この記録が青島中學校での中國語教育がなされたことを具體的に明示した初出のもの。岡田瓢は、青島日本中學校と改稱後の 15 年 4 月現在も、青島日本高等女學校とともに兼職していた。
 (06. 30)久保田嘉喜太郎@、李村日語學校教師に[686]
 (10. 10)泉平、青島公學堂教師兼青島日語學校囑託教師に[735]
 (11. 08)方德明@*、青島日語學校教師に[750]

以下、*は、(11. 6. 20)現在、當該の職に在職または、兼務していたことを示す

大正 9 (1920) 年

9. 01. ?? 沿線の民政署(坊子、張店)撤廢[??]
 (03. 16)和田作十郎、坊子日語學校長事務取扱兼坊子支那語學校長事務取扱[831] (03. 20) [CR]
 (03. 20)上利恭助、坊子日語・支那語學校長事務免兼職[CR]
 (03. 27)和田作十郎、臺東鎮分教場勤務[CR]

せよとある。青州支那語學校と青州日語學校については、教師の任免「(10. 05. 16～10. 11. 14)呼野義幸、青州日語學校長兼日語學校教師、青州支那語學校長兼青州支那語學校教師、(10. 06. 17～10. 12. 02)于耕三、青州日語學校教師兼青州支那語學校教師[1114]」以外に、現在のところ記録が見えないので、あるいは短期間(大正 10 年中)に閉校したのかもしれない。

(06. 17)王錫濟*、張店日語學校教師兼張店支那語學校教師に[1114]

(06. 17)于耕三、青州日語學校教師兼青州支那語學校教師に[1114]

(06. 17)張寶五、坊子日語學校教師兼坊子支那語學校教師に[1114]

(06. 17)張寶五×退職す[1137]

(06. 17)孟廣□、坊子日語學校教師兼坊子支那語學校教師[1114]

(10. 14)孟廣□、×依願退職す[1169]

(10. 15)桑原善材、李村公學堂舎監・兼勤に[1179]

10. 26 青島高等女學校規則改正

第 4 條本校ノ學科目「外國語」を「英語、支那語」に改め「支那語」を隨意科目とした。岡田瓢は、『大正 13 年 青島日本高等女學校概覽』にも記載されているのが初出であるが、既に青島中學囑託教師であったことを考慮するならば、12 年 6 月 30 日から青島高等女學校にも兼務していた[C](14 年 1 月調 青島日本高等女學校)

(11. 04)大西金藏△免兼職[1179]

(11. 04)櫻田有*、李村日語學校教師・兼勤に[1179]

(11. 04)池田清、第一青島尋常高等小學校訓導に[CR]

(11. 04)池田清、墓東公學堂副堂長兼教師に[1179]

(11. 04)小林新三郎、青島^ま公學堂副堂長兼教師兼務

(11. 14)呼野義幸×職を免ず[1182]

(12. 01)大西金藏×依願退職す[CR]

(12. 01)岩城信太郎×依願退職す[CR]

(12. 02)于耕三×依願退職[1192]

(12. 07)池田清*、青島日語學校教師に[1193]

(12. 07)李容劭*、青島支那語學校教師・兼務に[1193]

大正 11(1922) 年

(01. 16)小林新三郎、李村公學堂副堂長・兼務[1215]

(01. 16)高橋久造(第二青島尋常小學校訓導)、

墓西公學堂副堂長兼教師に[1215]

(01. 16)井出九十九(第一青島尋常高等小學校訓導)、

青島公學堂教師に[1215]

11. 2 月中 青島支那語學校、青島日語學校生徒募集

志願資格は、「日本人ニ在リテハ尋常小學校卒業程度」「中華民國人ニ在リテハ初等小學校卒業程度」とし、「教授ハ夜間 2 時間トシ二箇年卒業」とある。

(03. 04) 高澤煦×青島公學堂教師に[1235]

(03. 31) 加賀美五郎七*、青島日語學校教師・兼務に[1253][CR]

(03. 31) 淺井新太郎△依願免兼職[1253]

(04. 30) 渡邊知吉×依願退職す[1266]

(07. 04) 淺井新太郎、山東懸案解決ニ關スル條約所定ノ共同委員委員會隨員(通譯)

10 月中 李村小學校を滄口に移轉

(11. 05) 加賀美五郎七×死亡[CR]

(11. 13) 小林新三郎△免兼職[1352][R2]

12. 09 『青島守備軍公報』終刊

12. 10 各日語學校、支那語學校廢校、公學堂廢校

(12. 10) に青島守備軍民政部が廢庁されたこと、さらに池田清(青島日語學校教師)、谷口林右衛門(青島日語學校教師)、櫻田有(李村日語學校)らが、退職していること、櫻田有の履歷書[CR]に、「(12・20) 青島守備軍民政部殘務整理ヲ免ス(李村日語學校分) なお 12 月 25 日欄は空欄となっている」とあることから判断した。公學堂については、中華民國に移管されたことは十分考えられる。

(12. 10) 池田清、谷口林右衛門、納十郎、櫻田有×依願退職す

(勅令 505 号により廢庁)[CR]

11. 12. 17 青島守備軍撤退完了

大正 12(1923) 年

12. 02. 10 青州分教場、高密分教場閉校

03. 31 第一青島尋常高等小學校、第二青島尋常小學校、
青島中學校、青島高等女學校廢校

04. 01 青島日本人會立青島日本小學校、青島日本中學校、青島日本高等女學校として、
移管開校〔但し、官立諸學校扱い〕

(04. 05) 小林新三郎×依願退職す[R2]

05. 24 青島居留民団小學校規則(11. 04. 06)の青島守備軍小學校規則
第 8 條補修科學科目表に「支那語」とある

大正 13(1924) 年(月日不明) 青島日本中學校師範科開設

(丁)

第四章 普通話教育時期

第一節 普通話の普及と現代中國語教育の展開状況

1. はじめに

序章、第三章第一節で既述したように、國語教育時期をステップとして、それまでの文語に代わり、言文一致完成後の中國語によって經濟・政治・思想・學術を著述した點に、それが「現代」を冠するに足る現代中國語としての最大の意義を持つのである。決して、日常會話を口語文で表現することに現代中國語としての意義があるのではない。この現代中國語は普通話と命名されている。普通話が現代中國語としての意義を實現するためには、日常會話で展開される單純な論理を表現する技術だけではなく、事件・事象の持つ複雑な論理をも表現できる技術が必要である。それゆえ、普通話教育時期の中國語教育の眼目は、現代中國語の文章教育にある。つまり、普通話教育時期の最大テーマは、口語文の文字言語教育の建設にある。

2. 戦後の中國語教育の進展

それでは、戦後日本の中國語教育はどのように進んだのだろうか。

中國語が言文一致を完成させた 1950 年以降、日本でも、古文の漢文はさしあたり別としても、音聲言語と文字言語との両面の教育を中國語教育が負わねばならなくなっていた。そして、ここに、日本の中國語教育に新しい問題が生まれたのである。それは、中國では公文書に口語文の使用が公認され、日本では中國語は漢文(時文)から現代文の地位を奪った。しかし、音聲言語と文字言語とに棲み分けして、中國語教育と漢文教育とが互いに分離竝立していた國語教育時期には、それぞれの問題として處理されて來た問題も、普通話教育時期では、一手に中國語教育が擔わなければならないことになったのである。

しかし、言文一致以後、即ち、音聲言語と文字言語との統合時期において、中國語教育は、その内部では、音聲言語教育と文字言語教育の竝行教育ではなく、漢文教育より連なる文字言語教育を否定して、音聲言語教育のみを選択したのである。時文科目の正式科目化に續く支那語科目の正科化を目指した戦前の内地の中國語教育を領導していた東京外國語學校などの人たちや外地の中國語教育者が日本敗戦により總退陣した結果、終戦以降、中國語教育を領導したのは、倉石武四郎であった。そして、その倉石武四郎がこの選擇をしたからである。しかし、中國語教育は、明治以前からずっと音聲言語教育として單に教材として音聲言語を書記化した漢字材料を使っていたに過ぎず、口語統一以後言文一致前

には、口語文教育を志向したが、文章教育の内實は、即ち、文字言語教育を漢文教育に任せたままで、文字言語教育を確立するまでには至らなかった²⁰⁶。倉石武四郎は、國語教育時期の中國語教育における音聲言語教育に成果を挙げたのであるが、口語統一以降の中國語の質的變化と文字言語教育がずっとなされていなかった中國語教育の實態とを理解せず、訓讀により中國語教育でもずっと文字言語教育がなされてきたと誤解し、音聲言語教育の最大の障害を訓讀と認識した。それゆえ、1951(昭和 26)年頃の中國語講習會での訓讀による中國語新聞講讀講座閉講のエピソードに見られるように²⁰⁷、訓讀を排除して、文字言語教育を否定し続けたのである。倉石武四郎の音聲言語教育の選擇とその實踐は、「訓讀を玄界灘に投げすてて來た」²⁰⁸後の、漢文の中國語音音讀推進から始まり、中國語教育での表音化の追及とその普及とに端的に反映されている。当初は注音字母を推し、1950(昭和 25)年からはラテン化新文字を、そして 1958(昭和 33)年からのローマ字(ピンインローマ字)に至る採用音票文字の變更履歴は、中國語教育を音聲言語教育として位置づけようとする努力ゆえであった。換言すれば、音聲言語教育として中國語教育を位置付け定着させる手段として、中國語教育に最適な表音化を模索する過程に、漢字を棄て音聲言語教育を選擇した熱意を見ることが出来る。これが、普通話教育時期においても變えることはなかった。そして、倉石武四郎は、中國の口語統一と言文一致の動きについて、『倉石武四郎著作集』(倉石武四郎, 1981)などを見ても、文字改革にのみ關心を集中し、言文一致については關心も示さず論じてもない。そして、漢字の改廢を第一に解決すべき問題とし、大衆へのわかりやすい表現の提示には言及するが、文章の論理の理解に関しては言及がない。これが倉石武四郎の言說の特徴である。

3. 國語教育時期戦後期から普通話教育時期に残された課題

さて、中國語教育が音聲言語教育に限定された結果、中國語が時文をも包攝した筈の戦後の中國語教育では、案の定、音聲言語教育と口語の文章教育との間に矛盾も出始めた。特に初級中國語教育では、文字言語教育が厚遇される筈はなく、さらに、宣傳文、尺牘、公文書などに至っては、専門の中國語教育でも冷遇される状況を必然的に生んだのである。これに気づいた一人に北浦藤郎がいる。そして、この弊害の原因について、

「*Spoken Chinese* のようなやり方は、耳と口の面だけの入門書としてはよい。しかし、あれでは新聞や手紙が讀めない。況んや教養をや。まあ、下級通譯の養成以上に出ないもので、わが國の大學生には必ずしも適當でない。」²⁰⁹

²⁰⁶ 戦後、漢文と中國語現代文とを繋ごうとした著作には、『新しい中國文——その読み方と訳し方』(竹中伸, 1956)がある。

²⁰⁷ 『中國語五十年』(倉石武四郎, 1973; 94-95 頁)

²⁰⁸ 『支那語教育の理論と實際』(倉石武四郎, 1941; 191 頁)

²⁰⁹ 北浦藤郎「口頭練習によるはなし言葉の型の練習」『書架』Vol. 1 原載((175 頁脚注欄に續く))

と、普通話教育時期に入った前後の 1960(昭和 35)年頃²¹⁰批判している。

この批判は尤もなことであった。昭和 14(1939)年 2 月以降、漢文科目であったとはいえ、古文(漢文)以外に時文が広く一般の中學生に講じられていたことに比べると、GHQ による漢文教育弱体化政策で時文學習の制度的處置が廢止された結果、戦後の文字言語教育の状況は、訓讀とはいえ現代白話文の文字言語教育を立てていた戦前に比べて、退歩したからである。この北浦藤郎の批判が、言文一致以降の中國語自體の變化とその教育の問題として理解されず、言文一致を果たした後の 1960 年の普通話教育開始は、文字言語教育と音聲言語教育とを再考する機會であったはずなのに、この北浦藤郎の批判が大きな流れとならなかったことは、戦後の中國語教育の痛恨事であった。

4. 21 世紀の普通話の變容

普通話は、漢民族の共通語として、そして、各民族間の交際に用いられる共通語として定義されていたが、1982 年制定の『中華人民共和國憲法』で「民族の共通語」と定義され、さらに、2000 年 10 月に『中華人民共和國國家通用語言文字法』では、「國家共通語」と定義された。このように、普通話はその名稱を變えずに變容を遂げている²¹¹。

この「國家通用語」への變容に連動させて、國家漢語國際推廣領導小組辦公室は中國語國家檢定試験として HSK(漢語水平考試)を準備し、1990 年に中國國內で初めて HSK を實施した。翌 1991 年から、HSK は世界各國で實施されるようになり、日本では、1991 年 12 月に第一回 HSK 試験が實施されている。この國家檢定試験制定は、中國語の正規化・規範化を加速させるものであり、「中國政府公認の中國語」というブランドで漢語の國際化を促進するものである。そして、2000 年に 1950 年代の普通話の定義づけを變えた中國語が、語法、語彙など中國語の内實を變えるのか否か、さらには、普通話の定義づけを變えた中國語に對して外國人としての我々がいかに對するのか、などが將來に問題となるか否かも不明である。しかし、いずれにせよ 1950 年代の普通話は 21 世紀に入りすっかり別のものとなっており、確かに中國語が更なる變化を迎えていると考えねばならないようだ。

次節では、普通話の代表格として、地域性を越えた挨拶詞“你好”の誕生について論述する。

(p. 174 頁脚注 209 の續き) 鱒澤未見)。「オーラル・アプローチ(口頭教授法)による中國語入門教育」(1961 年 3 月原載)。本稿は『中國語入門教授法』(長谷川良一, 1995; 12 頁)所収による。

²¹⁰ 前掲『中國語入門教授法』(長谷川良一, 1995; 12 頁)の記載からの推定による。

²¹¹ 普通話の發展については、「中華人民共和國の言語政策における「普通話」の位置づけ」(宮西久美子, 2000)、「少数民族語から見た中國の「國家語」名称 — 「國家通用語」名としての「普通話」の可能性 —」(フフバートル, 2009)に詳しい。

第二節 普通話の挨拶ことば“你好”考

1. はじめに

挨拶は、人と人との接触の第一歩であり、人間生活の基本である。それゆえ、「挨拶も出来ぬ馬鹿」という人物評が、職業、官位を超えて厳然と成立しているのである。そして、挨拶語を伴う日常の挨拶は、人間関係を圓滑に保つ、必要且つ重要な言語活動である。

日本語において、「こんにちは」という挨拶語は、一般的な挨拶語として定着している。そして、“你好”という挨拶語は、現在、知らぬ者はない中国語の代表となっている。とはいえ、1983年に鱈澤が留學したとき、挨拶語といえば、「喫飯了嗎」や「上哪兒去」²¹²で、意外にも教科書で學習した“你好”は余り耳にしなかった。しかし、21世紀に入り、中国人の携帯電話での會話は、“你好”で始まるのを耳にする時、中國で暮らす經驗を持たぬにせよ、「喫飯了嗎」や「上哪兒去」の使われる頻度が減り、“你好”が年々廣く使われつつあることが想像できる。これは、改革開放政策以後は、人の移動が法的にも現實的にも比較的自由になり、人と人との関係が、村の中や街の中の関係から他の地域の人々との関係にまで擴大し、これが“你好”の使用頻度に反映したものである。特に、近年の携帯電話の普及は、中國全土での人々の出會い方を一變させて、その出會いに適合した、空間、人間関係を越えた、抽象的な汎用性の高い挨拶言葉“你好”の普遍化を決定的にしたのである。

本節は、“你好”が日本の中国語テキストに、いつ登場し、いつ定着したか、を考察したものである。

2. “你好”のバリエーション“您好”の初出

“您好”を“你好”のバリエーションと假定すれば、“您好”の日本のテキストにおける初出は、豫想外に早く、『北京官話北京游歴記 初篇』（文楨²¹³, 1914）のようである。

それは、（引用者により適宜、／で發言者を分けた。以下、同じ。）

²¹² 中國語の挨拶語について比較的コンパクトに解説をしているものに、大阪府通譯編『支那語の彙』（岩倉傳七, 1939）がある。それによると、「支那に於ては「こんにちは」「今日はいゝお天氣で御座います」等といふ挨拶の言葉を用ひず、専ら其の場合に適合した言葉を以て挨拶に代へるのであります。」と紹介し、「挨拶の言葉」として、「您好啊 御變りありませんか（親しい閒柄の者と會つた場合一般に用ふ）」、「您喫飯了嗎」、「您喫了飯了嗎」、「您忙不忙」、「您上那兒去」、「您上那里去」、「您早起来了」、「您起来了」などを擧げている。これらを挨拶語としてではなく、或いは、そう意識させることなく、採用しているテキストも多い。また、宮島吉敏・鐘ヶ江信光『四個星期中國語』（宮島吉敏・鐘ヶ江信光, 1985）66頁『中國語 Q&A101』（相原茂, 1987）14-15頁にも説明がある。

²¹³ 同書の自「序」（明治45年舊曆7月記）と宮越健太郎「序」によると、文楨は、字は輔廷、不翁と號し、北京英國公使館で中國語を教授、明治43年舊曆8月東京外國語學校に招聘されたとある。但し、引用者はその確認をしていない。

您好久違、這是打那兒來。(1 頁)

您是程先生的少爺不是。／是、您是吳先生、您好。／好、請坐。(15 頁)

您好、我這幾天有點兒事、沒得來、聽說您同人看戲去了、好不好。／可不是、(34 頁) というものである。

しかし、この“您好”は、日本のテキストに再び登場することは暫く無かった。そこで、少し視点を變えて、“您好啊”を見ることにする。というのは、長谷川寛『中國語會話』(1960 年 9 月 25 日第 1 刷 1972 年 6 月 20 日第 16 刷白水社發行)によれば、「「您好啊！」の「《啊》」を略して 您好！」(39 頁)とあるからである。

“您好啊”は、『官話指南』(吳啓太・鄭永邦, 1882)第二卷「官商吐屬篇第十章」²¹⁴が日本のテキストにおける初出である²¹⁵。それは、

老爺您好啊／好啊、您好啊／好啊您哪 (下線は引用者による)

である。

この「您好啊／好啊您哪」は、『官話急就篇』(宮島大八, 1904²¹⁶ ; 33 頁)問答之上(80)にも登場する。『官話急就篇』は、文法と體系を重んじる現在の教學方法から見ると大變遅れているのは確かであるが、庶民の日常の言葉を反映している点では好著で、初級テキストの代表として普及した。また、『官話指南』も、1945 年までの中級テキストのバイブル的存在であった。そして、大正期には、ともに支那語検定試験の基準テキストとなっていた。それゆえ、『官話指南』と『官話急就篇』に採られた「您好啊／好啊您哪」は、挨拶語の一つの定式として、その後の日本のテキストに廣く採用されている²¹⁷。

なお、「您好啊／好啊您哪」の解説を見ると、例えば、大橋末彦『官話急就篇詳譯』(大正 6 年 10 月 1 日初版、大正 6 年 12 月 1 日 3 版、文英堂書店刊)、飯河道雄述「官話急就篇講話」[『支那語速成講座 分科合本』(飯河道雄, 1928¹)所収]や、『標準支那語教本初級編教授用參考書』(鈴木擇郎, 1937)にも、「您好啊」は「《啊》」を略して您好」という説明はない。これは、筆者たちが「您好」を耳にしなかったか、或いは、耳にしても留意するに及ばぬものと判断した結果であろう。

日本以外の中國語テキストを見ると、單獨で使われる“您好”は、Imbaut-Huart の *Manuel*

²¹⁴ 引用者が據ったテキストは、刊年不明、全 99 葉、半葉 12 行 27 字、奥附に「長縣崎」と誤植の有るもの。『官話指南』は、吳啓太・鄭永邦合著金國璞改訂『改訂官話指南』(明治 36 年 5 月 3 日初版文求堂刊)として版を重ね、通行している。その改訂部分は、初版第一卷「應對須知」のみで、該當部分には變更はない。なお、商務印書館 1902 年刊『官話指南』は原書第一卷第 1 葉の登場人物を替えている。

²¹⁵ 『亞細亞言語集 支那官話之部』(廣部精, 1889)に“您(你)好啊”は見えず、同書には「大人好」(問答十章之四)、「請老爺安／好啊」(問答十章之八)という言い方が見られる。原書 T・F・Wade『語言自邇集』(1867 年初版本)、1886 年第 2 版本、1903 年第 3 版本もこの部分には變更がない。

²¹⁶ 『急就篇』(昭和 8 年 10 月 5 日改訂)も引用部分は同文、『改訂急就篇 會話篇』(昭和 47 年 4 月 1 日 5 版)は文末に感嘆符を附す。

²¹⁷ 『華語萃編 初集』3 頁(東亞同文書院, 1916)も 1921 年刊の第四版も、同文を採用し、改訂を経てもこの部分に變更はなかった。

pratique de la Langue Chinoise parlée à l'usage des français 第2版(1892年刊)が初出であろう。但し、“這一向您好”の形では、同じ著者による『京話指南』vol. 1-4(1888-1889年刊)のvol. 2(1888年刊)が初出ということになる。

Imbaut-Huart の著書3点²¹⁸——1、Imbaut-Huart, 1885: *Manuel pratique de la Langue Chinoise parlée à l'usage des Français*(第1版 1885年刊) 2、*Cours électique, graduel et pratique de langue chinoise parlée* (京話指南)(1888-1889年刊、3、*Manuel pratique de la Langue Chinoise parlée à l'usage des Français*(第2版 1892年刊)——における“您好”の関係個所を刊行順に並び、それを表にすると、

1885年刊第1版	1888年刊『京話指南』	1892年刊第2版
1 好	1 好	1 好
2 閣下好	2 閣下好	2 您好
3 您好啊	3 您好啊	3 閣下好
4 大人好	4 大人好	4 大人好
5 託福 (p.35)	5 託福	5 託福。託福 (p.130)
	6 這一向您好	
	7 您這一向好	
	8 託福。託福 (vol. 2 p.73)	

となる。

しかし、“您好”は上の例以外には見当たらず、以下の如く“您好啊”が使われている。

1885年刊第1版	1888年刊『京話指南』	1892年刊第2版
3 這一向您好啊	3 這一向倒好啊	3 這一向您好啊
4 好啊您納。您倒好	4 好啊。您納倒好	4 好啊。您倒好
5 託福。託福 (pp. 47-48)	5 託福。託福 (vol. 2 p. 208)	5 託福。託福 (pp. 160-161)
	老爺您好啊／你的買賣好啊 (vol. 3 p. 208)	

これを見ると、1890年前後が“您好”の出現の節目であったと推測できるが、“您好”が多く使われているという状況にはなかったようである。というのは、国立国会図書館支部東洋文庫所蔵の1910年までの中国語テキストをアトランダムに調べてみると、1903年刊 Vaudescal の *Etude élémentaire de la langue chinoise. Avec le fascicule spécial contenant les phrases en caractères chinois* の13E Dialogue に「1 錢老爺好啊 2 好 老爺好 3 好好」、Brandt, Yakov. 『華言初階』に「老爺您好啊 2 好啊 你做的事情好啊」(p. 305)とあるように²¹⁹、“您好啊”の用例も少なく、“您好”、“您好”は見られないからである。

²¹⁸ いずれも、国立国会図書館支部東洋文庫所蔵による。

²¹⁹ 参考例としては、1898年刊 Goodrich 『官話萃珍』「你納好哇」(158丁B)がある。

3. 1930 年前後に“你好”登場

中國の國語の教科書では、管見に據れば、1933 年の教育部審定の小學校「國語」教科書に“你好”が初登場する²²⁰。それは、朱文叔等編孫世慶等校『小學國語讀本』初級第二冊（民國 22 年 10 月 9 日教育部審定民國 26 年 5 月 288 版上海中華書局刊）冒頭の課文「學校門口」の末尾（1 頁）に置かれている、

看見先生 我一鞠躬 說道『多日不見了 先生 你好』（空格は原文のまま）である。

この課文には室内で生徒が先生にお辭儀をする挿繪がある。先生に對して“您好”ではなく、“你好”と語りかけている點に、新しい人間關係を表すものとして“你”を“您”と同等に扱う中華民國の“平等”の意志を見て取れる²²¹。そして何よりも、“您好啊”ではなく“你好”が教科書に採られたことは、“你好”が挨拶語として公認されたことを示すものである。

“你好”が採用された 1933 年前後を調べてみると、

1927 年刊 Ratay, J. P.・秀毓生・金叔延の *Current Chinese, or, Shih Yung Hsin Chung Hua Yü*（適用新中華語）には、

黃先生，您好？／好哇・您好？（p. 4）〔・（ナカグロ）は原文のまま。以下の例文は同じ。〕

您好哇？這是從那兒來呀／好啊・從鄉下來。（p. 24）

這一向好哇？／少見。您好？（p. 96）

這一向好哇？／好啊！您好哇？（p. 153）

啊，您好哇？／今天早晨忙不忙？／好哇・今天不算很忙。（p. 161）

の例があり、

McHugh・周克允の *Introductory Mandarin Lessons, or, Hua Yü Hsin Chieh Ching*（華語新捷徑）（1931 年刊）にも、

您好？／好 您好？（Here 好您哪 may also be used と注釋している）

How are you? / Well, thank you. How are you?（pp. 3-5）

您好？／好 您好？

How are you? / Fine, how are you?（pp. 174-175）

您好？ 您是村正麼？／是（p. 229）

How are you? Are you the head man of this village? / Yes.（p. 234）

の例がある。

これらのことから、日本のテキストには採用されなかったが、1930 年前後には“您好啊”（“你好啊”）と“您好”（“你好”）とが並行しており、教育部により“你好”の使用が推奨されたものと推測できる。

“您好”は、1940 年には、北京で刊行された日本人著者によるテキストにも現れる。それは、『正則日本語講座 第二卷 初等會話篇』（日野成美, 1940）である。そこには、次の

²²⁰ 時間は下るが、注音符號による教科書の『國語新課本(一)』（李文誥・王杏生, 1947 民國 36 年 7 月初版開明書店刊）には、「好！／你好！」（2 頁）とある。

²²¹ 例えば、明治 39 年北邊白血鈔『燕京婦語』では、「您好哇」と「你好哇」との相手に對する使い分けが明確である。

如く、「今日は」を「您好！」と譯している²²²。「文具店で」(47 頁)²²³では、

子 おちさん 今日は。 大叔！您好！

主人 やあ、いらっしやい。 呀！您來啦！

とし、さらに、「病氣見舞」(144 頁)では、

上原 一郎君、今日は。 一郎！您好！

一郎 毎日來ていただいて すみません。 每天都來、眞對不起。

としている。

また、『學び易い北京語の本』(久世宗一, 1941)では、

王先生、少見少見／彼此彼此／您好、府上都好／托福都好 (98 頁)

と、“您好”が用いられている。しかし、この2つのテキストはいずれも北京で刊行され、前者は日本語教科書、後者は著者がさほど有名ではない點で、日本のテキストには影響を與えなかったと思われる。とはいえ、ここに、日本のテキストには見られぬ“您好”の中國での浸透度が窺える。

そして、“你好”を採用する世界的に有力な2つのテキストの登場となる。

Spoken Chinese (Hockett & Fang, 1944)では、その Basic course・Units1-12 に、

(引用者鱒澤がローマ字表記を漢字に翻字した。)

你好? How are you? (p. 7)

What would you say?(中略)You meet Miss.Wang and say:王太太, 你好? (p. 9)

とあり、さらに、對話では、

Mr. Ross : 先生好?

Stranger : 好。你好?

Mr. Ross : 好。 (p. 17)

と、“你好”を採用した。

さらに、*Beginning Chinese* (DeFrancis, 1946)には、

(引用者鱒澤がローマ字表記を漢字に翻字した。)

M²²⁴ : 你好啊? How are you?

W : 好。你好? Well. How are you?

M : 很好。 I'm fine. (p. 7) とある。

この *Spoken Chinese*、*Beginning Chinese*、そして、趙元任の *Mandarin Primer* (1949 年刊)²²⁵ は、1945 年以降の日本の中國語教育に、直接に影響を與えた。

その結果の一つとして、倉石武四郎『ラテン化新文字による中國語初級教本』(1953 年 6 月 20 日第 1 刷 1953 年 9 月 15 日第 2 刷岩波書店刊)では、

(引用者鱒澤がラテン化新文字表記を漢字に翻字した。)

²²² 一律に「您好」と譯しているのではなく、54 頁(雜貨屋で)では「客 今日は。借光！店員 いらっしやいませ。您來啦！」とする。

²²³ 場面設定は、隣家の文具店。

²²⁴ M は Mr. Martin、下段の W は Mr. Wang の略称。

²²⁵ “你(您)好”、“你(您)好啊”は、ともに使われていない。

c: お元気? 你好?

a: 元気よ、 好, (8 頁)

と。また、

金子二郎『初級中國語讀本——中國語のはなし方——』上巻(金子二郎,1957)の

(2 你好啊?)では、

先生: 你好啊?

學生: 好。張先生, 您好?

先生: 很好。 (21 頁)

と、“你好”(“您好”)は、「你好?/好」という定式で、再び日本のテキストに登場した。しかもこの 2 著は、その内容とともに、その著者(東京大學教授倉石武四郎と大阪外國語大學教授金子二郎)により、當時の中國語教育に一定の影響をもつものであった。しかし、間もなく、日本の中國語教育を變えることとなるテキストが登場する。

4. 普通話の挨拶言葉“你好”の登場

『漢語教科書(日本語版)』上冊(北京大學外國留學生中國語文專修班, 1960^a)が刊行され、その「口語練習」冒頭(79 頁)に、現在使われている挨拶の定式、即ち、「你好!/你好!」が登場する。その原文は、

(1) 你好! ごきげんよう!

(2) 你好! ごきげんよう!

である。

ここでは譯語「ごきげんよう!」が用いられているため、この譯語から受ける感じとして、中國語「你好!」自體が少し硬く感じられる。

そして、原テキストの『北京放送テキスト中國語講座課本』は鱒澤未見だが、陳文彬編・校閱香坂順一改編増補『初級—中級用/北京放送テキスト中國語講座課本』(昭和 40 年 11 月 25 日初版昭和 47 年 1 月 10 版光生館刊)冒頭(.1)では、

① 你好! こんにちは! こんばんは!

と、譯語を變え、さらに、『漢語教科書(日本語版)』を引き繼ぐ、北京・商務印書館編『基礎中國語』上巻(東方書店出版部, 1973)では、

A(1) 你好! こんにちは!

B(1) 你好! こんにちは! (52 頁)

と、譯語も形式もともに定式化した。

『漢語教科書(日本語版)』は北京で刊行されるや、同年 11 月には東京の光生館から縮印刊行され、その内容と體系ゆえに、徐々にその後の中國語教育の標準になっていった。それゆえ、1960 年以降、日本のテキストは“你好”を採用するものが増加し、1965 年以降、“你好啊”は徐々に採用されなくなり、1970 年以降は、余り見られなくなっていった。

つまり、『漢語教科書(日本語版)』は、普通話とその教學體系を提示することで、日本の

中國語教育の歴史にその時代を劃したが、その象徴的表現が、その冒頭に掲げられた“你好”であったのである。そして、普通話としての“你好”の登場とともに、庶民の挨拶語としての「喫飯了嗎」や「上哪兒去」などは舊い表現として日本のテキストに採用されなくなった。さらに、中國でも、1978年の改革開放政策以後は、携帯電話の普及に顕著なように、人と人との接し方の變化に伴い、“你好”が使われる場面が増加し、これまでの庶民の挨拶語に變化を與えはじめている。

終 章

本論文 174 頁で引用した北浦藤郎の発言は、中國語の口語習得（音聲言語教育）と口語文習得（文字言語教育）との落差とその解消の必要性、即ち、口語文の文字言語教育の建設の必要性を語るものであった。これを直截に論じたものではないが、それにつながるものとして、古典文言文と現代白話文とを結ぶものについて二つの論がある。一つは倉石武四郎のものであり、一つは本論文 4-5 頁で引用した『支那時文釋義』（山田謙吉, 1923; 37-38 頁古文と白話）の言である。

訓讀に習熟するも、訓讀に密着した文字言語教育を否定して、音聲言語教育を選択した倉石武四郎は、

「従来文語を訓讀していた人が音讀を學び、現代音に通じた人が文語を學べば、自然にその連絡ができてしまふ」²²⁶と述べ、その實例とおぼしき發言で、「（文言の訓讀は轉倒讀み、白話は直讀である……引用者による補記）そのため、文言と白話とがまったく別種の言語であるかのように錯覺した。それが今や二〇歳前後の學生によって、わけもなしに合成された。ここに現代語の學習からさかのぼって古典にのぞむという方式が成功したのである。もちろん、文言と白話とでは語彙がおなじでない。（中略）文言には句讀がない。これも難澀の原因であり、教師たるわたくしは、しばしば句讀のあやまりを正した。しかし、こうした點を捨象すると、文言と白話とはけっして別ではない。」²²⁷

と斷じた。

倉石武四郎は、古典文言文と現代白話文とを結ぶものは音聲であるとして、音聲以外には触れていない。句讀、そしてポーズ(休止)という、口語文・文語文に共通する一文と文章の急所を「捨象」して、この急所を音讀でどのように解決・克服するのかの肝心要の議論を避けている。また、音聲が口語文と文語文とを結びつける唯一のものという觀點は、訓讀の盲點を衝いたような氣にさせるけれども、どのように結びついているかを論じているわけではない。そして、これは音聲としての口語修得と口語文修得との落差について述べたものではないが、いずれにせよ、口語修得と口語文修得との落差も音讀によって乗り越えられると主張するように思われる。

同じく訓讀に習熟した山田岳陽の言(本論文 4-5 頁に引用)を再度引用すると、

「右、金國璞氏の『北京官話談論新篇』第五十三章の全文を掲ぐ。白話に於ける叙述の力に注意するを要す。微細なる叙述と一絲も亂れざる語句の層進する所は、全然古文の組織法と同じ。支那の戲劇等に於て局面の轉換は、脚本家の最も注意する所にして、古文の章法、篇法と同一の原理に本づきて結構せらる。此の文章に於ても、文章としては章法、篇法に注意し、演藝としては局面の轉換に注意すれば、自然に巧處を

²²⁶ 倉石武四郎著『支那語教育の理論と實際』「目次」7 頁の一節。

²²⁷ 倉石武四郎著『中國語五十年』1973 年 1 月 30 日岩波書店刊 165 頁。

悟るべし。」

である。この言は、古典文言文と現代白話文とを結ぶものは論理展開の仕方（論理構成即ち文章構成）であるという主張である。序章で既述したように、言語表現に論理構成を整える手立て・技法を知らなければ、口語文は作れない。文章の論理構成を整える技法習得のみが口語習得と口語文習得との落差を埋められるのであり、その文章の論理構成を整える技法を示したものが、前掲した山田岳陽の一節なのである。

そこで、文字言語教育の導き手となる、山田岳陽の言をもう少し詳しく見ておこう。

山田岳陽は、文章作成を念頭に文章を観察し、文章全體を常に見据えて「訓讀」していたのである。それは、山田岳陽は、一文を集めてもそれをそのまま文章とはなるものではないと考え、作者が全體の論理構成を意識して、段落、一文、語句に至る細部にまで計算して書かれたものが文章である、と考えていたからである。つまり、山田岳陽の文章観は、文章は作者の論理に従って構造化されたものであり、構造化されておらぬ一文の集合は文章でない、というものである。だから、文章を構成する各一文はそれぞれ別個に存在せず、連鎖的結合體として各一文を認識するというものである。そして、段落の構成も、段落内の文章構成も、一文の構成も、字句の構成も、全ては文章の論理構成に従うものだからこそ、篇法、章法、句法、字法という、それに必要不可欠な用語を用いたのである。同様に、一篇の詩歌と一篇の文章とは同じものである、と認識していたのである。というのは、詩歌は、句數、句長、對句、音韻配置などの、定められた論理構成に従い、字句を當てはめて作成するものである。そして、文章は、段落、一文、字句を論理に従って文章を構成していくものである。つまり、詩文と文章とは、定型、非定型の差異はあるが、論理構成を有する作品に仕上げる點で共通しているからである。

訓讀と文章の論理構成とは別物であるから、理屈の上では、訓讀を否定しても、文章の論理構成、即ち、思惟の論理化の習得は可能に見える。しかし、日本では、初めは中國語で中國古典を學んでいただろうが、日本人である、という意識を獲得してからは、日本人は、訓讀によってのみ、中國古典から、話の轉回、文章の論理構成を掴んできた。つまり、訓讀とは、文章の論理構成を日本語で讀むための手段であった。だから、文章構成習得に必要な用語とその用法とを訓讀とともに獲得して來たのである。また、論理構成習得こそが現在と同様に教養であった。こういう背景を持つ訓讀を否定するには、文章構成習得に必要な用語とその用法との代案を提示するか、或いは、それを包攝する具體的方法を提示しなければならない。そうでなければ、その訓讀否定は有害無益である。だから、倉石武四郎のように、古典文言文と現代白話文とを結び付けるものが音聲であるとしたら、文章の論理構成を包攝した中國語音讀の具體的提示、或いは、文章構成に必要な、篇法などの用語の代案が、有って然るべきであった。しかし、それらの提示がなされなかったため、文章の論理構成を隠してしまう音讀神話が残された。訓讀を轉倒讀みと非難しても、論理をそこに見出せないようなポーズ(休止)を意識しない直讀では、いくら滑らかな音讀でも意味を持たない。さらに、倉石武四郎が漢文教育の止揚を目指した、その中國語教育

には、戦前も戦後も、篇法、章法などの用語もなく、文章構成から切り離した句法、字法の考究に終始した。その理由は、倉石武四郎が漢文教育の成果、即ち、文字言語教育の成果については全く考えもせず、その文章構成の方法までも訓讀の弊害と見なして、これを訓讀と一緒に玄界灘に棄てたからである。倉石武四郎の訓讀否定は大間違いであった。

一文の組立は各國語によって異なるが、その論理の進め方、文章の運び方、文章構成法は、各國語に共通しているのである。しかるに、戦後の中國語教育には、依然として篇法、章法などの用語も登場せず、段落構成と段落内の文章構成の研究なしの文法研究が隆盛している。これは、戦後の中國語教育が、1960 年の普通話教育時時期以降も、東京大學教授の倉石武四郎の訓讀否定に同調して、漢文教育の成果の議論をなおざりにしたまま、文字言語教育を否定し、口語の文章教育も音聲言語教育の延長と規定し、そのうえ、中國語の質的變遷に學問的・教育的關心も示さなかったからである。その結果、論理構成の方法は中國語教育から排除されたまま今日に至っている。

また、20 世紀末から、中國語(正確には普通話)自體の意味づけを漢族の共通語から國家通用語へと變化させている。そして、1991 年 12 月の HSK(漢語水平考試)の日本參入以降、中國語の規範化・正規化の進展とともに、とりわけ HSK の各級(1~6 級)の設定は、これまでの日本國內の中國語檢定期以上に中國語教育に直接の影響を與えはじめている。それゆえ、HSK の日本參入以降、普通話教育の時代から既に新たな時代に突入しているように感じられる。

このような中國語の現況も踏まえ、また、既述の如く、現在の中國語教育が口語(音聲言語)に加え、文章教育としての口語文(文字言語)に責任を持たなければならなくなつて久しい現實的要請から、かつて漢文教育が擔ってきた文章構成に關する用語とその用法の教學を 21 世紀の中國語教育が擔うべきである。文章の論理構成の習得は、大變單調で面白味の少ない作業であるには違いはないけれども、文章構成の方法の教育こそ、新しい時期區分による明治以降中國語教育史が教える、現在の中國語教育の喫緊焦眉の課題なのである。

参 考 文 献

凡例

- ・著書・論文、西歐書、雑誌、目録・總記に分別して、和漢著者姓名の五十音順に配列し、西歐著者名の ABC 順に配列した。
- ・編と著との區別を附けなかった。ただ、譯書は譯として區別した。
- ・著作發表年は、その初版發刊年とする。分冊刊行のものも第一分冊初版發行年とする。初版以外の閲覽著作はその版數も記す。刊年不明は不明と記す。刊年月の書式は、その奥附の記載に従う。年號は、明治は明、大正は大、昭和は昭、民國は民と略記し、滿洲國年號は略さずそのまま轉記する。例えば、1987. 05. は 1987 年 5 月、明 41. 04. は明治 41 年 4 月の如くである。
- ・同一發表年の著作は、發表月順に右肩添え字の數字で區別した。

【著書・論文】

- 愛知大學中日大辭典編纂處, 1988: 『中日大辭典(増訂第二版第 2 刷)』大修館書店 1988. 09. 刊
- 相原茂, 1987: 『中國語 Q&A101』1987. 05. 大修館書店刊, 1992. 07. 第 4 版
- 淺川謙次, 1968: 「中國語教育における歴史的課題」『アジア經濟旬報』1968. 06. 下旬號(淺川謙次, 1977 所收による)
- , 1977: 『披黑雲睹晴天 淺川謙次追悼遺稿集』1977. 12. 淺川謙次追悼遺稿集刊行委員會刊
- 青柳篤恆, 1908: 「日露戰後支那に於て活動せんとする日本の青年は如何なる支那語を學ぶべき乎」『支那語學』第十卷號, 明 41. 04. 支那語學研究會編(文求堂書店刊)所收(早稻田大學中央圖館所藏)
- 足立忠八郎, 1902: 『清國時文輯要總譯』明 35. 07. 石丸書舗刊
- 安部貞, 1920: 『山東省支那語ノ研究』大 9. 01. 序刊(波多野太郎, 1986 所收による)
- 荒尾精, 1889¹: 『日清貿易商會荒尾精演說筆記』明 22. 10. 石川縣第一勸業課刊(國立國會圖書館所藏)
- , 1889²: 「明治二十二年十一月二十五日山口藤六樓ニ於テ 日清貿易商會荒尾精演述ノ要旨」『山口縣勸業雜報』號外(國立公文書館・內閣文庫所藏)
- 安藤彥太郎, 1954: 「1953 年 12 月 26 日、東京大學教養學部で開催された中國語學研究會月例會での講演「急就篇をめぐって」」『中國語學研究會會報』第 22 號(1954. 01.) 所收, 文生書院・東城書店刊『中國語學』復刻版所收
- , 1955¹: 「中國語教育の歴史的 성격」『教養諸學研究』第 2 號(昭 30. 03.) 早稻田大學政治經濟學部教養研究會編刊所收
- , 1955²: 「共通討論テーマを學生と討議しよう」『中國語學研究會會報』第 29 號(1954. 08.) 所收, 文生書院・東城書店刊『中國語學』復刻版所收
- , 1955³: 「中國語教室の問題について」『中國語學研究會會報』第 30 號(1954. 09.) 所收, 文生書院・東城書店刊『中國語學』復刻版所收
- , 1971¹: 「中國語は外國語である——戰後の中國語教育」(安藤彥太郎, 1971² 所收による)

- , 1971²:『日本人の中國觀』昭 46. 03. 勁草書房刊, 昭 46. 06. 第 2 刷
- , 1988:『中國語と近代日本』1988. 02. 岩波書店刊
- 飯河道雄, 1923¹:『現代支那語讀本』大 12. 08. (大連)大阪屋號書店刊
- , 1923²:『支那に於ける外人の文化事業論』大 12. 11. 飯河道雄刊
- , 1928¹:『合本支那語速成講座分科合本』東方文化會, 昭 3. 02. 刊, 昭 9. 09. 第 20 版
- , 1928²:「官話急就篇講話」(『合本支那語速成講座分科合本』所收)
-
- , 1928³:『繪入り子供と家庭の支那語』昭 3. 06. 東方文化會刊, 大連・大阪屋號書店發賣
- 伊澤修二, 1895:『日清字音鑑』明 28. 06. 竝木善道刊(國立國會圖書館所藏)
- , 1904:『視話應用清國官話韻鏡 附解説書』明 37. 12. 樂石社刊
-
- 石田卓生, 2009:「東亞同文書院の中國語教材——『華語翠編』以前について」『中國 21』(32) (2009. 01. 刊) 所收
- , 2010:「東亞同文書院の中國語教育について」『オープン・リサーチ・センター年報』4, (2010. 06. 刊) 所收
- , 2013:「東亞同文書院以前の御幡雅文『華語跬步』について」『同文書院記念報』21 (2013. 03. 刊) 所收
- , 2016:「東亞同文書院の中國語文章語教育について——愛知大學東亞同文書院大學記念センター所藏テキストを中心として」『同文書院記念報』24 (2016. 03. 刊) 所收
- 石山福治, 1904:『支那語辭彙』明 37. 12. 文求堂刊
- , 1935:『最新支那語大辭典』昭 10. 06. 第一書房刊
- 磯田一雄(ほか), 2000:『在滿日本人用教科書集成』第 8 卷, 2000. 11. 柏書房刊
- 磯野清藏, 1932:『簡易滿洲語自習書』昭 7. 12. 關東軍參謀部刊
- 關東軍參謀部編とあるが、「本書中發音記號及軍用會話、單語單句
竝ニ附錄(同文怪義ヲ除ク)ハ獨立守備歩兵第二大隊本部附陸軍通
譯生磯野清藏氏著「日滿對譯軍用軍事會話」ヲ借用セリ」とある
- , 1934:『速成滿洲語自習書』昭 9. 05. 東京・偕行社刊, 昭 10. 06. 第 9 版
- 〔關東軍參謀部, 1932 の判型縮小改題本である〕
- 伊地智善繼, 1949:「アメリカの中國語學——特に最近の傾向について——」『中國語學』29(昭 24. 08. 刊) 所收
- 伊地智善繼・大原信一, 1952:共譯『Beginning Chinese 中國語初歩』昭 27. 大阪外國語大學中研室内伊地智善繼油印刊
- 井手三郎, 1899:『清國ニ於ケル肥後人』(國會圖書館憲政資料室所藏) 佐々友房文書 23 所收
- 井上雅二, 1910:『巨人荒尾精』明 43. 09. 佐久良書房刊(國立國會圖書館所藏)
- 井上翠, 1906:『日華語學辭林』明 39. 10. 18(光緒 32. 09.) 東亞公司(博文館)刊
- , 1950:『松濤自述』, 昭 25. 05. 大阪外國語大學中國研究會刊
(中國語教本類集成 第 10 集 第 3 卷所收)
- , 1941:『井上支那語中辭典』昭 16. 11. 文求堂刊
- 岩倉傳七, 1939:『支那語の栞』(大阪外國語學校支那研究會小冊(一)) 昭 14. 05. 大阪實文館刊
- 岩村忍・魚返善雄, 1937:カールグレン著・共譯『支那言語學概論』1937. 02. 文求堂刊

- 岩村成允, 1906: 『北京正音支那新字典』 明 39. 08. 博文館刊
- 岩本眞理, 2017: 『『南山俗語考』 翻字と索引』 2017. 04. 中國書店刊
- 上奥留輔, 1933: 『日滿會話 日滿協和は先づ言語から』 昭 8. 06. 滿蒙拓殖研究會刊
- 上仲尚明, 1914: 『膠州灣詳誌』 大 3. 11. 博文館刊
- 汪向榮, 1988: 『日本教習』 1988. 10. 北京・生活・讀書・新知三聯書店刊
- 太田辰夫, 1995: 「滿洲文學考」『中國語文論集』 1995 年 5 月東京・汲古書院刊所收
- 太田辰夫・竹内誠, 1992: 『小額 社會小説』 平 4. 8. 汲古書院刊
- 大橋末彦, 1917: 『官話急就篇詳譯』 大 6. 10. 文英堂書店刊, 大 6. 12. 3 版
- 魚返善雄・實藤惠秀, 1943: 「支那語書誌學」第 3 卷 6 號～第 4 卷 2 號, 昭 18. 06. 刊-
昭 19. 02. 刊
- 魚返善雄・中野昭麿, 1943: 劉復著, 魚返善雄・中野昭麿共譯『支那文法講話』 昭 18. 02.
三省堂刊
- 魚返善雄, 1939: デンツェル・カー著, 魚返善雄譯『現代支那語科學』 昭 14. 01. 文求堂刊
——, 1948: 譯『劉復著國語運動略史』 昭 23. 04. 序, 譯者自刊
——, 1957: 校注「同治末年留燕日記」『東京女子大學論集』 第 8 卷 1, 2 號, 昭 32. 11.,
昭 33. 02. 刊所收
- 岡本茂, 1925: 『支那文語口語文典』 大 14. 08. 偕行社刊 (波多野太郎, 1987 所收による)
- 岡本正文, 1902: 『支那音聲音字彙』 明 35. 7. 文求堂刊
- 岡本隆三, 1946: 「卷頭言 華語の回復」『新中華』 帝國書院, 第 1 卷第 1 號 (昭 21. 6. 刊)
所收
- 御幡雅文, 1886: 『華語跬步未定稿本』 明 19. 御幡雅文刊 (東京大學井手三郎文庫所藏)
——, 1889: 『官商須知文案啓蒙』 明 22. 11. 御幡雅文刊 (內閣文庫所藏)
——, 1890¹: 『華語跬步』 明 23. 日清貿易商會刊 (東京大學井手三郎文庫所藏)
——, 1890²: 『滬語商賈問答・續散語問答』 明 26. 刊 (東京大學井手三郎文庫所藏)
——, 1891: 御幡雅文北京官話譯『生意筋絡』 光緒 17. 11. (明 24. 11.) 序刊
——, 1893¹: 『滬語便商・散語問答』 明 25. 修文書館刊 (早稻田大學中央圖書館所藏)
——, 1893²: 『滬語便商意解』 明 25. 修文書館刊 (早稻田大學中央圖書館所藏)
——, 1899: 『華語跬步』 明 32. 刊 (東京大學井手三郎文庫所藏)
——, 1903¹: 『華語跬步』 明 36. 10. 文求堂刊
——, 1903²: 『滬語便商』 明 36. 10. 文求堂刊
——, 1903³: 『滬語便商意解』 明 36. 10. 文求堂刊
——, 1908: 『增補華語跬步』 上・下, 明 41. 01. 文求堂刊
——, 不明: 『華語跬步音集』 御幡雅文纂刊
- 大橋末彦, 1917: 『官話急就篇詳譯』 大 6. 10. 文英堂書店刊, 大 6. 12. 第 3 版
- 岡田瓢, 1924: 『北京官話 常用二千句集』 大 13. 05. 25 青島華文書院刊, 昭 13. 10. 訂正第 8
版
- 何盛三, 1919: 『北京官話文法 (詞編)』 大 8. 4. 赤松喬二刊 (著者名は阿麼徒)
——, 1928: 『北京官話文法』 昭 3. 10. 太平洋書房刊
——, 1935: 『北京官話文法』 昭 10. 09. 東學社刊 (國立國會圖書館デジタルコレクション)
——, 1929: 『現代支那語講座』 昭 4. 04. ~ 昭 6. 12. 太平洋書房刊
改題再版: 紀文閣支那語講座刊行會『模範支那語講座』 昭 7. 04. ~ 昭 7. 05.

- 外務省, 1870: 『漢語跬歩』明 3. 外務省刊
- 學校法人大乘淑徳學園一〇〇年史編集委員會, 1996: 『學校法人大乘淑徳學園一〇〇年史資料編』平 8. 11. 學校法人大乘淑徳學園刊
- 柏原文太郎, 1901: 『華語跬歩』明 34. 7. 東亞同文會刊<116-128>
- 金谷昭, 1877: 高第丕・張儒珍著金谷昭訓點『大清文典』明 10. 12. 青山清吉刊
- 鐘ヶ江信光, 1986: 『中國語研究六十年——私の歩んだ半生』1986 刊 (鱒澤未見)
- 金子堅太郎, 1940: 「明治五年より同十一年まで米國留學懷舊錄」科學知識普及會編『科學知識』昭 15. 01 號
- 金子二郎, 1957: 『初級中國語讀本——中國語のはなし方——』上卷 1957. 5. 江南書院刊
- 神谷衡平・清水元助, 1923: 共著『標準中華國語教科書 初級篇』大 12. 4. 文求堂書店刊 (國立國會圖書館デジタルコレクションによる)
- , 1924: 『標準中華國語教科書 中級篇』大 13. 4. 文求堂書店刊 (國立國會圖書館デジタルコレクションによる)
- , 1926¹: 『註解 支那長篇小説選鈔』昭 2. 04. 文求堂書店刊
- , 1926²: 『註解 支那短篇小説萃選』昭 2. 05. 文求堂書店刊
- , 1929: 『現代中華國語文讀本 前・後篇』昭 4. 7. 文求堂書店刊
- 神谷衡平・北浦藤郎, 1929: 『新選支那時文讀本』昭 4. 7. 同文社刊, 昭 9. 3. 第 4 版
- 上村幸次, 1957: 「明治初期の中國語學關係書に就いて」『山口大學文學會誌』viii~1 刊
- 川崎近義, 1883: 『西涯子藏書目錄』明 16. 08. 査記(刊本なし)
- 川瀬侍郎, 1934: 『かなつき 日滿會話』昭 8. 02. 東京・大阪屋號書店刊, 昭 9. 09. 第 8 版
- 河原操子, 1944: 『新版蒙古土產』明 42. 實業之日本社原刊, 昭 19. 01. 大阪・靖文社増補新刊
- 韓起初, 1953: 『劉巧團圓』1949. 北京・新華書店官, 1953. 02 北京・人民出版社重排第一版
- 木野村政徳: 『日清會話 附軍用語』明 27. 09. 日清協會刊
- 教育ジャーナリズム史研究會, 1993: 『長崎縣有志教育會雜誌』第 3 號 1993. 08. 日本圖書センター復刻刊
- 金國璞, 1887: 『華言問答』明 20. 02. 御幡雅文寫刊(青燒版)
- , 1903: 『華言問答』明 36. 04 文求堂刊
- , 1905: 金國璞官話譯『北京官話今古奇觀 第一編』明 37. 06. 文求堂刊
- , 1911: 金國璞官話譯『北京官話今古奇觀 第二編』明 44. 04. 文求堂刊
- 金國璞・平岩道知, 1898: 『北京官話談論新篇』明 31. 12 積嵐樓書屋刊
- 金星灑, 1914: 『婦女談論新集』大 3. 04. 文求堂刊
- 久世宗一, 1941: 『學び易い北京語の本』昭 16. 10. 北京・永増書局刊
- 倉石武四郎, 1939: 『倉石中等支那語』(全 5 卷) 昭 14. 07. ~16. 03. 弘文堂刊
- (中國語教本類集成 第 2 集 第 4 卷所收)
- , 1941: 『支那語教育の理論と實際』昭 16. 03. 岩波書店刊
- , 1949: 『中國語法讀本』昭 24. 05. 日光書院刊
- , 1953: 『ラテン化新文字による中國語初級教本』1953. 06. 岩波書店刊
- , 1973: 『中國語 50 年』1973. 01. 岩波書店刊
- , 1977: 日中學院編『倉石武四郎中國にかける橋』1977. 04. 亞紀書房刊
- , 1981: 『倉石武四郎著作集』(第 1 卷 1981. 3., 第 2 卷 1981. 5.) くろしお

出版刊

- 黒木彬文, 1980: 「興亞會の基礎的研究」『近代熊本』No. 22 昭 58. 熊本近代史研究會刊
慶應義塾出版社, 1880: Wade, Thomas Francis 原著『清語階梯語言自邇集』明 13. 07. 編刊
憲兵司令部, 刊年不明: 『秘 日獨戰役憲兵史』憲兵司令部刊
興亞會, 1880¹: 『興亞會報告』第四集(明 13. 05.)興亞會刊
——, 1880²: 『興亞會報告』第十二集(明 13. 11.)興亞會刊。
(黒木彬文・鱒澤彰夫, 1993: 『興亞會報告・亞細亞協會報告』所收)
興亞會支那語學校: 『新校語言自邇集 散語ノ部』慶應義塾出版社
(中國語教本類集成 第 1 集 第 1 卷所收)
神戸小學校開校三十年記念祝典會, 1915: 『神戸區教育沿革史』大 4. 05. 神戸小學校開校三
十年記念祝典會刊
江藍生, 1994: 「『燕京婦語』所反映的清末北京語特色」『語文研究』1994 年第 4 期・1995 年
第 1 期, 北京語文出版社刊(江藍生, 2000 所收による)
——, 2000: 『近代漢語探源』2000. 02. 北京・商務印書館刊
黒龍會, 1933: 『東亞先覺志士記傳』1933. 黒龍會出版部原本刊, 1966. 06. 『明治百年史叢書
22』原書房復刻第 1 刷)
故下田校長先生傳記編纂所, 1943: 『下田歌子先生傳』昭 18. 10. 故下田校長先生傳記編纂所
編刊
吳大五郎, 1886: 「北京留學生試驗成績審查意見書」明 19. 10. (外務省外交史料館所藏
6-1-7- - 1 「清國へ本省留學生派遣雜件」2 所收)
吳大五郎・鄭永邦, 1888: 『日漢英語合璧』明 21. 11. 鄭永慶刊
吳啓太・鄭永邦, 1882: 『官話指南』明 15. 11. 楊龍太郎刊
——, 1903: 金國璞改訂『改訂官話指南』明 36. 05. 03 文求堂刊
權寧世, 1927: 『支那四聲字典』昭 2. 09. 東京・大阪屋號書店刊
——, 1933: 『改訂支那四聲字典』昭 8. 10. 東京・大阪屋號書店刊
胡明揚, 1987: 『北京語初探』1987. 01. 商務印書館刊
小室三吉: 「小室三吉の明治三十三年二月十七日附書簡」三井文庫所藏(物産 144)『明治三
十三年上半季會議錄』所收
近衛第一旅団: 『兵要支那語』明 27. 08. 東邦書院刊
増訂再版(明 27. 08.)は多田桓校の朝鮮語を附したもの
小山澄夫, 2010: 周汝昌著・小山澄夫譯『曹雪芹小傳』2010. 07. 汲古書院刊
國務院總務廳人事處, 1940: 『滿洲國政府語學檢定試驗問題集』康德 4. 04. 明文社刊
彭城邦貞, 1894: 『獨習日清對話捷徑』明 27. 09. 鐘鈴堂刊<特 65-921>
佐々澄治, 1888: 『長崎縣達類纂』明 21. 05. 以文會社刊(國立公文書館內閣文庫所藏)
佐藤三郎, 1984: 「中國における日本佛教の布教権をめぐる」『近代日中交渉史の研究』昭
59. 03. 吉川弘文館刊所收
實藤惠秀, 1946: 「明治以前の中國語研究——日華語學關係史(1)——」『〔中國語雜誌〕新
中華』第 1 卷第 5 號(昭 21. 12. 刊) 所收
さねとう・けいしゅう, 1970: 『中國人 日本留學史』増補版, 1970. 10. くろしお出版刊
參謀本部, 1894: 『日清會話』明 27. 08. 八尾新助刊, 明 37. 02. 第 4 版
——, 1914: 『日支會話』大 3. 08. 小林又七刊
——, 1918: 『日支會話』大 7. 08. 小林又七刊
——, 1937: 『日支會話』昭 8. 02. 兵用圖書株式會社刊, 昭 12. 09. 第 11 版
鹽谷溫, 1939: 「卷頭言」『支那語と時文』創刊號(昭 14. 07. 01 刊) 所收
——, 1940: 『中等學校時文新編下』昭 15. 10. 開隆堂書店修正刊

- 重野安繹 1885: 重野安繹總閱、北京音磯部栄太郎・張滋昉校閱『明治字典』明 18. -21. 大成館刊
- 柴垣秀太郎, 1954: 「全國大會の主旨を會報にも反映させよう」『中國語學研究會會報』第 33 號(1954・12)所收, 文生書院・東城書店刊『中國語學』復刻版所收
- 島津重豪, 1812: 『南山俗語考』文化 12 年刊→岩本眞理, 2017 を参照
- 下永憲次, 1926: 編『北京俗語兒典』大 15. 06. 東京・偕行社刊
- 謝枋得編『文章軌範』: 前野直彬, 1961 を参照
- 朱全安, 1997: 『近代教育草創期の中國語教育』1997. 10. 白帝社刊
- 朱文叔等編・孫世慶等校, 1933: 『小學國語讀本』初級第二冊(上海中華書局民國 22. 10. 09 刊, 教育部審定民國 26. 05. 第 288 版)
- 淑德學園, 1962: 『淑德教育七十年』昭 37. 11. 淑德學園刊
- 鐘寶, 1938: 『男女適用最近日台會話』昭 13. 寶文館刊
- 眞宗典籍刊行會, 1941: 「大谷派學事史略年表」(『續眞宗大系』第二十卷) 昭 16. 原刊, 昭 52. 國書刊行會印
- 杉武夫, 1929: 『最新支那語講座』昭 4. 05. ~昭 5. 07. 文求堂刊
- , 1937: 『最新支那語軍事會話』昭 12. 10. 關東軍參謀部刊
- 關東軍參謀部編纂とあるが、奥附に「責任者 杉武夫」とある
- , 1940: 『現地攜行支那語軍用會話』昭 15. 09. 外語學院出版部刊(中國語教本類集成第十集 第 2 卷所收)
- 鈴木擇郎, 1937: 『標準支那語教本初級編教授用參考書』昭 12. 05. 東亞同文書院支那研究部刊
- 鈴木萬太郎、下永憲次: 『北京官話俗語集解』大 14. 05. 東京・大阪屋號書店刊
- 諏訪義讓, 1970: 「大陸における谷了然師の開教活動」『同朋學報』第二十二號(昭 45. 刊)所收
- 青島市推廣普通話教材編寫組, 1987: 『青島人怎樣學說普通話』1987. 05. 青島出版社刊
- 青島守備軍軍政史編纂委員會, 1927¹: 『秘 自大正三年十一月至大正六年九月 青島軍政史』第 2 卷第 4 篇衛生、教育(國立國會圖書館デジタルコレクションによる)
- , 1927²: 『秘 自大正三年十一月至大正六年九月 青島軍政史』第 3 卷第 5 編運輸交通(國立國會圖書館デジタルコレクションによる)
- 青島日本中學校史編集委員會, 1989: 『青島日本中學校史』1989. 03. 青島日本中學校史刊行會刊。
- 薛乃良, 1876: 『眉前淺話』『中國文學語學資料集成』第 1 篇第 2 卷所收
- 錢稻孫, 1935: 「北平に於る日本文化研究の現状」『中國文學月報』第 8 號(昭 10. 10.) 中國文學研究會編, 生活社刊所收
- 善隣書院, 1935: 『羅馬字 急就篇』昭 10. 11. 善隣書院刊, 昭 11. 06. 第 2 版
- 高田眞治・魚返善雄, 1939: 『時文讀本』昭 14. 10. 大日本出版刊, 昭 15. 03. 訂正版刊
- , 1940: 『現代文言讀本』昭 15. 06. 大日本圖書刊
- 高西賢正, 1937: 『東本願寺上海開教六十年史』昭 12. 08. 東本願寺上海別院刊
- 大本營陸軍部, 1941: 『皇軍必攜〔實用〕馬來語會話』昭 16. 08. 大本營陸軍部刊
- 武田寧信・中澤信三, 1943: 共著『軍用支那語大全』昭 18. 09. 帝國書院刊
- 田中慶太郎, 1932: 『魯迅創作選集』昭 7. 04. 文求堂刊
- 田中慶太郎・松枝茂, 1939: 『周作人隨筆抄』昭 14. 04. 文求堂刊
- 田中清一郎, 1937: 王力著・田中清一郎譯『中國文法學初探』昭 12. 06. 文求堂刊

- 田中正程, 1885: 田中正程譯, ジョーン・ベビス, 張滋昉共校『英清會話獨案内』明 18. 07
昇榮堂刊
- 谷信近, 1889: 『支那語獨習書 第一編』明 22. 05. 大阪・支那語獨習學校刊
- 秩父固太郎, 1928: 『簡易支那語會話篇』昭 3. 05. 大連・大阪屋號書店刊, 昭 8. 07. 第 22
版
- 張照旭, 2014: 「『大清文典』の中國語カナ表記について」岡山大学大学院社會文化科学研究
科紀要第 37 号 (2014. 03.)
- 張美蘭, 2011: 「日本明治時期教科書北京官話口語詞」『明清域外官話文獻語言研究』2011.
04. 長春・東北師範大學出版社刊所收。
- 趙傑, 1996: 『滿族與北京話』1996. 07. 遼寧人民出版社刊
- 中國語學研究會, 1969: 『中國語學新辭典』昭 44. 10. 光生館刊
- 中國語學研究會關西支部, 1954: 「關西支部提出全國大會討論共通テーマ『中國語教育方法
論』」(『中國語學研究會會報』1954. 07. 20 第 28 號所載)
(昭 63. 05. 27 文生書院・東城書店刊復刻版による)
- 中國語學研究會座談會, 1954: 「金澤大會を顧みて」『中國語學研究會會報』1954. 12. 10
第 33 號(昭 63. 05. 27 文生書院・東城書店刊復刻版による)
- 中國文學研究會, 1942: 『中國文學』第 83 號(昭 17. 05. 生活社刊) 特輯「日本と支那語」
- 中國文字改革委員會詞彙小組, 1958: 『漢語拼音詞彙(初稿)』1958. 12. 文字改革出版社,
1959. 03. 第 3 次印
- 陳文彬, 1965: 編・校閱香坂順一改編增補『初級—中級用／北京放送テキスト中國語講座課
本』昭 40. 11. 光生館刊, 昭 47. 01. 第 10 版
- 東亜同文會, 1936: 『對支回顧錄』下卷 1936 年原本刊原書房『明治百年史叢書 70』1981. 06.
復刻第 2 刷
- , 1941: 『續對支回顧錄』下卷 1941 年原本刊原書房『明治百年史叢書 212』1981. 07.
復刻第 2 刷
- 東亜同文書院學友會, 1908: 『日清貿易研究所・東亜同文書院沿革史』明治 41. 06. 東亜
同文書院學友會刊
- 東京外國語學校, 1932: 『東京外國語學校沿革』昭和 7. 11. 東京外國語學校刊
- , 1874: 『明治七年三月官員並生徒一覽』明 7. 東京外國語學校刊
(一ツ橋大學圖書館藏)
- , 1876: 『東京外國語學校校則』(明治 9 年 12 月)(茂原市立木、高橋喜惣治文書
所收)
- , 1879: 『東京外國語學校一覽明治十二年十月』明 12. 東京外國語學校刊
(一ツ橋大學圖書館藏)
- , 1880: 『東京外國語學校一覽明治十三、十四年』明 13. 東京外國語學校刊
(一ツ橋大學圖書館藏)、
- , 1881: 『東京外國語學校一覽明治十四、十五年』明 14. 東京外國語學校刊
(一ツ橋大學圖書館藏)
- , 1882: 『東京外國語學校一覽明治十五、十六年』明 15. 東京外國語學校刊
(一ツ橋大學圖書館藏)
- , 1883: 『東京外國語學校一覽明治十六、十七年』明 16. 東京外國語學校刊
(一ツ橋大學圖書館藏)
- , 1884: 『東京外國語學校一覽明治十七、十八年』明 17. 東京外國語學校刊
(一ツ橋大學圖書館藏)
- 東京外國語大學史編纂委員會, 1999: 『東京外國語大學史』1999. 11. 東京外國語大學刊
- 東方書店出版部, 1973: 北京・商務印書館編東方書店出版部譯『基礎中國語』上卷, 據 1972. 02.
商務印書館出版中國國際書店刊, 1973. 03. 東方書店刊, 1973. 06. 第 2

刷

- 渡會貞輔, 1918:『支那語叢談』大 7. 08. 大阪屋號書店刊(國立國會圖書館デジタルコレクションによる)
- , 1936:「支那語雜誌小史」宮越健太郎主幹『支那語』第 5 卷 1 號~第 3 號(昭和 10. 01. ~03.) 所收
- 徳谷豊之助・松尾雄四郎, 1905:『普通術語辭彙』明 38. 05. 敬文社刊
- 富谷兵次郎, 1923:『中華言文新編』大 12. 01. 01 奉天同文商業學校刊
- (波多野太郎, 1985¹ 所收による)
- 富山誠一, 1908:『記憶するに易く實用に適する日滿會話』明 41. 04. 東京・大阪屋號書店, 大 14. 07. 第 30 版)
- 鳥井克之, 1972:「戦前の所謂「支那語」雑誌について」『中國語教育』1972. 第 2 期中國語教育研究會刊
- 鳥居鶴美, 1947:『華語助動詞の研究』昭 22. 10. 養徳社刊
- 長崎市立長崎商業百年史編集委員會, 1985:『長崎商業百年史』昭 60. 11. 長崎市立長崎商業高等學校刊
- 中澤信三, 1941:「支那語學學習態度について」『支那語』第 10 年第 4 號(昭 16. 04.) 所收
- 長澤規矩也, 1932:『時文類纂』昭 7. 07. 育英書院刊
- 中田敬義, 1878:『北京官話 伊蘇普喩言』明 12. 04. 無盡藏書屋刊
- , 1936:「明治初年に於ける支那語の研究に就て」支那語學會『支那語學報』第 4 號(昭 11. 10.) 所收
- , 1988:「續散語串珠」[『中國文學語學資料集成』第 2 篇所收(波多野太郎, 1988²)]
- 中谷鹿二, 1926:『和文華譯講義 日本語は斯うして支那語に譯ませう』(大 15. 01. 滿書堂刊
- , 1930:『支那語は變る新らしい支那語を研究せよ』昭 5. 05. 大連・大阪屋號書店刊(大東文化大學圖書館所藏による)
- 中村義, 1999:『白岩龍平日記 アジア主義實業家の生涯』1999. 09. 研文出版刊
- 那須清, 1992:『舊外地における中國語教育』1992. 01. 不二出版刊
- 二宮俊博, 2002:「『逍遙遺稿』札記——シルレルとショオペンハウエルのこと及び張滋昉について——」梶山女學園大學研究論集(人文科學篇)第 33 号(2002) 所收
- 沼田正宣, 1893:『日清會話自在』明 26. 06. 法木書店刊
- 野口宗親, 1999:「明治期熊本における中國語教育(1)」『熊本大學教育學部紀要, 第 48 號, 人文科學』(1999. 12.) 所收
- 長谷川寛, 1960:『中國語會話』1960. 09. 白水社刊, 1972. 06. 第 16 刷
- 長谷川良一, 1995:『中國語入門教授法』1995. 09. 東方書店刊
- 波多野太郎, 1985:『中國語學資料叢刊』第 2 篇「燕語社會風俗官話翻譯古典小説・精選課本篇」1985. 11. 不二出版刊
- , 1986:『中國語學資料叢刊』第 4 篇「尺牘・方言研究篇」1986. 10. 不二出版刊
- , 1987:『中國語學資料叢刊』第 5 篇「公文研究・日語中譯・声音研究篇・補遺」1987. 05. 不二出版刊
- , 1988¹:『中國文學語學資料集成』第 1 篇, 1988. 04. 不二出版刊
- , 1988²:『中國文學語學資料集成』第 2 篇, 1988. 10. 不二出版刊
- , 1996:『波多野太郎博士覆印語文資料提要』1996. 03. 不二出版刊

- 服部宇之吉, 1937: 「下田先生と西太后」『くれ竹』25 號—故下田先生追悼號(昭 12. 07)所收
- 林憲一, 1939: 「支那語及び支那時文教授の意義及びその實施方法試案」〔斯文會『斯文』第 21 編第 3 號(昭 14. 03.)〕所收
- 日野成美, 1940: 『正則日本語講座 第二卷 初等會話篇』民國 29. 02. 新民印書館刊, 民國 30. 10. 第 10 版
- 兵庫縣立第一神戸商業學校, 1938: 編『六十年史』昭 13. 11. 兵庫縣立第一神戸商業學校刊
- 平山治久, 1904: 『袖珍實用滿韓土語案内』明 37. 04. 博文館刊
- 廣池千九郎, 1937: 「歐米學者の支那語學研究に關する略歴史」『廣池博士全集 2 支那文典』昭 12. 04. 第 1 版, 昭 43. 12. 第 2 版, 廣池學園出版部刊所收
- 弘島慶勝, 1936: 『衛生部員ニ必要ナル滿洲土語』昭 11. 08. 關東軍軍醫部刊
奥附は「關東軍軍醫部編纂」とするが、「弘島慶勝編纂セルモノ」と明記あり
- 廣部精, 1879: 『亞細亞言語集 支那官話部』明 12. 06. —明 13. 08. 青山堂刊
——, 1880: 『總譯亞細亞言語集 支那官話部』明 13. 04. —明 15. 12. 青山堂刊
——, 1902: 『増訂亞細亞言語集』明 35. 11. 青山堂書房刊
- 藤井省三, 1992¹: 『東京外國語學校支那語科』1992. 09. 朝日新聞社刊
——, 1992²: 「中國語教室の魯迅」魯迅論集編集委員會『魯迅研究の現在』1992. 09. 汲古書院刊所收
- 藤井草宣, 1933: 「最近日支佛教の交渉」『日本宗教講座』第一回配本昭 8. 東方書院刊所收
- 福島安正, 1887: 福島安正編輯・英繼校訂『自邇集平仄編四聲聯珠』明 19. 09. 陸軍文庫刊(洋裝本に明 35. 05. 博文館刊本がある)
- フフバートル, 2009: 「少数民族語から見た中國の「國家語」名稱 — 「國家通用語」名としての「普通話」の可能性—」『學苑』昭和女子大學人間社會學部紀要(2009. 2)No.820 所收
- 古市友子, 2013: 「近代日本における中國語教育に關する總合研究: 宮島大八の中國語教育を中心に」大東文化大學博士學位論文 2013. 03. (大東文化大學機關リポジトリによる)
- 文楨, 1914: 『北京官話北京游歷記 初篇』大 3. 04. 文楨刊, 文求堂發賣
- 北京近代圖書館, 1938: 『中國現代文讀本』民國 27. 10. 北京近代圖書館刊
- 北京大學外國留學生中國語文專修班, 1958¹: 編『漢語教科書 (俄文本)』上冊 1958. 09. ・下冊 1958. 10. 時代出版社刊 (鱗澤未見)
- 北京大學外國留學生中國語文專修班, 1958²: 編『漢語教科書 (英文本)』上冊 1958. 10. ・下冊, 1958. 11. 時代出版社刊
——, 1960¹: 編『漢語教科書 (日本語版)』上冊 1960. 03. ・下冊 1960. 04. 時代出版社刊
——, 1960²: 『中國語教科書 (日本語版漢語教科書縮刷版)』上卷昭 35. 11. ・下卷昭 36. 01. 光生館刊
- 細谷新治, 1991: 『商業教育の曙 下卷』1991. 03. 如水會學園史刊行委員會刊
- 牧相愛, 1900: 『燕音集』明 33 陰曆 12 月序刊

- 前野直彬, 1961:『文章軌範(正篇)上』〔明治書院刊・新釋漢文大系(17)〕昭 36. 11. 明治書院刊, 昭 38. 02. 再版
- 鱈澤彰夫, 1990:「明治以降の中國語教育史の考察——日清戰爭終結までテキストを中心として」(1990. 03. 早稻田大學大學院文學研究科修士論文)
- , 1992:『燕京婦語——翻字と解説——』1992. 09. 好文出版刊
- , 2013:『影印 燕京婦語 北邊白血鈔・總譯』2013. 01. 好文出版刊
- 「滿洲國」教育史研究會, 2013:監修『「滿洲・滿洲國」教育資料集成』第 16 卷(1993. 05. エムティ出版刊所收)
- 滿洲城第 4012 部隊, 1942:『滿語教本 國境の曉 第壹卷』昭 17. 06. 序刊油印
『官話急就篇』『名辭篇』『問答之上』の謄寫本
- 松村幹男, 1997:『明治期英語教育研究』1997. 03. 辭遊社刊
- 宮越健太郎, 1926:『華語發音提要』大 15. 05. 車前堂刊
- , 1929:『支那現代短篇小説集』昭 4. 12. 文求堂刊
- 宮越健太郎・杉武夫, 1940:共編『最新中等時文讀本』昭 15. 02. 修正再版刊
- 宮島大八, 1904:『官話急就篇』明 37. 08. 善隣書院刊, 大 10. 03. 第 69 版
- , 1933:改訂『急就篇』昭 8. 10. 善隣書院刊
- , 1935:『羅馬字 急就篇』昭 10. 11. 善隣書院刊
- , 1935:『急就篇發音』昭 10. 12. 善隣書院刊
- 宮島貞亮, 1933:「明治最初の支那語學校」『東亞事情論文集』(昭和 8 年度)昭 8. 12. 慶應義塾大學東亞事情研究會刊所收
- 宮島吉敏・鐘ヶ江信光, 1985:『四個星期中國語』(昭 6. 09. 05 大學書林刊, 昭 60. 05. 第 3 次改訂第 196 版刊)
- 宮田一郎, 1964:「白話文に於ける吳語系語彙の研究」(高志高等學校研究集録 4 號 1964. 04. 原載)宮田一郎, 2005 所收による。
- , 2005:『宮田一郎中國語學論集』2005. 11. 好文出版刊所收。
- 藤井(宮西)久美子, 2003:『近現代中國における言語政策 文字改革を中心に』2003. 02. 三元社刊
- 宮西久美子, 2000:「中華人民共和國の言語政策における「普通話」の位置づけ」『言語文化研究』26. (2000.) 大阪大學言語文化部大學院言語文化研究科刊所收
- 宮原民平, 1939:『新編中等支那語教本』(全 5 卷)昭 14. 01. ~06. 東京開成館刊
- 宮原民平, 1941:『宮原民平 支那時文讀本 自習書 昭和十五年版』昭 16. 03. 學習の友社刊
- 宮良當壯, 1981:『宮良當壯全集 10 琉球官話集』昭 56. 06. 第一書房刊
- 宮脇賢之介, 1922: 梧雨生『家庭支那語』大 11. 03. 大連・大阪屋號書店刊
中國語教本類集成 第 5 集 第 4 卷所收
- 三好一, 1960:「中國語教科書の“貧困”と中國語教育者の責任について——「中國語教育の現状と見透し」を讀んで」『書評』1960 年 7 月號, 極東書店刊
- 森一郎, 1967:『試験に出る英單語』1967. 10. 青春出版社刊
- 文部省實業學務局, 1934:『實業教育五十年史』昭 9. 10. 實業教育五十周年記念會刊
- 矢澤利彦, 1981:「浜まつと廣東女子師範學堂」『東方』81 號, 1987. 12. 東方書店刊
- 山口喜一郎, 1941:『日本語教授法概論』昭 16. 11. 新民印書館刊
- , 1943:『日本語教授法原論』昭 18. 07. 新紀元社刊, 昭 19. 09. 第 3 版
- 山浦貫一, 1941:『森恪(普及版)』昭 16. 07. 25 森恪傳記編纂會刊
- 山下直登, 1980:「三井物産會社支那修業生制度の歴史的意義」『西南地域史研究』第 4 輯(昭 55. 09.) 文獻出版刊所收

- 山田謙吉, 1923: 著『支那時文叢義』大 12. 07. 禹城學會(山田謙吉)刊, 大 13. 01. 再版
- 吉田精一, 1977¹: 『必修現代評論』昭 52. 03. 文研出版刊
- , 1977²: 『必修近代評論』昭 52. 03. 文研出版刊
- 橫濱山手中華學校百年校史編輯委員會, 2005: 『橫濱山手中華學校百年校史』2005. 橫濱山手中華學校百年校史編輯委員會刊
- 李昌遠, 2007: 著『中國公文發展簡史』2007. 05. 復旦大學出版社刊
- 李素楨, 2013: 『日本人を對象とした舊「滿洲」中國語試験の研究について』2013. 07. 文化書房博文社刊
- 李文誥・王杏生, 1947: 『國語新課本(一)』民國 36 年 7 月初版開明書店刊
- 黎錦熙, 1924: 『新著國語文法』民國 13. 02. 民國商務印書館
- 六角恆廣, 1955: 「明治における日本の中國語」『早稻田商學』第 115 號(昭 30. 01.) 早稻田商學同攻會所收
- , 1961: 『近代日本の中國語教育』1961. 12. 播磨書房刊
- , 1977: 「中國語教育法」『早稻田商學』(昭 52. 11.) 第 266 號早稻田商學同攻會刊所收
- , 1978: 「中國語教育史概論」『早稻田商學』第 272 號(昭 53. 06.) 早稻田商學同攻會刊所收
- , 1983: 「中國語教育史の研究」『早稻田商學』第 300 號(昭 58. 07.) 早稻田商學同攻會刊所收
- , 1984: 「北京官話教育の開始」, 『早稻田商學』第 305 號(昭 59. 06.) 早稻田商學同攻會刊所收
- , 1986: 「中國語教育史の時期区分」『早稻田商學』第 313 號(昭 61. 02.) 早稻田商學同攻會刊所收
- , 1988: 『中國語教育史の研究』1988. 07. 東方書店刊
- , 1999: 『漢語師家傳——中國語教育の先人たち』1999. 07. 東方書店刊
- , 2001: 『中國語關係書書目(增補版)1867~2000』2001. 12. 不二出版刊
- , 1991: 『中國語教本類集成』第一集, 1991. 04. -第十集, 1998. 05. 不二出版刊
- 渡邊庫輔, 1952: 『長崎の時計師——長崎時計産業發達史稿』日本時計俱樂部私版 1952. 06. 10 原刊影印本
- 編者不詳, 1902: 『臺灣文官普通試驗問題集 附最近各試驗問題集及試驗規則』明 35. 03. 臺北・博文堂刊
- 編者不詳, 1937: 『陣中支那語手引』昭 12. 10. 序刊
- Arendt, 1894: *Einführung in die Nordchinesische Umgangssprache. Praktisches Übungsbuch zunächst als Grundlage für den Unterricht am Seminar* by Carl Arendt. Stuttgart & Berlin. 1894. 2v.
- Brandt, 1909: *華言初階* by Yakov Brandt. Peking 1909.
- Bunge, 1914: *Kleiner Deutsch-Chinesischer Sprachführer für den Deutschen Soldaten in China* by Max Bunge. Tsingtau 1914. 第 2 版
- DeFrancis, 1946: *Beginning Chinese* (Yale linguistic series) by John DeFrancis. Yale University Press. 1946.

- Edkins, 1862: *Progressive lessons in the Chinese spoken language* by Joseph Edkins. 1862
- Goodrich, 1898: *A character study in Mandarin colloquial : alphabetically arranged* (官話萃珍) by Chauncey Goodrich. 滙文書院, 1898.
- Hockett & Fang, 1944: Chaoying. *Spoken Chinese* (WarDepartment Education Manual EM506-507) by F. Charles & Fang. 1944
- Imbaut-Huart, 1885: *Manuel pratique de la Langue Chinoise parlée à l'usage des français* by Imbaut-Huart. 第1版 1885, 第2版 1892
- , 1887: *Cours électique, graduel et pratique de langue chinoise parlée* (京話指南) by Imbaut-Huart. Peking & Paris, 4v. (1887—1889)
- Lessing & Othmer, 1912: *Lehrgang der nordchinesischen Umgangssprache* (漢語通釋) by Lessing & Othmer. Tsingtau, 1912. 2v.
- Mateer, 1906: *A course of mandarin lessons, based on diom* (官話類編) by Calvin Matee. Wilson. 再印 1906
- McHugh・周克允, 1931: *Introductory Mandarin Lessons, or, Hua Yü Hsin Chieh Ching* (華語新捷徑) by J. M. McHugh & 周克允. Shanghai Kelly & Walsh, LTD, 1931.
- Ratay・秀毓生・金叔延, 1927: *Current Chinese, or, Shih Yung Hsin Chung Hua Yü* (適用新中華語) by J. P. Ratay, 秀毓生 & 金叔延. Shanghai Kelly & Walsh, LTD 1927.
- Vaudescal, 1903: *Etude élémentaire de la langue chinoise. Avec le fascicule spécial contenant les phrases en caractères Chinois* by Vaudescal. Peking. 1903
- Wade, 1859: 尋津錄 by Wade, Thomas Francis. 香港刊. 1859.
- , 1867¹: 語言自邇集 by Thomas Francis Wade. London, Trübner & Co. 1867.
- , 1867²: 文件自邇集 by Thomas Francis Wade. London, Trübner & Co. 1867.

【總合・文書】

- 外務省外交史料館所藏『青島守備軍公報』、『大正9年10月調 民政概況』、『青島守備軍ノ軍政ニ關スル諸統計表』、『在外本邦學校關係雜件—青島小學校』、『恩給及退隱料關係—青島』、『在外本邦學校關係雜件—青島諸學校』、『清國へ本省留學生派遣雜件』
- 國立公文書館所藏『公文錄』
- 國立公文書館アジア歴史センターデジタルアーカイブ『明治21年「貳大日記8月」』
- 陸軍省-貳大日記-M21-8-26(防衛省防衛研究所原藏)
- 長崎縣立圖書館所藏『學務課決議簿 教員進退ノ部 明治廿一年自五月至十二月』
- 『學務課決議簿 學制ノ部 明治廿三年』、『長崎縣嚴原中學校韓語學部規則』(長崎縣布達甲第21號明治16年3月5日)
- 防衛省防衛研究所戰史研究センター史料室所藏『參謀本部歷史草案』
- 三井文庫所藏『三井物產合名會社使用人表』、『三井物產合名會社職員錄』、『社報』、『明治三十二年下半季三井商店理事會議錄』、『明治三十二年下半季三井商店理事會議錄』、『明治三十三年上半季會議錄』、『明治四十年支店長會議事錄』
- 『近代日本總合年表』:1968. 11. 岩波書店編刊 1978. 11. 第2刷

【書目】

- 內田慶市・氷野善寛など, 2017: 『關西大學東西文化研究所所藏鱒澤文庫目錄(初稿)』 2017. 03. 編刊
- 靜嘉堂文庫, 1929: 『靜嘉堂文庫國書分類目錄』 昭4. 02.

- 中京大學社會科學研究所臺灣總督府文書目錄編纂委員會, 1993:
 :『臺灣總督府文書目錄』第1卷 1993. 12. ゆまに書房刊
 ——, 1996:『臺灣總督府文書目錄』1996. 07. 第3卷 ゆまに書房刊
 ——, 1998:『臺灣總督府文書目錄』1998. 03. 第4卷 ゆまに書房刊
 東京大學東洋文化研究所附屬東洋學文獻センター, 1980.:「長崎大學附屬圖書館經濟學
 部分館漢籍分類目錄」『長崎大學附屬圖書館經濟學部分館漢籍分類目錄
 熊本大學附屬圖書館落合文庫漢籍分類目錄』昭 55. 3. 25 刊所收
 Cordier, Henri, 1881: *Bibliotheca Sinica Dictionnaire bibliographique des relatifs à l'Empire
 Chinois* by Henri Cordier. Parris, 1881-1895. 2nd, 1904-1924.

【雜誌・新聞】

- 『英語青年』: 昭 15. 8. 15 號, 研究社刊
 『華語月刊』: 創刊昭 3. 07., 終刊昭 18. 11., 東亞同文書院大學華語研究會編刊
 『支那語』: 創刊昭 7. 09., 終刊, 19. 03., 外語學院出版部編刊
 1 卷 3 號(昭 7. 11.)までは『初級支那語』と題した。
 『支那語』臨時増刊「支那語文法研究號」: 昭 15. 12., 外語學院出版部編刊
 『支那語學報』: 創刊昭 10. 11., 終刊昭 14. 04. 支那語學會編文求堂刊
 『支那語學會會報』第 1 號: 昭 8. 6. 支那語學會編文求堂刊
 『支那語月刊』: 創刊昭 19. 04., 終刊昭 19. 12., 帝國書院刊
 改題繼續誌→『新中華』創刊昭 21. 06., 終刊昭 21. 12., 帝國書院刊
 改題繼續誌→『中國語雜誌』創刊昭 22. 01., 終刊昭 26. 06., 帝國書院刊
 『支那語研究』: 創刊昭 13. 12., 終刊昭 18. 09., 天理外國語學校崑崙會編刊
 (後に天理外國語學校海外事情調査會編刊)
 改題繼續誌→『華語研究』創刊昭 21. 1., 終刊昭 23. 10.
 天理外國語學校海外事情調査會編刊
 『支那語雜誌』: 創刊昭 16. 01., 終刊昭 19. 03., 宮原民平主幹, 螢雪書院刊
 『支那語雜誌』企畫連載記事:「私が支那語を始めた頃」[第 2 卷 6 號~第 8 號
 (昭 17. 06. ~08.)]
 『支那語と時文』: 創刊昭 14. 09., 終刊昭 18. 12., 奥平定世, 開隆堂刊
 『支那語及支那語』: 創刊昭 14. 02., 終刊 18. 06., 大阪外國語學校支那語研究會編,
 寶文館刊
 改題繼續誌→『支那語文化』創刊昭 18. 11., 終刊昭 18. 06., 大阪外國語學校大陸
 語學研究所編
 『新中國』: 創刊昭 21. 03., 終刊, 昭 23., 實業之日本社刊
 『善隣』: 存卷昭 8. 01. - 昭 19. 09., 中谷鹿二, 善隣社刊
 (山口大學總合圖書館所藏、天理大學附屬天理圖書館所藏)
 『中國語學習運動』: 創刊 1972. 01., 終刊 1975. 09., 片岡公正, 史泉書房刊(後にミネオ社
 刊)
 『中國文學』第 83 號, 特輯「日本と支那語」: 昭 17. 05., 中國文學研究會編, 生活社刊
 『ラヂオ・テキスト支那語講座』昭和 16 年(自 1 月至 3 月)日本放送出版協會刊
 『開導新聞』: 創刊明 13. 07. 01. ~ 明 16. 04. 17. 東京・開導社發行(京都・眞宗大谷派教
 學研究所所藏)
 複刻版: 1999. 10., 眞宗大谷派宗務所出版部刊
 『配紙』: 創刊明 5. 02. 27. ~ 明 18. 06. 29, 東本願寺發行(京都・眞宗大谷派教學研究所所藏)
 複刻版: 1989. 04., 眞宗大谷派宗務所出版部刊

本論文初出一覽

序章：「明治以降中國語教育史上の基本問題」（『中國文學研究』43；58-74 頁所收）および「如何にして「書く中國語」を習得するか」（『中國文學研究』25；（1）-（13）頁 所收）に基づき、大幅に書き改めたもの、以下の諸篇も多かれ少なかれ修訂・加筆あり。

第一章：「日本造語「侵略中國語」考」（『中國文學研究』31；（289）-（298）頁所收）

第二章第一節：「北京官話教育と『語言自邇集 散語 問答』明治 10 年 3 月川崎近義氏鈔本」（『中國語學』235；146-155 頁所收）

第二章第二節：「日本陸軍の中國語教育」（早稻田大學大學院『文研紀要別冊』18；146-155 所收）

第二章第四節：「東本願寺中國語教育編年資料〔明治 6 年至明治 16 年〕」（『開篇』8；58-73 頁所收）

第二章第五節：「御幡雅文傳考」（『中國文學研究』26；（29）-（45）頁所收）、「御幡雅文傳考拾遺」（『中國文學研究』27；（13）-（33）頁）

第二章第六節：「『燕京婦語』の階級方言「克」（去 kè）について」（『影印 燕京婦語 北邊白血鈔・總譯』2013 年 1 月好文出版刊所收）、「『燕京婦語』解説」貳、參（『燕京婦語——翻字と解説——』1992 年 9 月好文出版刊所收）

第三章第一節：「1930 年代の中國語教育への視點——新しき路に見えしもの——」（『中國文學研究』18；72-82 頁所收）

第三章第二節：「日本外地の中國語教育と方言音」（『中國文學研究』28；（19）-（32）所收）

第三章第三節：「軍隊における中國語——視點と變遷——」（『中國文學研究』22；（77）-（91）頁所收）

第三章第四節：書き下ろし

第四章第一節：「明治以降中國語教育史上の基本問題」（『中國文學研究』43；58-74 頁所收）

第四章第二節：「“你好”考」（『中國文學研究』29；（65）-（73）頁所收）

終章：「明治以降中國語教育史上の基本問題」（『中國文學研究』43；58-74 頁所收）

（了）